

# 第一章 調査の経過

## 第1節 調査地の設定

平成8年度の発掘調査は、整備委員会の指導助言に基づき、本調査地「苑池の北岸調査」の他に「伽藍正面（東）、背後（西）の山の遺構確認調査」「西ヶ谷の遺構確認調査」を行った。本調査地1ヶ所とトレーニング（試掘調査地点）を30ヶ所設定した。この内トレーニング1～13は、伽藍正面（東）の山に、トレーニング14～27は伽藍背後（西）の山に、トレーニング28～30は、西ヶ谷に設定した。

本調査地「苑池の北岸」は、永福寺跡整備地域の北側にあたり、平成7年度調査地と、昭和63年度調査地との中間地点にあたる。整備計画地内に6地点設置してある、『永福寺跡測量基準点』（平成元年度設置）の、No.2（X=-74891.062 Y=-23790.173 H=19.680）、No.5（-74875.810 Y=-23882.056 H=21.532）、No.6（X=-74812.178 Y=-23894.588 H=22.882）の国土座標を今年度の測量原点と定め、調査の測量杭を設置した。

苑池北側の調査地は、整備地内に20m方眼で設定している、測量グリッド杭のC-5・6、E-5・6に囲まれた範囲で、調査対象面積は803.1m<sup>2</sup>である。伽藍正面（東）の山と伽藍背後（西）の山、西ヶ谷に、合計30ヶ所設定したトレーニングの調査対象面積は490m<sup>2</sup>で、合計した今年度の調査面積は1293.1m<sup>2</sup>である。

平成8年7月1日より、調査地点の位置出しのための測量から現地調査を開始し、平成9年1月31日までに全ての調査を終了、機材を撤収し現地調査を終了した。

## 第2節 各調査地の層序及び概要

### （1）苑池の北岸調査

本調査地は整備地域の北側にあたり、南北に広がる永福寺庭園の北端に位置するものと考えられる。調査地の北東側一帯は亀ヶ淵と呼ばれ、また奥深くに延びる杉ヶ谷の入口である。また北西方向は、西ヶ谷の入口となる。

遺構埋没深度は現地表下約0.6～2.3mである。表土の下には部分的に近年、宅地造成のために客土された盛土が約70cmと、昭和40年代まで営まれていた水田耕作土・床土（灰色粘質土）が、約80cmの厚さで堆積している。宝永年間の富士山スコリア（FHO-1）が、海拔19.5m前後で、調査地のほぼ全域で確認されている。遺構面の上に堆積する土砂の大半が永福寺廃絶以後、中世から近世にかけての水田及び畑の耕作土と思われる。また苑池遺構の堆積土の大半は、池中に流れ込んだきめの細かい灰色砂質土と、茶褐色粘質土等の非常に柔らかく粘性が強い土、粗い砂と水摩した土丹が混じる土の三種類に分けられる。柔らかく粘性の強い土は、池中で水が濁った状態で堆積したもの、粗い砂と水摩した土丹の混じる土は強い流れ込みがあったことが推察できる堆積である。

永福寺建立以前は、杉ヶ谷から流れ出る二階堂川と北西に位置する西ヶ谷からの流路が合流して、平坦地を形成していたと考えられる。永福寺建立のため、敷地の中央を北から南に流れていた二階堂川の流路を、東の山裾に沿って付け替え、苑池を造ったと考えられる。

### （2）伽藍正面（東）の山の遺構確認調査

調査地は大きく谷中の平場と、山の尾根上の2ヶ所に分けられる。谷中にかつて宅地だった約800m<sup>2</sup>程の平場があり、11ヶ所トレーニング（調査地点）を設定した。現在竹林となっている平場の遺構埋没深度

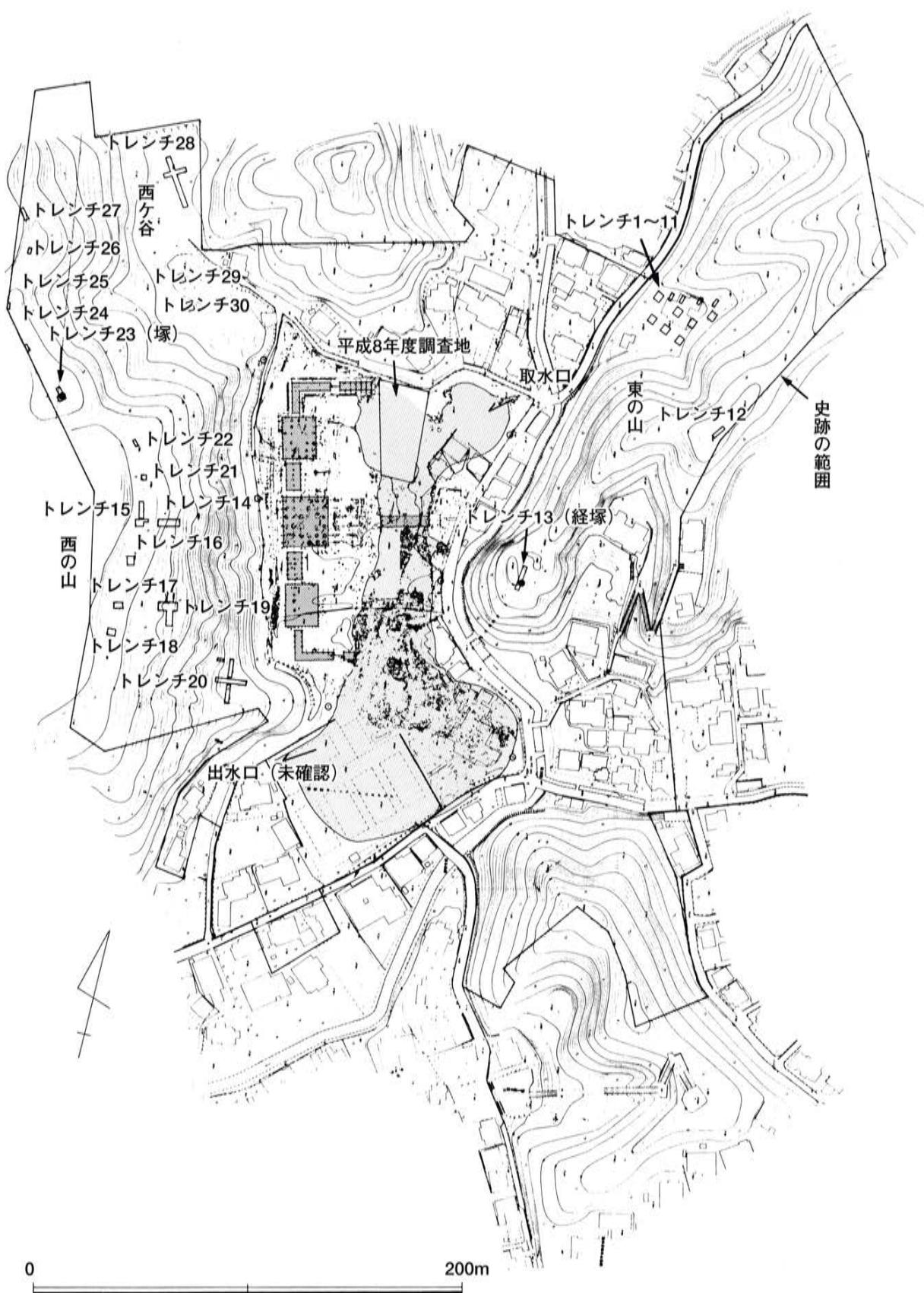


図1 調査地点（本調査地・遺構確認調査地点）及び史跡の範囲

は、現地表から遺構確認面まで谷内の奥で約100cm、手前で約40cmである。

山の尾根筋は馬の背のように幅が狭く、すでに岩盤が路頭している部分も見受けられる。尾根上に2ヶ所設定した調査地点の表土の厚さは約20cm前後と薄く、表土を剥ぐとすぐに岩盤が路頭する状況で、遺構に伴うような土層の堆積は認められなかった。

### (3) 伽藍背後（西）の山の遺構確認調査

堂舎背後（西）の山には、中腹に1ヶ所、山頂付近に1ヶ所の平場がある。平場は主に山の斜面を削平して造成され、厚さ約30cm程の表土があり、表土の下はすぐに岩盤もしくは黒色ないし黒灰色粘質土の地山となる。若干古代の遺物が見られるが、中世に伴う遺物は出土しない。近世の開墾（近年まで、西の山一帯が茅場だった。）による削平があったのかもしれない。

堂舎背後の山頂では、尾根伝いに平場を含め人為的な削平が、阿弥陀堂から二階堂まで行われている。二階堂背後では壁状に、最大約10mの落差のある最大斜度約55度の斜面を造っている。痩せた尾根上には約20~30cm程の表土が覆い、これを剥ぐと岩盤が露出する。尾根上の岩盤の表面は著しい風化が認められ、長期間に渡って路頭していたと考えられる。現在落葉広葉樹で覆われている山も、堂背後の斜面を中心に、岩盤が路頭した切岸状の景観だった可能性がある。現在この尾根を北に辿って行くと、西ヶ谷を経て百八やぐらのある天園ハイキングコースに出ることが可能である。

### (4) 西ヶ谷の遺構確認調査

西ヶ谷は永福寺別当坊、僧坊があったとされる谷だが、約30年前の緑苑台住宅地の造成によって、谷間の大部分が埋め立てられてしまい、現在谷の入口から奥に約100mが残されているに過ぎない。現在谷間が遊水池となり谷間の絞れ水が年間を通して途切れることはない。谷内に残された平場を中心に調査地点を3ヶ所設定した。遺構埋没深度は、現地表から土丹で埋め込んだ遺構確認面まで約40~50cmあり、地表まで腐植土と若干のかわらけ片を含む、明茶灰色砂質土と茶灰色砂質土（畑の耕作土）が堆積している。土丹面を掘り抜くと下約60cmで、地山面の上面に貝殻を含む砂を薄く敷き詰めた面が確認されている。

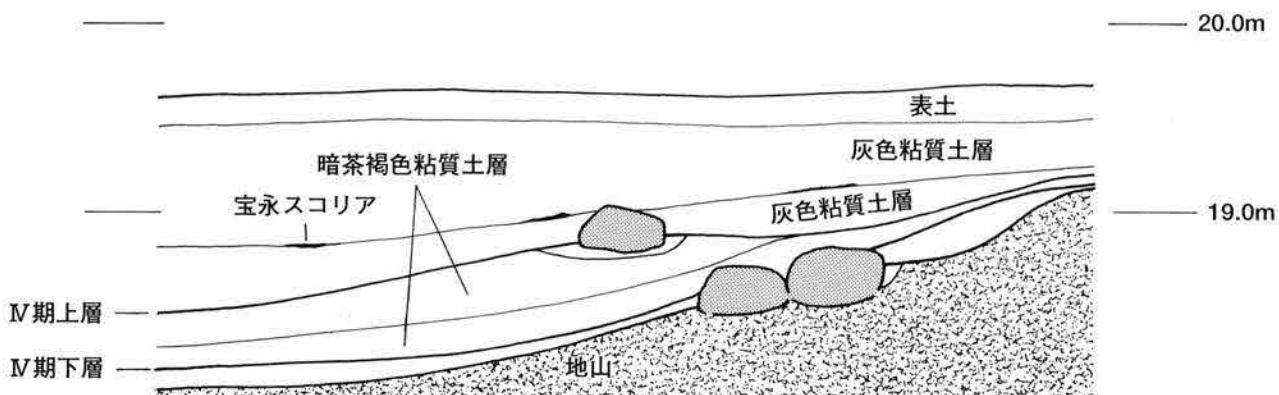


図2 苑池調査地標準土層断面模式図

## 第二章 検出された遺構

### 第1節 庭園の調査（本調査地）

#### （1）苑池

昨年度の調査で、堆積した土層からIV期（室町期）を、IV期-1からIV期-5まで3つに分けることができたが、今年度の調査で確認した土層では、IV期を上層と下層の2つに分けるにとどまった。

調査地の北側で池の水際に景石を配した庭園と、永福寺IV期下層に伴うと考えられる遣水遺構を検出した。景石を配していたのは主に調査地の北東側で、北側の丘陵の先端を利用し、池中に岬状に削り残した地山に沿って凝灰砂岩質の景石を多数組んで並べていた。これは昨年度確認した、景石を組み合わせて造られた岬の続きである。記録を取りながら全体を掘り下げる調査は、IV期上層からIV期下層までとして、これ以下の地山面までの調査は、北西隅でIV期下層と確認した土丹敷きの遺構面と、今年度初めて確認した、IV期遣水の水路を保護するため、一番影響の少ない池中で行った。水際から陸地部分は、整備委員会の指導により、遺構を極力壊さないように細心の注意を払い、部分的に掘り下げるトレーンチ調査に切り替えた。

##### a. IV期上層の苑池

調査区内（海拔約19.7～19.4m）で、富士山宝永年間のスコリア（FHO-1）を検出した。このスコリアの下（海拔約19.6～19.0m）のほぼ全域で、灰茶褐色砂質土（粘質土）層のIV期上層を検出した。

調査区の北側では景石が約15個検出されたが、景石の上面にはスコリアが見られた。このことは江戸時代には、少なくとも一部景石は路頭していたと考えられる。ほとんどの景石はIV期上層の構成土中に埋もれた状態であった。この状況は昭和63年度に調査した、北側翼廊先端部でIV期以降の遺構とした面の検出状況に類似している。この時期の苑池はかなり縮小していたものと考えられる。

##### b. IV期下層の苑池

IV期上層を30～60cm掘り下げる（海拔約19.5～18.5m）と、池汀線周辺を貼り増したIV期下層を検出した。池中は厚さ約60cmのきめの細かい暗茶褐色粘質土の堆積があり、松葉、炭化物を含んでいた。

#### 遣水遺構

調査地の北西隅で、北西から東南方向の池に向かって延びる長さ約15m、幅約3m、深さ約30～50cmの水路を検出した。この水路はIV期下層の時期に、西ヶ谷からの水を池に流し込んでいた遣水の流路になるものと考えられる。遣水の底には粗い砂、水摩した土丹粒が厚く堆積し、かなりの水量があったと思われる。遣水が池に流れ込む位置に、海辺の岩を利用した景石が据えられていた。池中に流れ込む水を景石を利用して、二手に分けていたものと考えられる。

#### 岬部分

IV期上層では頂部だけが見えていた景石は、IV期上層の構成土を掘り下げ、全体を露出させることができた。景石は、据え方に大きな土丹を使い脇を固めて固定しているもの、据え方に瓦を差し込んでいるもの、大きな景石の上に重ねられているものなどが確認された。岬の周辺は、水際から3m位の幅で灰褐色砂質土を使い貼り増され、なだらかな洲浜を形成している。

この時期の池底の堆積土中には多くの木片、植物遺体が混入し、見た限りでは松葉が多いように思われる。仏像残片2点、五輪塔婆が1点出土している。

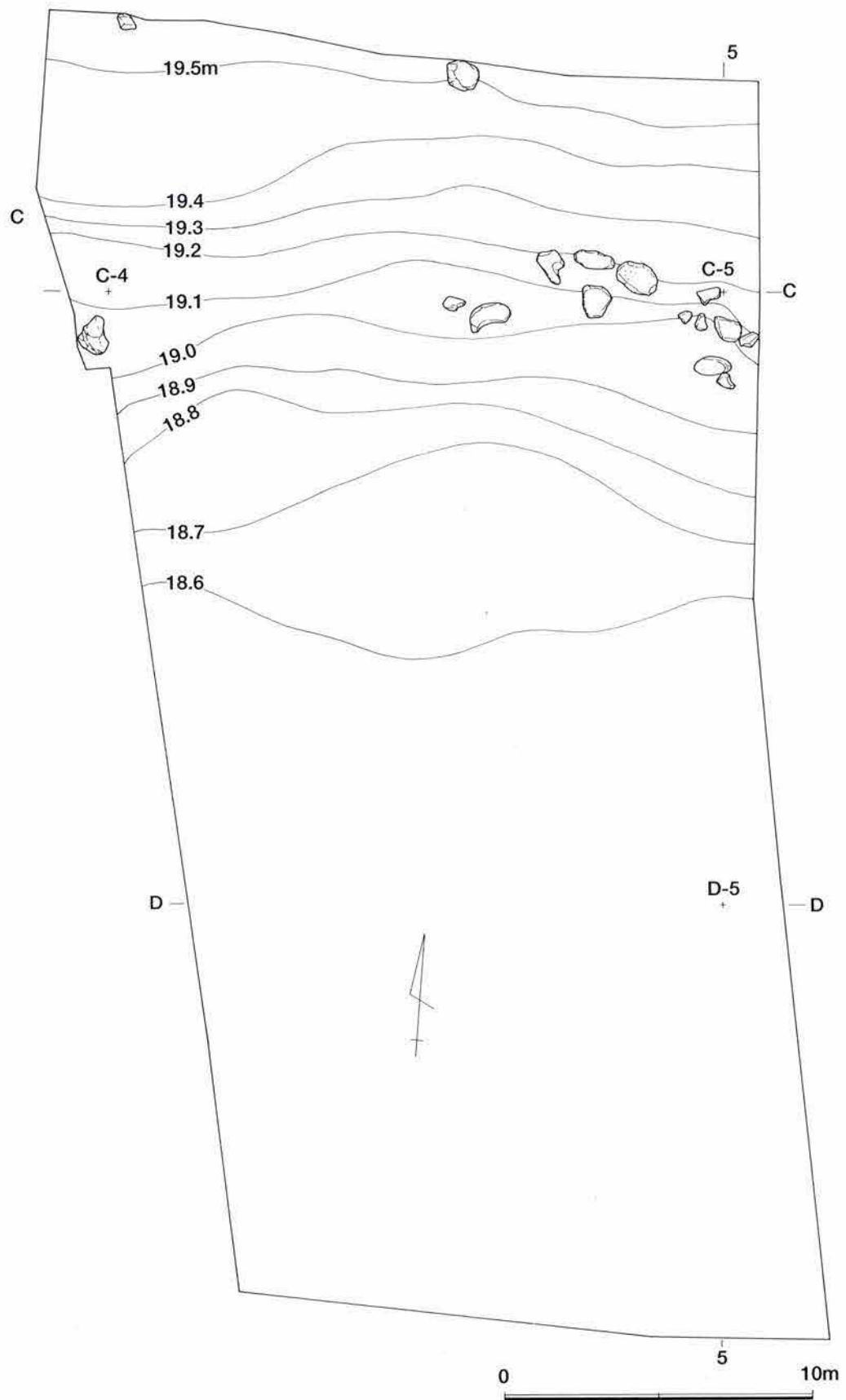


図3 IV期土層の苑池概念図

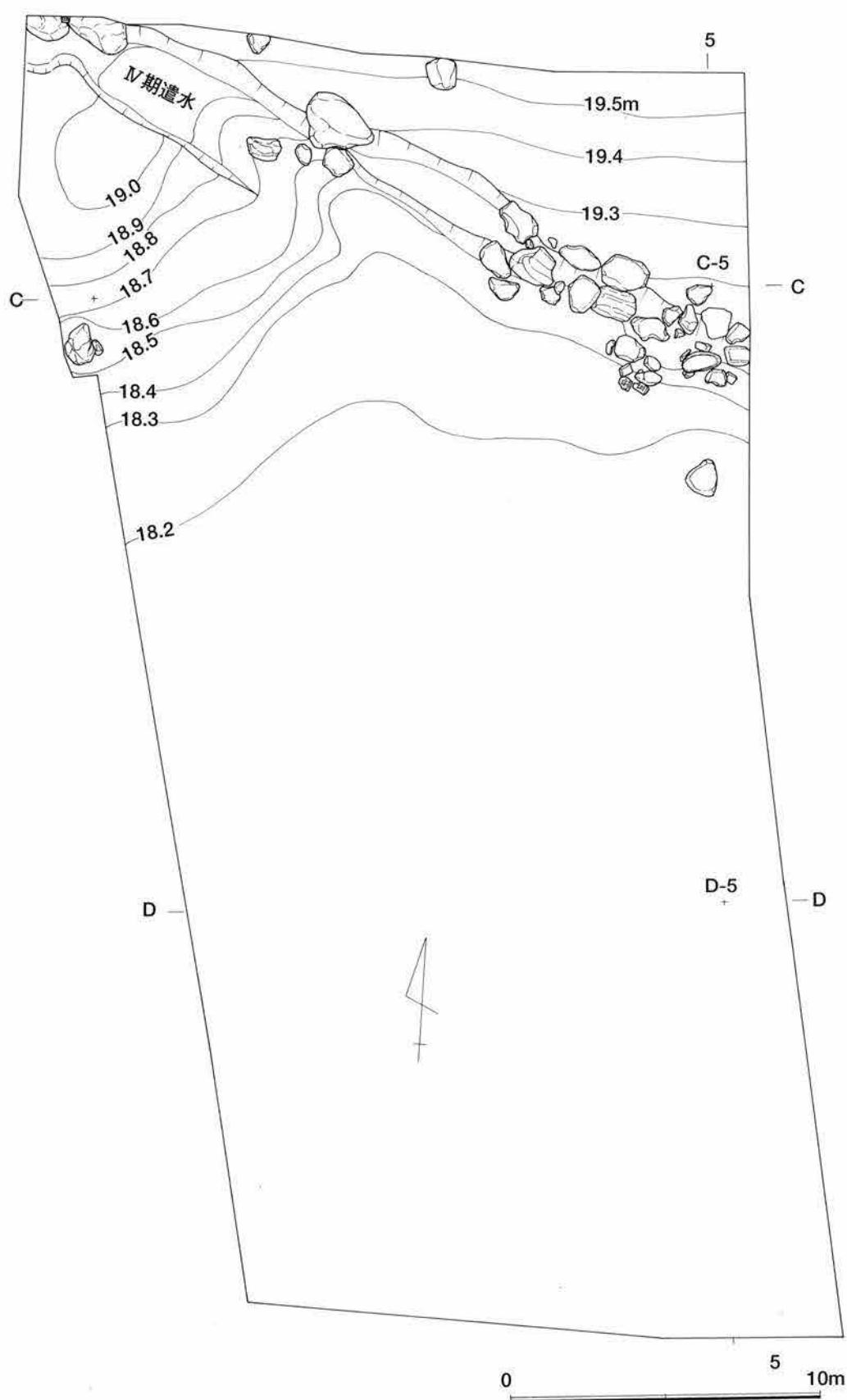


図4 IV期下層の苑池概念

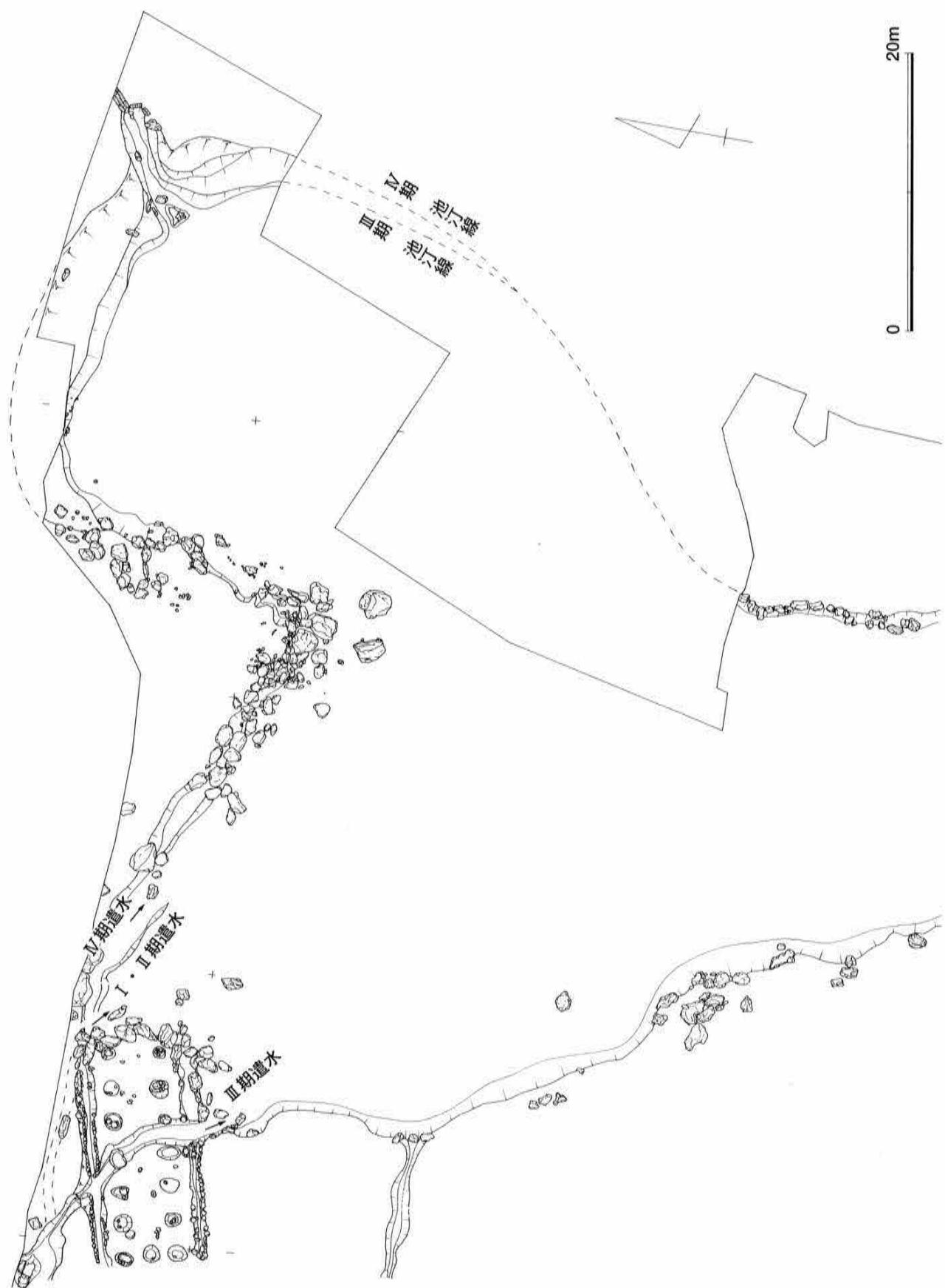


図5 昭和63年度・平成6・7・8年度の菟地遺構合成図

### c. IV期以前の苑池（地山面）

#### 池中

池中で、IV期下層の構成土である灰褐色砂質土を掘り下げるに、10~30cm下（海拔19~17.9m）で、地山面と岩盤面を検出した。浚渫を頻繁に行ったのか新旧の遺物が混在していた。

#### 陸地

厚さ10cm程に薄く貼り増された暗褐色粘質土層と、若干の砂利の下は地山になる。調査地の北端を東西方向に地山面を直線的に掘り込んだ、幅約60cm、深さ約80cm、確認した長さ約20mの永福寺創建期に伴うと考えられる8溝を検出した。溝内の覆土は、黒褐色粘質土で若干の木材の削り屑を含んでいる。黒色土を使い（地山）短期間のうちに埋められたものと思われる。覆土からアカマツの根株が出土。直接的には結びつかないが、昭和62・63年度に北翼廊を斜めに直線的に横切る形で検出した、4溝の形態、覆土、出土遺物が類似していることから、永福寺創建期の土工事に伴う排水のための溝と考えられる。

#### （2）苑池の調査で出土した遺物（図6~21 図版54~64）

##### a. 土器・陶磁器・金属製品他（図6、図版54・55）

1~3はIV期上層覆土から出土した遺物である。

1は青白磁の梅瓶片。外面に牡丹文が描かれ、灰白色で堅緻な胎土に水色の釉が施される。

2は銅製品。長さ3.8cm、幅8mmの釘状のものだが用途不明。

3は硯。裏面は剥離。残存長7.5cm、残存幅4.6cm。

4~20はIV期下層から出土した遺物。

4~15はかわらけ。4~6は手捏ね成形のかわらけである。細かい軟質の素地を持ち、その様相から13世紀前半のものと思われる。7~15は轆轤成形のかわらけである。13、15は器肉が厚く口縁がやや外反することより15世紀中頃の様相を呈し、その他は厚みに多少の差はあるものの、おおよそ13世紀後葉から14世紀前葉の製品であろう。

16は常滑鉢の口縁部片。口縁端部が丸みを帯び、外面の口縁下に2mm幅の沈線が巡る。胎土は長石の小片を含み、灰色を呈す。

17は瀬戸入子底部片。胎土は淡灰色で堅緻。底部には笠削り調整が見受けられる。

18は青磁折腰鉢口縁部片。内面に細かい蓮弁文が入り、釉は不透明で厚く施されている。淡緑色。

19は瀬戸の鉢底部。底面は糸切りの後笠削りがなされ、墨書痕が見られる。また割れ口には接着する際使用された麦漆が付着する。胎土は淡灰色で僅かに気泡が入り、黄茶灰色の釉が薄く施される。底径10cm。

20は手焙り口縁部片。胎土は小砂、小石を多く含み、外面口縁下に菊花の文様を施す。

21~28地山面覆土より出土した遺物である。21~26はかわらけ。

26は手捏ね成形。焼成がやや甘く、13世紀中頃の製品と思われる。

21・22は燈明皿として使用されたもの。21は底部が大きく、器高は低い。23は口縁が丸みを帯びる。

22・24・25は底部がやや小さくなり、口縁に向けて薄くなる。これらはおおよそ13世紀後葉~14世紀前葉のかわらけと言えよう。

27は木製の皿である。口径11.6cm、底径9.5cm、器高1.7cm。内底部の削りが不完全なこと、外側面に面取りの痕が残ることなどから未完成品と思われ、外底部も高台内側を一周削ったのみである。

28は刀子である。残存長22.8cm、幅2.8cm。片切刃で目釘穴が穿たれる。

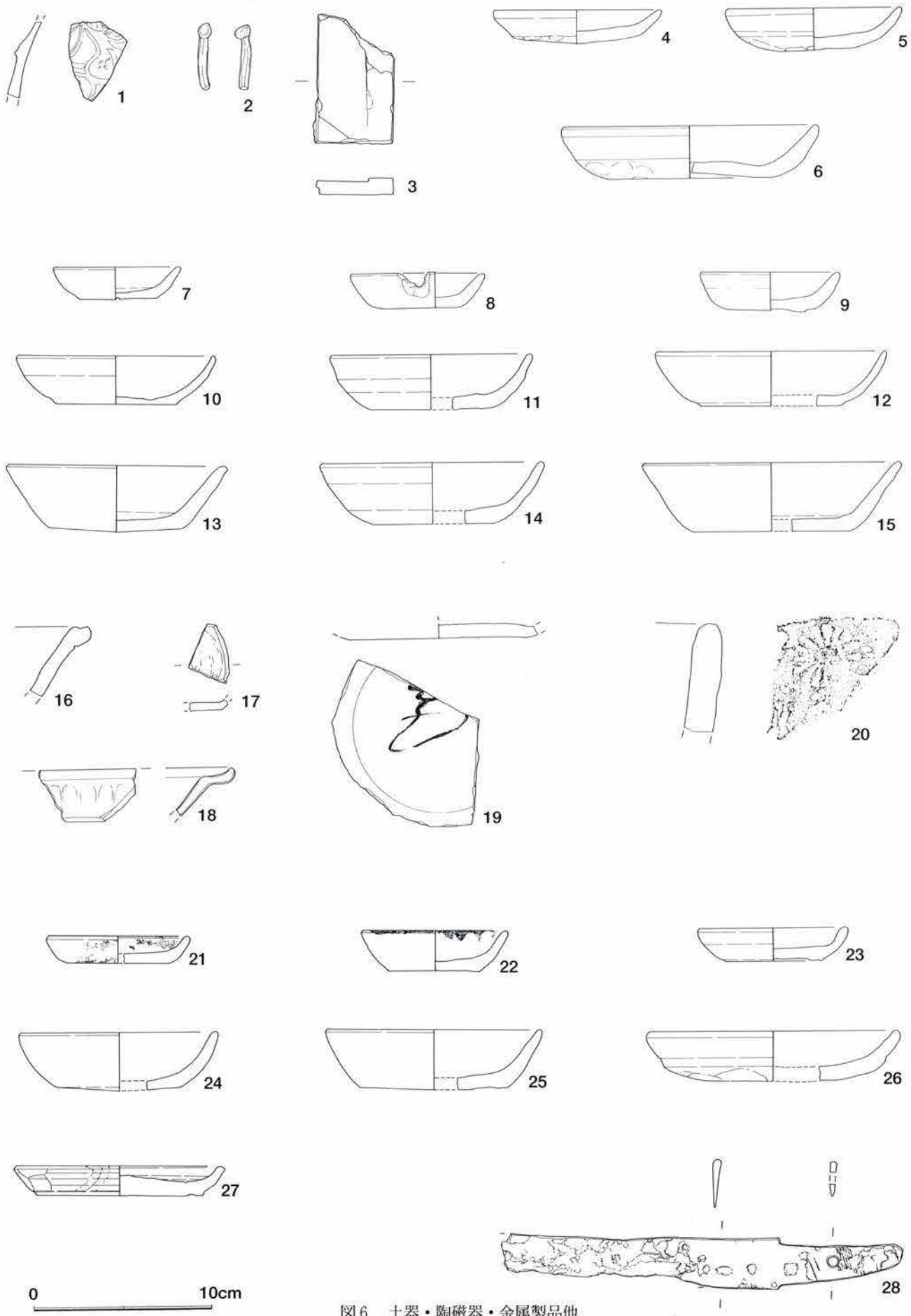


図6 土器・陶磁器・金属製品他

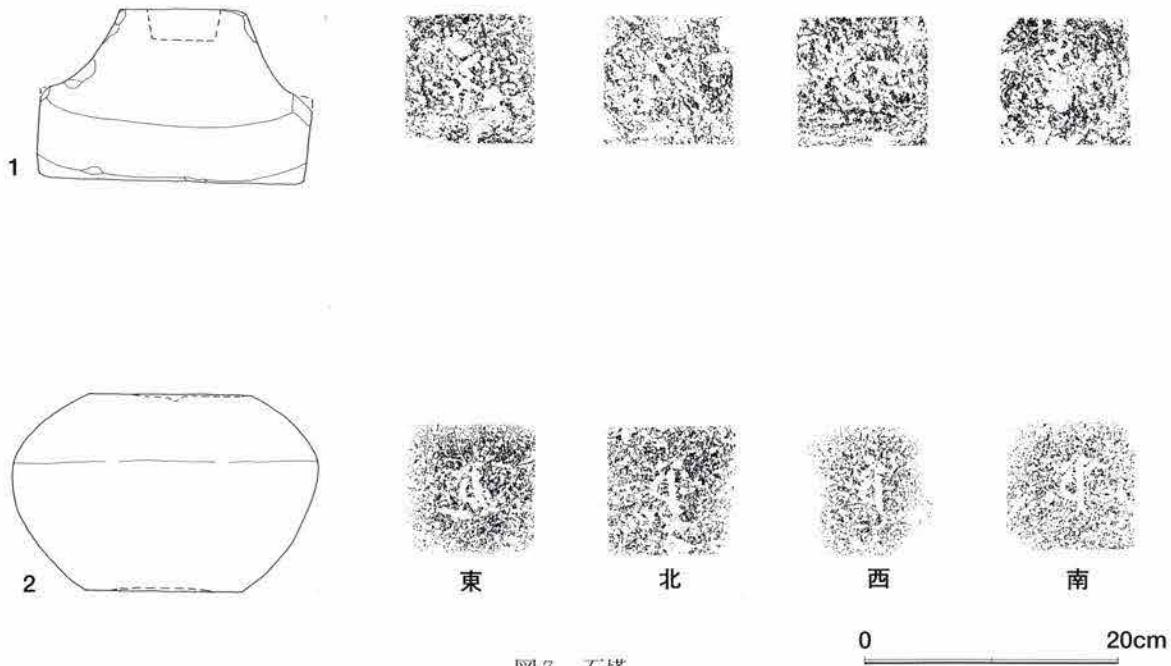


図7 石塔

b. 石塔 (図7、図版56)

1は五輪塔の火輪。IV期構築土より出土。幅21.6cm、高さ13.9cm上部には空風輪を受ける幅約6cm、深さ約2.5cmの枘穴を持つ。安山岩製で四面に種子が刻まれている。不鮮明ではあるが、拓影左から、「工:」「土」「で」「工」と思われる。

2は同じく五輪塔の水輪。IV期下層覆土より出土。やはり安山岩製で四面の種子は「ア」「ア:」「ア」「ア」である。

c. 木製品 (図8・9、図版57)

図8はIV期下層覆土、池中から出土した木製品である。

1は枹状の木製品である。残存長19.8cm、最大幅5.4cm。針葉樹系の木材が使われ、端部の削りが顕著である。

2は残存長19.2cm、幅3cmの棒状の木製品。1と同一個体と思われる。

3は長さ21.1cm、幅1.2cmの棒状木製品。

4～6は漆製品。4・5は仏像の一部か。

4は頭髪部で漆は剥離して下地のみ残り、裏には火を受けた痕跡がある。残存長8.9cm、残存幅7cm。

5は衣の袖部分か。木地に布が貼られた上に塗漆される。残存長23.4cm、幅5.7cm、厚み1.2cm。

6は円盤の一部か。片面のみ塗漆。残存長11cm、残存幅2.7cm、厚み9mm。

7は五輪塔婆である。墨痕はほとんどないが、木地の表面に比べ墨書されていた部分が腐食せず、浮き出して残る。これにより何文字かは肉眼でも判読できるが、全体の文脈は不明である。長さ60cm、幅5cm、厚み1.3cm。下端より約14cmの所に釘穴が認められる。表面の風化具合から見ても、長期間壁などに打ち付けられていたものと思われる。

図9は平成7年度に、池中IV期・2面(14世紀後半相当)より出土した板状の木製品。長さ175.2cm、幅42.4cm、厚み4cm。手斧痕(長さ8cm前後、幅6cm前後)が顕著である。鉄釘が2ヶ所、また釘痕が1ヶ所遺存し、おそらくは左右対称に打たれていたものであろう。扉の可能性がある。

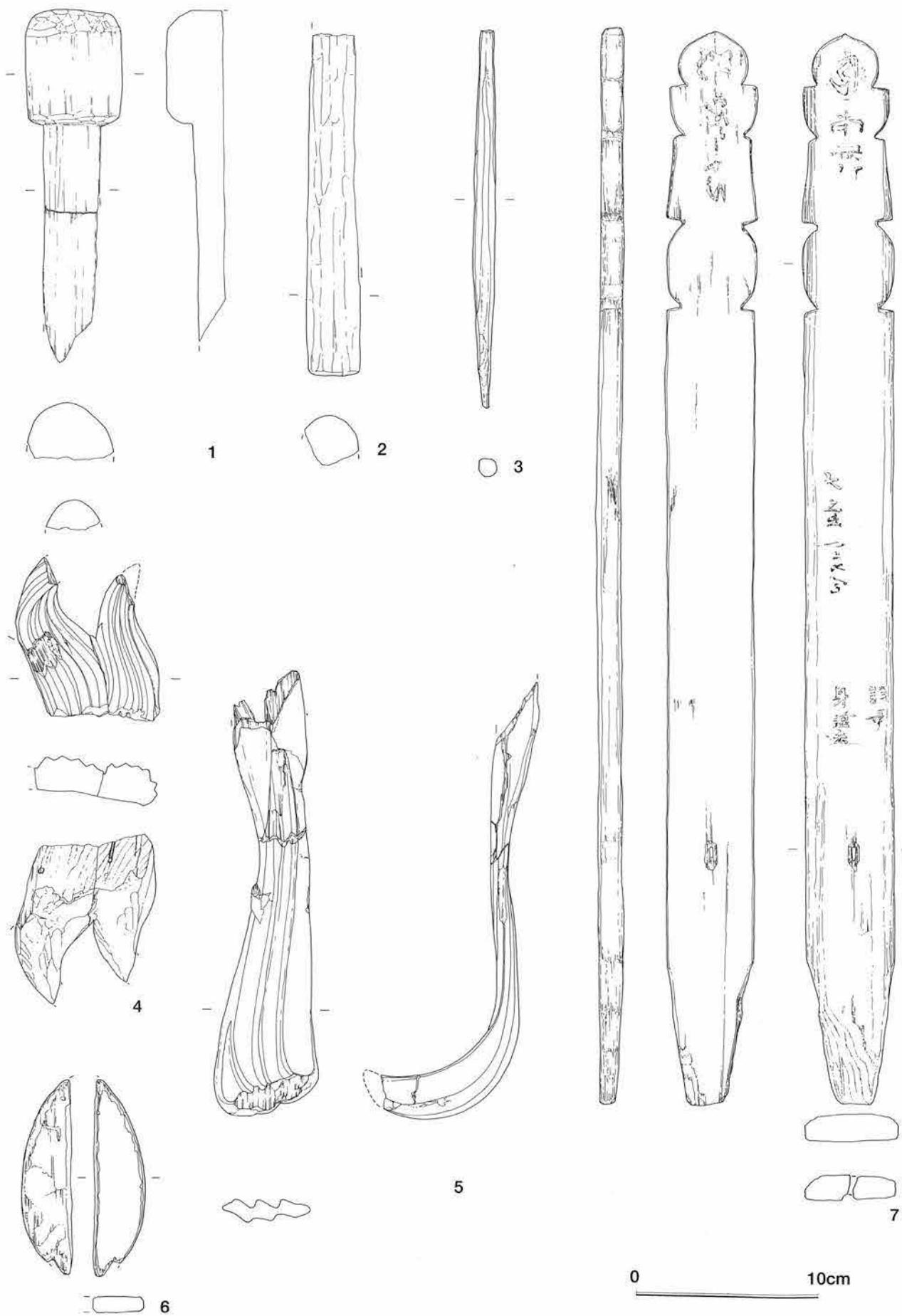


図8 木製品

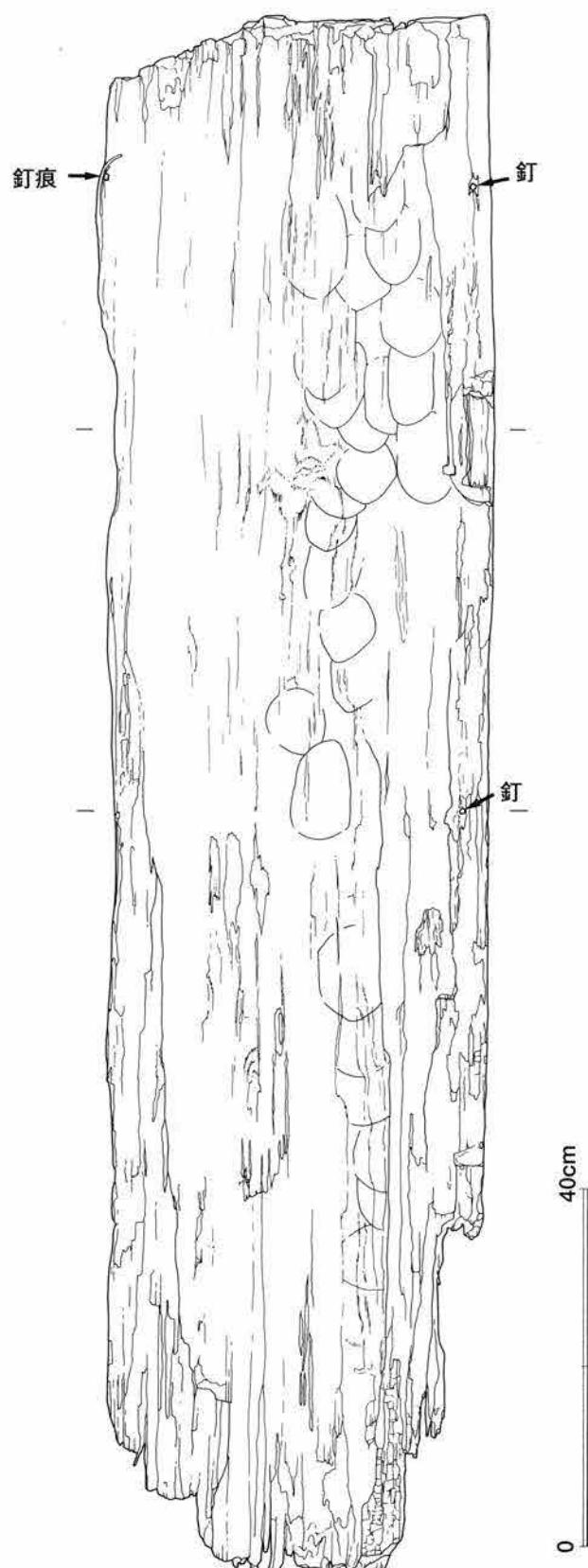


図9 木製品

#### d. 瓦 (図10~21、図版64~68)

苑池の調査では多量の瓦片が出土しているが、ここでは型式の判断できる瓦當、法量の判る男瓦・女瓦、鬼瓦を選んで図示した。瓦については既刊の概報で型式分類・生産年代等について述べてきた。ここで用いた型式名はこれに従ったものである。

図10-1~17、図11・図12は瓦當で、この内図10-3はIV期上層覆土より出土、図10-1・2・4~14はIV期下層覆土より出土、15・16、図11・図12は地山面覆土より出土。

図10-1・2・4・5・6・16、図11は唐草文字瓦。I期のもので、精良で堅緻な胎土を特徴とする。

図10-1は瓦當下部の破片であるが、上部の割れ口に女瓦と接合されていた縄目の圧痕を明瞭に残しており、製作工程を知る上で、重要な資料といえる。これは接合する女瓦部分の上外区まで及んでおり、これに顎部をはり付けて瓦當を形成するという方法で制作されていると考えられる。

図10-7・8はI期の唐草文字瓦であるが、今回の調査で初めて出土した型式である。女瓦F類と同様の硬質な炻器質であり、東海地方の産であることが知られている。瓦當面は灰釉が塗られ明緑灰色を呈する。文様はYN I 01と同様の、中心飾りの左右に唐草が三反転する均正唐草文と推される。三反転めの先端が二股に岐かれるのがYN I 01と区別される特徴である。

図10-3はI期の蓮華文鎧瓦。

図10-9~11・図12はII期の寺銘文字瓦。胎土は粗く、気泡を多く持つが、硬質。

図10-12はII期の剣頭文字瓦。胎土は精良でI期のものと似る。埼玉県水殿瓦窯の製品であることが知られている。

図10-13・14はIII期以降の巴文鎧瓦。外縁の径は13cm程度と考えられる。粗い胎土で、やや軟質。瓦當面に粒子の細かい離れ砂が少量付着する。なお、13は今回の調査で初めて出土した型式である。

図10-15はII期と考えられる鎧瓦。瓦當裏の縁帯が肥厚している。鳥衾か。

図10-17はI期の男瓦C種。IV期下層覆土より出土。女瓦F類及びYN I 06(図10-7・8)と同じ胎土を持つ東海地方産のもの。

図13はI期の男瓦A種。1・2ともIV期下層より出土。1は段部までの長さ約37cm、厚さ約2.5cm。2は幅約19cm、長さ約47.5cm、厚さ約3cm。

図14はII期の男瓦B種。IV期下層より出土。幅約19.5cm、長さ約45cm、厚さ約2.5cm。

図15・図16はI期の女瓦A類。いずれもIV期下層より出土。図15は狭端の幅約27.5cm、長さ約40cm、厚さ約2cm。図16は狭端の幅約28cm、広端の幅約30.5cm、長さ約39.5cm、厚さ約2cm。

図17はI期の女瓦F類。IV期下層より出土。狭端の幅約28cm、長さ約39.5cm、厚さ約3cm。東海地方産のもので、凹・凸面とも粗い長石粒が付着する。凹面は縦ナデを施し、広端・狭端を浅く削っている。

図18~図20は、II期の女瓦D類。図18はIV期下層覆土より出土。長さ約43cm、厚さ約3cm。広端の幅は、35cm程度と推定される。図19はIV期下層より出土。広端の幅約33cm、長さ約42.5cm、厚さ約2.5cm。

図18・図19は同じ叩き目を持つ製品である。凸面に押されている叩き目文様は斜格子に菊花、花菱、輪ちがい文を組み合わせたもので、長さ43cm以上、幅約5cmを一単位としている。叩き板の大きさを知る上では、貴重な資料といえる。なお凹面は図18・図19では若干の違いがあるが、縦方向のナデを施し、狭端を削って仕上げている。

図20はIV期下層より出土。広端の幅約33cm、長さ約44cm、厚さ約3cm。凹面は斜格子文の叩きが施される。凸面には狭端側に弱い横ナデを施し、狭端を削っている。

図21は鬼瓦。いずれも精良な胎土からなるI期のもの。1はIII期覆土より出土。珠文はひとつひとつ

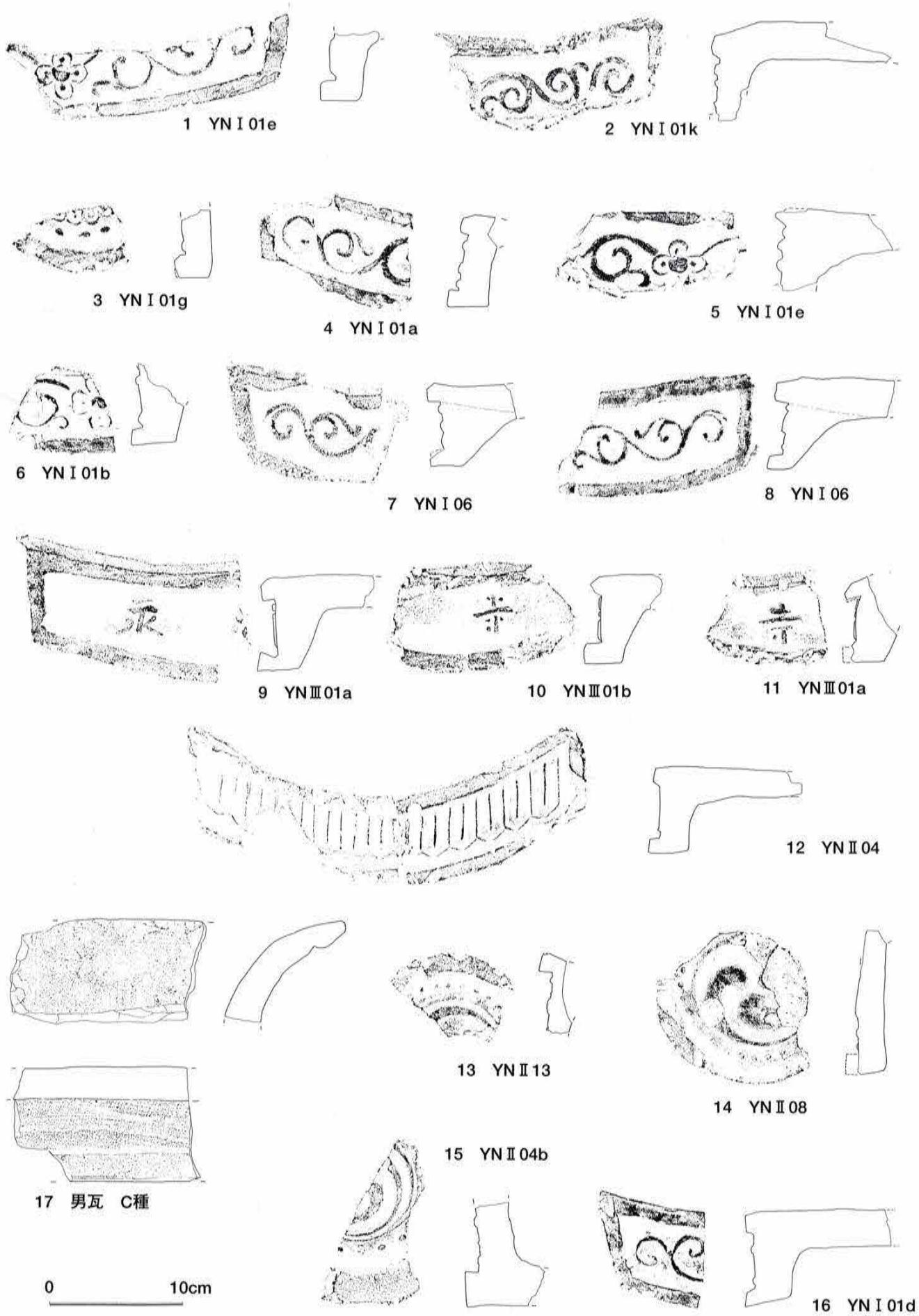


図10 鐙瓦・宇瓦

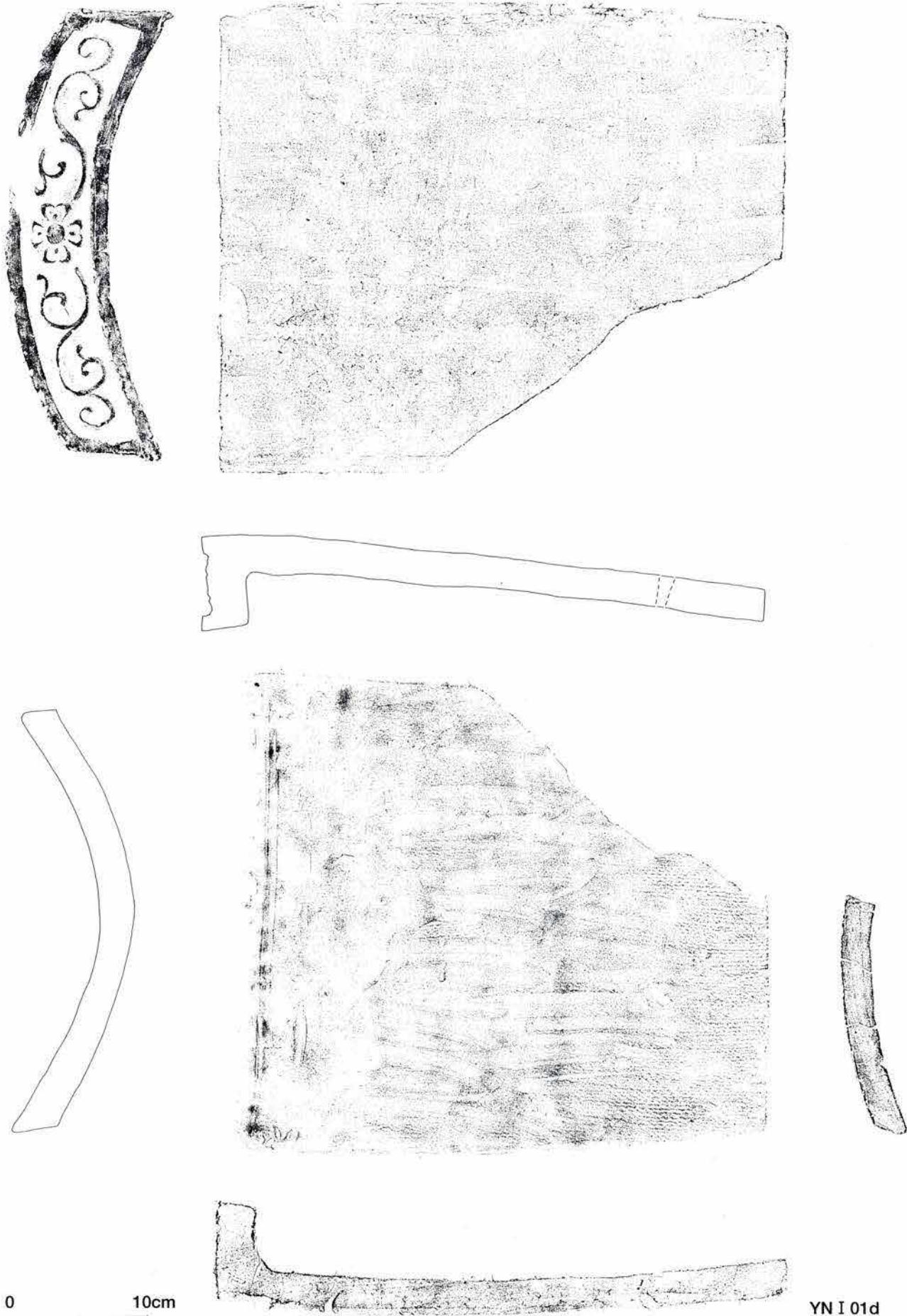
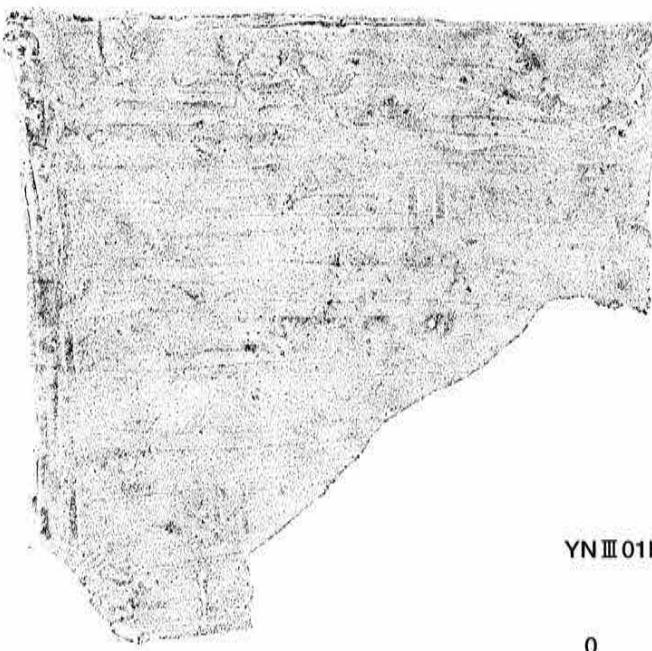
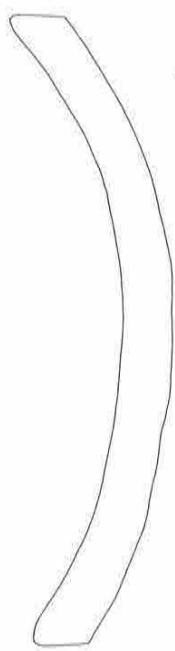
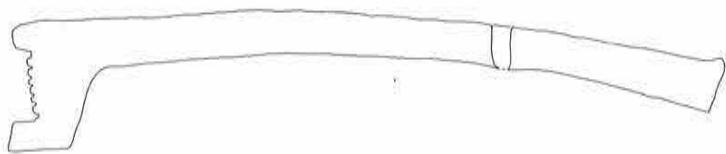
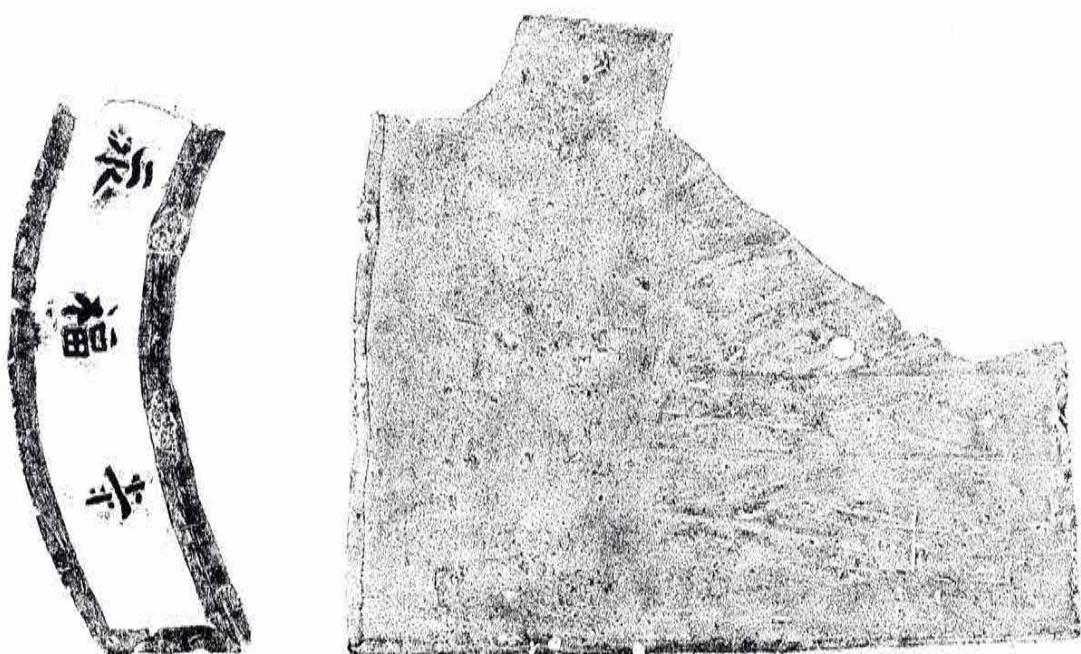


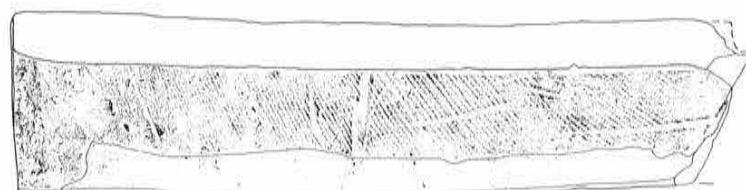
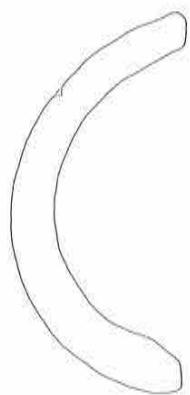
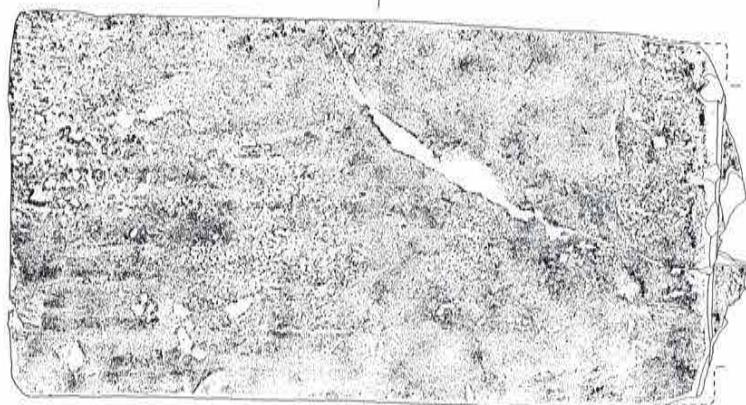
図11 宇瓦（I期唐草）



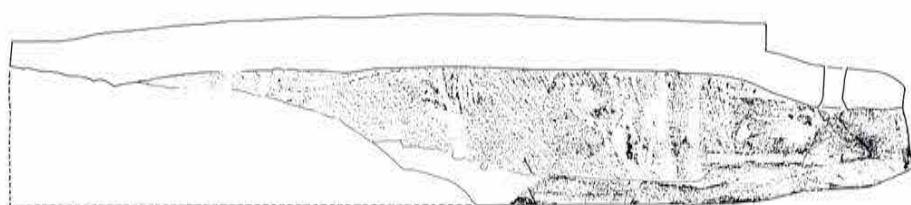
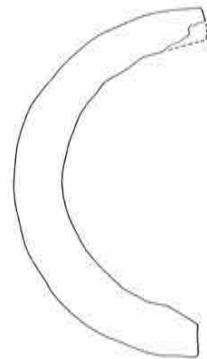
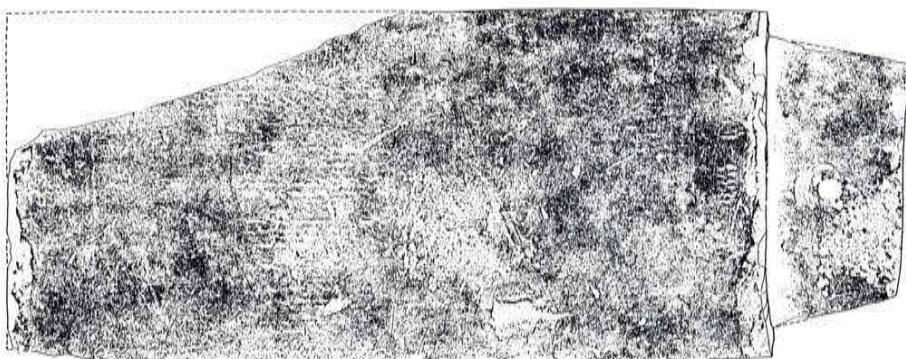
YN III 01b

0 10cm

図12 宇瓦（Ⅱ期寺銘）



1 A類



2 A類

0 10cm

図13 男瓦（I期）

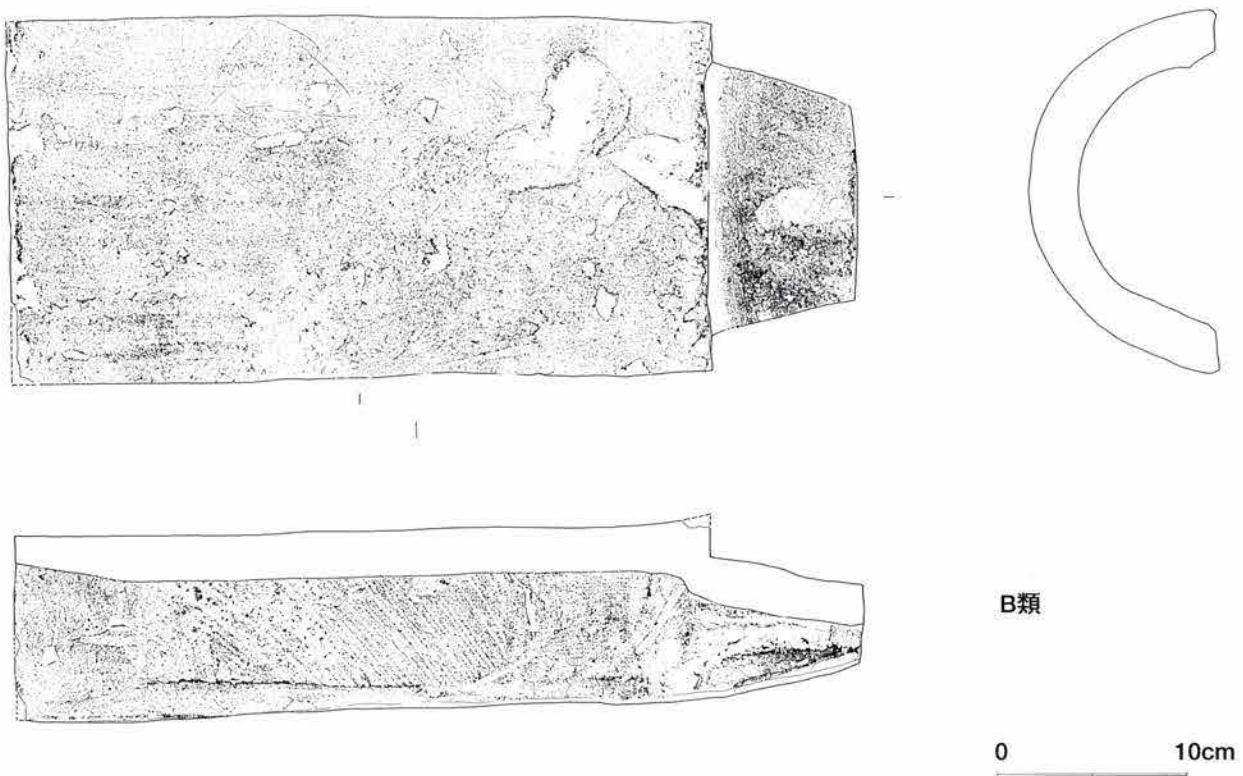


図14 男瓦（II期）

スタンプ状のものを押して作られ、珠文帯はヘラによる線刻である。2はIV期下層覆土より出土。成形は1と異なり、全体を范で作っていると考えられる。珠文帯は范で成形した後に、若干の削りで調整している。

## 第2節 伽藍正面（東）の山の遺構確認調査

### （1）伽藍正面（東）の山の確認調査で検出した遺構（トレンチ1～11）

二階堂から見て正面左手、東の山の中腹、海拔約32m程の所に約800m<sup>2</sup>程の平場があり、買収以前は宅地であった。位置的には杉ヶ谷の入口、亀ヶ渕にあたることから、文献中から名前を拾うことができる「亀ヶ渕坊」、もしくはそれに関連した遺構が埋没している可能性のある地点である。平場を中心に、3×4mの基本的なトレンチを7地点、1×3mの補助的なトレンチを4地点設定した。

#### a. トレンチ1

平場の西手前部分に設定したトレンチである。50cm程の表土（1）と暗茶灰色土層（2）を掘り下げるに、ほぼ平坦な1面（標高31.5m）のよく締まった茶灰色粘質土層（3）、第2面の土丹層（4）となる。約2.5m下のトレンチ最深部で岩盤面（標高30～30.6m）を確認した。岩盤は西に向かって傾斜していた。岩盤上で土丹（17）を使い地業を行っている。土層（16）は溝状に落ち込んでいる。

遺物は1面と2面まで掘り下げる途中に、かわらけ、梅瓶、火箸、刀子等が出土している。

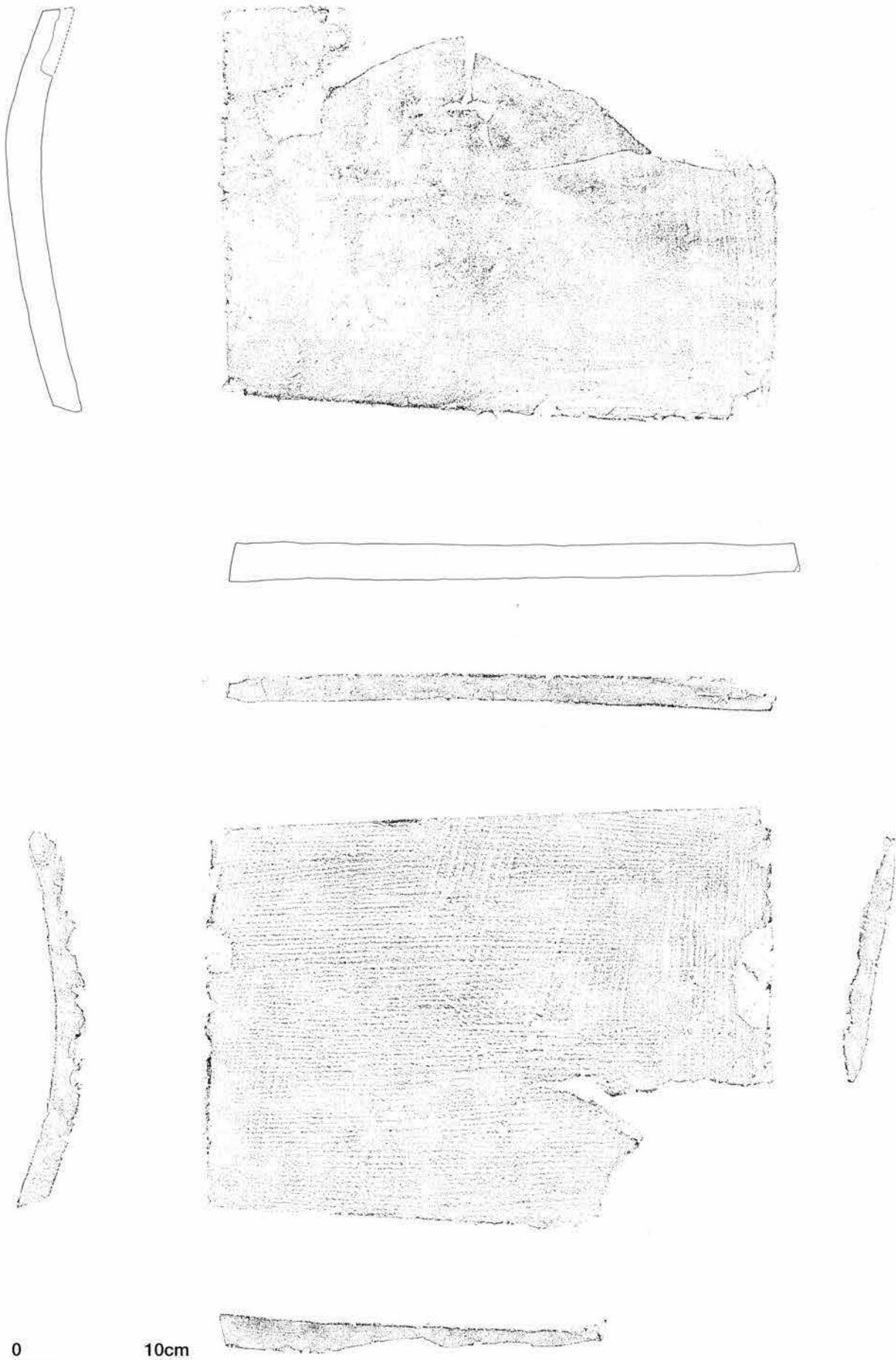
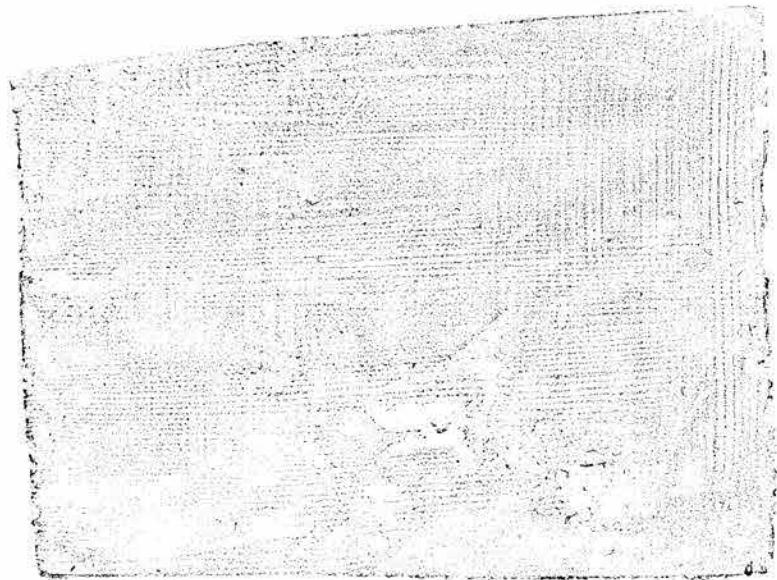
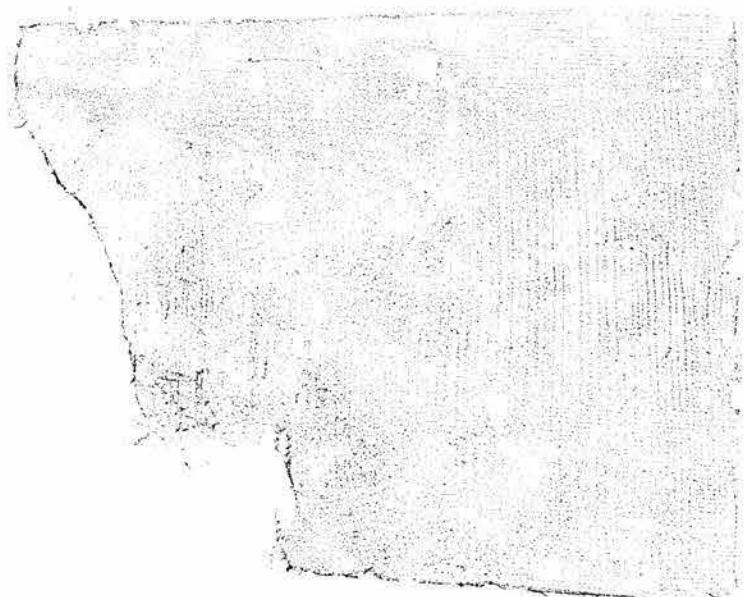


図15 女瓦 (I期)

A類



0 10cm



A類

図16 女瓦（I期）

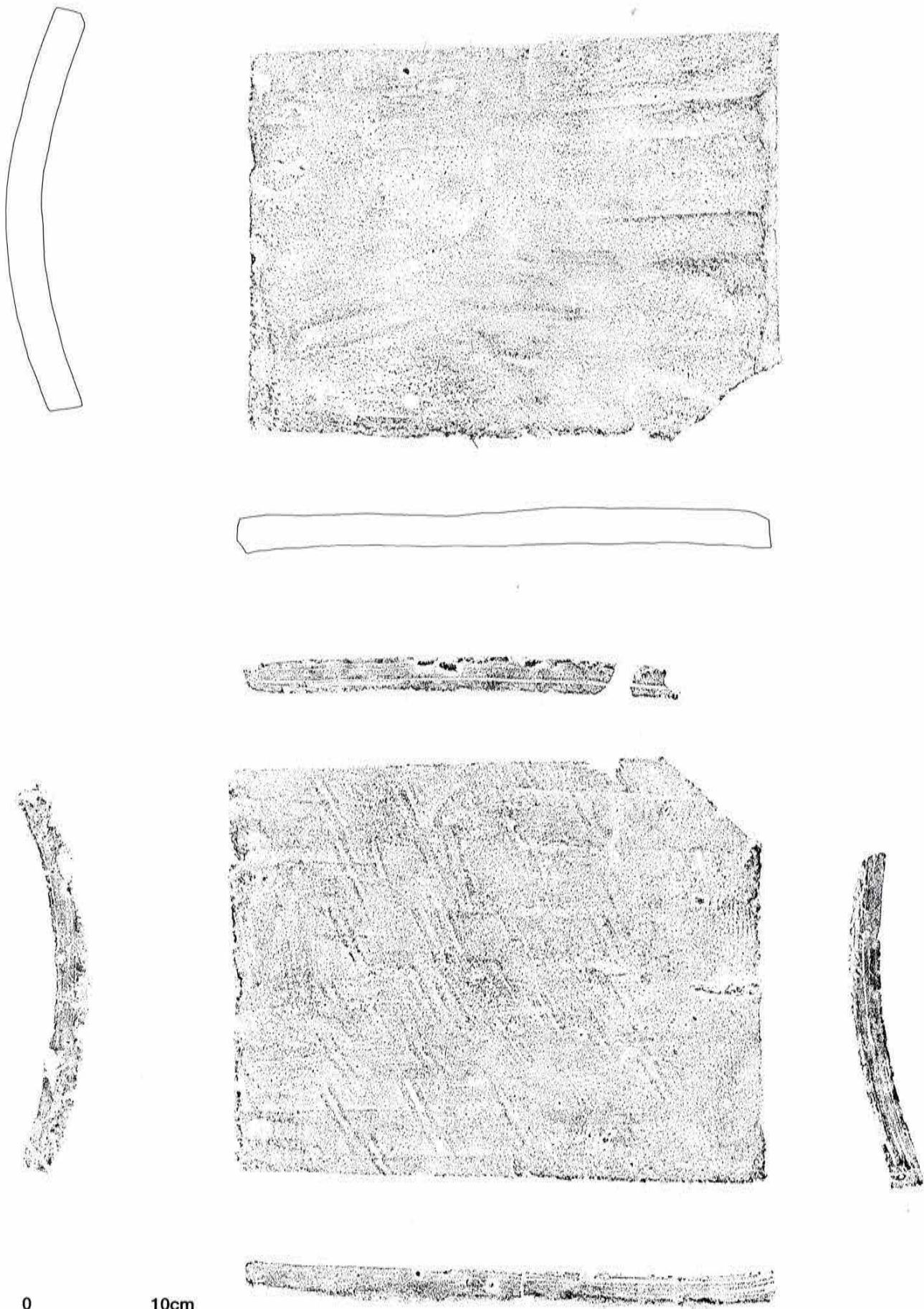


図17 女瓦（I期東海系）

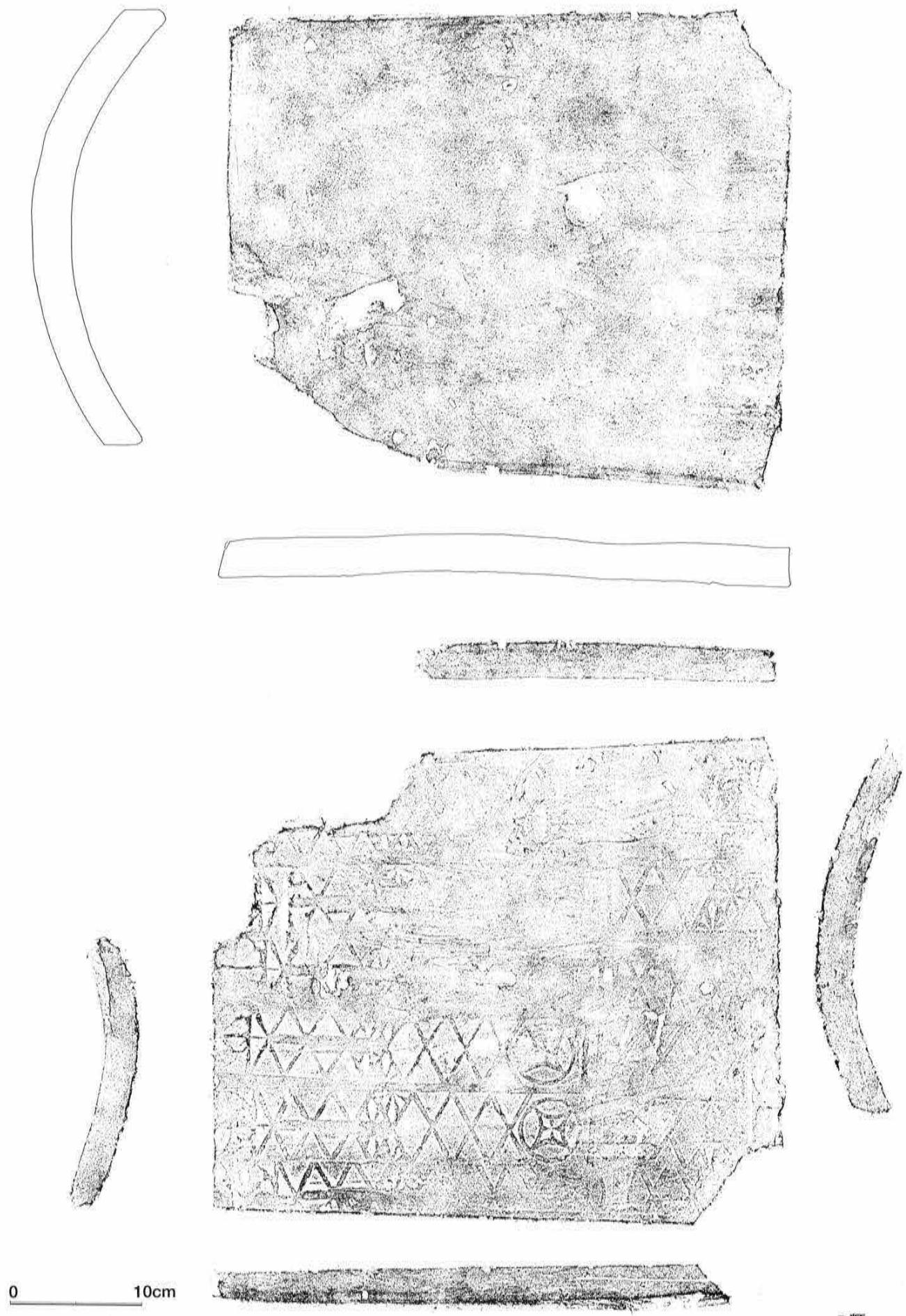


図18 女瓦（II期）

D類

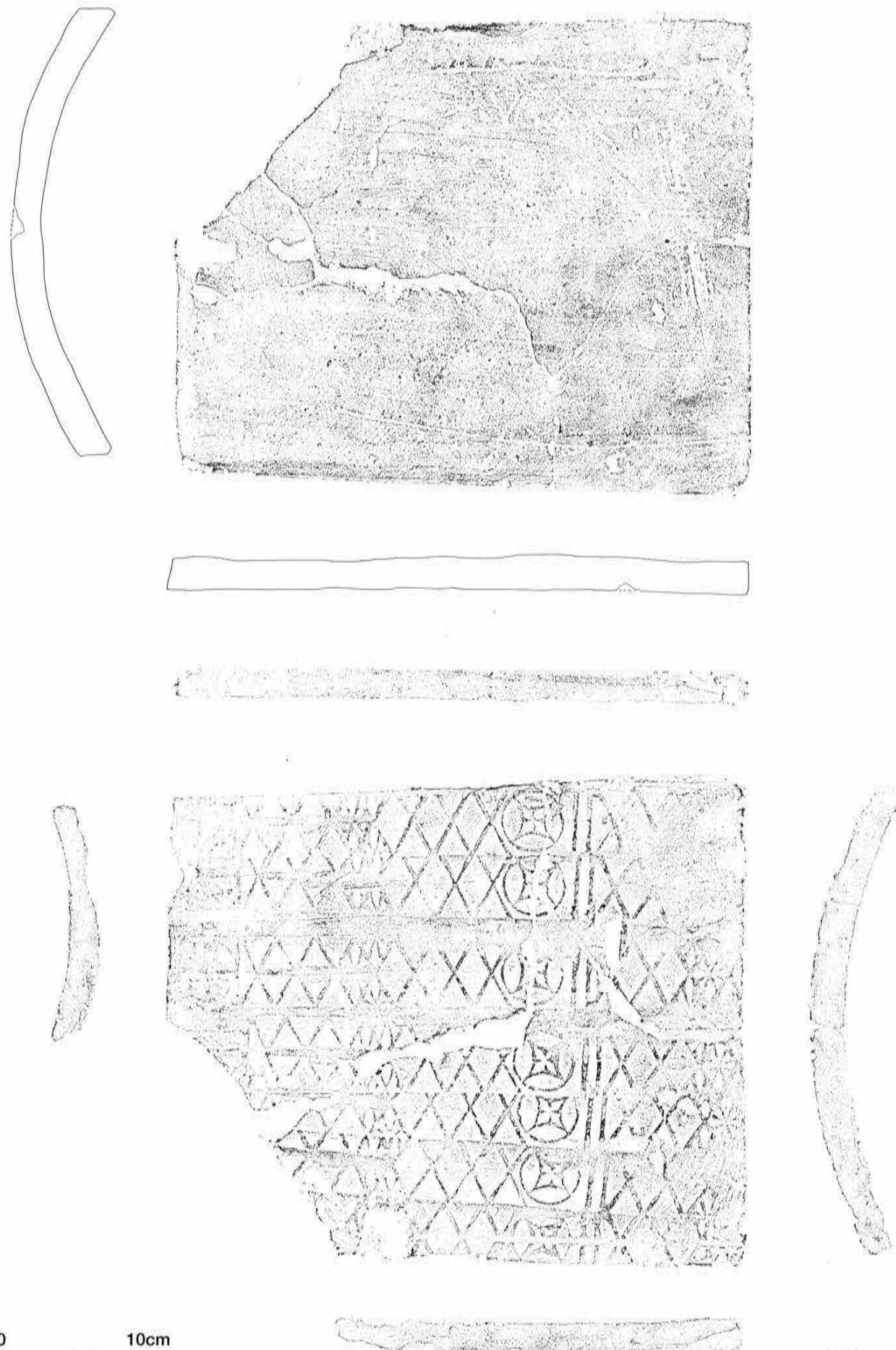


図19 女瓦（II期）

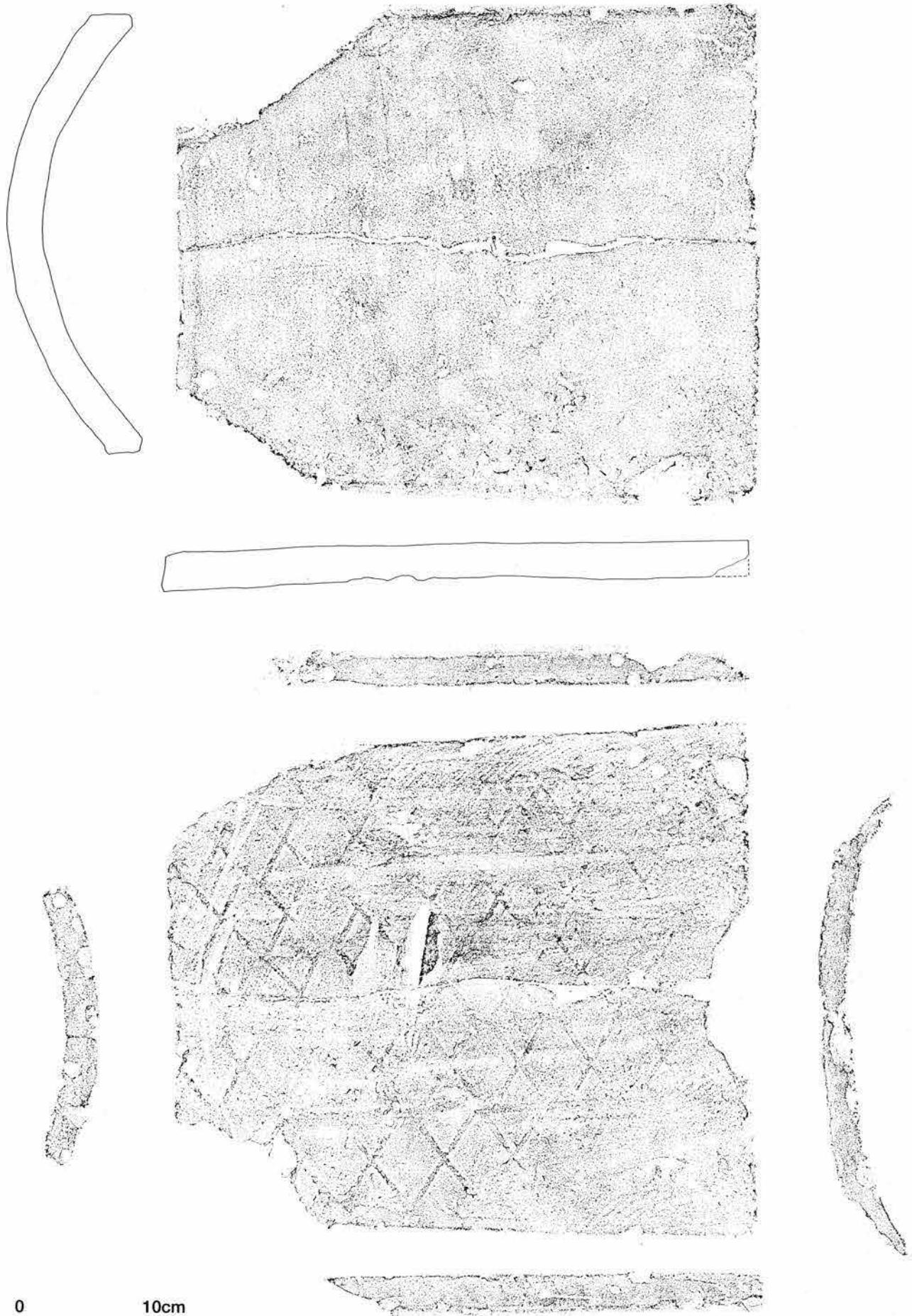


図20 女瓦（II期）

D類

### b. トレンチ 2

平場の一番西端に設定したトレンチである。表土（1）と暗茶灰色土層（2）を50cm程掘り下げると、岩盤面（海拔31.8m）となる。岩盤面上で3ヶ所の柱穴と、東西方向に延びる岩盤を掘った幅約60cmの溝（10）と、おそらく箱状になる一辺3m以上の落ち込み（11）を検出した。トレンチの北側では切り立った岩肌が露頭している。溝の中から若干のかわらけが出土している。落ち込みは岩盤を約1.2m掘り込み底面はほぼ平坦である。全体の形、何の遺構かは調査範囲が狭く不明である。

遺物は、高台付きの瀬戸折縁鉢、火舍等が出土している。

### c. トレンチ 3

トレンチ1の東側で約7m離れた位置に設定したトレンチである。表土（1）と暗茶灰色土層（2）を約50cm掘り下げると、茶灰色土層中に土丹が密に含まれた1面（海拔32m）が検出された。一部1面を掘り下げ、下の土層を確認した。1面の下約80cmで、ほぼ平坦な岩盤面（海拔31.8m）となる。この間、幾重にも厚さ10~20cm程度の地業が行われ、面を造っているが時期差は余り認められない。

### d. トレンチ 4

トレンチ3の北側で約10m離れた位置に設定したトレンチである。表土（1）と暗茶灰色土層（2）を約60cm掘り下げると、茶灰色粘質土層（3）の1面（海拔32.7m）が検出された。この1面の浅い窪みに張り付いた形で完形品を多く含む、かわらけ溜まりを検出した。14世紀前半頃に一括して投棄されたようである。このトレンチでは岩盤面は検出されず、淡黄灰色粘質土層の地山を検出した。

遺物は青磁水滴、梅瓶、手焙り、砥石、滑石製温石等が出土している。

### e. トレンチ 5

トレンチ3の東側で約8m離れた位置に設定したトレンチである。表土（1）と暗茶灰色土層（2）を約50cm掘り下げると、茶灰色粘質土層の1面（海拔32.4m）となる。この下層では、西に向かって緩やかに落ち込む岩盤面（海拔32.2~32m）を検出した。

遺物は、褐釉の施された酒会壺の蓋、青磁碗、砥石が出土している。

### f. トレンチ 6

トレンチ5の北側で約10m離れた平場のほぼ中央に設定したトレンチである。表土（1）と暗茶灰色土層（2）を約50cm掘り下げると、茶灰色粘質土層の1面（海拔32.8m）を検出した。1面を残しながら一部掘り下げると、最下層は淡黄灰色粘質土層（地山）となる。

図示できる遺物の出土はなかった。

### g. トレンチ 7

平場の北東隅、一番奥の山際に設定したトレンチである。山際のため、1面（海拔32.8m）まで表土

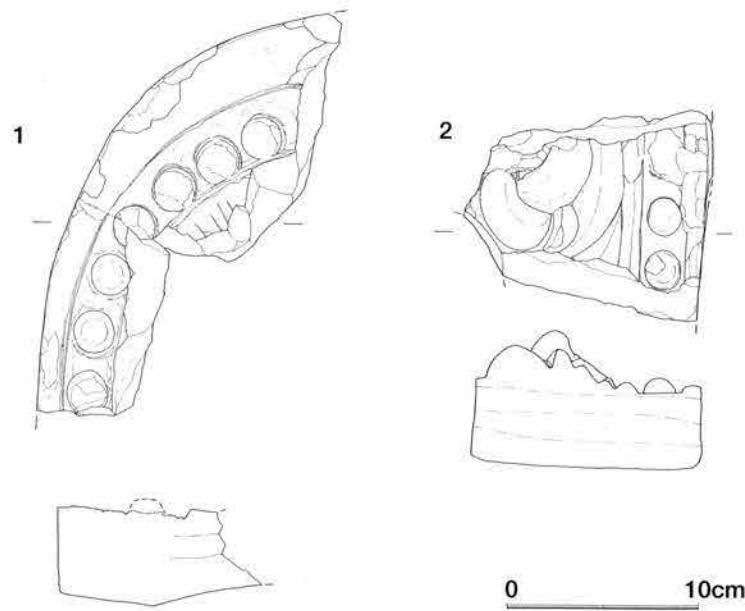


図21 鬼瓦

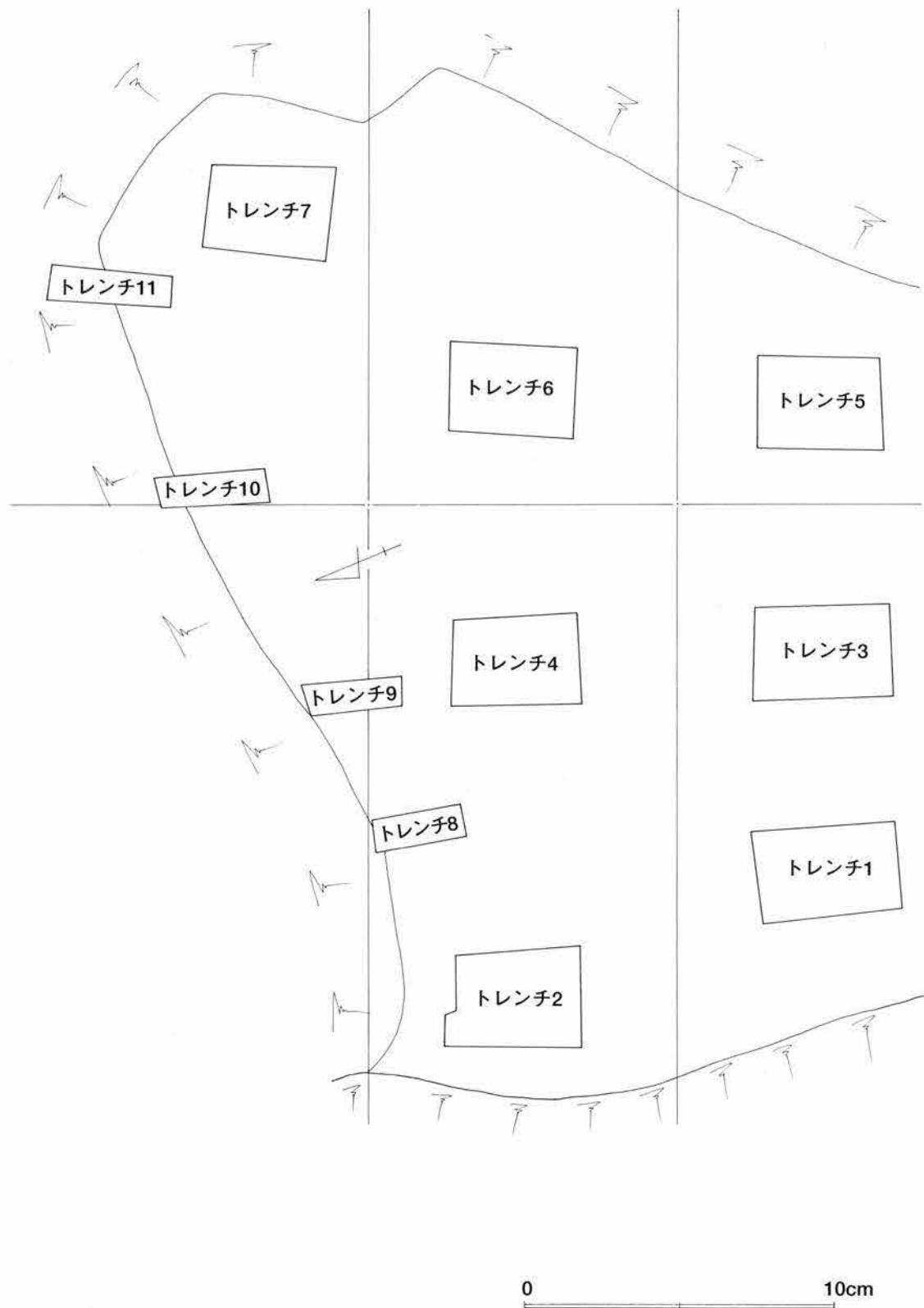
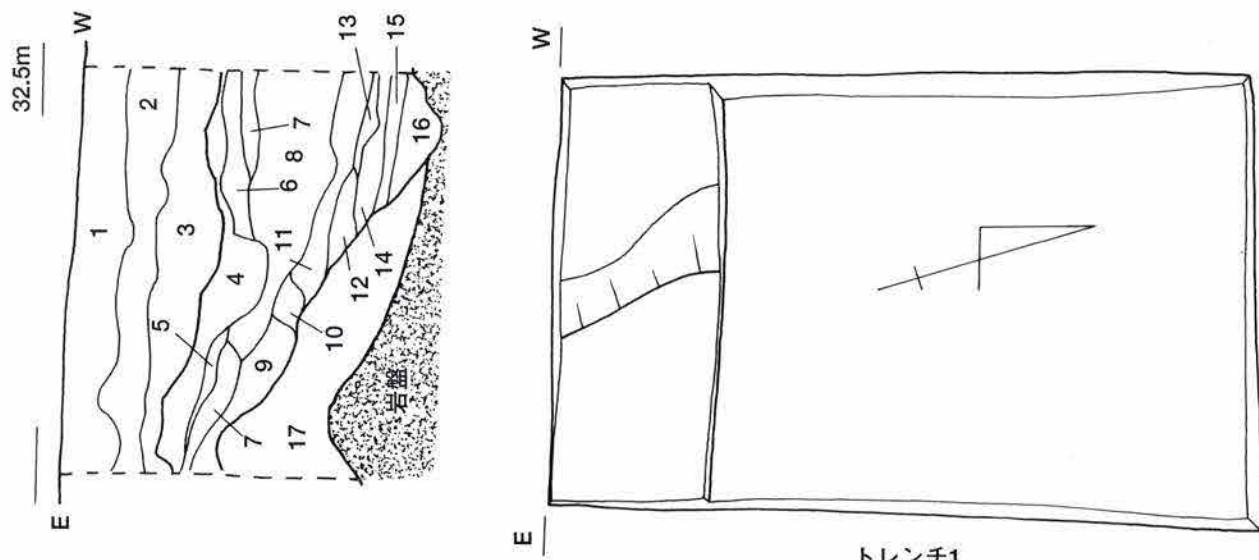


図22 伽藍正面（東）の山の平場遺構確認調査位置図 トレンチ 1～11



トレンチ1

- |                               |              |             |
|-------------------------------|--------------|-------------|
| 1. 淡茶灰色土層（表土）                 | 8. 茶灰色粘質土層   | 15. 茶灰色粘質土層 |
| 2. 暗茶灰色土層、しまり悪く少量のかわらけ含む      | 9. 暗茶灰色粘質土層  | 16. 土丹層     |
| 3. 茶灰色粘質土層、しまり良く10cm大の土丹炭化物含む | 10. 茶灰色粘質土層  | 17. 土丹層     |
| 4. 土丹層、10cm大の土丹密              | 11. 暗茶灰色粘質土層 |             |
| 5. 暗茶灰色粘質土層                   | 12. 暗茶褐色粘質土層 |             |
| 6. 茶灰色粘質土                     | 13. 暗茶灰色粘質土層 |             |
| 7. 土丹層、20cm大の土丹密              | 14. 暗茶褐色土層   |             |

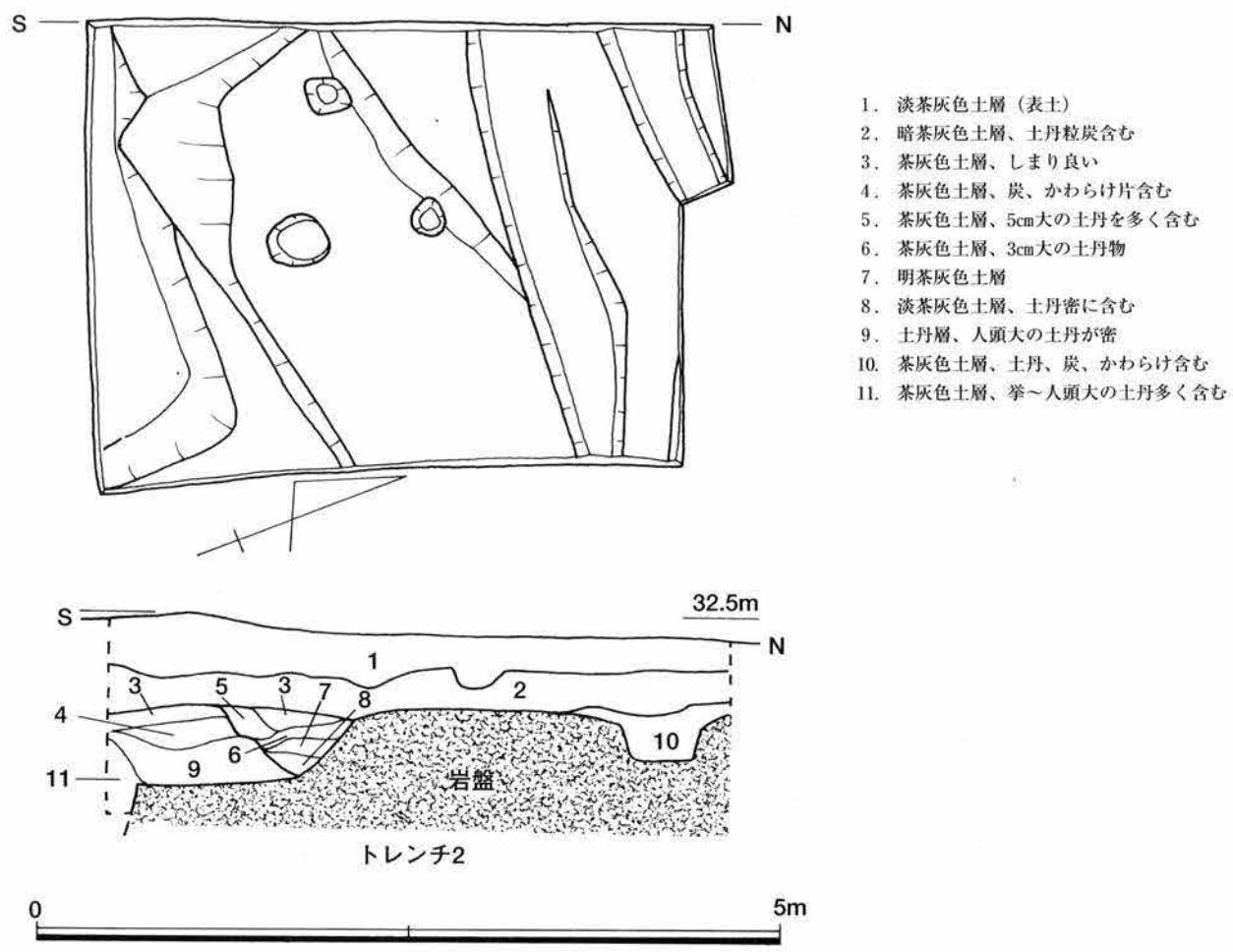


図23 トレンチ1・2

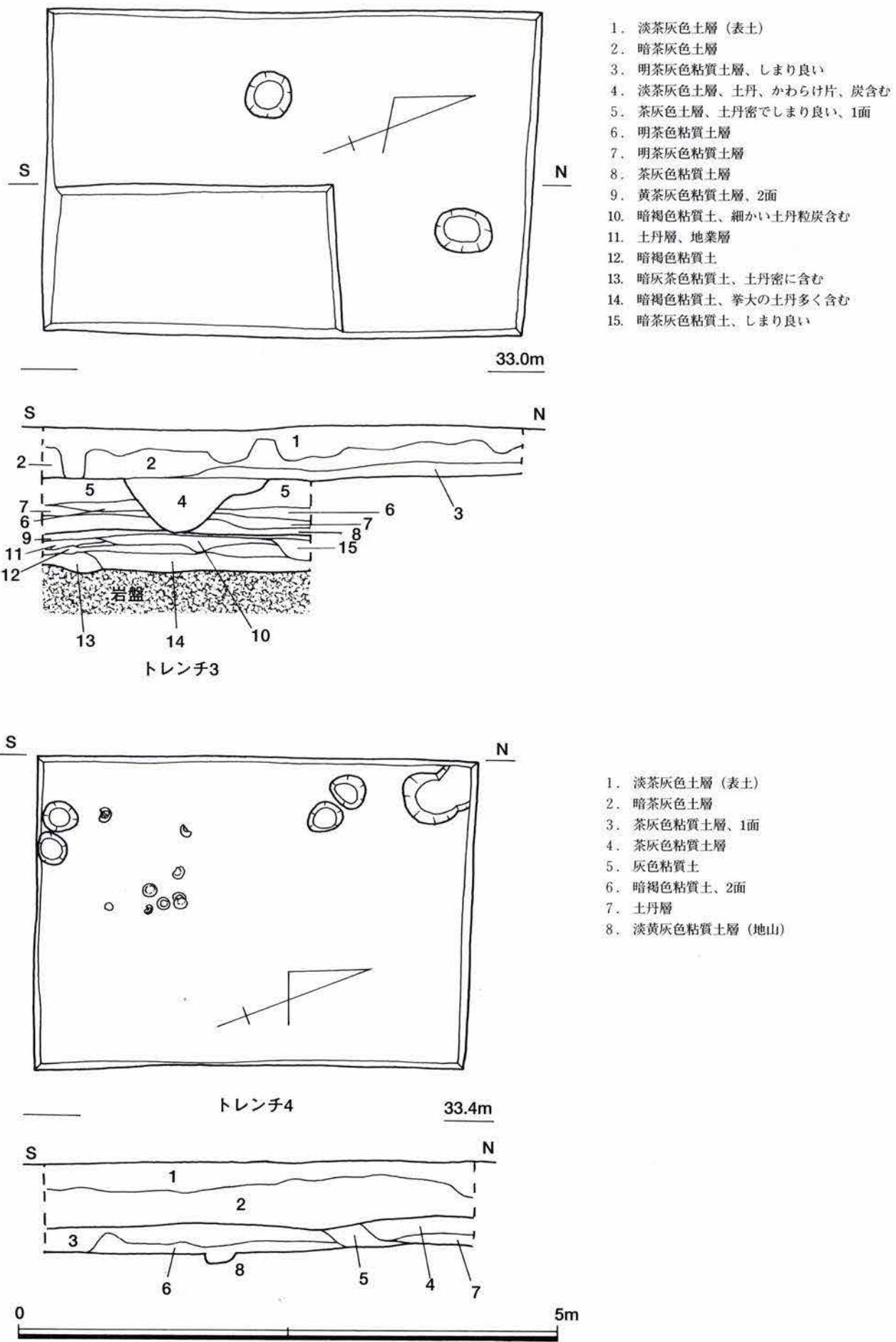


図24 トレンチ3・4

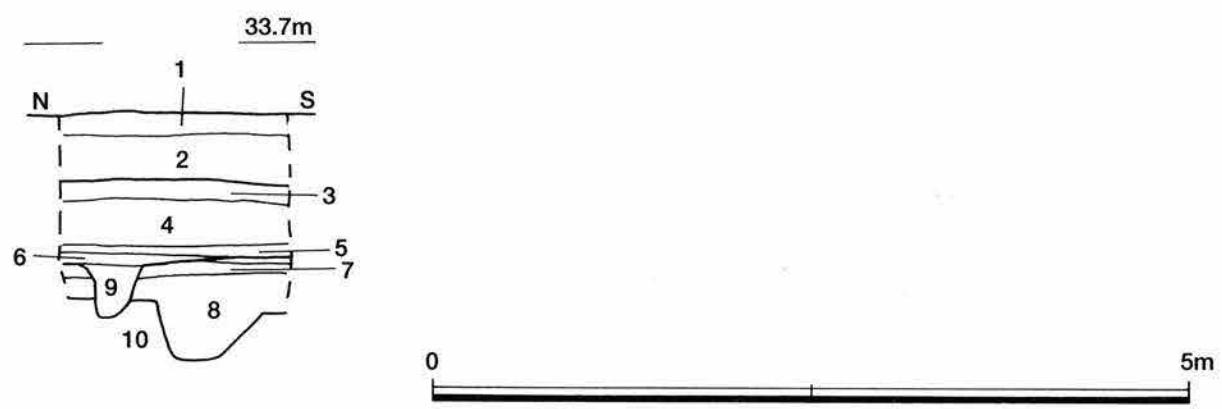
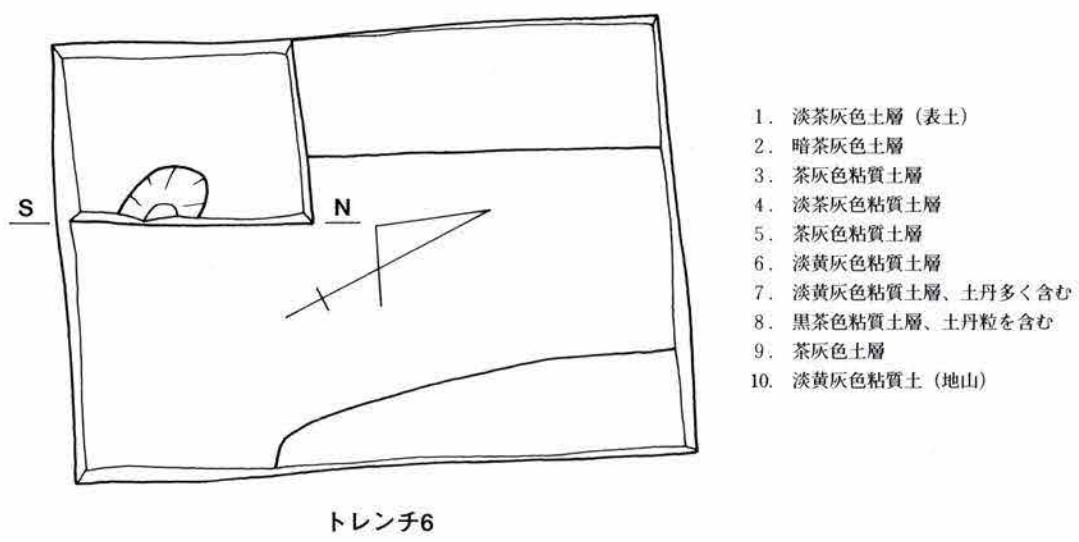
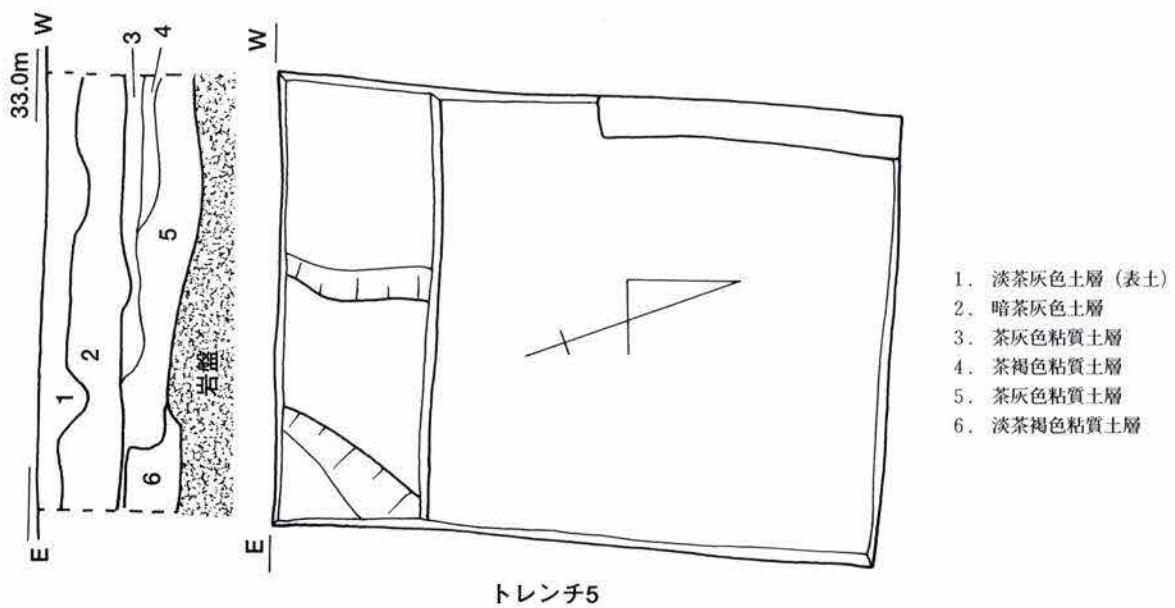


図25 トレンチ5・6

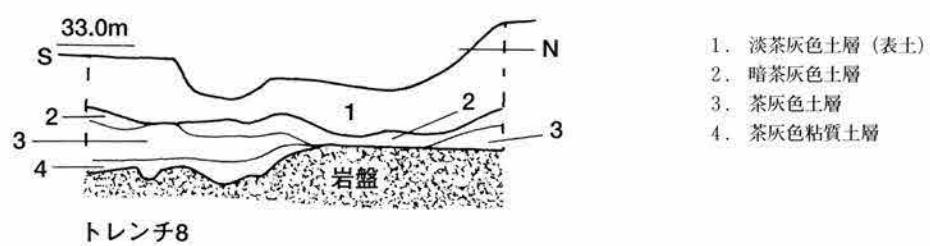
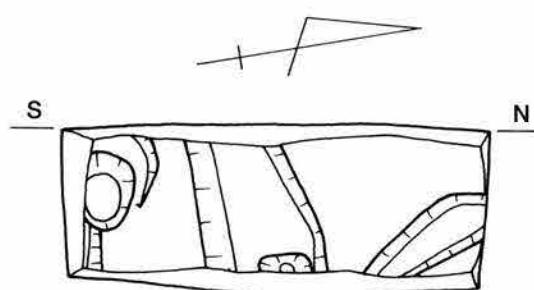
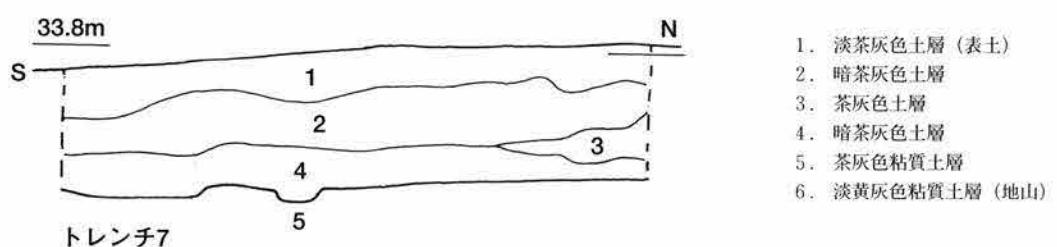
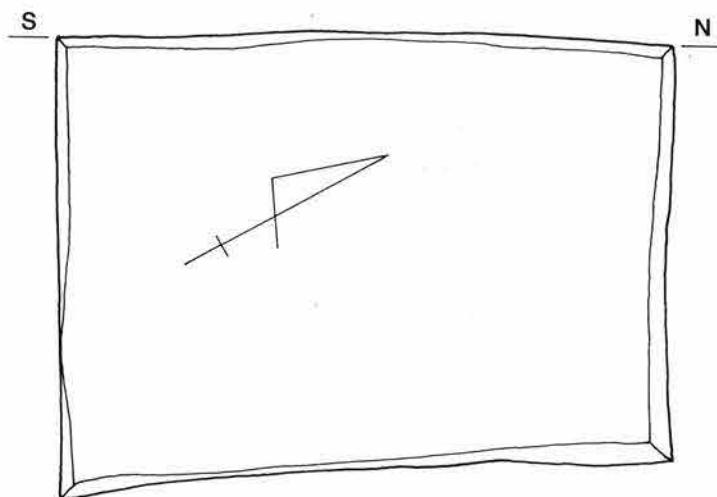


図26 トレンチ 7・8

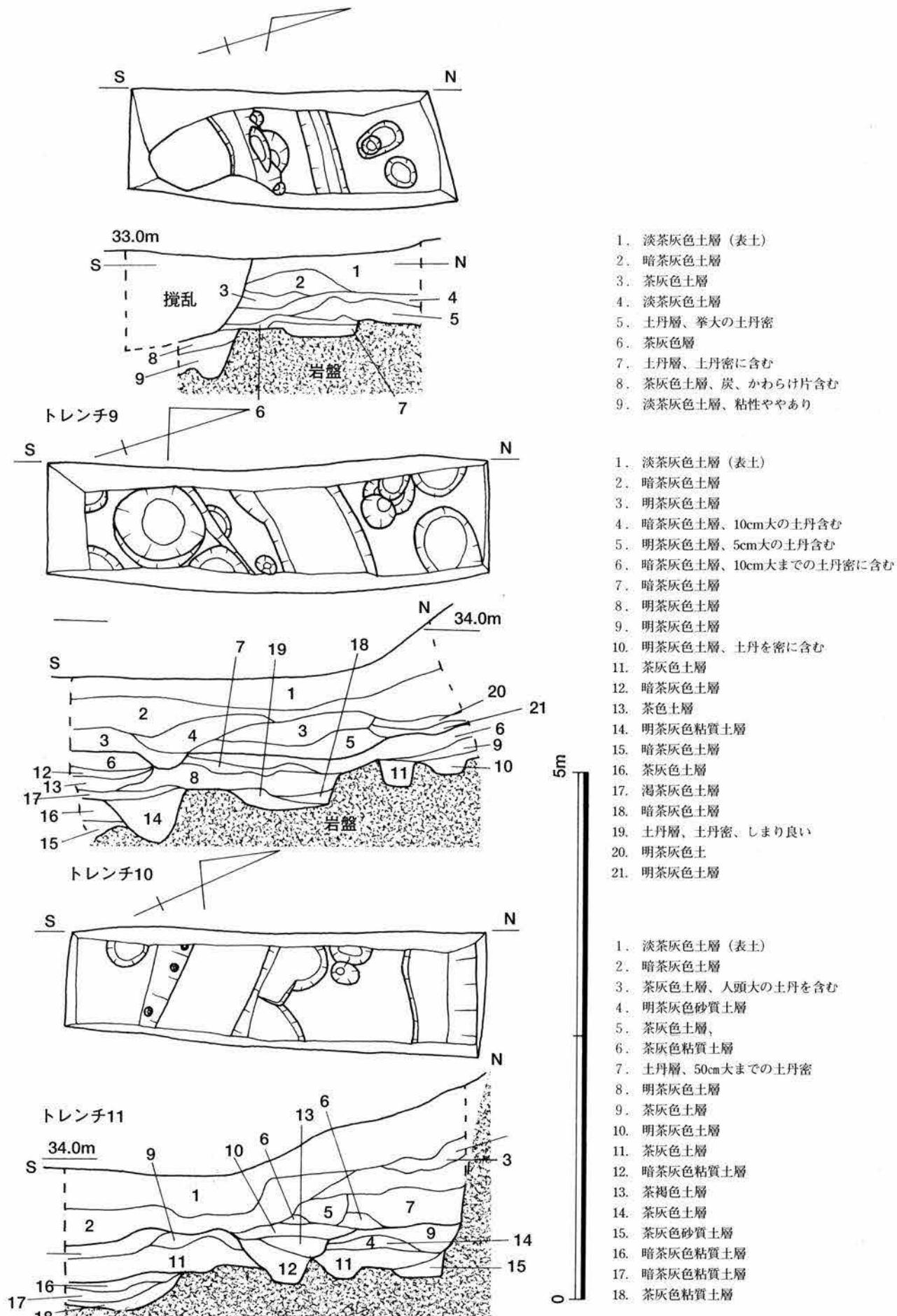


図27 トレンチ 9・10・11

(1) と暗茶灰色土層 (2) の他に茶灰色土層 (3)、暗茶灰色土層 (4) が堆積し、1面までの深さは約90cmである。

遺物は若干のかわらけと瀬戸の折縁鉢が出土している。

h. トレンチ 8

平場の北側、切り立った山際の西隅に設定した  $1 \times 3$  m のトレンチである。表土 (1) と暗茶灰色土層 (2) の下はすぐに岩盤面 (海拔32.4m) が露出する。岩盤上には幾筋かの東西方向に延びる溝を検出した。

図示できる遺物は出土していない。

i. トレンチ 9

トレンチ 4 の北、山際に設定した  $1 \times 3$  m のトレンチである。表土から約60cm掘り下げると岩盤面 (海拔32.4m) となる。面上には6穴の柱穴と山際を東西方向に走る溝を検出した。岩盤は西に向かって落ち込んで行く。

j. トレンチ 10

トレンチ 9 の北側で、約8m離れた地点に設定した  $1 \times 3$  m のトレンチである。トレンチ 8・9 と同じく、山際を東西方向に走る溝と多数の柱穴と土壙を検出した。柱穴、土壙ともに、溝に平行して並ぶようである。土壙は調査範囲が狭いため委細は不明だが、大きさ ( $80 \times 80$  cm)、規模 (溝に沿って4穴を確認) から見て、甕を据えていたように見える。

遺物は瀬戸の折縁鉢、常滑の甕の口縁等が出土している。

k. トレンチ 11

トレンチ 7 の北側の、切り立った山際に設定した  $1 \times 3$  m のトレンチである。トレンチの北壁は、ほぼ垂直に立ち上がる岩盤の壁になることを確認した。岩盤は西に向かって緩やかに下がって行く。表土

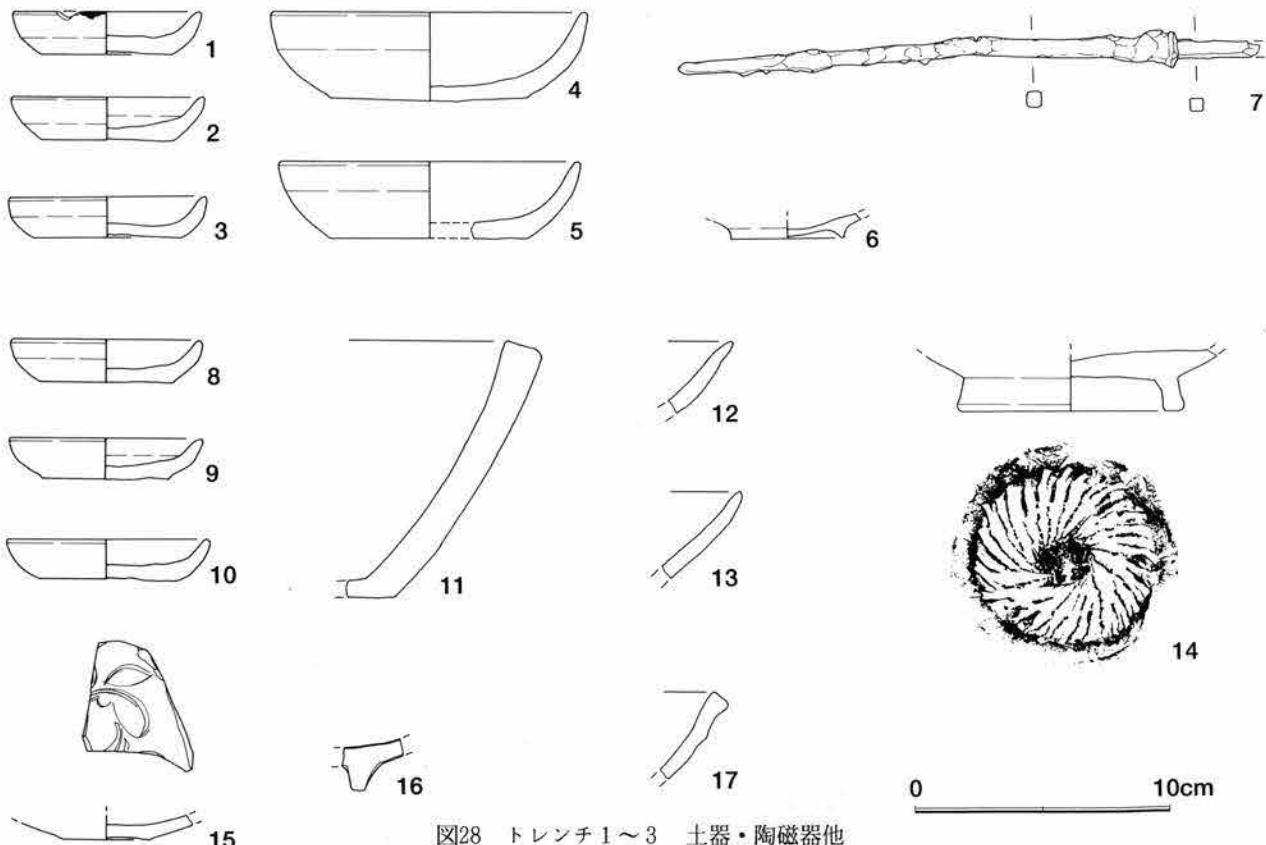


図28 トレンチ 1～3 土器・陶磁器他

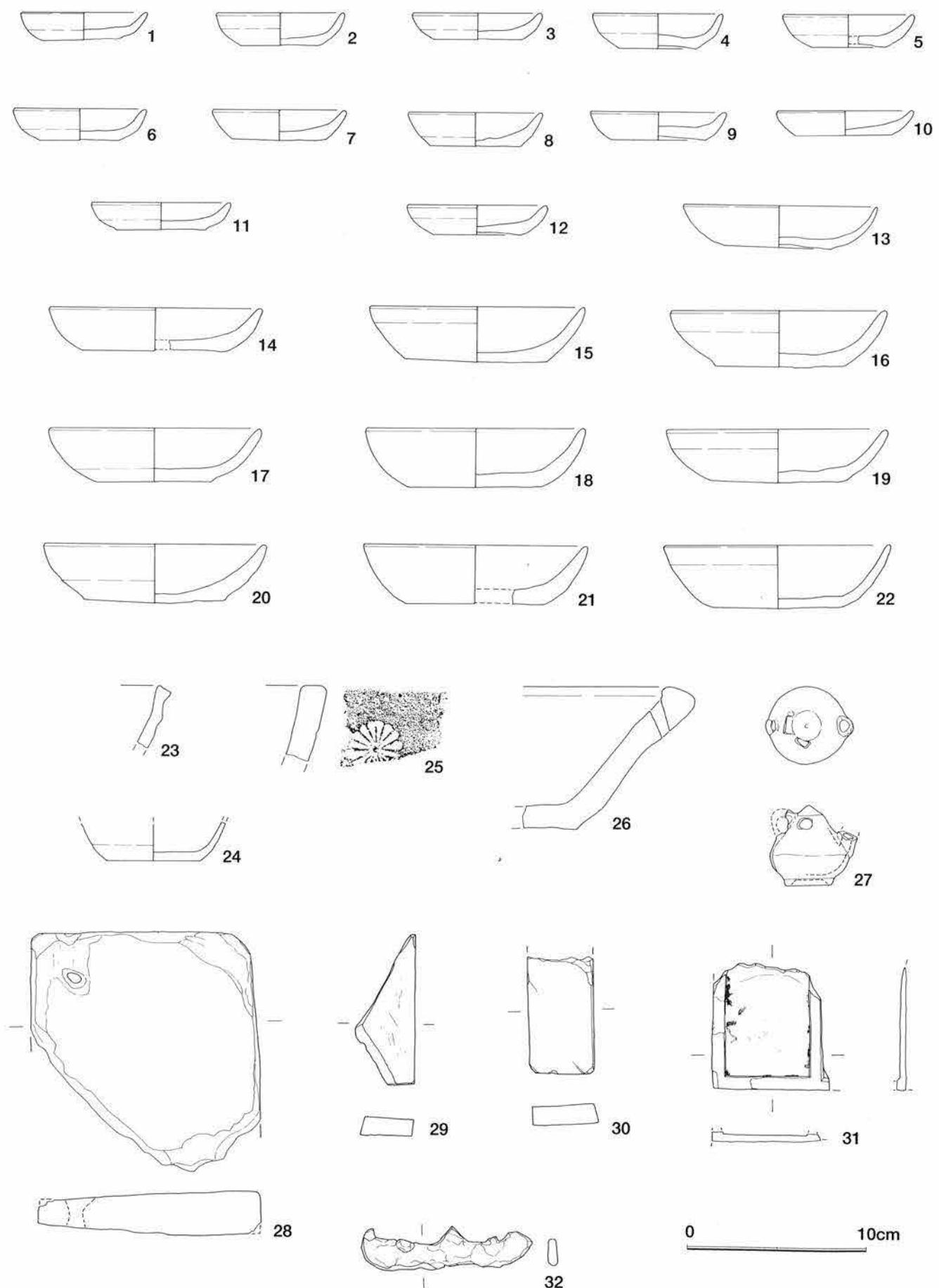


図29 トレンチ4 土器・陶磁器他

から1面まで約80cm、岩盤面（海拔33m）まで約1～1.5mである。

遺物はかわらけ（15世紀代）、瀬戸の折縁鉢、硯が出土している。

（2）伽藍正面（東）の山の平場確認調査で出土した遺物（図28・29・30、図版65～69）

a. 1～3 トレンチ出土の遺物（図28、図版65）

1～7はトレンチ1より出土した遺物である。

1～5はかわらけ。1は燈明皿である。1・4・5厚さが均一でやや丸みを帶びて立ち上がる。2・3はそれに比べ口縁へ向けて器肉が薄くなる、14世紀前半の様相を窺わせる。

6は皿もしくは碗の底部片。小砂が混入し、ざらつきがあり、表面の色調は黄白色、断面が濃灰色であることから伊勢系のものかと思われる。高台径は4.5cmである。

7は鉄製の火箸。残存長23.2cm、最大幅1.5cm。

8～16はトレンチ2より出土した遺物である。

8～10はかわらけ。口縁がやや薄い14世紀前半のものである。

11は手焙り片。全体的に摩滅し、文様等は認められない。器高10.3cm。

12・13は瀬戸の碗口縁部片。12は焼成が甘く、中心が淡赤灰色。表面も釉が剥離している。13は胎土緻密で淡黄灰色。淡緑色の釉が施されている。

14は瀬戸の鉢底部。淡黄灰色の精良な胎土に淡緑色の釉が施される。底部の上面には中心に3条の沈線が同心円を描き、さらにやや離れてさらに3条の沈線が巡る。裏面は高台を付けるときに施されたものか、拓影に見られるような掻き痕を持つ。高台径8.7cm。

15は白磁皿底部片。劃花文を呈し、底径3.5cm。

16は青磁碗底部片。灰白色の素地に青緑色の釉が施される。15・16とも胎土は堅緻である。

17はトレンチ3より出土した卸皿の口縁部片。胎土は淡灰色で比較的精良。淡緑色の透明な釉が施される。

b. トレンチ4出土の遺物（図29、図版66・67）

1～22はかわらけ。13は器肉が非常に薄く、堅く焼き締まった14世紀前半に見られる11cm前後のサイズのかわらけである。その他はやや器高の低い浅めのものを含み、13よりやや厚めな14世紀前葉の様相を呈するものである。

23は瀬戸の卸皿口縁部片。胎土は淡黄灰色、薄く淡緑色の釉が施される。

24は同じく瀬戸の碗底部。底径5.3cm。淡黄灰色の堅緻な胎土を持ち内壁面に僅かに降灰釉が見られる。

25・26は手焙り。25は口縁部片で砂を多く含み、ややしまりの甘い胎土に、外面口縁下に菊花のスタンプが施される。26は軟質の胎土だが締まりは良く、口縁部下に直径7mmの孔が穿たれる。器高8cm。

27は青磁の水滴。胎土は淡灰色を呈し堅緻。釉は暗緑色の半透明である。注ぎ口とつまみ部分が破損しているが状態は良く、上部側面に直径8mm大の水の注入口がつくられる。器高4.6cm。

28は温石。残存長13.7cm、幅13cm、厚み2.5cmの滑石製。石鍋の底を転用したものと思われる。角に直径1.5cm大の穿孔を持つ。

29・30は砥石。29は残存長8.5cm、残存幅3.4cm、厚み1cmで淡赤灰色。30は残存長6.6cm、幅3.7cm、厚み1.1cmの淡黄色。ともに片側面の研ぎ痕が顕著である。

31は硯。残存長7.2cm、残存幅6.6cm、縁と裏面は剥離している。右側に硯がもう一つ並ぶ形態である。濃灰色。

32は火打ち金。全体的に錆が著しい。残存長9.7cm、幅2.5cm、厚み約4mm。

c. トレンチ 5～11出土の遺物 (図30、図版68)

1～10はトレンチ 5より出土した遺物である。

1～6はかわらけ。総じて器肉が薄く、素地が細かい14世紀前半の様相を呈する。

7は酒会壺蓋片。胎土は淡黄灰色で精良堅緻。瀬戸の製品に酷似しているが、舶載のものとの推も脱し得ない。上面に薄く褐釉が施される。復元径16.5cm。器高3.6cm。

8は青磁碗口縁部片。胎土は堅緻。外面に鎧蓮弁文を有し、釉は半透明の青緑色である。

9は白磁の口兀皿口縁部片。胎土は堅緻、乳白色の釉が施されている。

10は砥石。残存長4.1cm、残存幅2.3cm、厚み5mm。

11はトレンチ 9出土のかわらけ。器肉が薄く素地も細かく密だが、二次焼成を受けたものか、灰褐色に変色している。14世紀前半の様相を呈する。

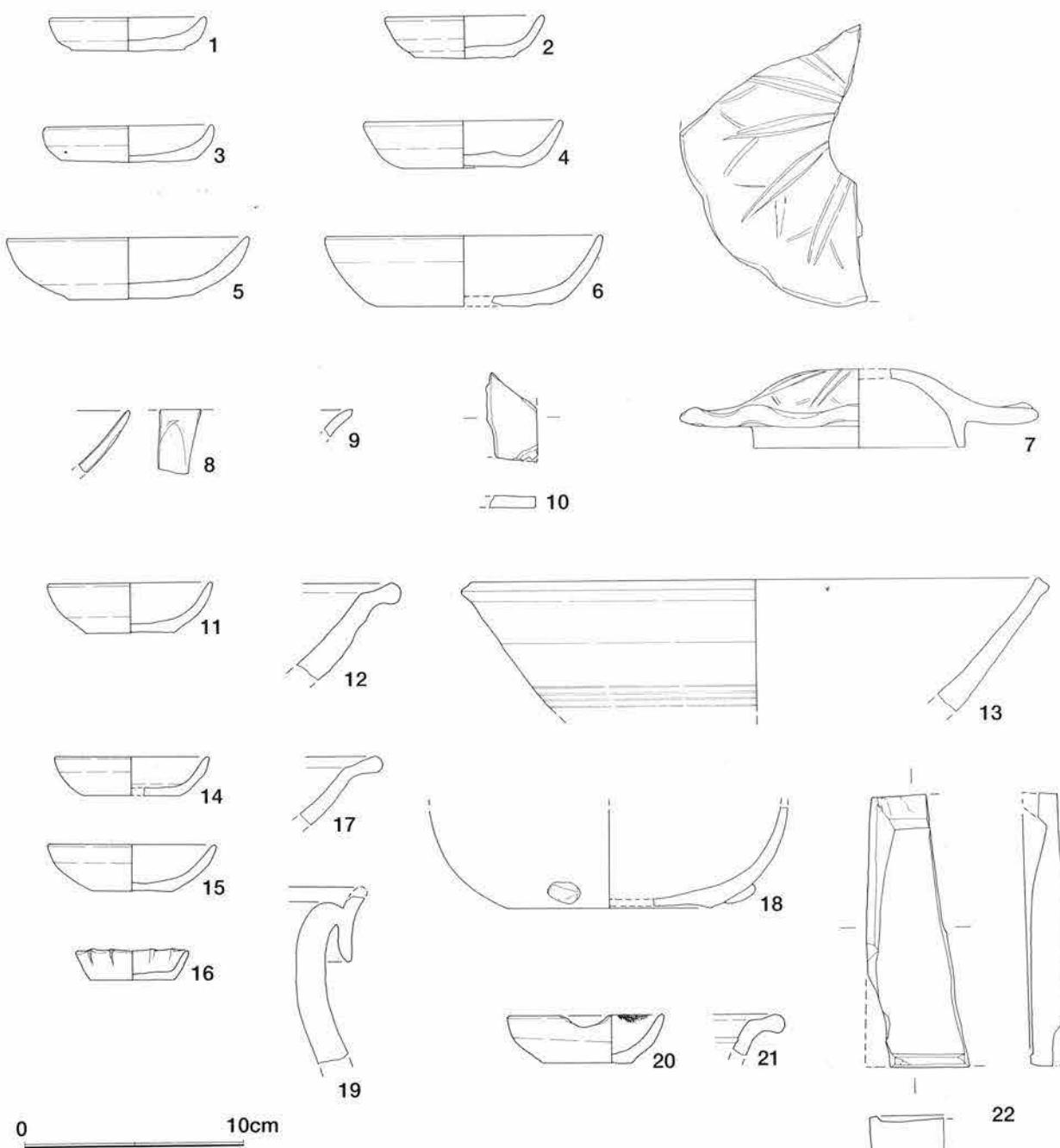


図30 トレンチ 5～11 土器・陶磁器他

12・13はトレンチ7からの出土。12は折縁鉢、13は鉢である。ともに瀬戸の産である。黄灰色の精緻な胎土を持ち、淡緑灰色の釉が施され、12は刷毛塗り。13は口径26.2cm、外体部に沈線が巡る。

14～19はトレンチ10から出土した遺物である。

14・15はかわらけ。素地は非常に精緻。器肉が薄く、焼成も良好である14世紀前半の形態。

16は瀬戸の入子。口径5cm、底径3.9cm、器高1.4cm。輪花型を有す。

17は瀬戸の折縁鉢口縁部片。胎土は淡黄灰色で精緻。

18は瀬戸の鉢。底部から緩く弧を描き立ち上がる。外面に貼り付いた塊は、重ね焼きする際に使用された粘土塊がそのまま付着したものである。胎土は乳白色で堅緻、内面は乳灰色に施釉され、底部に貫入がはいる。底径9.4cm。

19は常滑甕の口縁部片。堅緻な胎土を持ち、焼成も良好。口縁端部の形状は、14世紀中頃の様相を呈する。

20～22はトレンチ11より出土した遺物。

20は燈明皿に使用されたかわらけ。他のトレンチ同様、胎土の精良な14世紀前半の様相を呈するものである。

21は瀬戸の折縁鉢口縁部片。淡灰色の胎土に淡緑色の釉が施されている。

22は硯片。長さ12.6cm、残存長4cm、厚み1.8cm。陸部分と端の差があまりない。浅い感じの硯である。濃灰色。

#### d. 石塔 (図31・32、図版69)

東の山の平場では、調査以前から五輪塔が散乱していた。図31・32はこの表採資料である。

図31-1は空風輪。安山岩製。空輪の径約14cm、先端は欠損しているが残存する高さ約13cm。風輪の径約14cm、高さ約8cm。風輪の下に火輪に差し込む径約6cmの凸部をもつ。四面に種子が刻まれる。種子は拓影左から「」「」「」「」と見られる。

図31-2はやはり空風輪だが鎌倉石製。全体に材質が軟らかいためか、風化しており、種子が刻まれていた痕跡は認められるが不明瞭である。空輪の径約16cm、高さ12cm。風輪の径約16cm、高さ約8cm。

図31-3も2と同様の空風輪で、鎌倉石製。やはり風化が進んでおり、種子は不明瞭。空輪の径約18cm、高さ約16cm。風輪の径約18cm、高さ約8cm。底面はやや凹形に成形されている。

図31-4は火輪。鎌倉石製。幅約33cm、高さ約19cm。種子は刻まれていない。

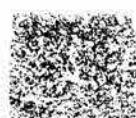
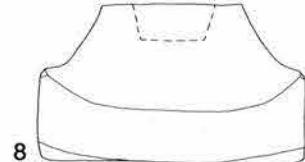
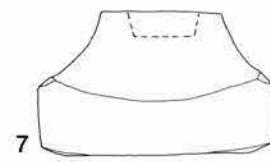
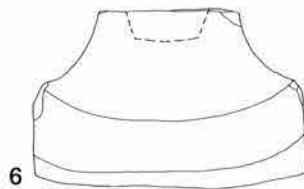
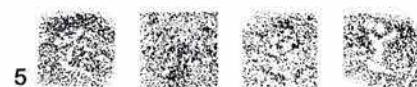
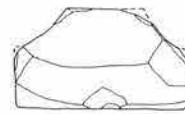
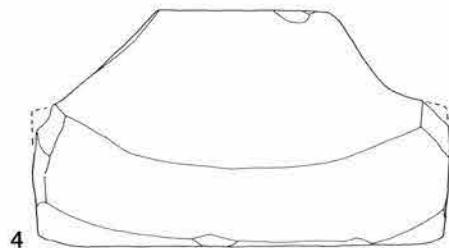
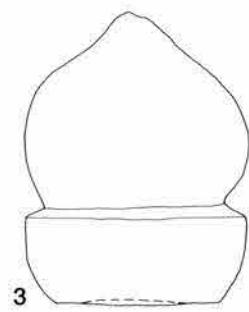
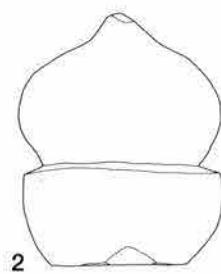
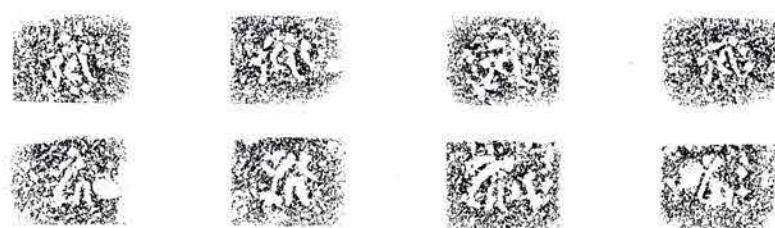
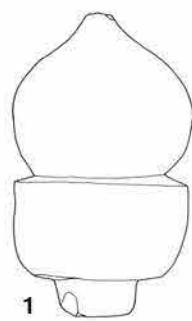
図31-5は火輪。鎌倉石製。かなり風化が進み、欠損している箇所も多いが、幅14cm、高さ8cm程度と推測される。種子は四面に認められるが、かなり不鮮明となっている。拓影左から「」「」「」「」か。

図31-6は火輪。安山岩製。幅約21cm、高さ約14cm。種子は一面のみに認められるが不鮮明。上面に空風輪を受ける凹形の枘穴が設けられている。この形状は図31-7・8、図31-1・2も同様で、今調査で表採した安山岩製の火輪全てに共通する。

図31-7は火輪。安山岩製。幅約19cm、高さ約11.5cm。種子は一面をのぞいて不鮮明である。「」か。

図31-8は火輪。安山岩製。幅約21cm、高さ約13.5cm。種子は一面のみ認められる。「」か。

図32-1は火輪。安山岩製。欠損が目立つが、幅20cm、高さ13cm程度と推測される。種子は四面に認められるが、かなり不鮮明である。



0 20cm



図31 石塔

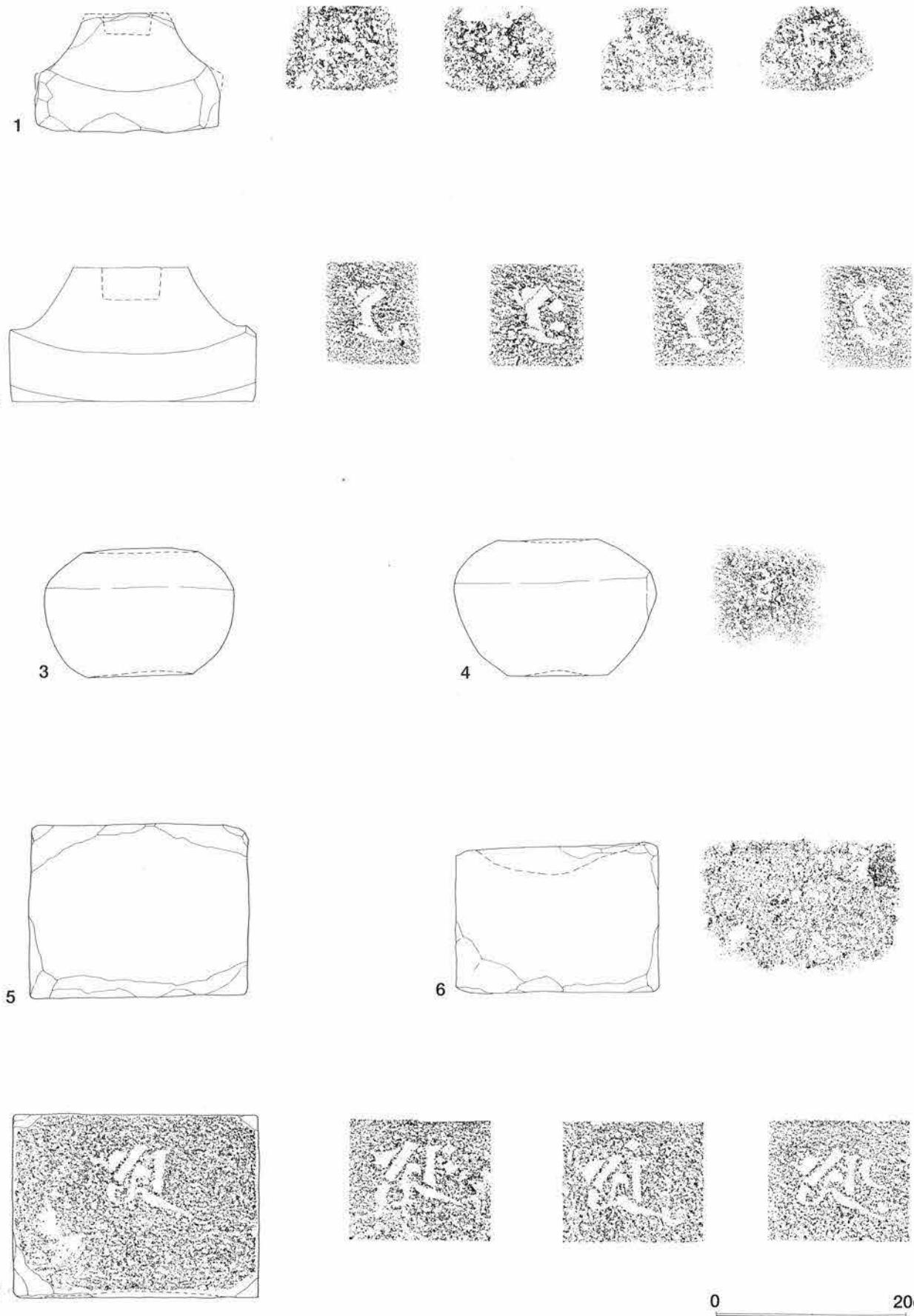


図32 石塔

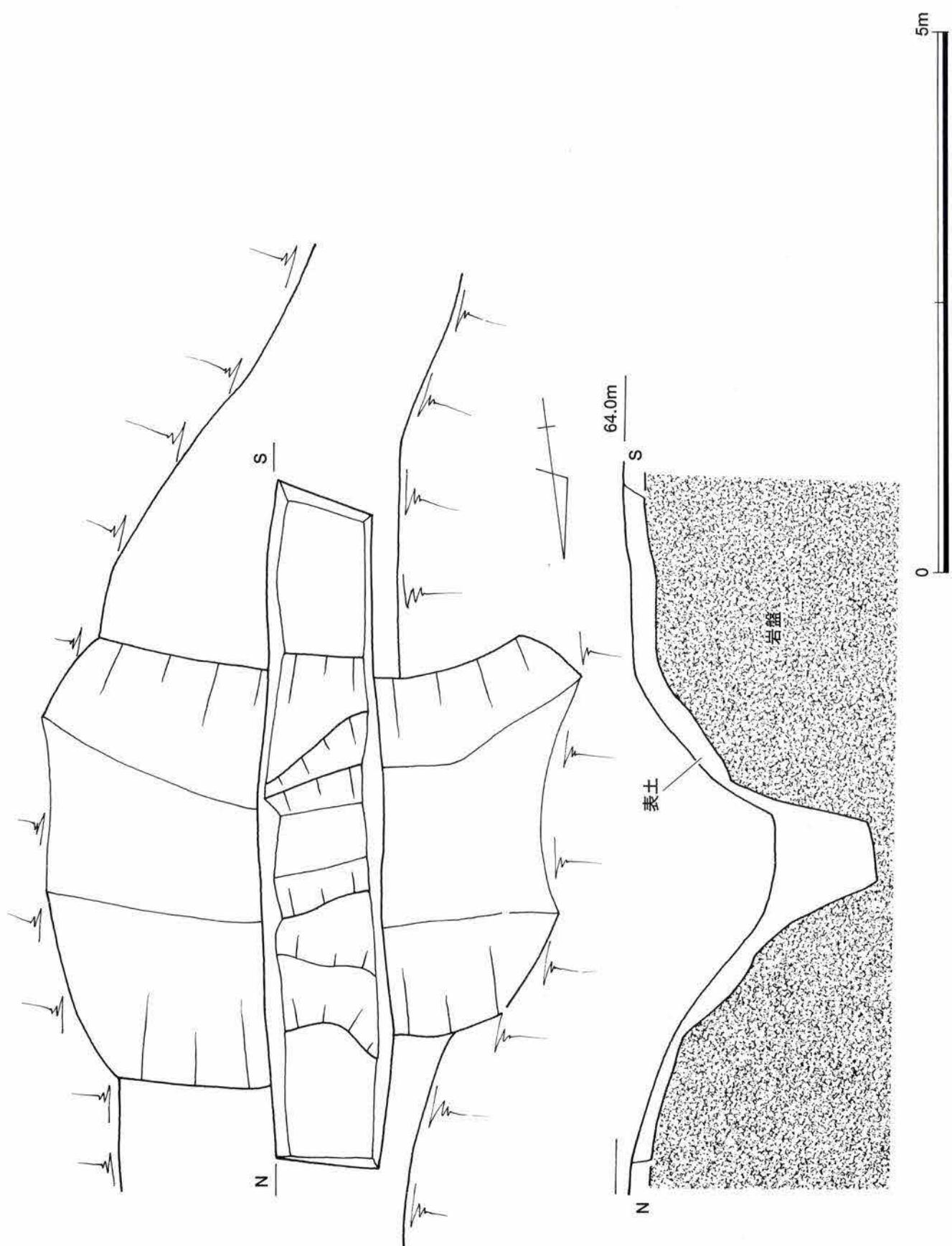


図33 トレンチ12（堀切）

図32-2は火輪。安山岩製。幅約27cm、高さ約14.5cm。残存状態はごく良好で、薬研に刻まれた種子も明瞭である。拓影左から「工」「工」「工」「工」。

図32-3は水輪。安山岩製。最大径約20.5cm、高さ約14cm。種子が刻まれているかは不明瞭。上面・底面はわずかに凹形に成形されている。

図32-4は水輪。安山岩製。種子は一面に「工」が認められる以外は不鮮明、ごく小さく刻まれている。やはり上面・底面が凹形を呈する。

図32-5は地輪。鎌倉石製。幅約24cm、高さ約19cm。風化が著しく、欠損している箇所も目立ち、種子が刻まれているかどうかは不明瞭。

図32-6は地輪。鎌倉石製。こちらもかなり風化しているが、幅22cm、高さ16cm程度と推測される。一面に種子が刻まれた痕跡がわずかに認められる。「工」か。上面は凹形にくぼみをもつ。

図32-7は地輪。安山岩製。幅約26.5cm。高さ約20cm。残存状態が良好で、薬研に刻まれた種子が明瞭。拓影左から「工」「工」「工」「工」。大きさ、種子の字体から見て、図32-2と組合っていたものとも思われる。

### (3) 伽藍正面(東)の山の尾根遺構確認調査(トレンチ12, 13)

永福寺正面(東)の山の尾根上に2地点設定したトレンチである。

#### a. トレンチ12(堀切)

東の山の尾根線上に設定した2×6mのトレンチである。トレンチの位置から直接見ることはできないが、ほぼ薬師堂正面の延長線上になる。調査地点を設定する踏査の際に、幅約3m、長さ約4mの範囲で、尾根を分断している落ち込みが確認され、小規模ながら尾根を分断する堀切と思われた。調査の結果、標高63.8mの尾根を幅約3m、深さ1.70mに渡って分断していることが明らかになった。尾根線上の表土は約20cm程度で、場所によっては岩盤が露頭している状況であった。

遺物の出土が確認されなかったため、堀切の造られた年代等は不明である。

#### b. トレンチ13(経塚)

東の山の尾根先端部分に設定した2×12mのトレンチである。トレンチ位置から西の方角を見ると、眼下に二階堂、阿弥陀堂を見る事ができる位置であった。トレンチ位置の標高は47.8~47.3mで、二階堂側(約海拔19.3m)から見て約22mの高低差がある。尾根線に沿って12mの長さで設定したトレンチの全域で、表土を剥ぎ約20~30cm掘り下げる岩盤面となる。岩盤面上には人為的な盛土等は確認されず、踏査の際の地表観察でも平坦な尾根の先端が南に向かって落ちて行くだけであった。

#### 経塚の検出

岩盤面が露出したトレンチの北端から約8mの地点で、壁際に半分かかった直径約120cmの円形の土壙を検出した。トレンチの壁がちょうど土壙の軸線にかかっていたので、セクション観察のため壁を垂直に残しながら掘り下げを開始した。約80cm掘り下げた時点で炭が多量に埋められ、土壙中央に甕の破片が露出していることを確認した。掘り下げ途中に、崩れ落ちた土丹層の隙間から、長さ25cm、幅15cm、重さ約3kgの安山岩玉石(図版32)と残存長28.0cm(刃渡り22.6cm)、身幅3.3cm、表面に柄と鞘の木質が遺存する腰刀1(図37-1、図版70)が出土している。経塚の可能性が考えられたため、いったん掘り下げ作業を中断し、トレンチの東側を土壙の大きさに合わせ、幅1m、長さ2mの範囲で拡張し、土壙全体の平面形の確認を優先した。細心の注意を払い範囲を拡張した結果、土壙は岩盤面から直接掘り込まれ、上部に盛土及び石など上部施設を思わせるものは確認できなかった。あるいは、土壙が穿たれている岩盤を覆っている表土が20~30cmと薄いため、上部施設は削平されている可能性も考えられる。

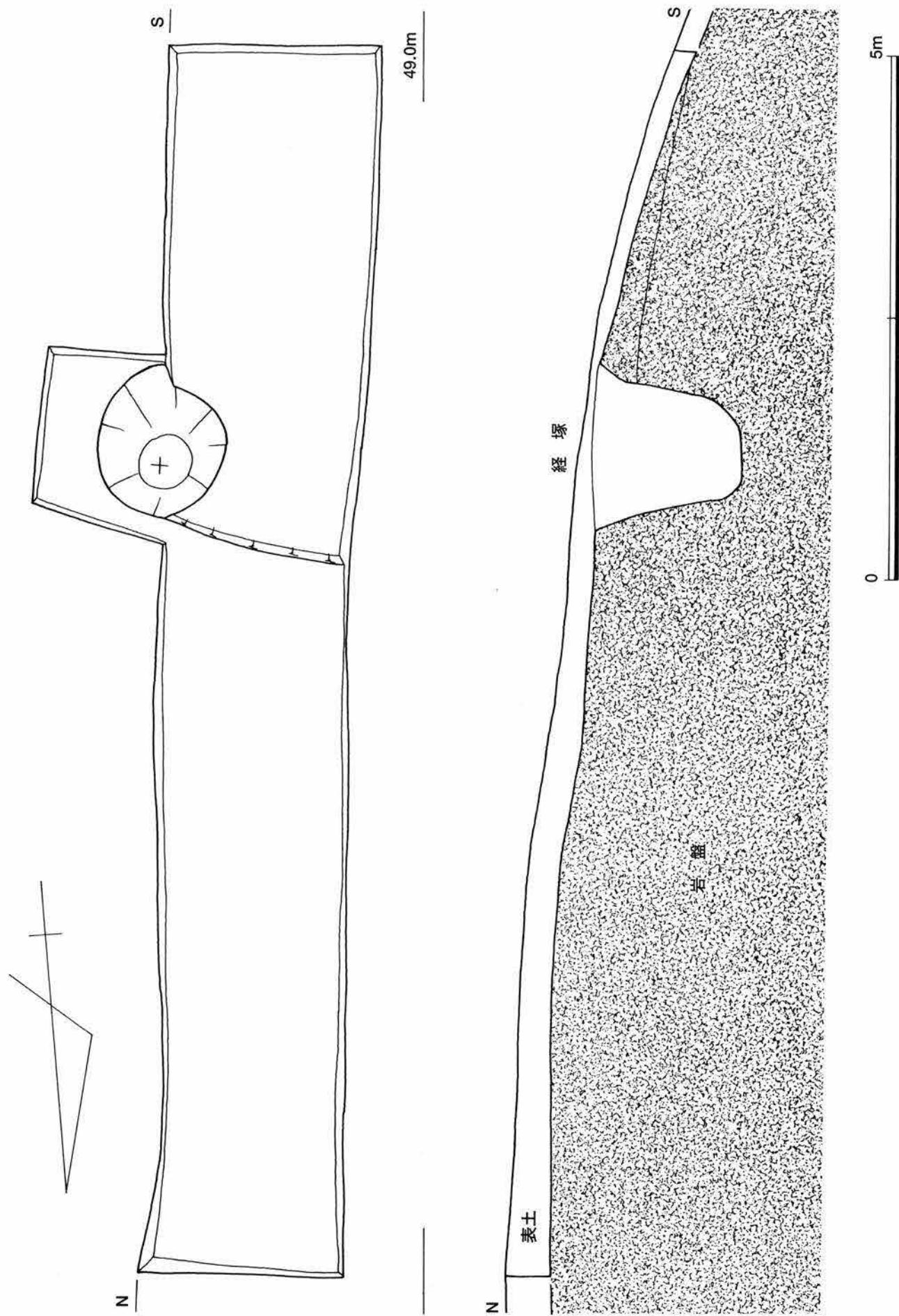


図34 トレンチ13（経塚）

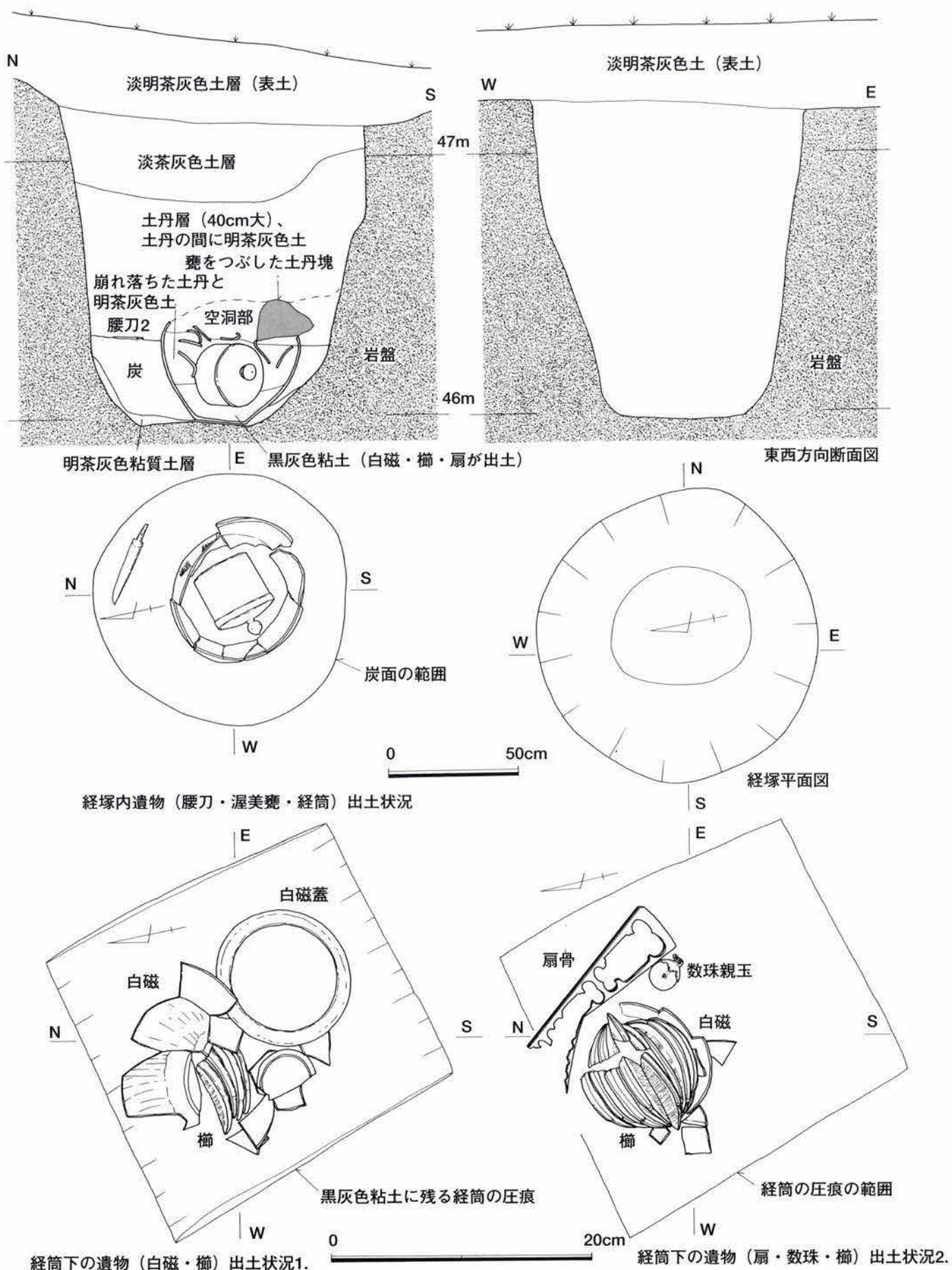


図35 トレンチ13（経塚）の外容器・内容器（経筒）出土状況、平面・断面図、副納品出土状況平面図

### 渥美の甕（外容器）・捏鉢（蓋）の出土状況

土層断面の観察結果、土壌中の土層は攪乱を受けていないことを確認した。1層目の土層は、淡茶灰色の締まったきめ細かい土の中に拳大の土丹を多く含み、土壌に蓋をするように約30cmの厚さがあった。その下2層目の土層は、一辺の大きさが40cm大の土丹層で明茶灰色の土が土丹の間を埋め、50~70cmの厚さで堆積していた。土層断面観察と土層断面図等を仕上げた後、1・2層を掘り下げ土壌内に多量に充填されている炭の上面で精査を行った所、土壌北隅の炭面上から全長32.8cm（刃渡り25.6cm）、身幅3.7cm、表面に柄と鞘（呑入）の木質が遺存する腰刀2（図37-2、図版70）、土壌の中央部で土圧のために甕の上半部が崩れ落ちた状態の、外容器として使用された渥美の甕（口径35.4cm、底径14.2cm、器高47.8cm、胴部最大径51.4cm）と、蓋として使用された渥美の捏鉢（口径33.5cm、底径13.2cm、器高11.9cm）を検出した。土壌と甕の下半分の間には炭が充填されていた。この時点で甕の内部に横向きに置かれている、銅製の経筒（内容器）の一部を確認した。甕の上半部と2層目の荒い土丹層との間には、20cm程の空洞が残されていた。捏鉢は甕の蓋として上向きに、甕の口部分を塞ぐため置かれたものである。先に出土している安山岩の玉石は、蓋の重しとして捏鉢に入れられ、甕の口にのせてあったと考えられる。

### 甕（外容器）内部の調査

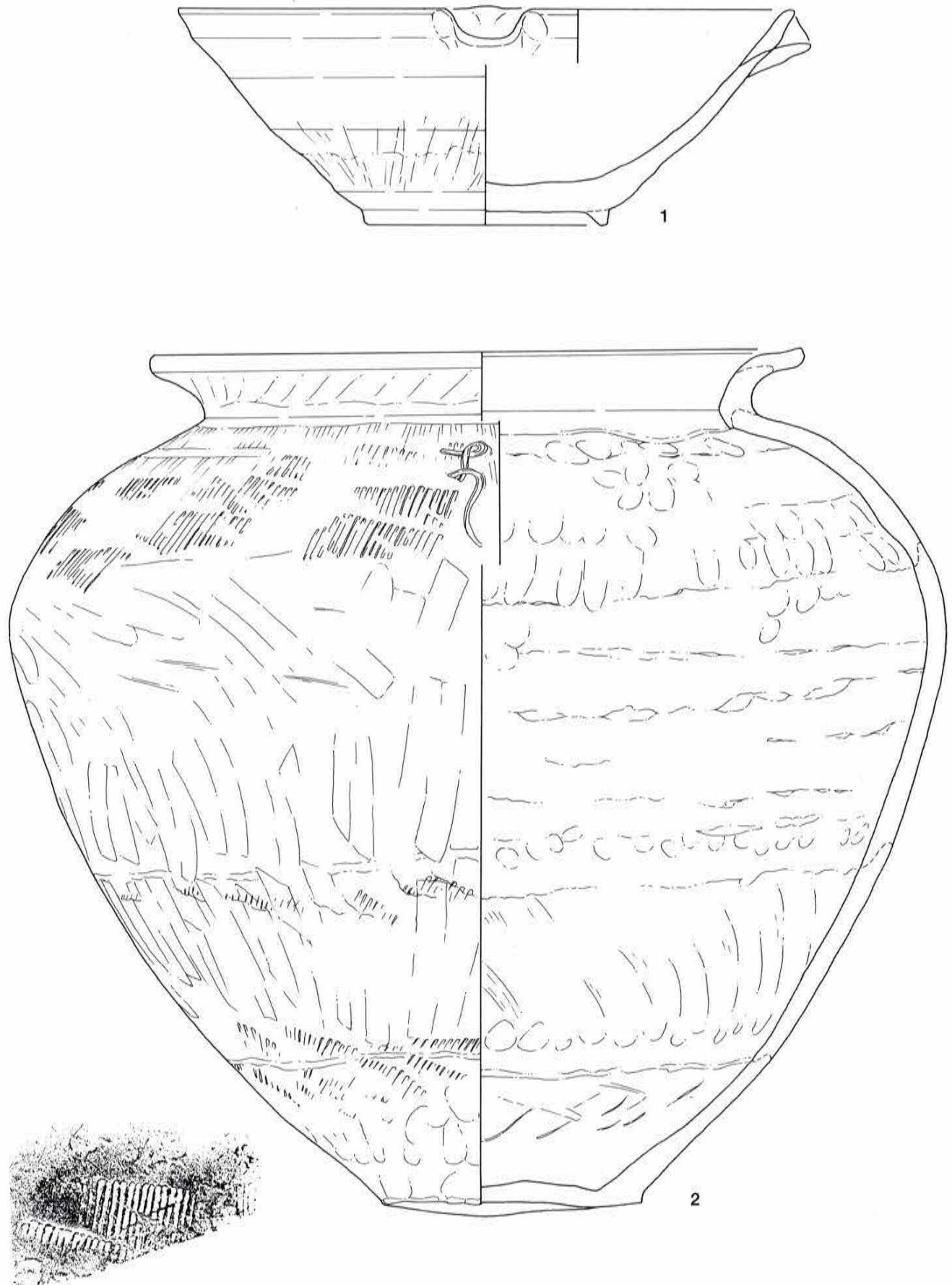
#### 経筒（内容器）の出土状況

甕の出土状況を記録した後、土圧のため崩れ落ちた捏鉢と甕の上半部の破片を取り上げた所、甕の中央部で横向きに据えられた銅製の経筒（内容器）を検出した。形態は円筒形の身に宝珠の付いた蓋が被せられていた。経筒の法量は、高さ31.0cm、筒の底部直径23.8cm、蓋の直径24.6cm、蓋に付けられた宝珠は高さ6.8cm、直径5.6cmである。経筒は当初から横向きに宝珠を西に向けて甕の底部に据えられ、経筒と甕底部の間には黒灰色粘土の堆積が約25cmあった。経筒の下に副納品が埋納されていたことから考えて、黒灰色の粘土は副納品を納めた後、横向きに埋納する経筒を固定するために隙間に詰められたと推察される。

甕の中に横向きに納められていた経筒の表面を観察すると、3cm四方程度の大きさで纖維状の固まりが付着していた。纖維は真綿状に絡み合っているもので、あるいは経筒を納めた時に包んでいた布のようなものの残片が遺存した可能性がある。また経筒の直径は24cmあり、外容器の口の大きさは26cmである。経筒を甕の内部に納めるには、立てた状態で布に包み真っ直ぐに降ろさなければ中に入れることはできず、中に入れてから横向きに据えたと考えられる。表面に付着していた纖維状の固まりは、この時に経筒を包み込んでいた布の可能性も考えられる。

#### 経筒下（副納品）の調査

経筒を取り上げた後、甕の底部に堆積している黒灰色粘土層の表面に残された経筒の圧痕を記録し、黒灰色粘土層を掘り下げた所、経筒の真下から白磁蓋付の口径10.4cm、高さ6.4cmの小壺と中に納められた、表面黒色で背の形が瓜型、幅約8cmの木製の櫛10枚が出土した。小壺はちょうど経筒の真下にあり、外容器の甕が崩れ落ちた時に押しつぶされたように、底部を上に向けた出土状況であった。櫛は10枚まとめて背の部分を下に小壺の中に納められていた。出土状況を記録した後、押しつぶされ割れている白磁小壺を取り上げ櫛を露出させた。白磁の破片を取り上げると、半分にして伏せた蜜柑の房の様に固まって出土した櫛の北東側から、水晶数珠の親玉と扇骨が出土した。数珠の親玉は傷のない無色透明な直径約2cm程もある大きなもので、紐を通すためにT字状に直径2mm程の穴があけられている。房のつけ根部分に、材質は銀と思われる冠と丸環が付けられている。数珠の親玉、扇骨の出土状況を記録し



外容器 外面の叩き目

0 20cm

図36 トレンチ13（経塚）外容器

た後、甕底部の黒褐色粘土層を掘り下げ、掘り下げた黒褐色粘土を篩ったところ、木製の直径6～7mmの数珠玉が30顆、水晶製の直径5～7mmの数珠玉が33顆、数珠の房飾りで、銀製の金具の付く水晶製の長さ1cm、幅6mmの露と呼ばれる涙形の玉が2顆、直径2mm程の金が1点、青白磁の皿（破片）と多数の植物の種子と思われるものが出土した。

扇骨は先端の幅の一番広い所が4.4cm、残存長約14cm、7枚ほど重なった状態で出土したものである。各1枚の厚みは1mmと極薄いものだが、表面は茶褐色の漆塗りである。また蒔絵とおぼしき金粉と、扇骨の先端部に極小さな笹の葉とおぼしき絵柄が認められた。

経筒の下で出土した数珠の親玉、木製・水晶製の数珠玉・露は一連のもので、組み合わせると金剛子念珠（半装束念珠）と呼ばれる数珠になる。

経塚の調査で出土した主な遺物は、腰刀、外容器の甕と捏鉢、内容器の銅製経筒、副納品の白磁小壺、櫛、扇、数珠、粒状の金、青白磁皿片であるが、この内、青白磁皿以外は全て完全な形で埋納したと考えられる出土状態であった。埋納されてから土中で、有機質の扇と櫛は腐植、陶器などは土圧による破損等が起こったと考えられるが、破損して出土した甕、捏鉢、白磁小壺も、接合すると全ての部品が揃っていた。ただ1点破片で出土したのが青白磁皿で、口縁部分の破片は細かく3片に割れていたが、接合できた。他の部分の破片は出土しなかった。経塚の検出状況、土層の確認調査から攪乱されたことは考えにくく、青白磁皿の破片の表面を観察すると、擦れた痕跡がなく新物の可能性があり、埋納時にその場で割って破片として埋めたとも考えられる。

甕の底部の黒灰色粘土中の遺物を取り上げた後、甕の下半部の出土状況を記録し、甕の全てを取り上げた。甕の周囲に充填されていた炭層を取り除くと、土壌の底部はやや丸みを帯びたU字状に窪んでいた。炭層中から遺物の出土は確認されなかった。

#### （4）トレンチ13（経塚）出土の遺物（図36、図版70・71）

##### a. 外容器

###### 渥美甕（図36-2、図版70）

岩盤に穿たれた直径約120cm、深さ約120cmの穴の中に据えられ、経筒の外容器として使用された渥美の甕で、周囲は炭で充填されていた。上からの土圧により、押し潰された状態で検出されたものである。甕の上半部は押されて崩れ落ち、下半部は上から押された力で、縦に裂けるように全体に亀裂が入っていた。

甕外面の色調は淡明灰色で、渥美の製品に見られる刷毛塗りの灰釉は施されていない。胎土は渥美特有の、細かくざっくりした砂っぽい素地である。焼成温度が比較的低く、生焼けの様にも見えるほど軟質の製品である。破片を全て取り上げ復元すると、器高47.8cm、口径35.4cm、底径14.2cm、胴部最大径51.4cmの甕である。器壁の厚さ1～1.2cmの比較的薄い粘土紐の輪積みで、胴部内側で幅約3cm程の粘土紐の重なりが観察できる。断面を観察すると、甕の体部（底部から頸部まで）は5工程、口縁部は2工程に分けて底部から造られたことがわかる。

体部外面には、荒い刷毛目が観察され、粘土輪積みの継ぎ目を潰すために、最初に施された調整痕と見られる。体部外面の各工程ごとの調整は、体部下半（第2・3工程）では極軽い平行叩きの叩き目が、不規則に継ぎ目に沿って施され、肩部（第4工程）では、原体の幅約4cm（長さ不明）の、目の細かい縦長格子文の叩き目が、継ぎ目に沿って帯状に連続的して施されている。体部最大径より上、頸部までの間に、籠書きによる草書体の文字のようにも見える記号が一ヶ所施されている。体部内面の各継ぎ目は、丁寧な下から上方向のナデ調整が行われている。

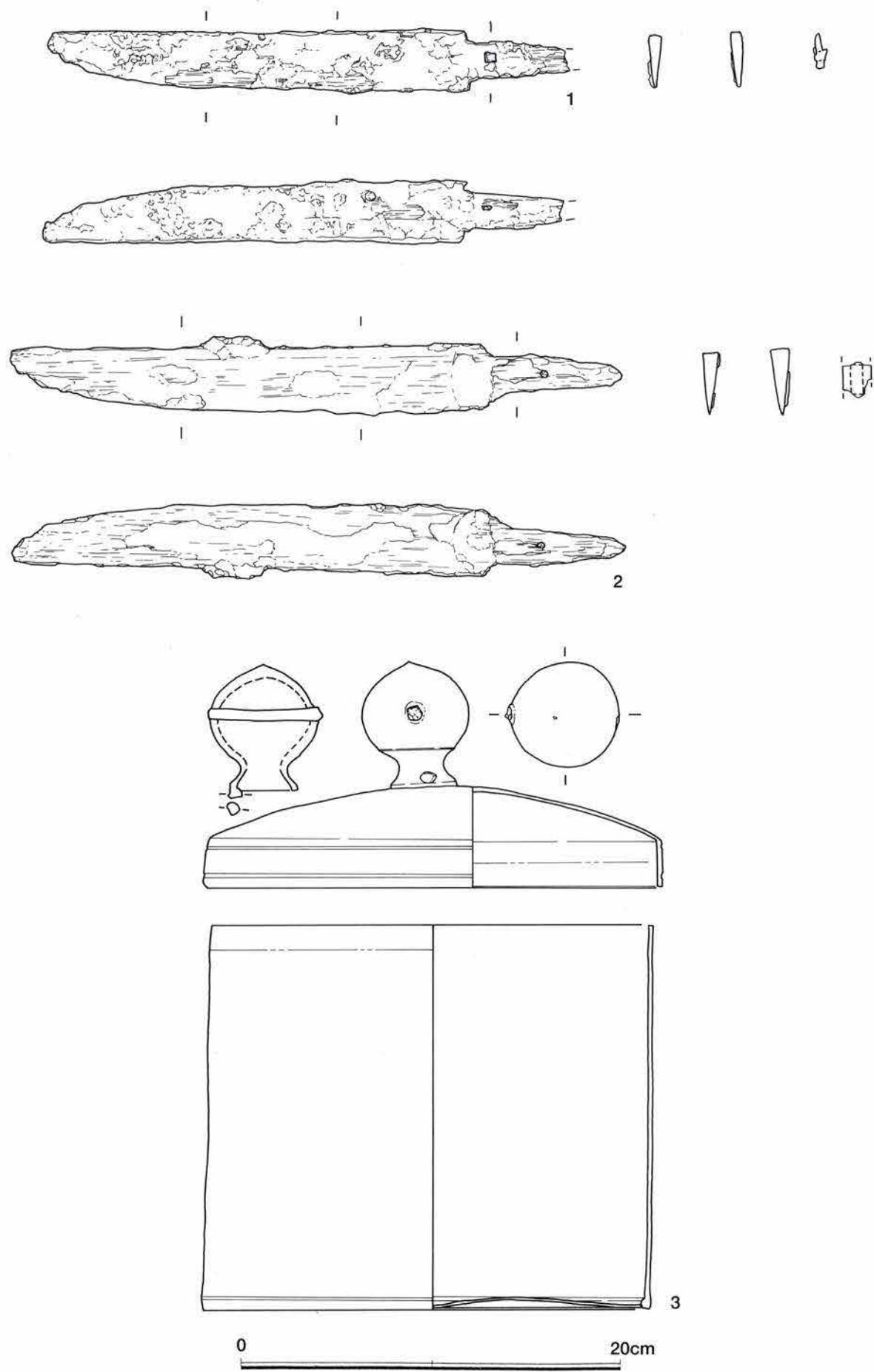


図37 トレンチ13（経塚）腰刀・経筒

頸部（第5工程）は、口縁部を上にのせるような形で、頸部が立ち上がり、内面に回り込むように粘土紐が貼り付けられている。頸部は短く、口端部との隙間は約3cm程である。頸部の外面には、口縁部を造り出した時の、折曲げ皺が規則的に見られる。口縁部の端面上部には、軽い横ナデによる凹みが一周する。端部はやや突き出すものの丸く収められている。

焼きがやや甘い以外、大きさの割に器壁が薄く、各内外面の調整から見ても、非常に丁寧に造られた製品といえる。

#### 渥美捏鉢（図36-1、図版70）

外容器の甕の蓋として使われたものである。口径33.5cm、器高11.9cm、底径13.2cmの渥美捏鉢である。底部の高台は貼り付けの三角高台で、糸尻にはもみがら痕が見られる。捏鉢外面の色調は淡明茶灰色で、胎土は渥美特有の、細かくざっくりした砂っぽい素地である。焼成温度が比較的低く、生焼けの様にも見えるほど軟質の製品である。胎土と焼成具合から見て、同じ工房で甕と同時に制作され、同じ窯で焼かれたと考えられる。底部の厚さは1.8cm程で、ここから立ち上がる体部はラッパ状に直線的に広がる。口縁部は尖り気味に丸く収められ、口縁外面に横ナデによる軽い凹みが一周する。口縁には90度の位置関係（計4ヶ所）で、1ヶ所に注ぎ口が、3ヶ所に指当てによって凹まされた輪花が造りだされていた。体部外面下半部の調整は、叩いた後、指ナデで丁寧に叩き目をナデ消している。常滑の捏鉢で見られる様な、削りによる調整は行われていない。体部上半部と内面の調整は主として、丁寧な横ナデによるものである。擂ったり、擦った様な使用痕は認められず、新物と考えられる。焼きがやや甘い以外は、非常に丁寧に造られた製品である。

#### b. 内容器

##### 銅製経筒（図37-3、図版71）

渥美甕の中に納められていた、全長31.0cm、筒の底部直径23.8cm、蓋の直径24.6cmの銅製の経筒である。底板の一部が腐食して、穴があいていた他は遺存状態は良好である。表面には全体に渡り、黒っぽい付着物が認められた。ごく一部分をクリーニングすると、表面は白銅色をしていることが確認された。蓋には高さ6.8cm、直径5.6cmの宝珠が2ヶ所の鉢止めで付けられていた。経筒本体に使われている銅板の厚みは約2.5～3mmである。底には厚さ約1mmの底板がはめ込まれていた。表面には銘文等は確認されなかった。経筒の内部から、泥と直径約1.5mm、残存長5cm程の経を巻いていた軸木と考えられる、縦に半分に割れる竹ひご状の製品が3本出土していることから、教典が納められていたと考えられる。しかし腐食した底部の穴からしみ込んだ水のために、腐敗、泥化したものである。

#### c. 副納品

##### 腰刀（図37-1・2、図版70）

1は経塚を埋めていた土丹層中より出土。残存長28cm（刃渡り22.6cm）、身幅3.3cm。表面に柄と鞘の木質が遺存。鉢で覆われているが、遺存状態は良好である。

2は経塚内の炭層上より出土。全長32.8cm（刃渡り25.6cm）、身幅3.7cm、表面に柄と鞘の木質が遺存。鉢で覆われているが、遺存状態は良好である。

##### 白磁小壺（図38-6、図版71）

蓋の直径10.4cm、高さ1.6cm、口径8.1cm、身の口径9cm、器高6.4cm、底径5.1cm、体部最大径10.3cmの景德鎮12世紀後半代の白磁蓋付小壺である。体部内面に粘土の継ぎ目が観察できることから、型作りと思われる。蓋と身の外面には透明な釉が施されている。また鎬状の文様が見られ、頸部周囲には珠文帯がめぐる。

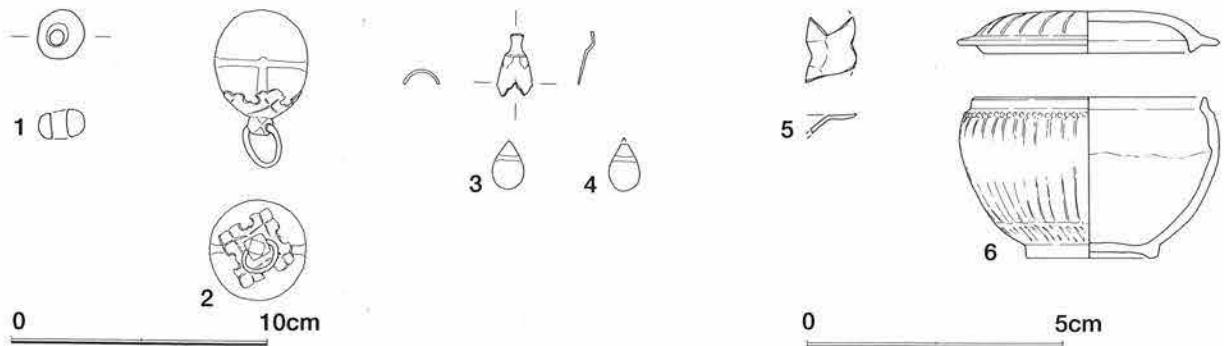


図38 トレンチ13（経塚）副納品

#### 櫛（図14-経筒下の遺物、図版71）

表面黒色で、背の形が瓜型の長さ約8.5cm、幅3.7cm、背の部分の厚さ1cmの木製の櫛である。漆がかけられていたようには見えないところから、白木の製品と考えられる。木材の同定を行っていないため、樹種は不明である。櫛目は1mmの間に、櫛歯が3枚と非常に細かい。10枚が背を下に向か、小壺の中に納められていたようで、小壺が転げ底部を上にして割れたため、半分にして伏せた蜜柑の房の様に、背を上に向か10枚がひとかたまりで出土した。

#### 数珠（念珠）（図38-1・2・3・4、図版71表2）

1は経塚の第2層の土丹層を掘り下げている時に出土したものである。材質は陶器のようで、直径9mm、中央には径3mmの穴が穿たれている。胎土は黄灰色で、とても軟質である。表面に白色不透明の釉が、施されていることが観察できる。

2は数珠の親玉である。傷のない透明な水晶製で、幅2cm、高さ1.9cmの大きさである。T字状に直径2mm程の穴が穿たれている。つけ根部分に、材質が銀と思われる冠と直径8mmの丸環の金具が付けられている。

3・4は数珠の房飾りで、露と呼ばれる。涙形の水晶製で長さ1cm、幅6mmの玉は2顆出土している。この露を包み込む形で、二枚合わせの金具がそれぞれに取り付く。（図38-4の片方の金具は腐食して遺存していない。）材質は親玉の冠の金具と同様に銀と思われる。

この他（表2）に、水晶製と木製の数珠玉が出土している。水晶製の数珠玉は、33顆出土している。直径5～7mmの大きさで、数珠本体だけでなく小粒のものの中には、房に使われていたものがあるかもしれない。木製の数珠玉は、30顆出土している。直径6～7mm大きさで、いわゆる算盤玉と呼ばれる扁平な形のものである。

経筒の下で出土した数珠の親玉、木製・水晶製の数珠玉、露を組み合わせると、金剛子念珠（半装束念珠）と呼ばれる数珠になる。

#### 扇（図14-経筒下の遺物、図版71）

扇骨は、先端の幅の一番広い所が4.4cm、残存長約14.0cm、7枚重なった状態で出土した。各1枚の厚みは1mm程と極薄いものだが、表面は茶褐色の漆塗りである。また蒔絵とおぼしき金粉と、扇骨の先端部には、極小さな笹の葉とおぼしき絵柄が認められた。この形状の扇骨は伝世する蒔絵手箱に描かれる扇散文に見ることができる。

#### 種子（図版80）付編2参照

植物の種実同定（<sup>株</sup>パレオ・ラボ

多数の植物の種実と思われるものが、土を篩ったところ出土した。

### その他の遺物（図14-5、図版71）

残りの土を篩ったところ、青白磁の皿の小片と、直径2mm程の金の粒が1点が出土した。青白磁の皿は3片に割れていたが接合できた。

## 第3節 伽藍背後（西）の山の遺構確認調査（図39～43、図版40～51）

### （1）伽藍背後（西）の山で確認した遺構

伽藍背後の山の尾根上に、12地点設定したトレンチである。トレンチ14～18、21、22は堂背後の尾根線上に、トレンチ23～27は、西ヶ谷に延びる尾根線上に設定した。またトレンチ19、20は堂背後の斜面上に二ヶ所ある平場を調査したものである。

#### a. トレンチ14（二階堂背後斜面）

二階堂背後の東西方向中軸線の延長線上、山頂直下の斜面に設定したトレンチである。30～40cm程の表土（1）と腐植土層（2）を剥ぐと、明灰色土層（3）と明茶灰色土層（4）の土丹が密に詰まった面と、40cm大の土丹塊が詰まった土丹層（5）がある。一見岩盤のように見えたため、当初は風化した岩盤面としたがトレンチ調査の結果、最下層から暗灰色粘土層（8）の地山面を確認した。（3）～（7）層は、段状に削って加工した地山面の上に地業した土層であることが確認された。直上の山頂まで約10mの高低差がある。

#### b. トレンチ15（二階堂背後尾根上）

二階堂の東西方向中軸線上の山頂部に設定したトレンチで、直下にはトレンチ14がある。25～40cm程の表土を剥ぐとすぐに、岩盤面と西に向かって落ちて行く岩盤面上に乗っている黒色土層（地山）が確認された。岩盤の表面は風化が著しい。遺物は出土していない。

#### c. トレンチ16

トレンチ15の南側の尾根上、二階堂と阿弥陀堂の中間地点に設定したトレンチである。20cm程の表土を剥ぐとすぐに岩盤面が露出する。岩盤面の表面は風化が著しく長期間露頭していた可能性がある。遺物は出土していない。

#### d. トレンチ17（阿弥陀堂背後）

阿弥陀堂東西方向の中軸線上の山頂部に設定したトレンチである。30～60cmの表土を剥ぐと、表面の風化著しい岩盤面が露出する。遺物は出土していない。

#### e. トレンチ18

調査した伽藍背後（西）の山の南北方向に延びる尾根上で、一番南に設定したトレンチである。20～40cm程の表土を剥ぐと、他のトレンチと同様に風化が著しい岩盤面が露出する。遺物は出土していない。

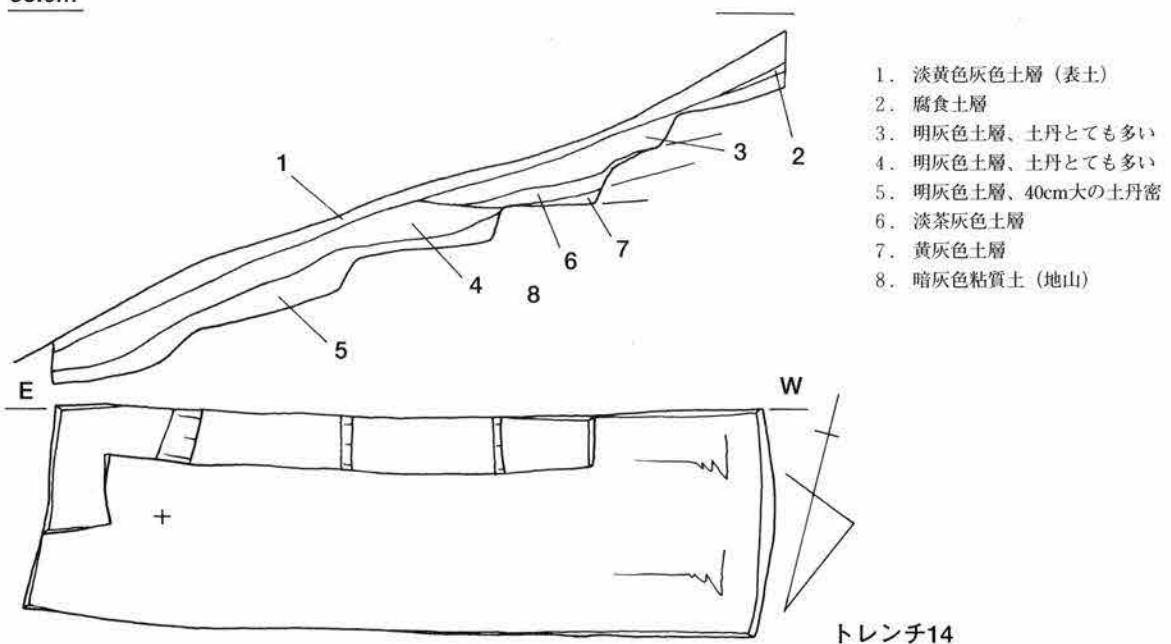
#### f. トレンチ19（阿弥陀堂背後の平場）

阿弥陀堂東西方向の中軸線上の山頂の直下に設定したトレンチである。トレンチの周囲は250m<sup>2</sup>程の平場である。30～35cm程の表土を剥ぐとトレンチの北側では岩盤面が、南側では黒色土層の地山面が露出する。岩盤面は人為的に削られていると思われるが、風化が著しいため加工痕は確認できない。遺物は出土していない。

#### g. トレンチ20（中腹の平場）

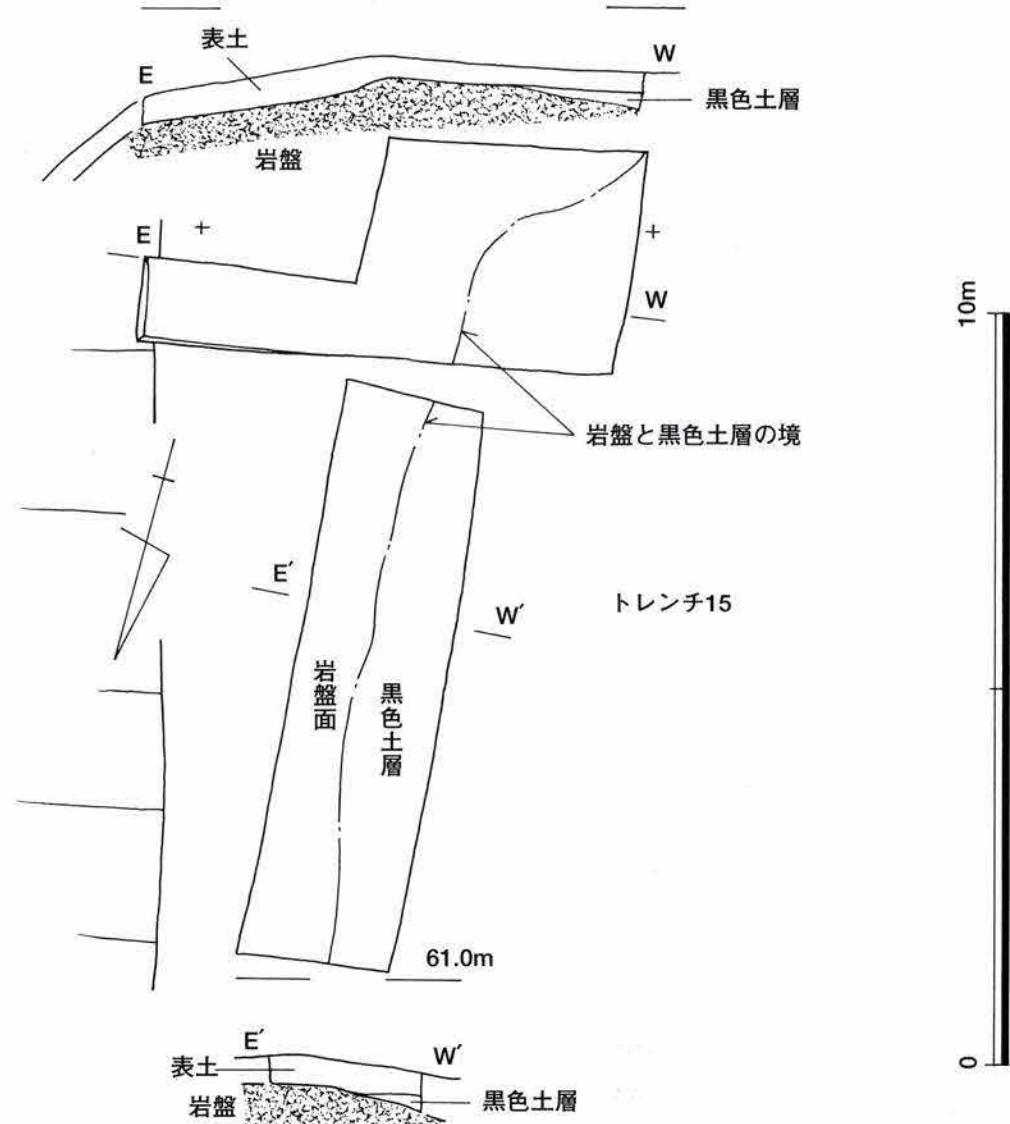
伽藍背後（西）の山に、テニスコート脇から登る途中の海拔約33mの所にある、広さ約300m<sup>2</sup>の平場に設定したトレンチである。十字に設定したトレンチの南半分は、30cm程の表土を剥ぐと岩盤面が露出する。北半分は黒色土層の地山面になる。黒色土層中から、表面に煤が付着した五領期の甕の破片が出

55.0m



トレンチ14

61.0m



トレンチ15

図39 トレンチ14・15

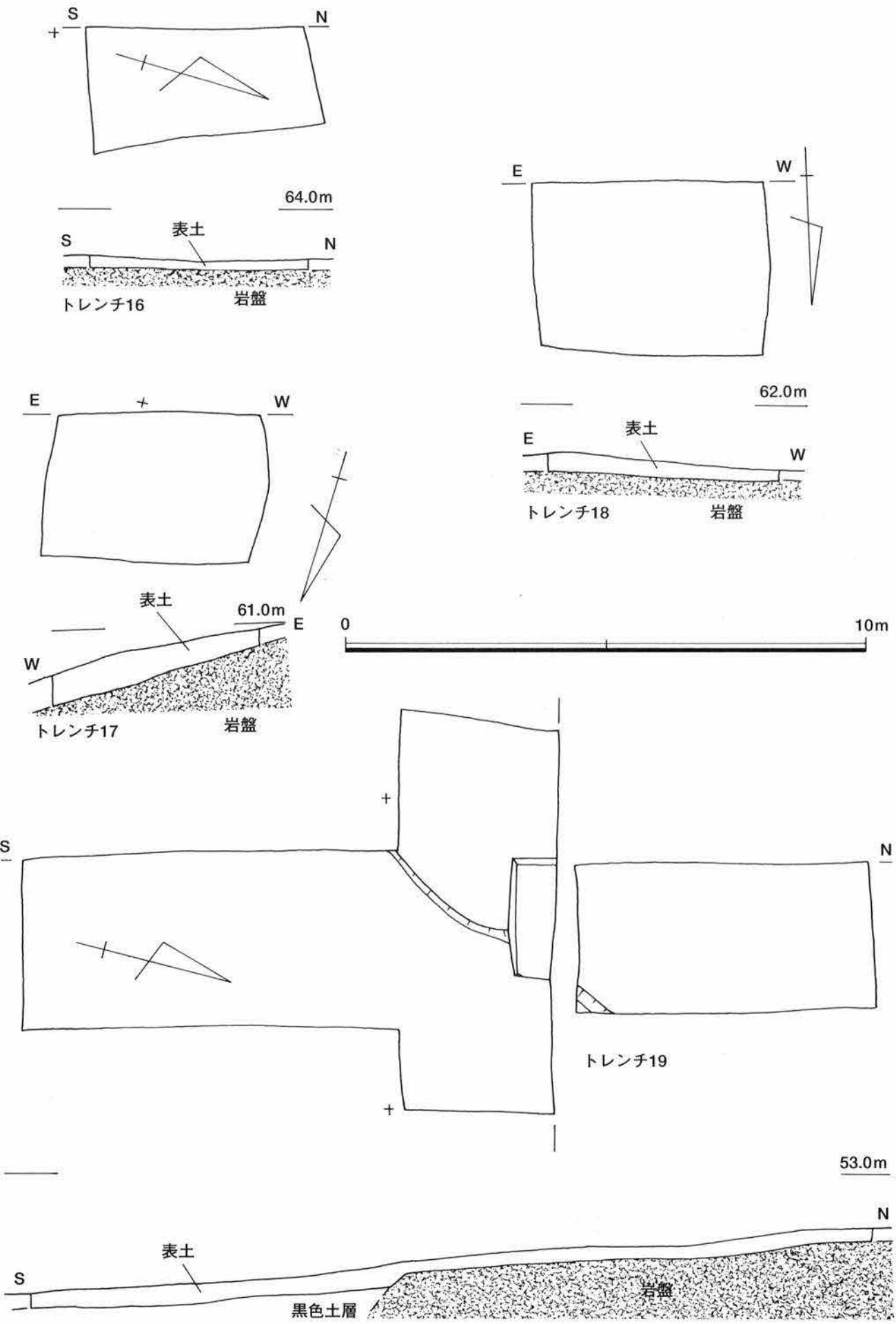


図40 トレンチ16・17・18・19

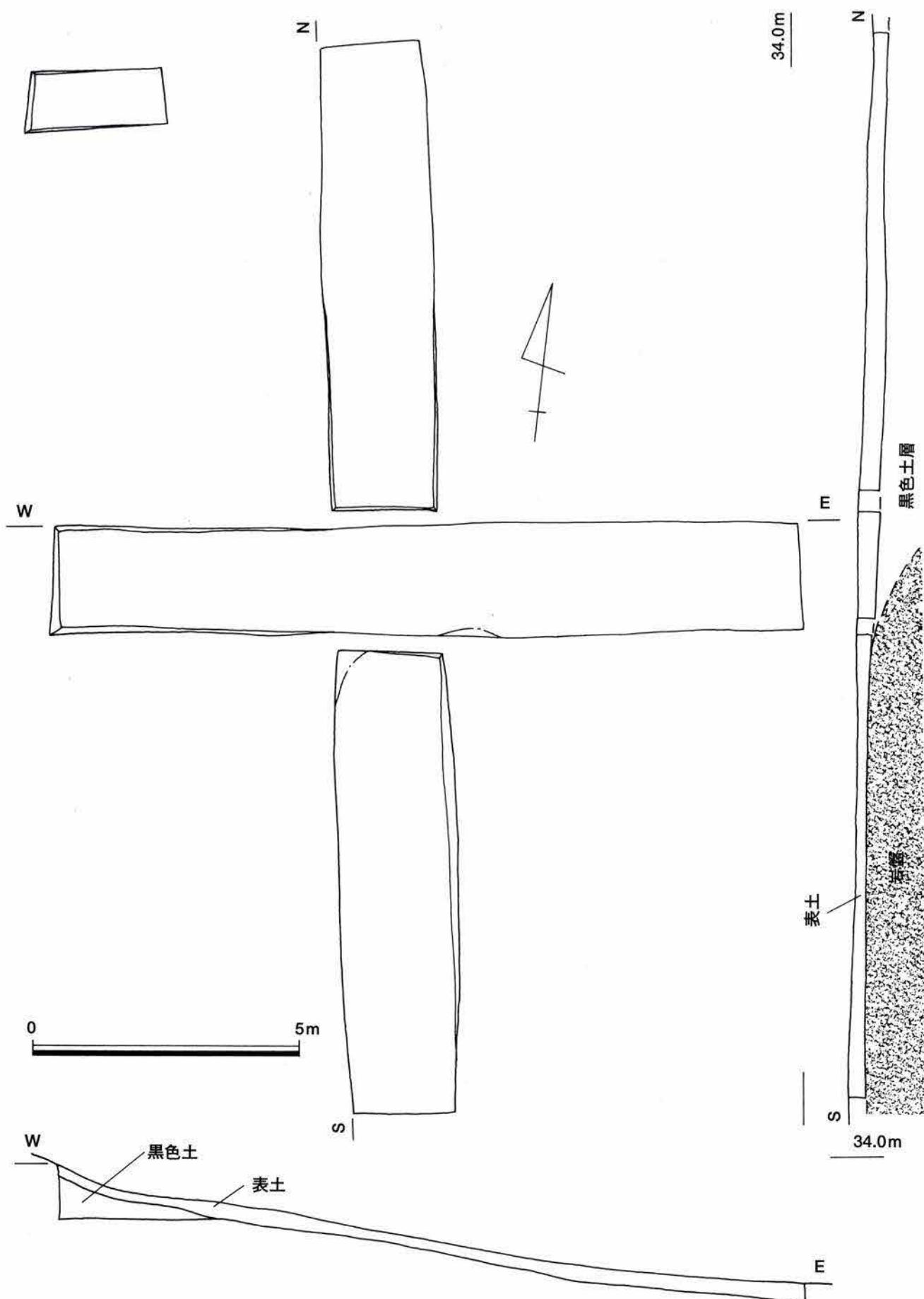


図41 トレンチ20

土したが、中世の遺物は出土していない。

h. トレンチ21

トレンチ15の北側の尾根上、二階堂と薬師堂の中間地点に設定したトレンチである。25cm程の表土を剥ぐとすぐに岩盤面が露出する。岩盤面の表面は風化が著しく長期間露頭していた可能性がある。遺物は出土していない。

i. トレンチ22（薬師堂背後）

薬師堂背後、東西方向の中軸線上の山頂部に設定したトレンチである。30cm程の表土を剥ぐと、表面の風化著しい岩盤面が露出する。遺物は出土していない。

j. トレンチ23（塚）

薬師堂背後の海拔約64m トレンチ22の北西方向に約40m離れた地点、一段高い地点に設定したトレンチである。海拔は約69mあり伽藍背後の南北方向に延びる尾根伝いの中でも一番高い地点で、西ヶ谷への入口部を東側に見下ろす位置的である。表面に僅かにある表土の下、包含層の茶灰色土層（1）を掘り下げるとき戸折縁鉢、魚住捏鉢、砥石、かわらけ、永福寺Ⅰ期瓦片等の遺物が出土した。伽藍背後（西）山の調査ではほとんど遺物が出土していないことと比べ、トレンチ23の遺物点数は多いものである。13世紀代の遺物は確認されなかったが、出土した遺物の種類・量が他に比べ多いことから、長期間この場所が何らかの形で儀式等に使用されていたと窺われる。

**土壌1**

薄皮のような表土を剥ぐと、直径約55cmの土壌1を検出した。土壌の中央にはやや斜めに傾いているものの、直立した状態で埋納されている常滑壺と蓋の代わりに壺の口部分にのせられた鏡、更に伏せた状態で壺と鏡に被せられた山茶碗窯系の捏鉢が出土した。保存状態は良く、蓋代わりの鏡の紐には白色の掛紐が遺存する。但し、色、模様等が当初施されていたか否かは不明である。常滑の壺の内部にはほとんど土が入っておらず、舶載の中国産の銅錢3枚と、やや扁平なそろばん玉形の直径1cm水晶製の数珠玉1個が出土した。

出土遺物から、埋納時期は14世紀中頃と考えられる。

**土壌2**

土壌1の西側で、直径約1.6mの土壌2を検出した。土壌の中から半分に割れ逆さまの状態の常滑捏鉢が出土している。上層では遺構の確認できず、岩盤面上で平面形を確認したり、周囲から出土した捏鉢の破片と土壌内の捏鉢の破片が接合したことから考えて、土壌上部はかなり広範囲に渡って攪乱されているものと思われる。土壌1より若干時期は古いと考えられるが、攪乱が著しく委細は不明である。

k. トレンチ24

トレンチ23から北に約30m進んだ地点、尾根伝いに設定したトレンチである。尾根の幅は狭く1m幅で設定したトレンチとほぼ同じである。25~30cm程の表土を剥ぐと岩盤面が露出する。遺物は出土しなかった。

l. トレンチ25

トレンチ24から北に約20m地点、尾根伝いに設定したトレンチである。30cm程の表土を剥ぐと、これまでに調査して来た尾根線上のトレンチと同様に岩盤面が露出する。遺構は確認されなかったが、岩盤面上に2枚のかわらけが上向きに重なり置かれた状態で出土した。このかわらけは14世紀前半のものと考えられる。

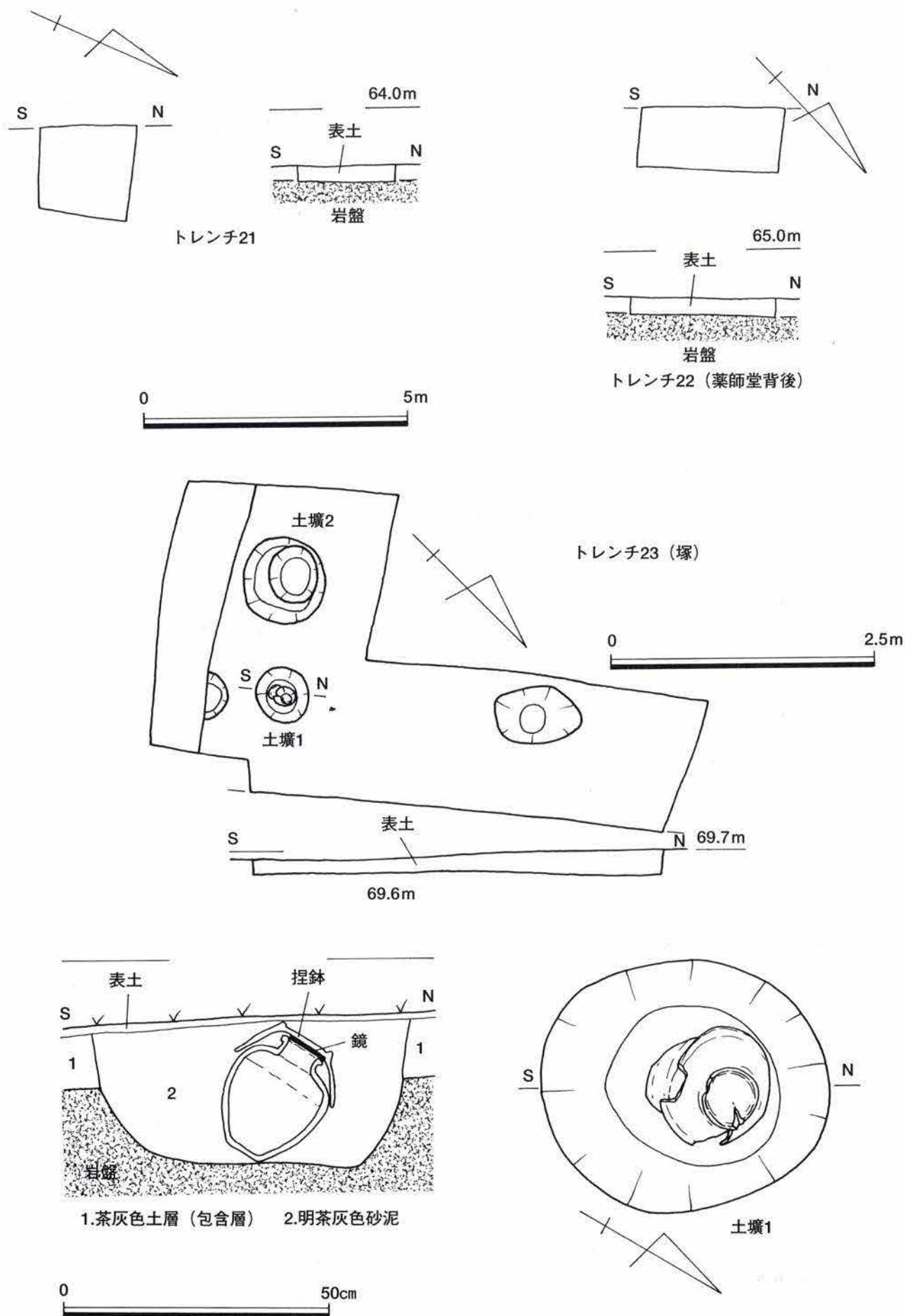


図42 トレンチ21・22・23 (常滑壺、鏡、捏鉢出土状況)

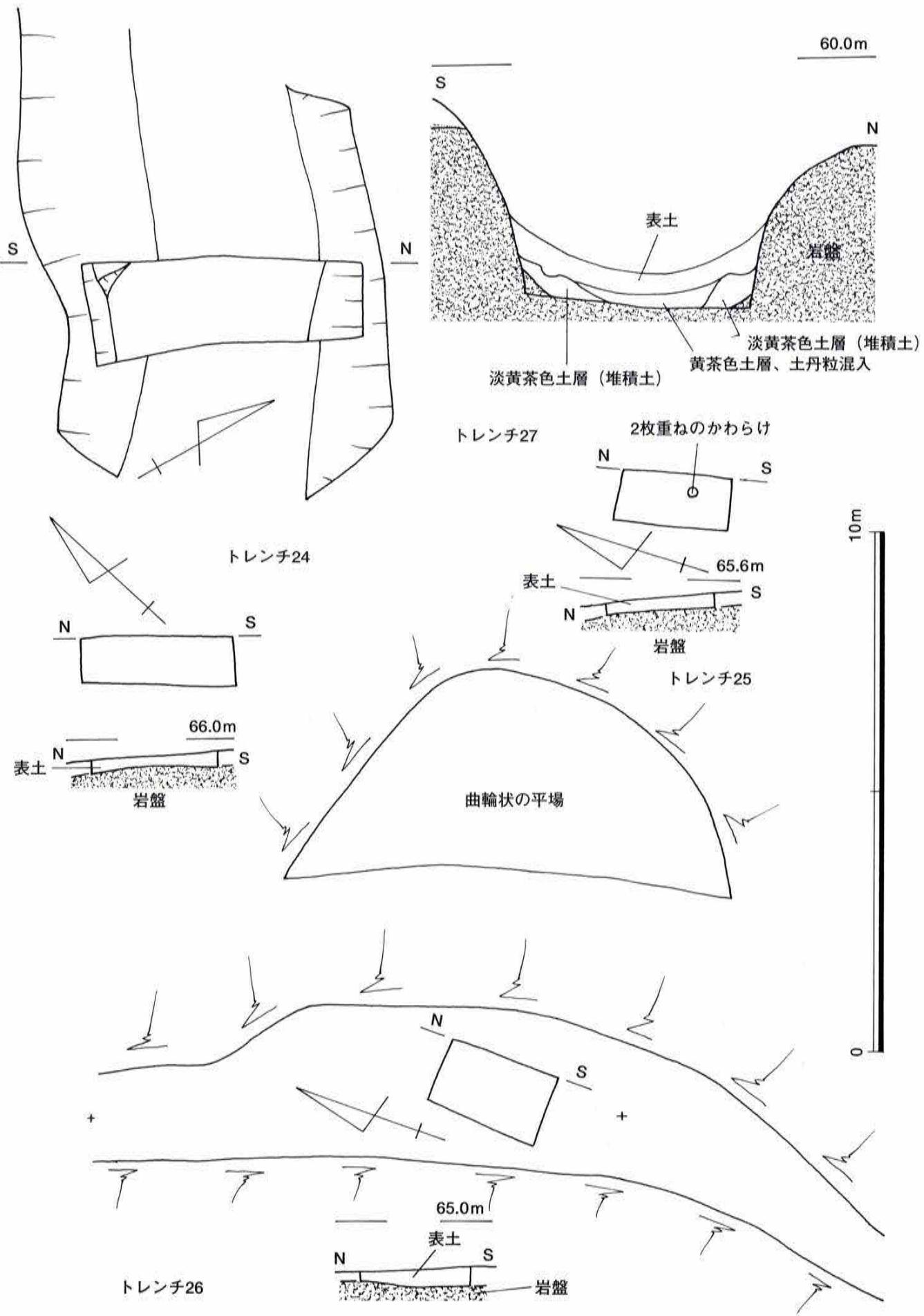


図43 トレンチ24・25・26・27 (掘切)

#### m. トレンチ26

トレンチ25から北に約30m地点、尾根線伝いに設定したトレンチである。ここを境に尾根線は一端急激に下って行き、堀切を検出したトレンチ27へと続いて行く。20~30cm程の表土を剥ぐと、他のトレンチと同様にすぐに岩盤面が露出する。遺物は出土しなかった。

#### n. トレンチ27（堀切）

トレンチ26から北に約20m地点、急激に下ってくる尾根伝いの一番低い地点に設定したトレンチである。調査前の状況はちょうど尾根を分断するように窪みが確認されていた。ここに幅2m、長さ6mのトレンチを設定した。窪んでいるため厚く60~70cm程堆積している表土を剥ぐと、尾根を分断する形で掘り込んだ堀切遺構を確認した。堀切の岩盤を削り込んだ壁はほぼ垂直に、横断面の形状は箱状で底面は平滑であった。尾根の上から測ると、堀切の幅は約7m、深さは約3mある大きなものであった。

トレンチの西側壁の両端部分で、堀切の底面部分が突出している所が二ヶ所確認された。尾根の軸線上にかかることから、この場所に架かっていた橋の基礎の可能性も考えられる。

### （2）伽藍背後（西）の山の遺構確認調査で出土した遺物

#### a. トレンチ23・25出土の遺物（図44、図版72・73）

1~11はトレンチ23の遺物。この内2・3は包含層の遺物である。この包含層からは他に、かわらけや瓦の小片等が多く出土したが、図示できるものをここに取り上げた。

2は魚住の鉢。灰白色を呈し、砂を多く含む胎土から成り、緻密。口縁部外面はクスベ状に暗灰色を呈する。

3は砥石。最大幅2.6cm、残存長5.3cm。裏面は割れたままの状態。側面、底面はよく磨かれている。

1・4は土壙2より出土。1は瀬戸の折縁鉢。胎土は明黄灰色を呈する。内面及び外面には緑灰色を呈する灰釉が施されているが、かなり剥離した状態。

4は常滑の捏鉢。三箇所に注ぎ口を有し、そのうち一箇所の内面にはヘラ描きによると見られる印、またもう一箇所の内側には錢型と細かい斜格子を組み合わせた縦5.8cm、横2.5cm程の長方形の押印が施されている。土壙2から破片として散乱状態で出土したこの製品は、底面を除いて全て復元することができたが、土壙2の覆土には底部の破片は見つかなかった。

5~11は土壙1（塚）の遺物。5は常滑壺の中に納められていた数珠玉。直径1cm、厚さ約6mm。算盤玉形を呈する。

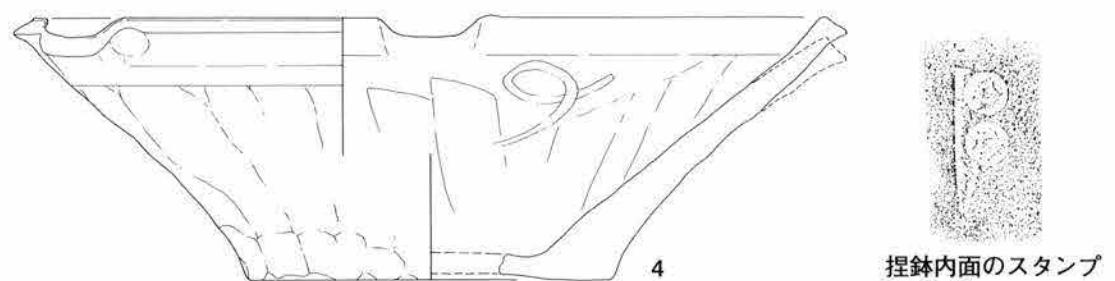
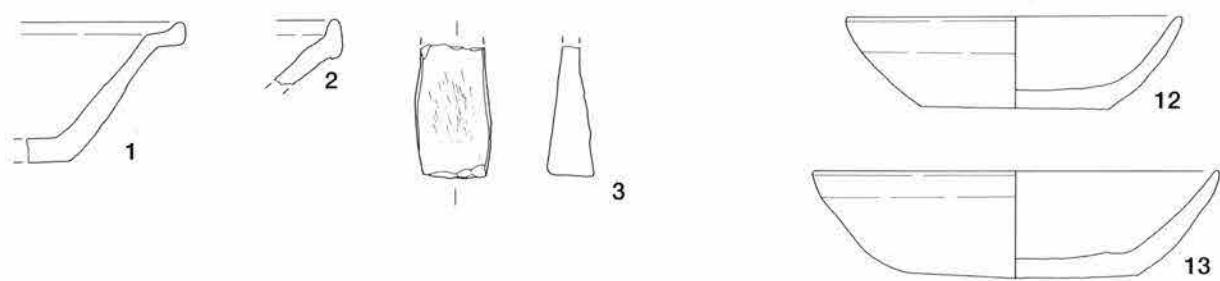
9~11の錢もこれと一緒に納められていたもので、9は咸平元宝、10は開元通宝、11は熙寧元宝である。

6は山茶碗窯系捏鉢。かなりゆがみをもつ製品であるが、概ね口径21.8cm、底径12.5cm、器高9.0cm。長石の多い粗い胎土から成る。片口であるが、口部分は欠損している。体部は強い横ナデで成形され、薄く丸く作られた口縁部はわずかに外反する。外面下体部は右回りの回転ヘラ削りによって成形され、断面三角形を呈する高台が貼り付けられている。底面には離れ砂が付着する。内面上部に沈線が設けられている。8の鏡で蓋をした壺をさらに蓋するような状態で出土した。

7は常滑の壺。口径10.0cm、底径8.0cm、器高21.0cm。明茶灰色を呈し、肩部に部分的に降灰釉が付着して、明緑灰色を呈する。肩には一条の沈線が設けられている。底面は砂底。

8は壺の蓋になっていた鏡。銅製。直径10.3cm。内区は花丸文に蝶をあしらう。外区は波文。紐座は菊花文。紐状の白い纖維が紐孔を貫通した状態で出土した。

12・13はトレンチ25出土のかわらけ。いずれも完形で13の上に12が重ねられた状態で出土している。



捏鉢内面のスタンプ

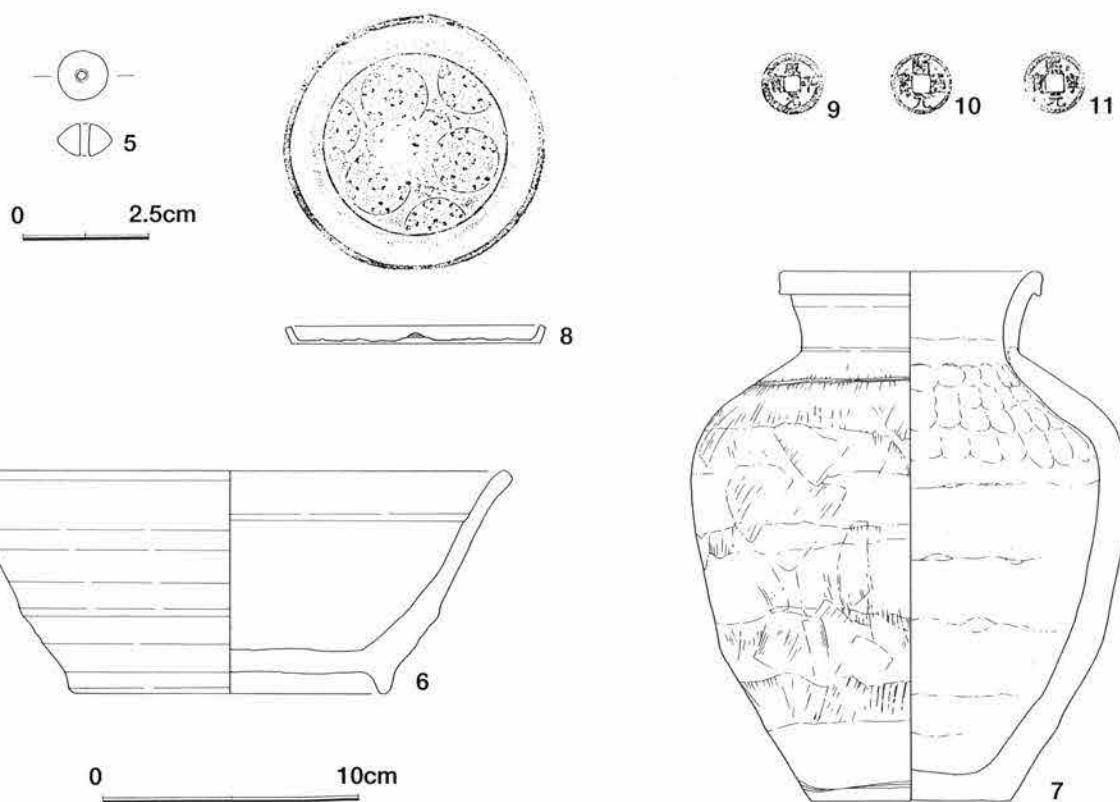


図44 トレンチ23（塚）・25の遺物

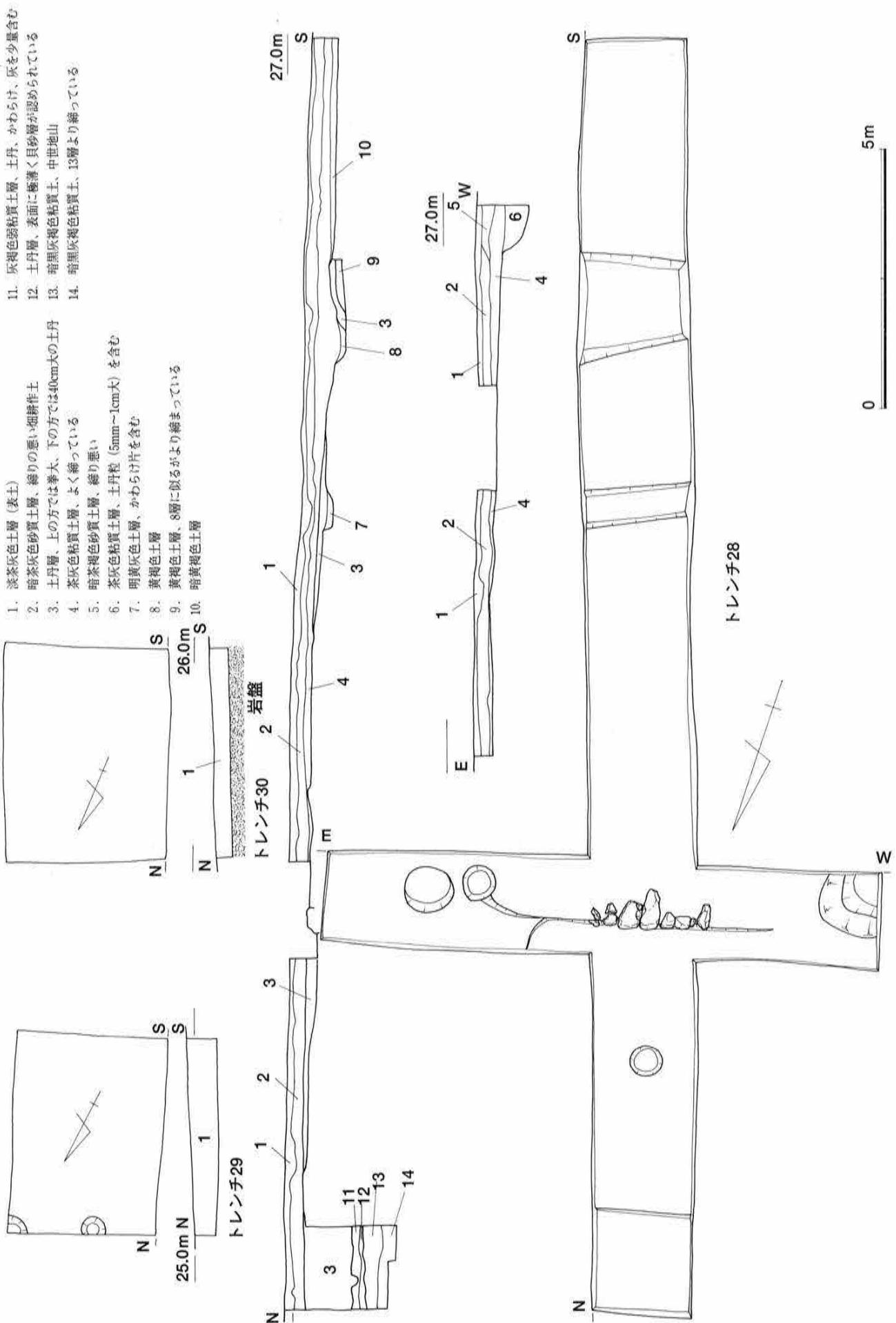


図45 トレンチ28・29・30（西ヶ谷）

12は口径13.1cm、底径7.5cm、器高3.7cm。13は口径15.9cm、底径9.2cm、器高4.3cm。明赤灰色を呈し、きめ細かい胎土から成り、軟質。器肉が均一的に薄く、浅型で体部が広く開く器形。14世紀前半頃のものと考えられる。

#### 第4節 西ヶ谷の遺構確認調査

##### (1) 西ヶ谷の遺構確認調査で検出した遺構 (図45、図版52・53)

西ヶ谷には遺構確認トレンチを3ヶ所設定した。西ヶ谷は永福寺別当坊、僧坊があったと文献に記載されている谷であるが、昭和40年代の宅地造成に伴って尾根筋を切り崩し谷が埋め立てられている。現在、谷の入口から約120mの範囲が史跡地として残されている。トレンチ29・30を設定した場所は、西ヶ谷の入口を塞ぐように地業された、高さ3m程の高台状の高まり（昭和56年度試掘調査）の北西側に広がる約400m<sup>2</sup>ほどの平場である。

###### a. トレンチ28

最近まで真竹の竹林であった800m<sup>2</sup>程の平場である。40cm程の表土（1）と旧耕作土層（2）には竹の根が入り込んでいた。これを剥ぎ取ると土丹地業面が露出し、土丹面上から東西方向に土丹塊を石垣の基礎状に並べた遺構、東西方向に延びる溝、土壙等を検出した。

十字に設定したトレンチの北端で、土丹層（3）を掘り抜いて下の土層状況を確認した。厚さ約1mの土丹層の下は、厚さ10cm程の灰褐色弱粘質土層と、薄く細かな貝を含む砂層が暗黒灰色粘質土層（地山）の上に堆積していた。地山面まで地表から約150cm程である。

遺物は土丹層中（3）から、永福寺Ⅰ期の瓦片、瀬戸天目碗片が出土している。かわらけは図示できるだけの資料が出土しなかったが、細片を見て行くと14世紀中～15世紀代のものが中心である。

###### b. トレンチ29

遺構面上に1m程の表土が堆積している。表土（1）の淡茶灰色土層はトレンチ28に比べやや粘性が強く、細かな土丹粒が含まれている。遺物は出土しなかった。

###### c. トレンチ30

トレンチ29と同様に1m程の表土（1）が堆積している。この表土を掘り下げるに岩盤面が露出する。遺物は出土しなかった。

##### (2) 西ヶ谷の遺構確認調査で出土した遺物 (図46、図版74)

###### a. トレンチ28出土遺物

トレンチ北端に設定した2×2mの深堀削中に、土丹地業層中

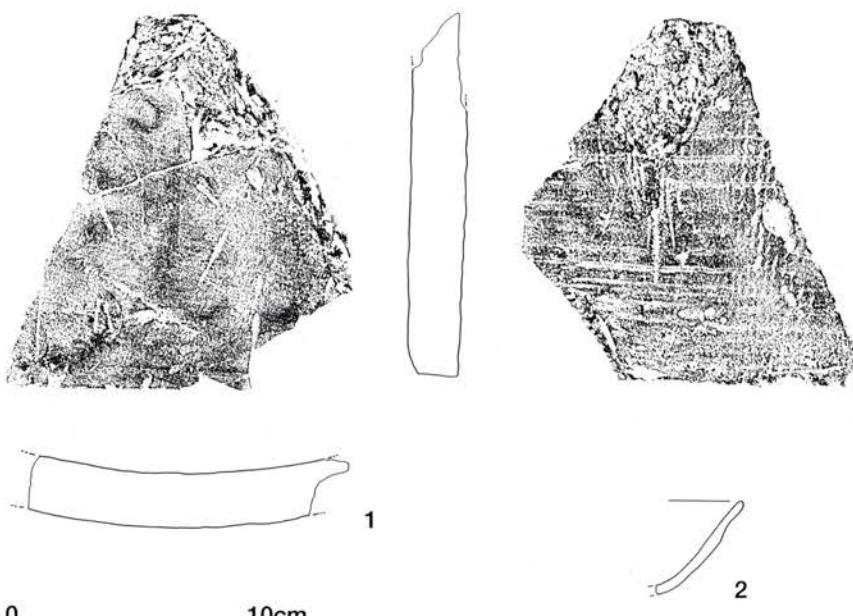


図46 トレンチ28の遺物

(3) より出土した遺物である。1は永福寺I期女瓦。精良な胎土で灰色を呈す。厚さ2.2cm。2は瀬戸の天目碗。胎土は淡黄灰色で軟質、淡緑灰色に施釉される。

### 第三章 まとめ

#### (1) 苑池の調査

今年度の苑池の調査は、苑池の北の限界の確認に主眼を置いて行われた。従来の時期区分の内、延慶3年(1310)の火災の再建以降廃絶までをIV期としていたものを、昨年度の調査によって、IV期-3面(14世紀前半)、IV期-2面(14世紀後半)、IV期-1面(15世紀以降)の3つに細分したが、今年度の調査では、苑地内の土層堆積状態からIV期を上層と下層の2つに分けることとなった。

昨年度の調査時に、東側半分を検出確認した苑池に突き出ていた、岬状石組みの残り部分を確認した。併せてⅢ期遣水の流路が埋め立てられた後に、新しく北翼廊の先端を埋め立て延ばした、IV期の遣水の流路を確認した。苑池への注ぎ口には景石を置き、流れ込む水流を二手に分けるといった工夫が見られた。

今年度調査した苑池の北岸の形状は、I期(創建)からⅢ期(鎌倉後期)まで大きな変化は見られない。基本的に地山を岬状に削りだし、陸地と池の境に景石を据えて汀に変化を持たせていた。IV期下層の時期に、北翼廊の先端部分の石組みを埋め立てて洲浜にし、併せて北岸の肩を利用して遣水の流路を延ばしていた。

#### (2) 今年度調査した苑池の時期

I期 創建(12世紀末)

北側の尾根の先端から陸地と池底を削りだしている。おそらくI期～IV期下層の時期まで苑池の北岸の形状に余り変化はないものと推察される。

II期 寛元宝治年間(13世紀中頃)

これまでの苑池の東岸の調査で確認している、II期の時期の大規模な埋め立ては確認されない。

IV期下層(14世紀前半)

北翼廊の先端部分を中心に埋め立て、新たな池底を貼り増し、遣水の流路を延ばしている。

IV期上層(14世紀後半)

池全体が大きく縮小し、景石なども僅かに頭をのぞかせているだけとなる。このころ補充された景石は、池の堆積土の上にのせられただけである。この状況は昭和63年度の北翼廊の調査で、IV期以降とした面の検出状況に類似している。

#### (3) 山の遺構確認調査

伽藍正面(東)の山の平場調査(トレンチ1～11)では、山際で岩盤を削り込んだ複数の溝や遺構が検出され、数多くの遺物(青磁水注、硯、手焙り、火箸など)が出土したことから、僧坊もしくは関連のある建物があった可能性が指摘できる。

伽藍正面(東)の山の尾根上の調査では、小規模ではあるが堀切(トレンチ12)が確認されている。また永福寺創建期の経塚(トレンチ13)が発見され、埋納状況の確認と出土状況の詳細な記録を取りながら、調査を進めることができたことは特筆に値する。埋納者が誰かと大いに期待される所であり、今後、個々の出土品の調査研究が進むものと思われる。

伽藍背後（西）の山の尾根は、人為的に大きく手が加えられ、場所によっては高さ10mも削られていたことが各トレンチ調査から判明した。トレンチ調査で確認した尾根上の岩盤面の表面は、風化が著しく長期間露頭していたと考えられる。このことから伽藍背後の山は、屏風状に切り立った岩盤面が露頭した、余り樹木の生えていない風景であったと推察される。トレンチ26東側脇の曲輪状の平場、トレンチ27で調査した幅7m、深さ3m以上もある大きな堀切は、東の山の尾根で検出された小規模な堀切（トレンチ12）の存在と併せ、『吾妻鏡』宝治元年六月五日の三浦合戦の項で、「当寺は殊勝の城郭たり」と記述された永福寺の優れた城郭的な防御施設の一端が明らかになった。更に多くの防御施設の存在を窺うことができ、幕府（頼朝）の権威としての姿、法要等の寺院としての姿、花見・月見等の別業的な姿といった永福寺の性格に、城郭という新たなる知見を与えてくれた。

今年度も諸先生、諸先輩から多くの貴重なご教授を受け、また周辺住民の皆様の深いご理解とご支援を賜り、永福寺苑池の調査ではIV期遣水の流路、山の遺構確認調査では、永福寺創建期の経塚を発見する等といった大きな成果を上げることができ、7ヶ月間に渡る調査の間事故もなく無事に終了することができたことを記して、深く感謝する次第である。

表1 かわらけ法量表

図6 苑池の調査で出土した遺物 (かわらけの法量)

単位はcm

No.	口 径	底 径	器 高	No.	口 径	底 径	器 高
4	9.4	—	1.9 手捏ね	13	12.2	7.5	3.8
5	9.8	—	2.4 手捏ね	14	12.4	6.8	3.5
6	14.3	—	3.0 手捏ね	15	14.5	8.9	3.9
7	7.0	4.4	1.8	21	7.8	5.8	1.5
8	7.4	4.3	2.0	22	8.1	5.2	2.3
9	7.7	4.3	2.2	23	8.3	5.4	1.9
10	11.1	6.8	2.7	24	11.0	7.0	3.3
11	11.2	6.9	3.1	25	12.1	8.4	3.4
12	12.9	7.9	3.1	26	13.9	—	2.8 手捏ね

図28 伽藍正面(東)の山の平場 トレンチ1~3 (かわらけの法量)

単位はcm

No.	口 径	底 径	器 高	No.	口 径	底 径	器 高
1	7.3	5.2	1.7	5	11.8	7.9	3.0
2	7.5	5.2	1.7	6	7.4	5.3	1.7
3	7.7	5.8	1.6	7	7.5	5.0	1.6
4	12.4	7.9	3.5	8	7.9	5.4	1.6

図29 伽藍正面(東)の山の平場 トレンチ4 (かわらけの法量)

単位はcm

No.	口 径	底 径	器 高	No.	口 径	底 径	器 高
1	7.0	4.2	1.5	12	7.8	5.0	1.7
2	7.1	4.4	1.9	13	10.8	6.0	2.4
3	7.2	5.0	1.5	14	11.8	7.8	2.4
4	7.3	4.4	2.0	15	12.0	8.0	3.1
5	7.4	4.2	1.8	16	12.1	7.3	3.2
6	7.3	4.4	1.8	17	11.7	6.5	3.0
7	7.4	5.3	1.7	18	12.2	7.6	3.3
8	7.4	5.1	1.9	19	12.3	7.1	3.0
9	7.5	5.3	1.6	20	12.4	8.0	3.3
10	7.6	5.4	1.4	21	12.5	7.8	3.3
11	7.7	5.5	1.5	22	12.7	7.2	3.6

図30 伽藍正面(東)の山の平場 トレンチ5~11 (かわらけの法量)

単位はcm

No.	口 径	底 径	器 高	No.	口 径	底 径	器 高
1	7.0	5.2	1.5	6	12.6	8.1	3.2
2	7.2	4.7	1.9	11	7.4	4.0	2.3
3	7.6	6.2	1.6	14	6.9	4.4	1.8
4	9.0	5.5	2.2	15	7.6	3.7	2.2
5	11.0	5.7	2.8	20	7.0	4.1	2.3

表2 経塚出土数珠玉計測表

水晶数珠玉

単位はmm

No.	直 径	厚 み	備 考	No.	直 径	厚 み	備 考
1	7.3	6.5		18	5.9	4.8	
2	7.1	6.2		19	6.0	5.3	
3	7.0	6.3		20	5.7	5.0	
4	7.3	6.5		21	6.0	5.4	
5	7.1	6.3	ヒビが入る	22	5.8	4.8	ヒビが入る
6	7.0	6.1		23	5.8	5.1	ヒビが入る
7	7.0	6.3		24	5.7	5.1	
8	6.9	5.8		25	5.3	4.5	
9	6.5	5.9		26	5.4	4.7	
10	6.5	6.0		27	5.5	5.0	
11	6.6	5.5		28	5.6	4.7	
12	6.4	5.3		29	5.4	4.7	
13	6.2	5.5		30	5.3	4.8	
14	6.5	5.3		31	5.4	4.6	
15	6.5	5.5		32	5.4	4.6	
16	6.0	5.2		33	5.3	4.4	
17	6.1	5.0					

木製数珠玉 (ゆがんでいるものは最大値を取った)

単位はmm

No.	直 径	厚 み	備 考	No.	直 径	厚 み	備 考
1	7.3	2.5		16	7.1	3.3	
2	6.9	2.8		17	6.9	2.4	
3	7.2	2.2		18	6.9	2.8	
4	7.2	3.3		19	7.3	2.7	
5	7.8	4.4		20	7.3	2.7	
6	7.2	3.8		21	6.8	2.3	
7	7.2	3.0		22	6.5	1.8	
8	7.4	2.7		23	7.0	1.6	
9	7.3	3.2		24	6.8	1.8	
10	7.4	2.5		25	7.1	2.3	
11	7.0	3.7		26	6.4	1.3	
12	7.3	3.0		27	7.0	2.2	一部欠損
13	6.9	3.4		28	6.6	1.5	半分欠損
14	7.3	3.2		29	7.0	1.4	皮膜のみ
15	6.9	2.5		30	7.0	1.5	皮膜のみ

## I期苑池の範囲

(調査の行われていない地点は推定)



図47 I期苑池の範囲

Ⅱ期苑池の範囲（調査の行われていない地点は推定）



図48 Ⅱ期苑池の範囲

### Ⅲ期苑池の範囲

(調査の行われていない地点は推定)



図49 Ⅲ期苑池の範囲

## IV期苑池の範囲

(調査の行われていない地点は推定)



図50 IV期苑池の範囲

## 附編1 史跡永福寺跡の花粉化石と木材化石

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

平成8年度の発掘調査においては、室町期の池のほか、同時期の水路が検出された。この水路は永福寺Ⅲ期以降の末期に近い時期の造水的性格のもとと思われ、北翼廊を迂回する形で造られ、苑池に注いでいる。また、創建時に排水施設として造られたと推測される溝も調査区北側で検出された。この溝について、時代とともに性格についても推測の域を出ず、それらの手がかりを得る目的で花粉分析を行った。また、先に記した苑池および水路より採取した試料についても花粉分析を行い、当時の永福寺周辺および苑池、水路周辺の古植生について検討した。さらに、発掘調査の際に検出された木材化石について、その樹種同定を行った。

### 1. 試料

花粉分析用試料は、図51に示した5地点（1～5）より柱状、およびスポットで採取した。また、図51には1～4地点の土層断面も示した。以下に、各地点の土層記載を示すが、詳しい土層断面や記載については遺構の章を参照して頂きたい。

地点1および2（溝）：1層は黒～黒褐色のシルト質粘土～粘土質シルトで、地点2では土丹（泥岩）の小塊がやや多く認められる。2層は粘性の高い黒色粘土で、地点1はやや砂質、地点2には土丹の小粒子が多量に含まれている。分析は地点1より採取された6試料（試料番号17～22）のうち、試料19を除く5試料について行った。なお、これら2地点は創建時に排水用に掘られた溝ではないかと考えられている。

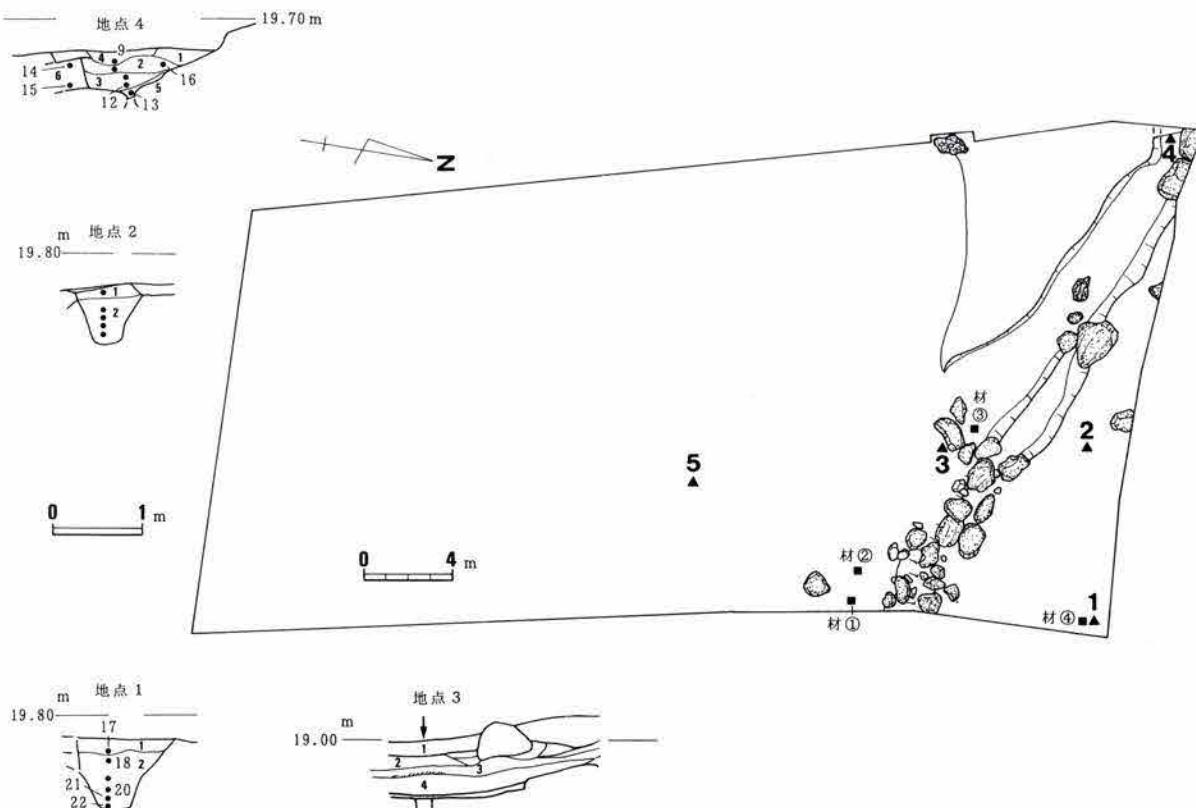


図51 試料採取地点位置と各地点の土層断面

地点3および5（苑池）：地点3の1層は黒褐色の粘土、2層は土丹を大量に含む黒灰褐色のシルト質粘土である。3層は黒褐色の泥炭質粘土で、細かい植物遺体が散在しており、下位との境界部にはマツの葉が一部密集している。この葉は断面形態からクロマツの葉と判断される。4層も黒褐色の泥炭質粘土で、上位より軟らかく、材片を含む植物遺体が散在している。4層の下位は土丹やケツ岩を含む青灰色の砂レキ層で池底（地山）にあたる。分析試料はこの2～4層より5点採取した（試料1～5）。また、地点5は地点3の4層下部を補足する目的で設定されたもので、上部は黒褐色の泥炭質粘土（試料6）で、地点3の4層下部にあたる。地点5の下部は青色を帯びた黒色シルト質粘土（試料7,8）で、土丹の小粒子が点在している。この地点5付近より貝化石が検出され、国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生にみて頂いた。その結果、オオタニシおよびカラスガイまたはイケチョウガイと同定された。いずれも河川や湖沼に生息するもので、苑池に生息していたのであろう。なお、時代は室町期と考えられている。

地点4（水路）：1層は遺構面（土丹・砂）、2層は褐色を帯びた暗青灰色の砂質粘土～粘土質砂である。3層は褐色を帯びた黒灰色砂質粘土～粘土質砂で、土丹塊（最大70mm）が点在しており、下部は玉砂利（ケツ岩）が多く含まれる。4層は暗灰色粘土混じりの暗青灰色砂レキで、レキは5～10mmの玉砂利で、下部は砂（細砂）のみとなる。5層は褐色を帯びた黒灰色の粘土質砂で、植物遺体が多く認められる。6層は青色を帯びた黒灰色の砂質粘土で、玉砂利が点在している。試料は2～6層より採取した8試料（9～16）である。なお、時代は室町期と考えられている。

## 2. 木材化石

発掘調査に際して、数点の木材化石が検出され、その樹種同定（松葉（パレオ・ラボ）担当）を行った。図51に試料採取位置を示したが、材④は地点1の溝内より検出されたものである。

観察の結果、材①（KAN350）および材③（KAN352）はヒノキ属、材②（KAN351）がマツ属、材④（KAN353）はアカマツであった。このうちマツについて、これまでの発掘調査で検出されたマツの葉はすべてクロマツであり、先に記したように今年度においてもクロマツと判断されている。今回のアカマツは2例目であり、先には平成6年度第1調査区の遣水内よりアカマツの根株が検出されている（鈴木 1996a）。

## 3. 分析方法

上記した21試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（質重約2～5g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフランにて染色を施した。

## 4. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉41、草本花粉39、形態分類を含むシダ植物胞子4、藻類1の計85である。これら花粉・シダ植物胞子・藻類の一覧を表1に、主要な花粉・シダ植物胞子の分布を



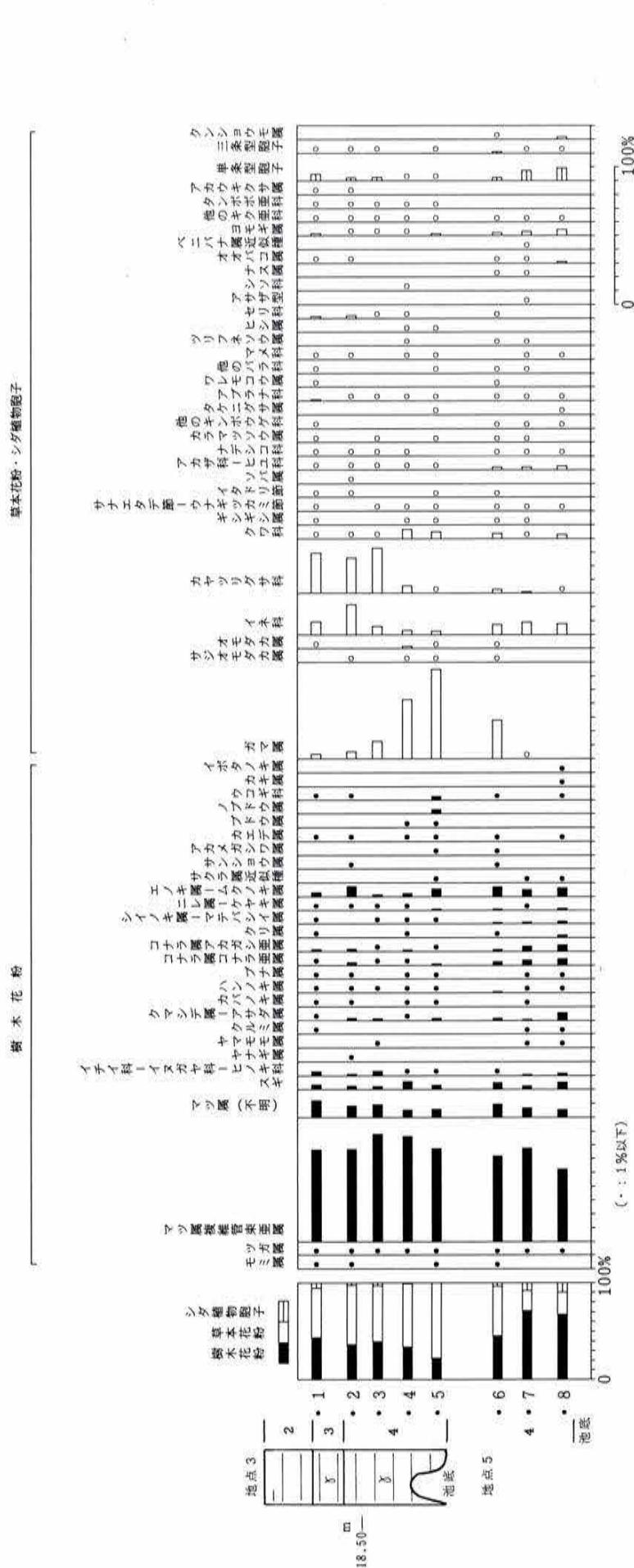


図52 地点3、5（苑池）の主要花粉化石分布図

図52（地点3, 5: 苑池）、図53（地点4: 水路）に示したが、地点1（溝）においては検出できた花粉化石数が少なく分布図として示すことができなかった。なお、分布図における樹木花粉は樹木花粉総数を基数に、草本花粉、シダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基数として百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるがそれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。また、花粉化石の単体標本（花粉化石を一個体抽出して作成したプレパラート）を作成し各自にPLC SS番号を付し形態観察用および保存用とした。

### 1) 地点3, 5 (図52)

マツ属複維管束亜属の優占で特徴づけられ、少ない試料8でも50%を越えている。マツ属複維管束亜属以外はいずれも低率で、その中ではエノキ属-ムクノキ属が5%前後とやや多く検出されている。その他、スギも5%前後の出現率を示し、コナラ属アカガシ亜属は上部に向かって減少しており、コナラ属コナラ亜属、シイノキ属-マテバシイ属も同様の傾向がみられる。草本類ではガマ属が試料4～6で多産しており、試料5では60%を越えている。また、カヤツリグサ科は上部で多く得られており、イネ科も同様の傾向を示している。その他では水生植物が観察され、抽水植物のサジオモダカ属・オモダカ属、浮葉植物のヒシ属はガマ属が多産している試料を中心に検出され、同じく浮葉植物のアサザ属（アサザ型）はそれより下位の試料7より得られている。

### 2) 地点4 (図53)

やはりマツ属複維管束亜属の多産で特徴づけられ、上部では減少するものの、マツ属複維管束亜属と判断できなかったマツ属（不明）を加えると50%以上を占めている。このマツ属複維管束亜属が減少する上部において、ツガ属・スギ・クマシデ属-アサダ属・アカガシ亜属・シイノキ属-マテバシイ属などが増加している。草本類においても上部試料でイネ科が多産し、ガマ属・カヤツリグサ科も同様である。また、抽水植物のサジオモダカ属・オモダカ属・ミズアオイ属・キカシグサ属が同試料のみから検出されている。その他、アブラナ科・ヨモギ属・タンポポ亜科なども若干増加しており、アカザ科-ヒュ科は試料11,16においてやや多く得られている。

### 3) 地点1

検出数が少なく分布図として示せなかったが、これまで示してきた地点と異なりマツ属複維管束亜属はそれほど得られていない。最も多く得られているのはアカガシ亜属で、スギが続いている。草本類ではイネ科が最も多く、次いでヨモギ属、タンポポ亜科となっている。

## 5. 苑池を中心とした永福寺周辺の古植生

### 1) 創建時の古植生（溝試料）

地点1および2の溝は永福寺の創建にあたり排水などのためにつくられたものと考えられており、溝埋積土はその時期のものと推測される。地点1の花粉分析結果をみると、花粉化石はそれほど得られず、保存状態も最下部試料を除き悪い。このことは最下部を除き溝は、乾いた状態で、速やかに埋積されたことを示していると思われる。すなわち、創建後、溝はその役目（排水等）を終え、埋め戻されたと推測される。同様のことが平成4年度の発掘調査でもみられ、排水施設と考えられている溝（第1地点）の埋積土について花粉分析を行っているが、その結果、やはり検出数は少なく、埋め土的性質のものと

## 樹木花粉

## 草本花粉・シダ植物胞子

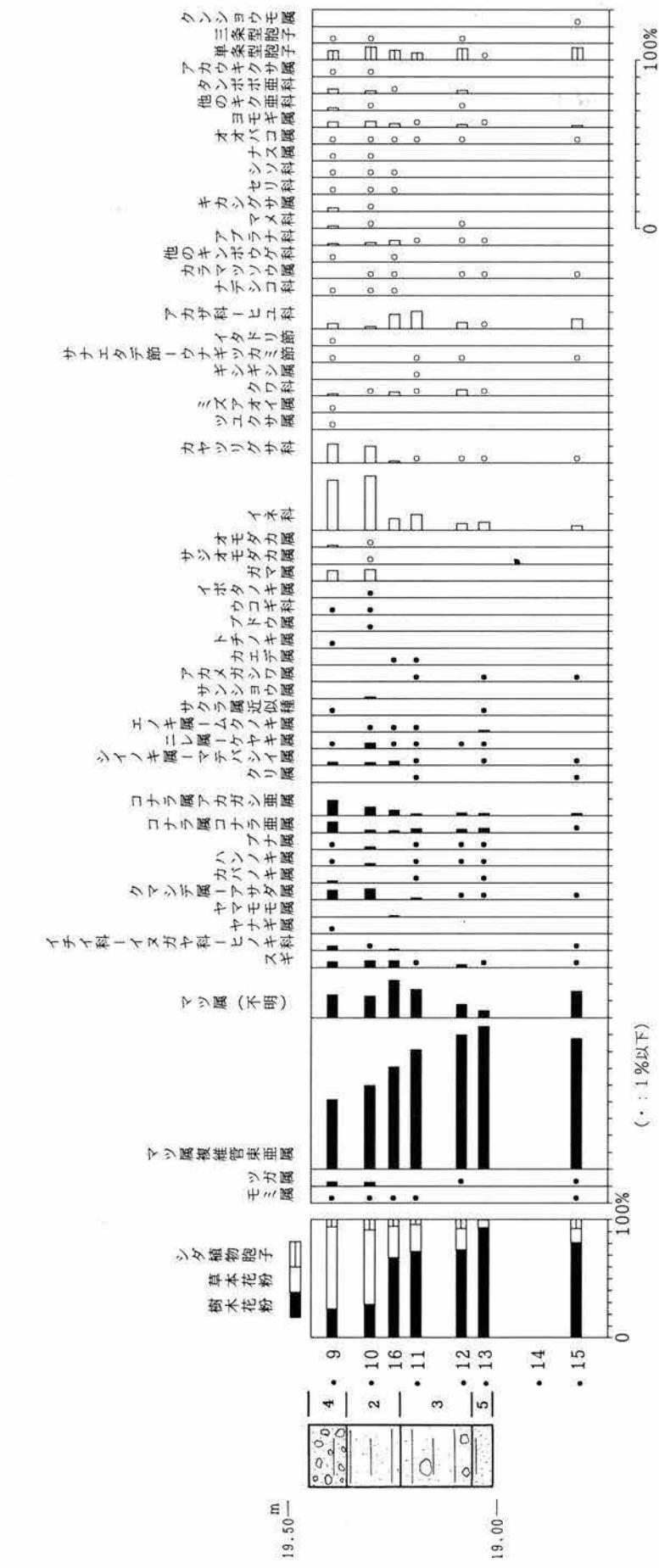


図53 地点4 (水路) の主要花粉化石分布図

推測されている（鈴木 1993）。

そうしたなか、最下部試料については検出数は少ないものの保存状態は良く、当時の植生を反映しているものと思われる。それによると、創建時の周辺植生は、アカガシ亜属を主体とした照葉樹林が優勢であり、スギ林も多かったと予想される。このことは先に記した鈴木（1993）にも示されているなど、これまで行ってきた分析結果と同様である。

## 2) 室町期の古植生（苑池・水路試料）

苑池堆積物について、創建後の幾度かの改修にともない浚渫も行われたことが予想される。よって創建直後の堆積物は残っていないと思われ、池底に近い部分においても上部の時代、すなわち室町期と同じくらいと推測される。この頃になると、永福寺周辺はマツ属複維管束亜属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）が優勢となっており、創建時前後の照葉樹林やスギ林は縮小した。こうした傾向は北条高時邸跡（鈴木 1996b）や北条小町邸跡（鈴木 1996c）など若宮大路を中心とした各遺跡でみられ、これは土地整備にともなう土地改変や頻繁なスギ材利用によってもたらされたと考えられている（鈴木・吉川 1994）。

地点4の水路の花粉分析結果をみると、上部においてニヨウマツ類は減少傾向を示し、若干ではあるがスギやクマシデ属—アサダ属、アカガシ亜属、シイノキ属—マテバシイ属（以後シイ類と略す）などが増加している。このことはスギ林や照葉樹林の回復傾向が示されていると考えられ、鎌倉幕府崩壊後、室町期には森林への人間の影響も次第に少なくなったと推測される。

池内についてみると、水深のあるところでは浮葉植物のヒシ属（ヒシ）やアサザ型（アサザ）が生育しており、浅いところではガマ属（ガマ・ヒメガマなど）が繁茂していた。その後、池はさらに浅くなつたとみられ、ガマ属に代わりイネ科やカヤツリグサ科が分布を拡大した。

水路周辺においてはツユクサ属・アカザ科—ヒユ科・アブラナ科・オオバコ属・ヨモギ属・タンポポ亜科などの雑草類が生育していた。これらは上部試料でやや多くなる傾向があり、時代が進むにつれて雑草類は増加したと予想される。また、ガマ属やオモダカ属・ミズアオイ属・キカシグサ属などが生育する湿地的なところも存在していたと推測されるが、これらの多くは水田雑草を含む分類群であり、永福寺周辺の水田域よりそれらの花粉が水路を通してもたらされた可能性もある。

## 5.まとめ

1) 溝試料については、検出された分類群（スギ・アカガシ亜属）から永福寺が創建された頃の植生を反映していると考えられ、速やかに埋め戻されたと推測される。

2) 室町期の永福寺周辺の古植生はニヨウマツ類が優占していたが、次第にスギ林や照葉樹林が増加し、それらの森林の回復傾向がみられるようになった。

3) 室町期の苑池は、水深のあるところにはヒシ属やアサザ属アサザ型が生育し、浅いところではガマ属が繁茂していたが、その後、さらに浅くなつてガマ属に代わりイネ科やカヤツリグサ科が増加した。

4) 室町期の水路周辺では雑草類が次第に増加した。

## 引用文献

鈴木 茂（1993）史跡永福寺跡苑池堆積物の花粉化石。鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書—平成4年度—，鎌倉市教育委員会，p.29-37.

- 鈴木 茂 (1996a) 史跡永福寺跡の花粉化石 (平成6年度). 鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書－平成6・7年度－, 鎌倉市教育委員会, p. 40-54.
- 鈴木 茂 (1996b) 北条高時邸跡の花粉化石. 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 12 平成7年度発掘調査報告 (第1分冊), 鎌倉市教育委員会, p. 90-102.
- 鈴木 茂 (1996c) 花粉分析. 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 12 平成7年度発掘調査報告 (第2分冊), 鎌倉市教育委員会, p. 261-270.
- 鈴木 茂・吉川昌伸 (1994) 鎌倉市永福寺跡における鎌倉時代の植生変遷. 植生史研究, 2, p. 45-51.

## 附編2 永福寺経塚出土の花粉化石・大型植物化石・炭化材

### 1. 出土経塚内土壤の花粉化石

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

永福寺主要伽藍の前面に位置する山頂付近より経塚が発見され、経筒、櫛、扇子などが出土している。こうした遺物とともに底部からは種実類を含む土壤も検出され、この土壤について花粉分析を行った。

#### a. 試料と分析方法

試料は黒褐色の砂レキ混じり粘土で、植物遺体も含まれている。この試料約3gについて、10% KOH処理-傾斜法-HF処理-比重分離-アセトトリル処理の順に分析を行い、残渣にグリセリンを加え保存用とした。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフランにて染色を施した。

#### b. 分析結果および考察

検鏡の結果、検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉10、草本花粉が6の総計16で、これらの一覧を表1に示した。そのうち、樹木花粉ではサンショウ属が圧倒的に多く検出されており、形態的にはいわゆる山椒（サンショウア属）ではなく、イヌザンショウア属（イヌザンショウ・カラスザンショウなど）に属するものと考えられる。次いでスギが多く、他に、コナラ属アカガシア属・コナラ属コナラア属・マツ属複維管束ア属（アカマツ・クロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）などが得られている。草本類は少なく、そのなかにベニバナ属近似種が含まれている。

サンショウ属花粉は他の分類群に比べ圧倒的に多く、これは花あるいは薬が混入したためと思われ、朽ちることなく残っていたものが供物

経塚内土壤の産出花粉化石一覧

和名 樹木	学名	
マツ属複維管束ア属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	2
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	2
スギ	<i>Cryptomeria Japonica</i> D.Don	9
イチイ属-イヌガヤ科-ヒノキ科	<i>T.-C.</i>	1
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus</i> - <i>Ostrya</i>	1
コナラ属コナラア属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	3
コナラ属アカガシア属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	4
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus</i> - <i>Zelkova</i>	1
サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	73
ミズキ属	<i>Cornus</i>	1
草木		
イネ科	<i>Gramineae</i>	4
ナデシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	1
マメ科	<i>Leguminosae</i>	1
ベニバナ属近似種	cf. <i>Carthamus</i>	1
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	1
他のキクア属	other <i>Tubuliflorae</i>	1
シダ植物		
樹木花粉	<i>Arboreal pollen</i>	97
草木花粉	<i>Nonarboreal pollen</i>	9
シダ植物胞子	<i>Spores</i>	0
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	106
不明花粉	Unknown pollen	6

T.-C. は *Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceae* を示す

を納める際などにまぎれこんだことが予想される。サンショウ属に次いで得られているスギやアカガシ  
亜属についても同様のことが考えられる。検出された経塚の時期は12世紀末から13世紀初頃と考えられ  
ており、この頃の永福寺周辺はスギ林や照葉樹林が優勢（鈴木 1996ほか）で、こうしたことが反映さ  
れているのであろう。

これに対して、イヌザンショウ・カラスザンショウは林内に普通にみられる落葉樹であり、発掘時  
(平成8年8月24日以降)に混入してしまったことも考えられ、これについては他の分類群も同様であ  
り、現時点ではどちらとも言えないのが現状である。なお、染料などに利用されたとみられるベニバナ  
属近似種（おそらくベニバナ）は供物などに付着して混入したと推測される。

#### 引用文献

鈴木 茂 (1996) 史跡永福寺跡の花粉化石 (平成6年度). 鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定  
史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書—平成6・7年度—, 鎌倉市教育委員会,  
p. 40-54.

### 2. 永福寺跡経塚内土壤から出土した大型植物化石

新山雅広 (パレオ・ラボ)

#### a. 出土した大型植物化石

永福寺跡の経塚から出土した大型植物化石はトウダイグサ科の種子の他は分類群名を決めるには至ら  
ず、便宜的に不明A～Dとし、以下に各々の記載を示した。なお、トウダイグサ科については千葉大学  
の百原新先生に同定していただいた。また、他の分類群についてもみていただき、ご助言を賜った。

##### トウダイグサ科 種子

完形3点、破片数点を出土した。長さ11～13mm、幅6～7mm、黒色で、やや偏平な橢円形。表面には  
やや不規則な縦方向の緩い隆起が数本ある。この隆起が中央に1本あり、稜となって上面観が扇形にな  
るもののが3点のうち1点みられた。種皮は幅0.3mmで固く内側で屈曲する柵状組織から構成される。種  
皮が屈曲する柵状組織から構成されること、および種子の向軸側中央に隆起があり、上面観が扇形にな  
ることから、トウダイグサ科に同定される。

##### 不明A

完形3点を出土した。茶褐色で径4mm程度の球形。柔らかく、表面は凹凸が目立ち、大きな穴が1つ  
ある。

##### 不明B

完形1点を出土した。茶褐色で側面観は半円形、上面観は円形。表面には10本程度の筋があり、下端には大きなへそがある。径3mm程度。

##### 不明C

完形34点を出土した。褐色ないし黒褐色、側面観は橢円形で下端には穴があり、表面はざら  
つく。長さ3mm程度、幅1.5mm程度。

##### 不明D

破片1点を出土した。表面は茶褐色でやや光沢があり、縦方向の隆起が目立つ部分がある。裏側は凹  
凸がある。

### 3. 永福寺跡経塚甕底部から出土した炭化材

植田弥生（パレオ・ラボ）

永福寺跡経塚甕底部から検出された炭化材の樹種を調べた結果を報告する。まず実体顕微鏡で横断面を観察し同定可能な大きさと組織の状況のよいものを選別した。小破片がほとんどでありその中から3分類群が確認できたのでその樹種組織を記載し電子顕微鏡写真を示す。

樹種同定はまず炭化材の横断面（木口）を手で割り新鮮な面を出し、次に接線断面（板目）と放射断面（柾目）は片刃の剃刀を方向に沿って軽くあて弾くように割り面を出す。この3断面の試料を直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子株製 JSM T-100型）で観察・写真撮影をした。

なお、ほとんどの破片はクリやコナラ節に似た管孔配列であり、どちらかの材と推測されるが、横断面の面積が小さいため集合放射組織の有無が確認できず同定には至らなかった。

#### 検出された樹種の記載

コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版1a.-1c.

年輪の始めに小型から中型の管孔が数層配列し除々に径を減じ、晩材部では薄壁・角形で小型の管孔が火炎状・放射方向に配列する環孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は单一、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものと複合状のものがあり、道管との壁孔は大きく柵状である。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。材は加工はしにくく乾燥すると割れや狂いが出やすい欠点はあるが、人里近くに普通にある樹種であることもありよく利用され用途も広い。堅果は食用となる。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版2a.-2c.

年輪の始めに中型の管孔が密に配列し除々に径を減じ、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列し、柔組織が接線状に配列する環孔材である。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は单一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性で集合状の組織はない。放射組織と道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木で、果実は食用になり、材は加工はやや困難であるが狂いは少なく粘りがあり耐朽性にすぐれている。縄文時代から果実は食用に、材は柱材の使用例が有名である。

シイノキ属 *Castanopsis* ブナ科 図版3.

年輪の始めに中型の管孔が間隔を開けて配列し除々に径を減じ晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材である。年輪始めの管孔が間隔を開けて配置していることからクリとは異なりシイノキ属と同定した。

シイノキ属は暖帯に生育する常緑高木で、関東以西に分布するツブラジイと福島県と新潟県佐渡以南に分布するスダジイがある。

## 写 真 図 版

図版 1



▲1. 重機による掘削終了直後

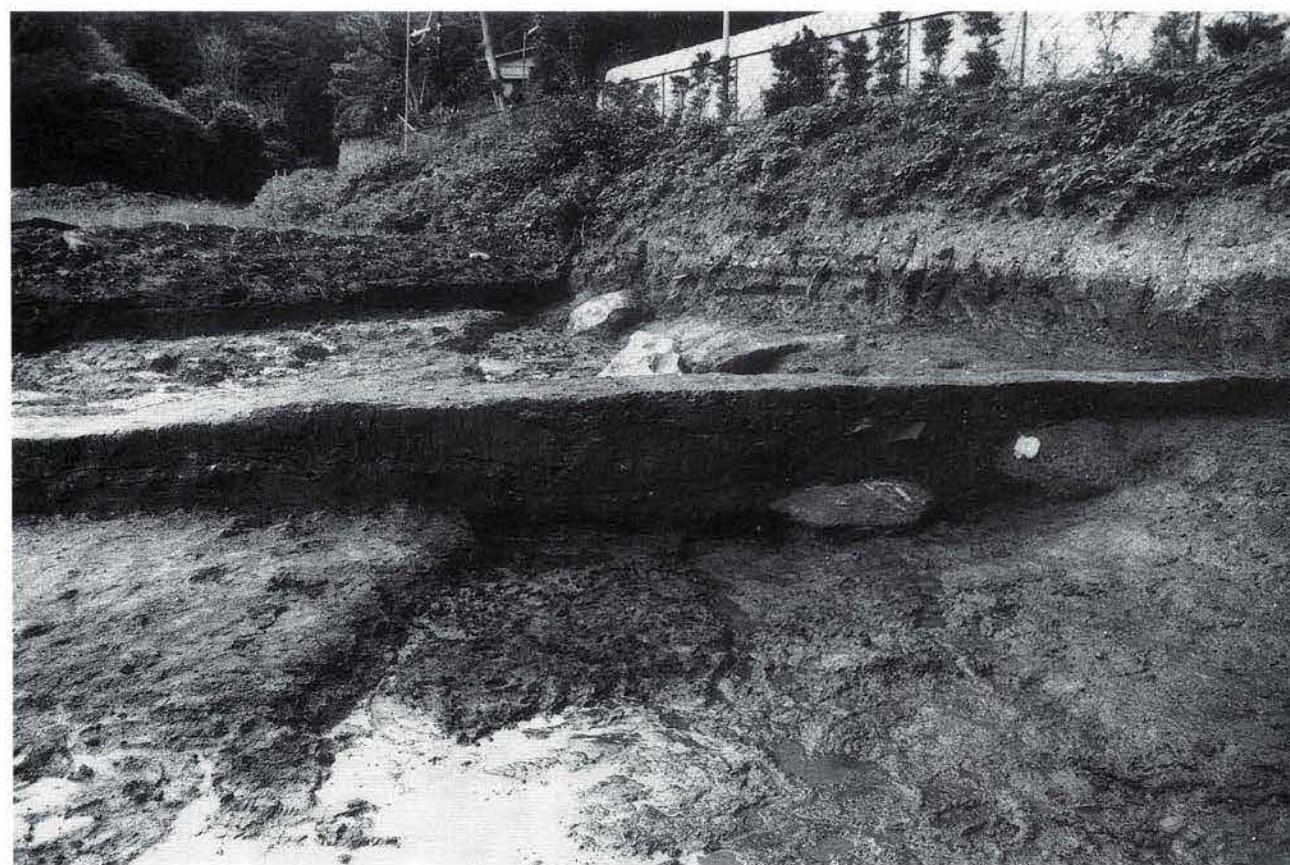
▼2. 掘り下げ風景





▲1. IV期下層土丹面と土層断面

▼2. IV期下層土丹面・遣水と土層断面



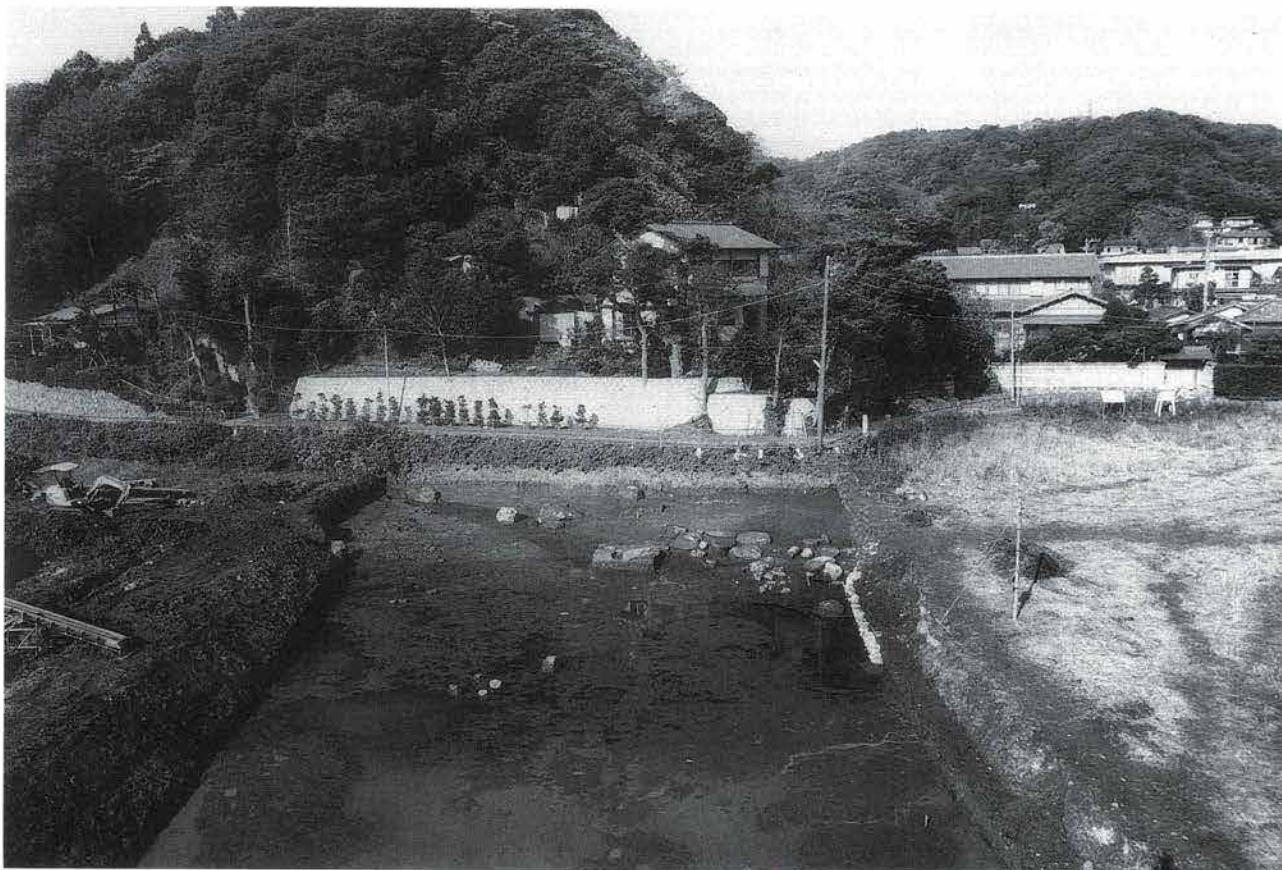
図版 3



▲1. IV期上層の全景

▼2. IV期上層の全景





▲1. IV期下層の全景

▼2. IV期下層の全景



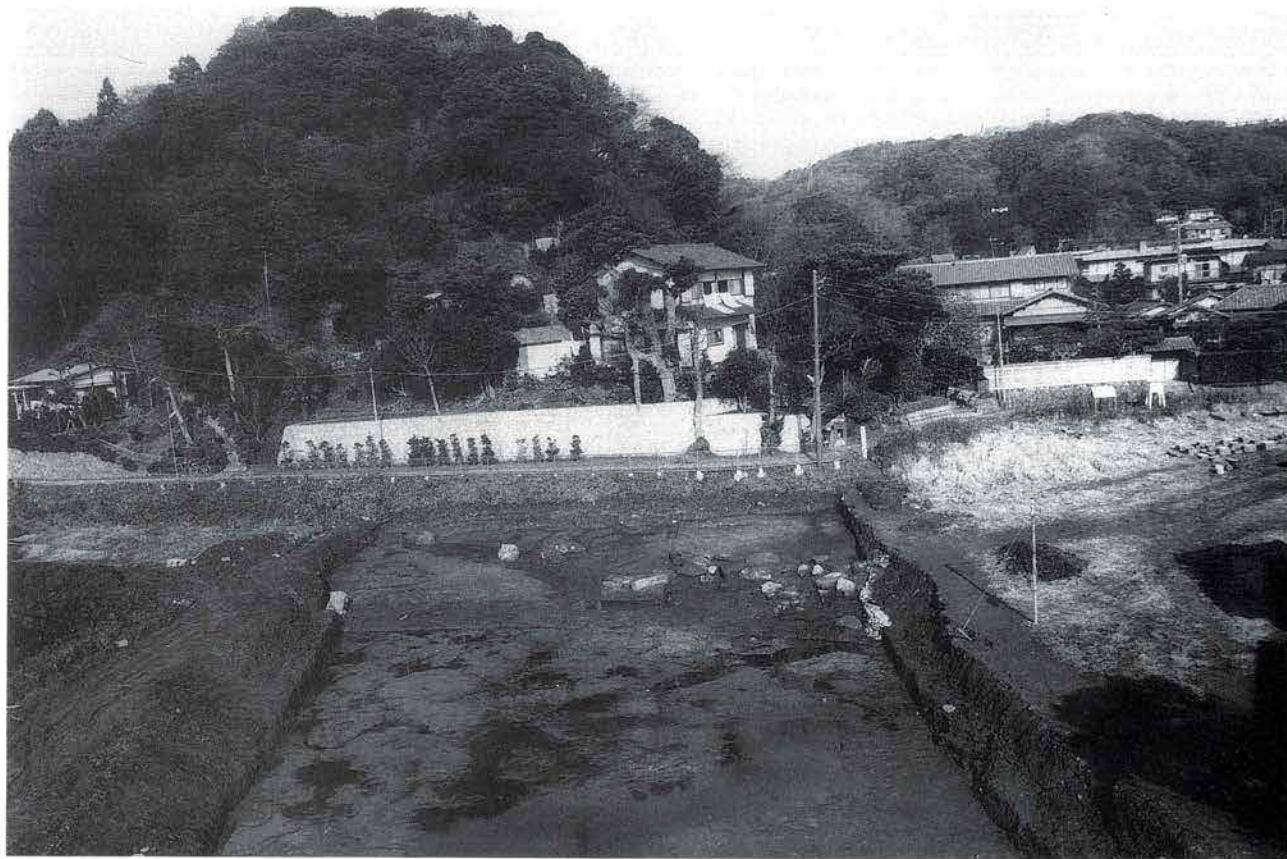
図版 5



▲1. IV期下層の全景

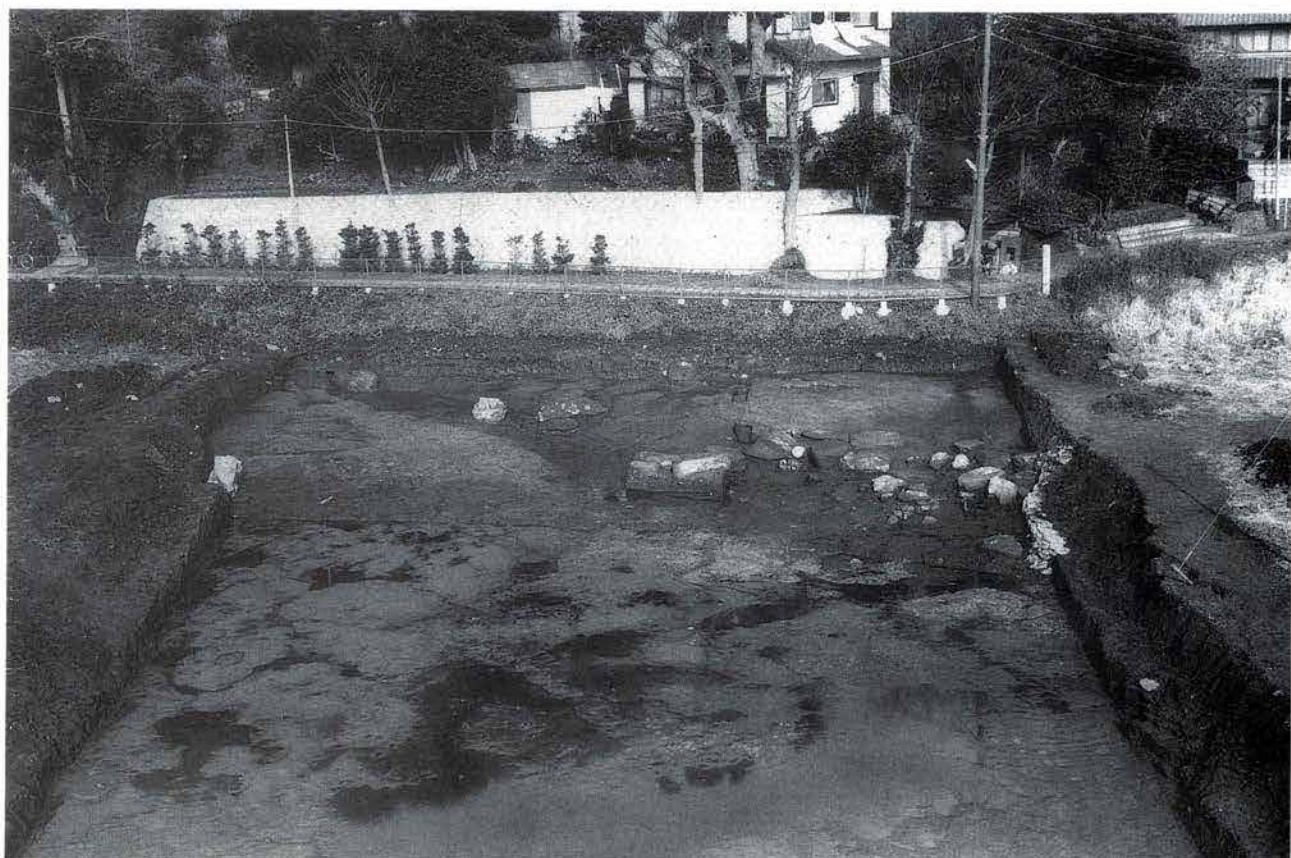
▼2. IV期下層の全景

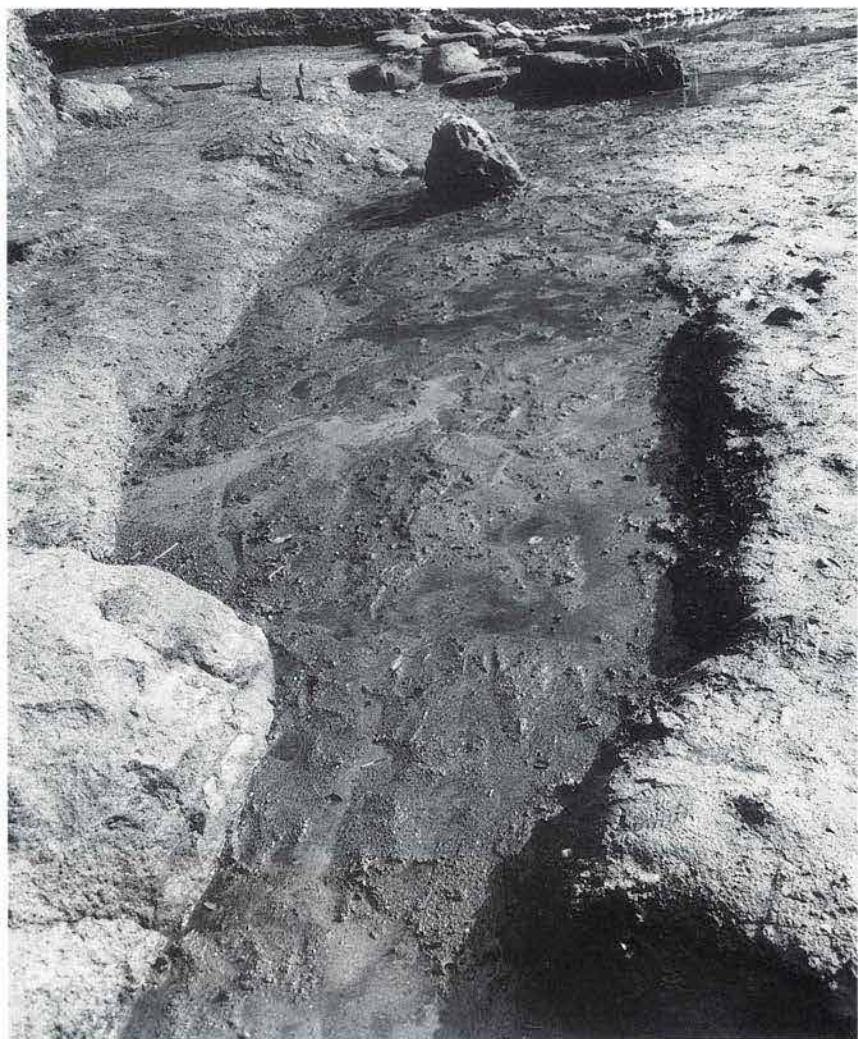




▲1. IV期以前の全景 (IV期下層の遺構保護のため池中のみ)

▼2. IV期以前の全景 (池中は、地山、岩盤が露出)

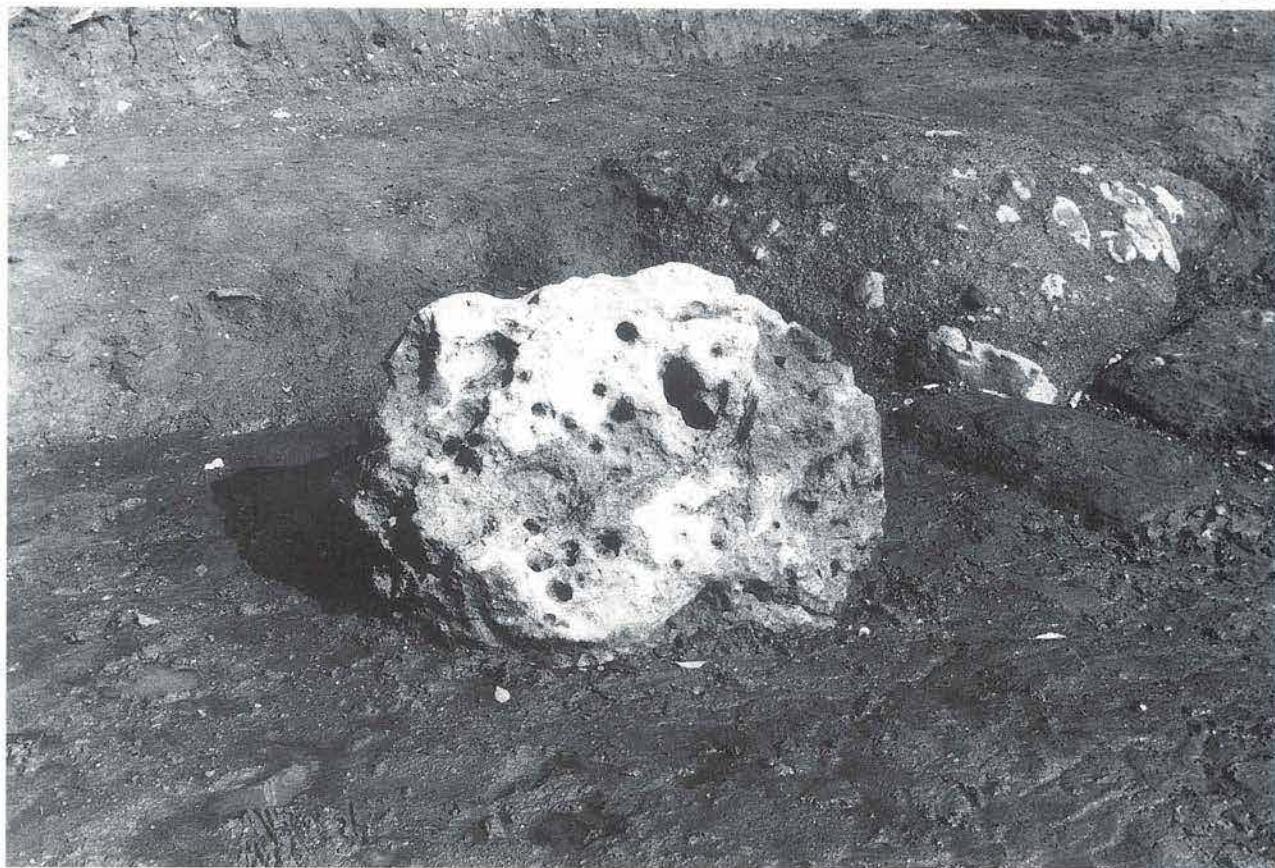




▲1. IV期下層、遣水の流路（北西から）

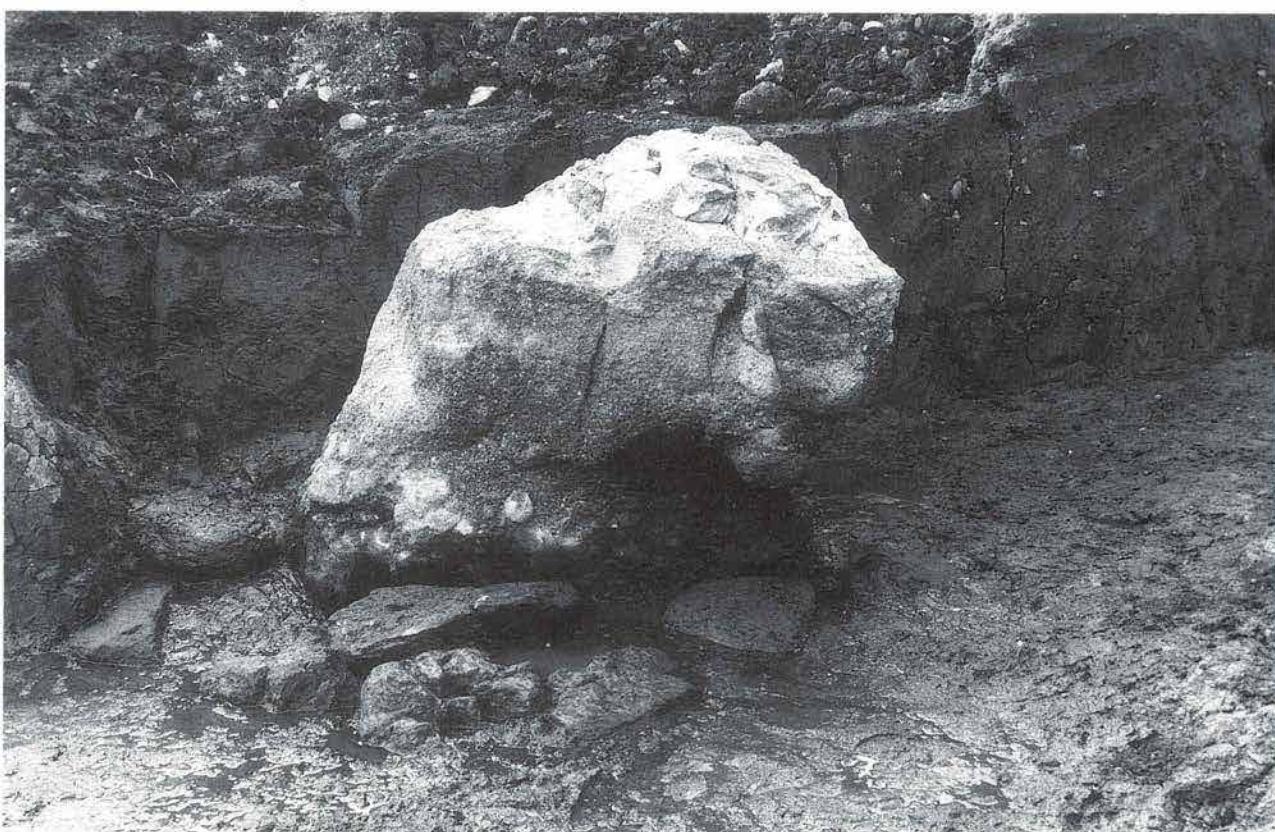
▼2. IV期下層の遣水の土層断面

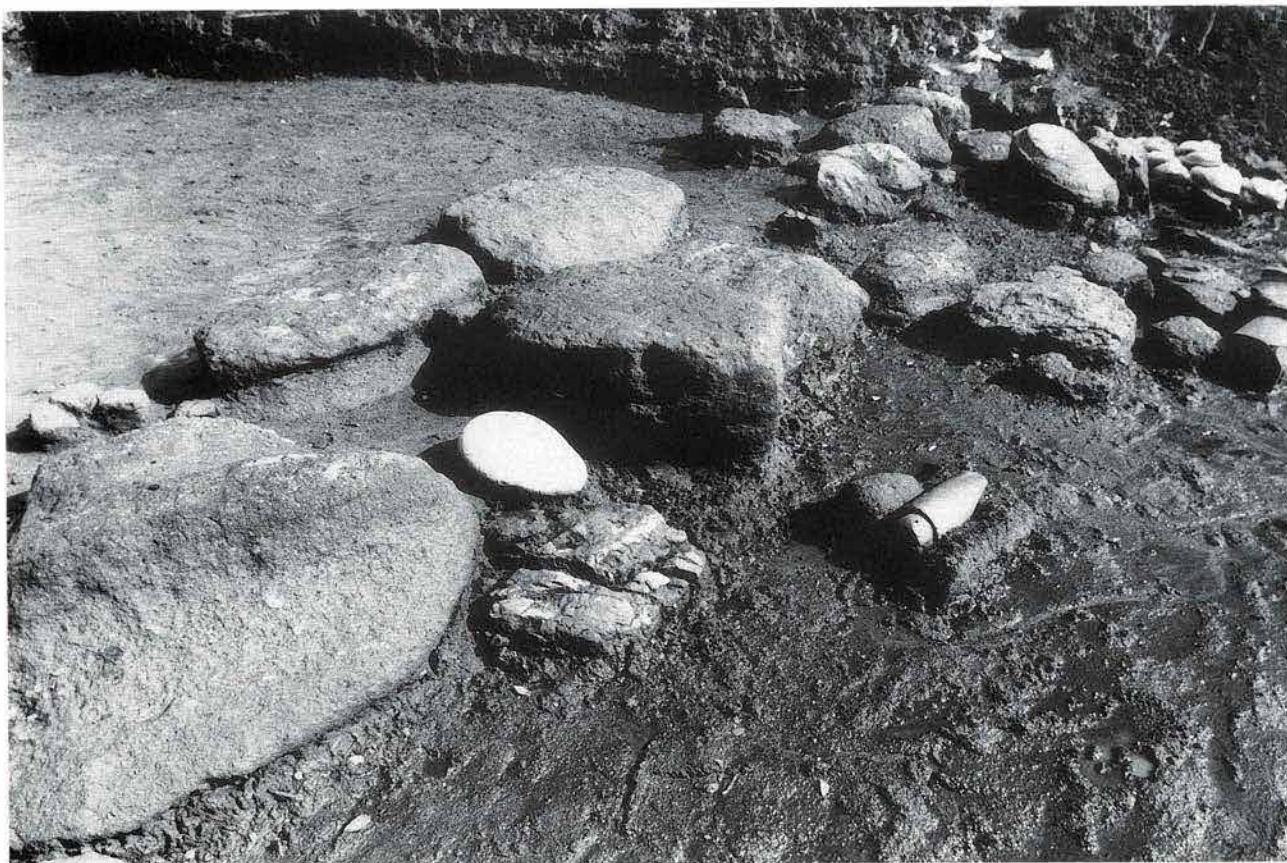




▲ 1. 遣水流路中の景石（南から）

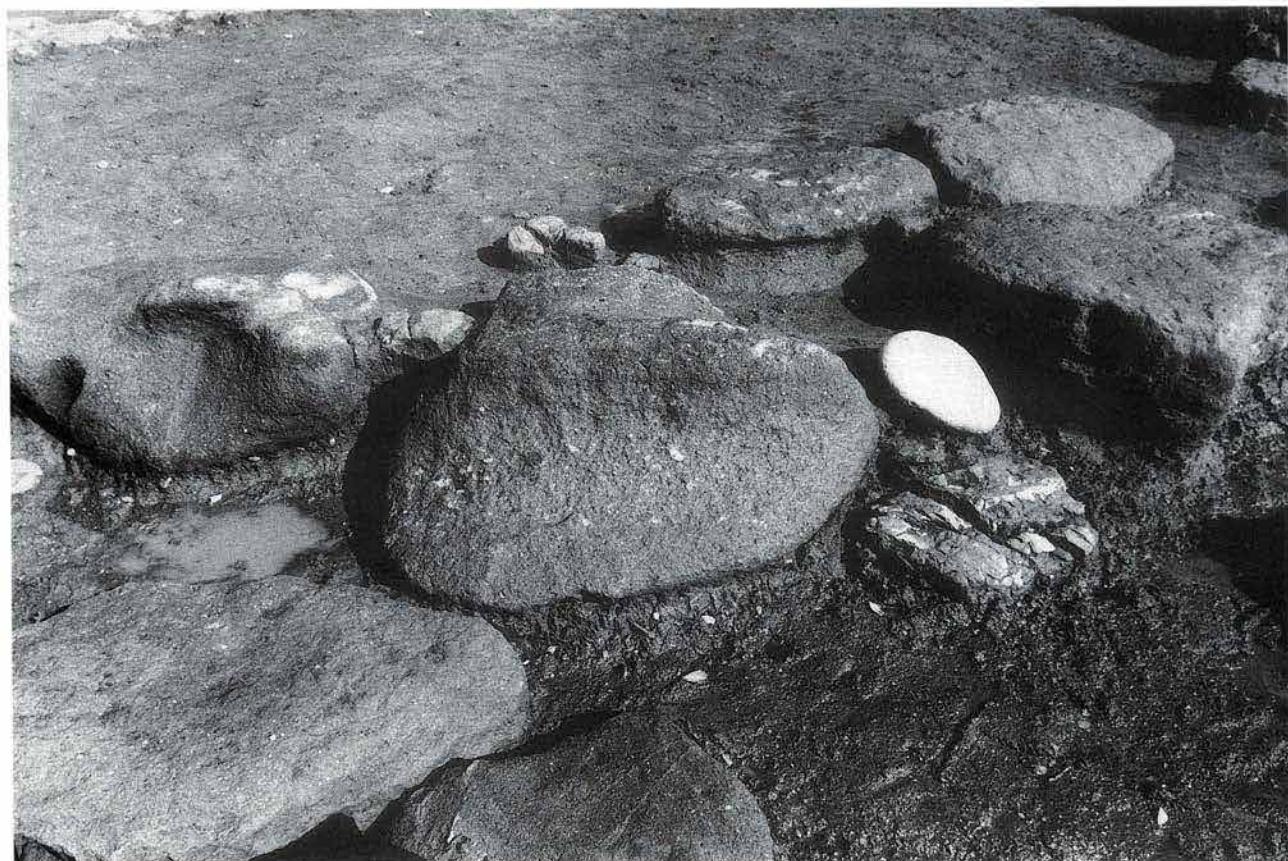
▼ 2. 立石（東から）

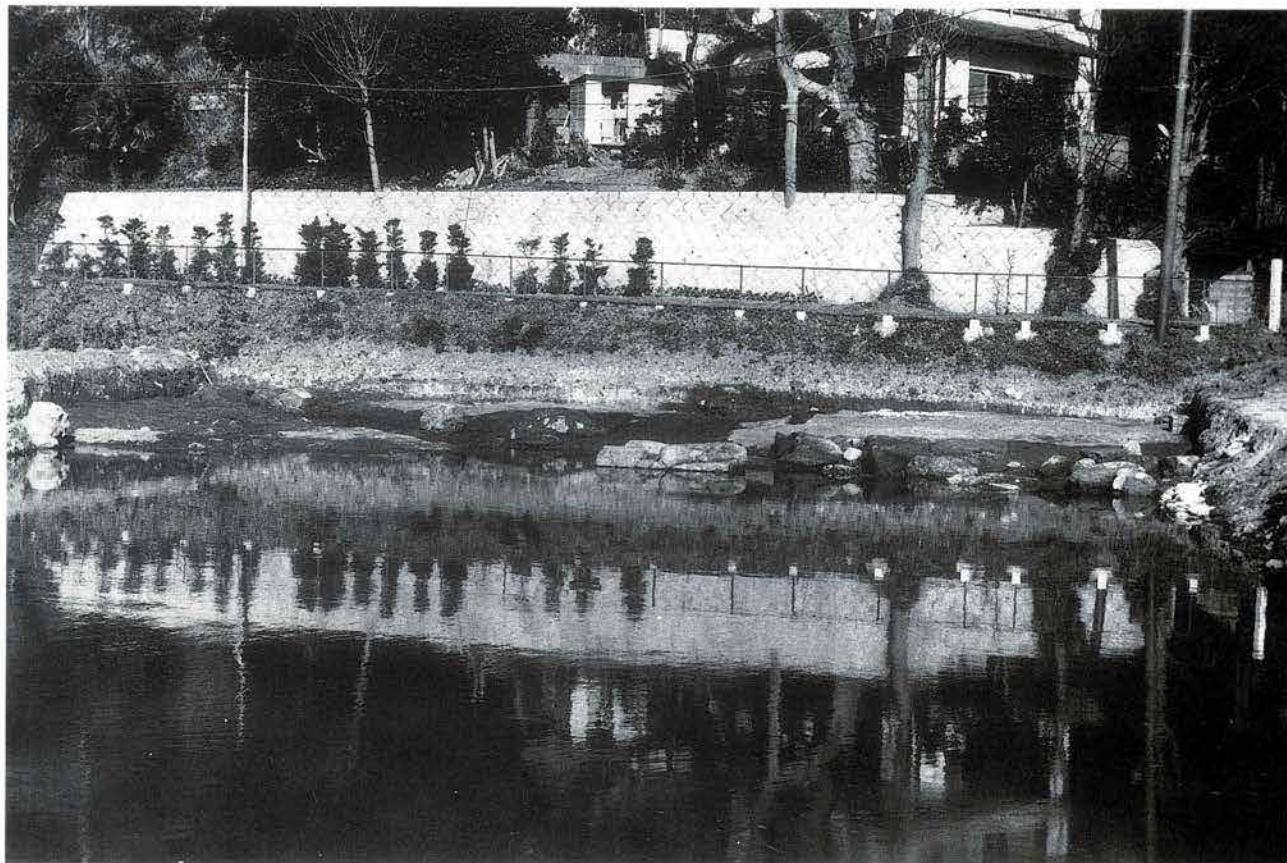




▲1. IV期下層の汀に並べられた景石（西から）

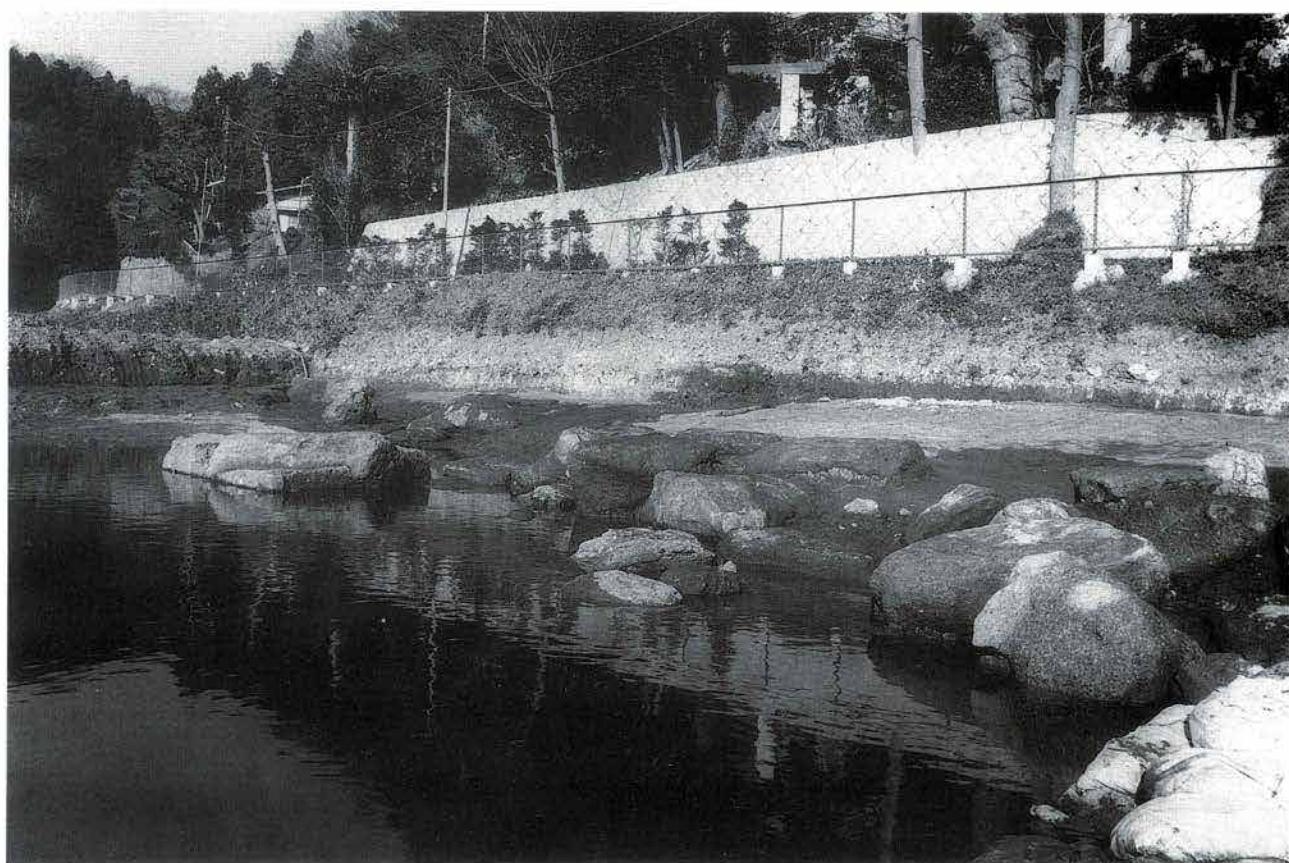
▼2. IV期下層の汀に並べられた景石（南から）





▲1. IV期下層の風景（南から）

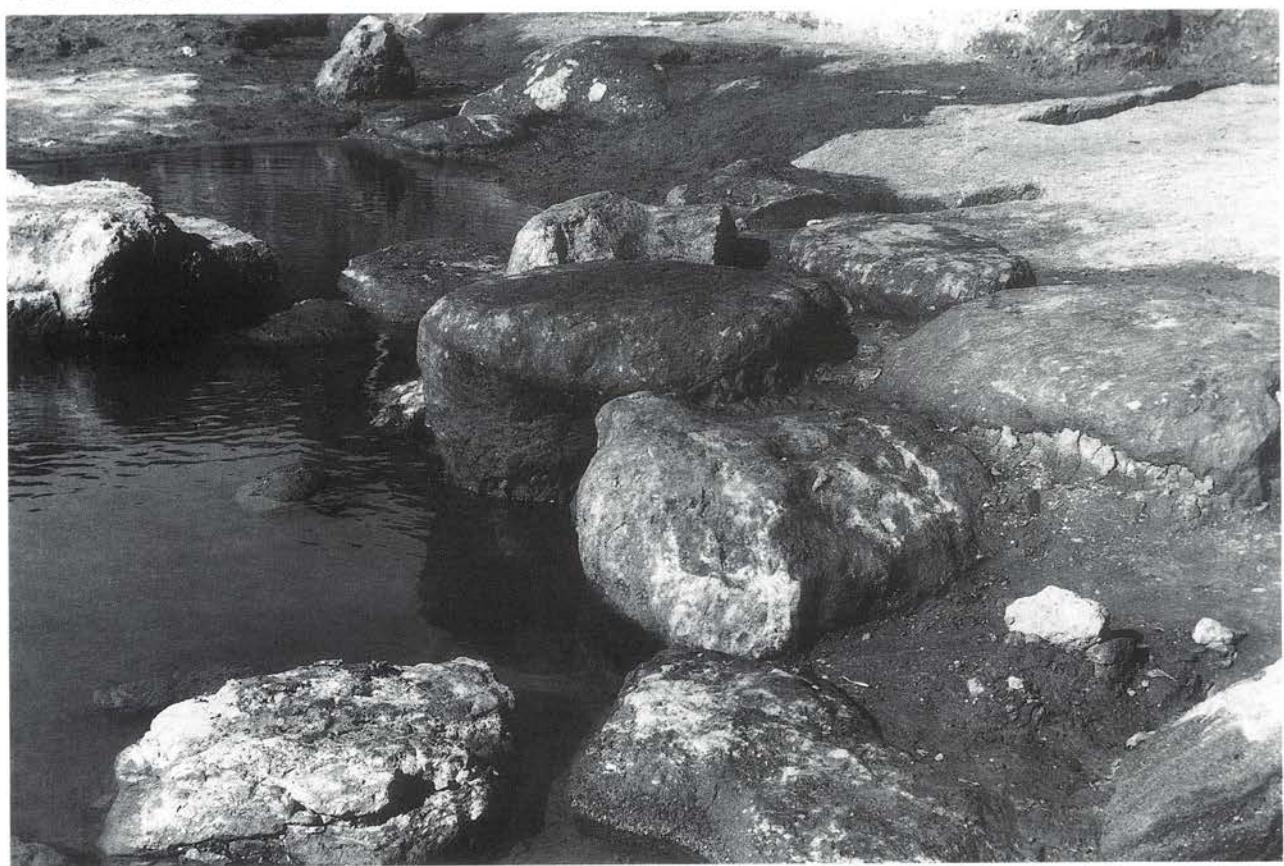
▼2. IV期下層の風景（東から）



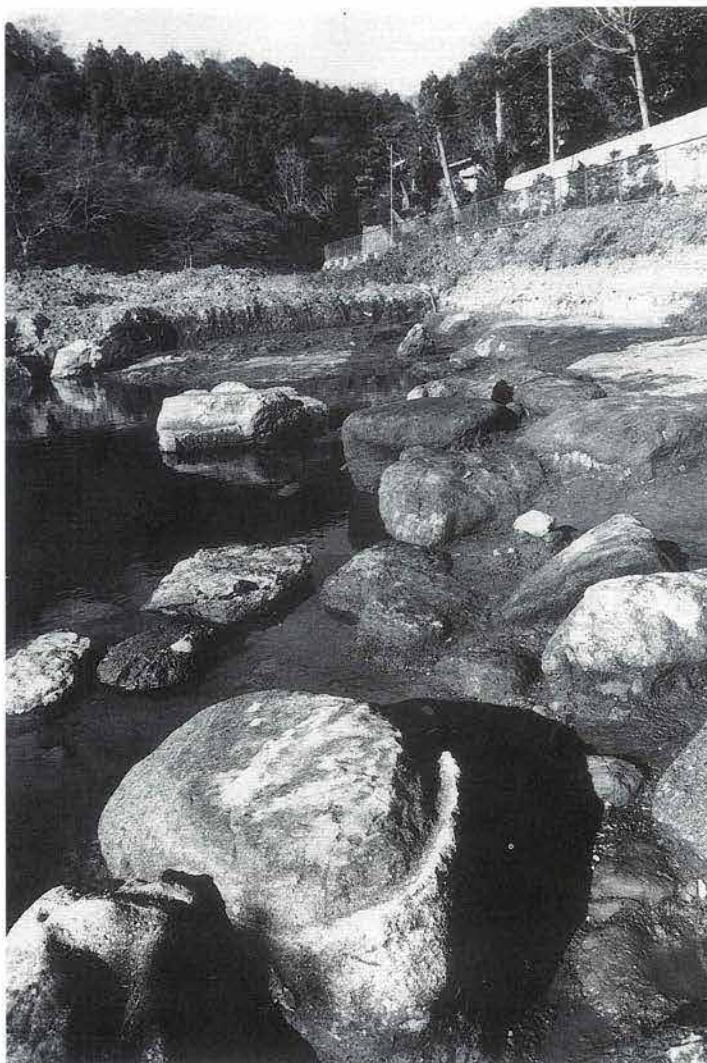


▲1. IV期下層の風景（南東から）

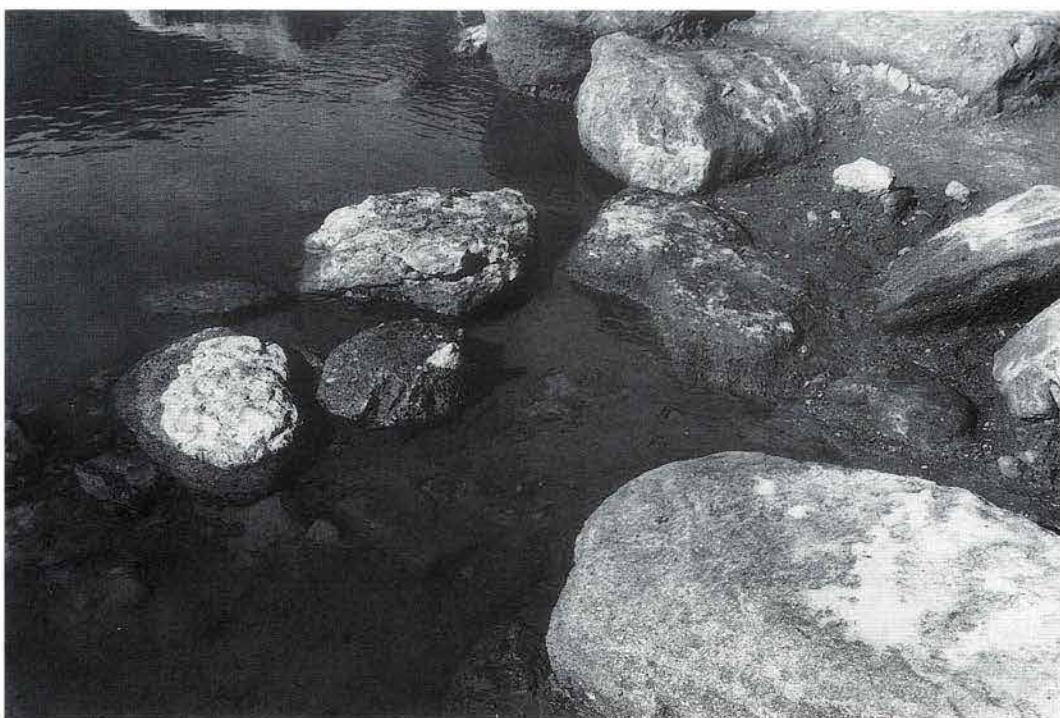
▼2. IV期下層の風景（東から）

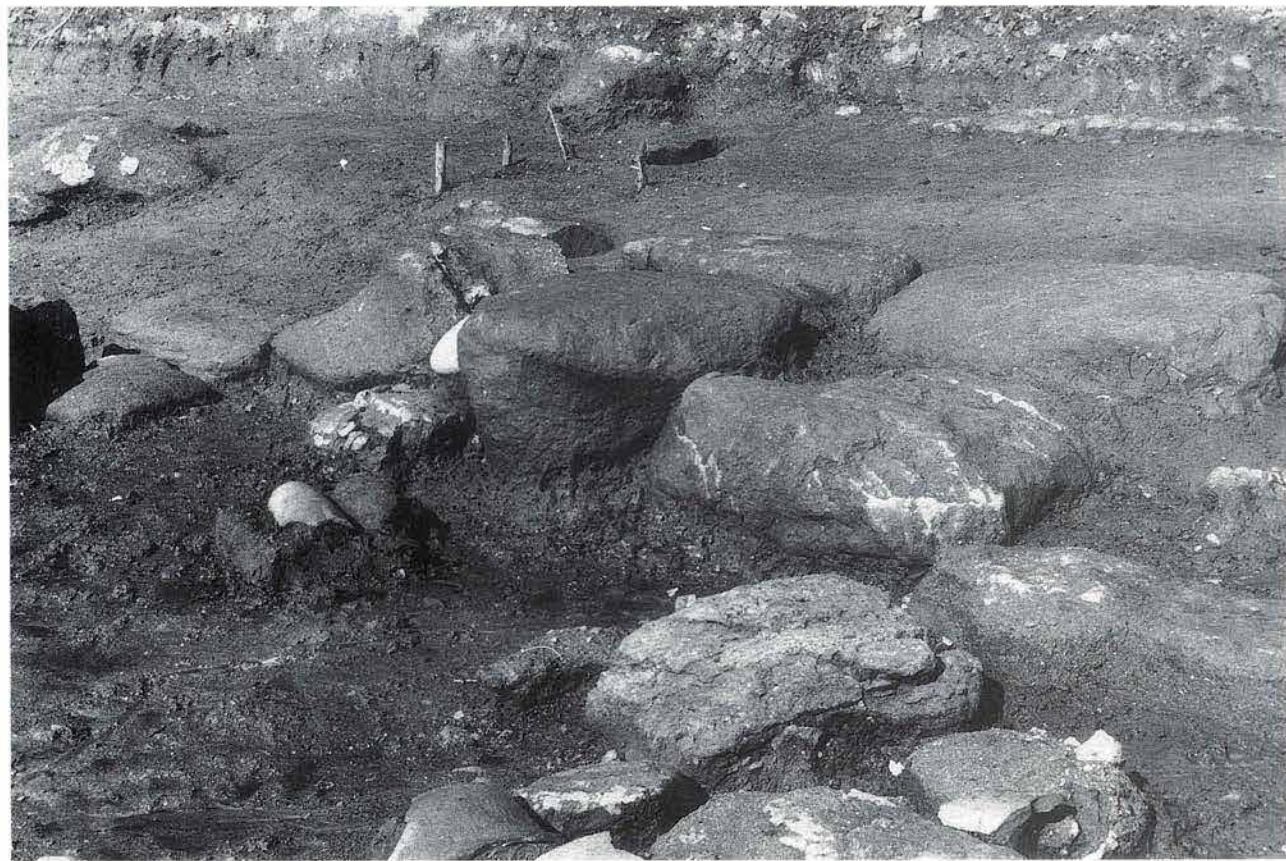


1. IV期下層石組みと遺水



▼2. IV期下層の風景





▲1. IV期下層、景石

▼2. IV期下層、瓦の出土状態

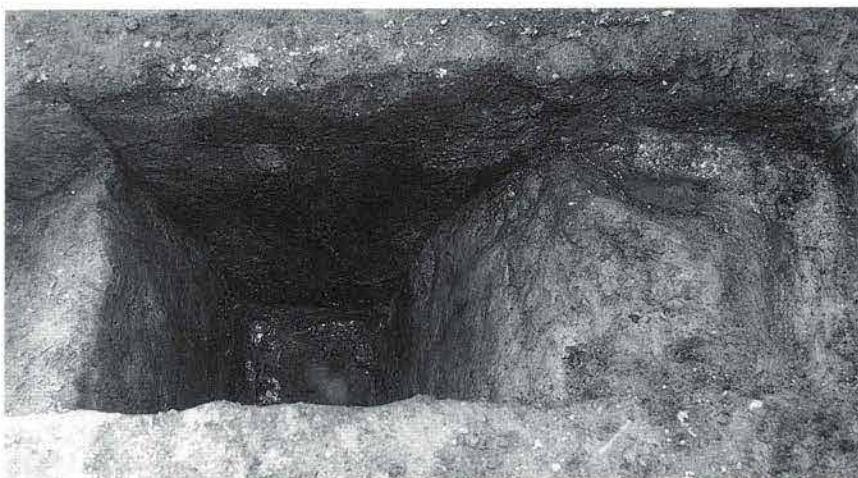




▲1. 仏像残片出土状態

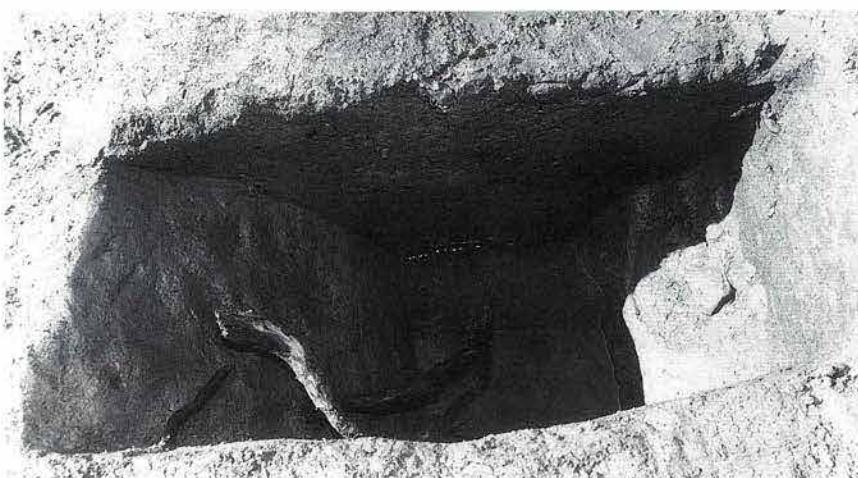
▼2. 五輪塔婆出土状態





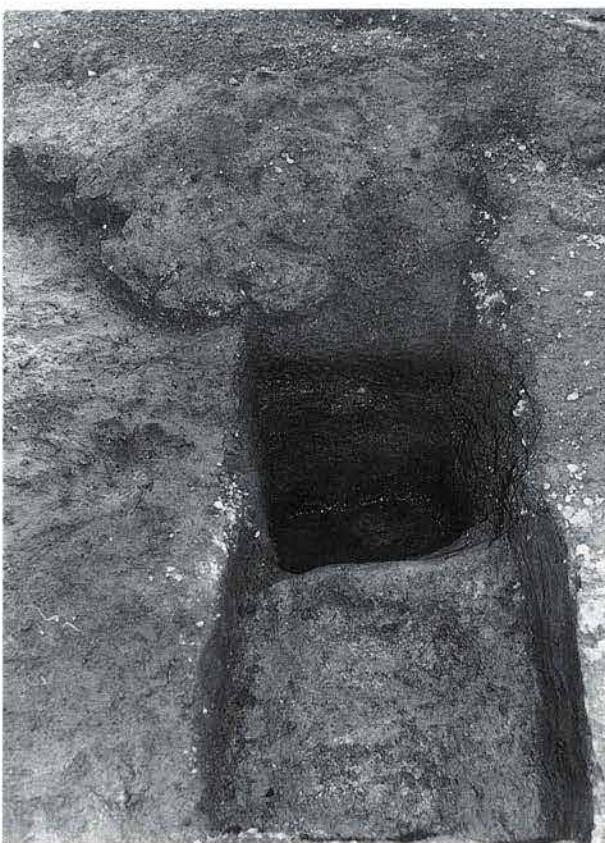
◀ 1. 溝 8

地山面を薬研に掘り込んでいる



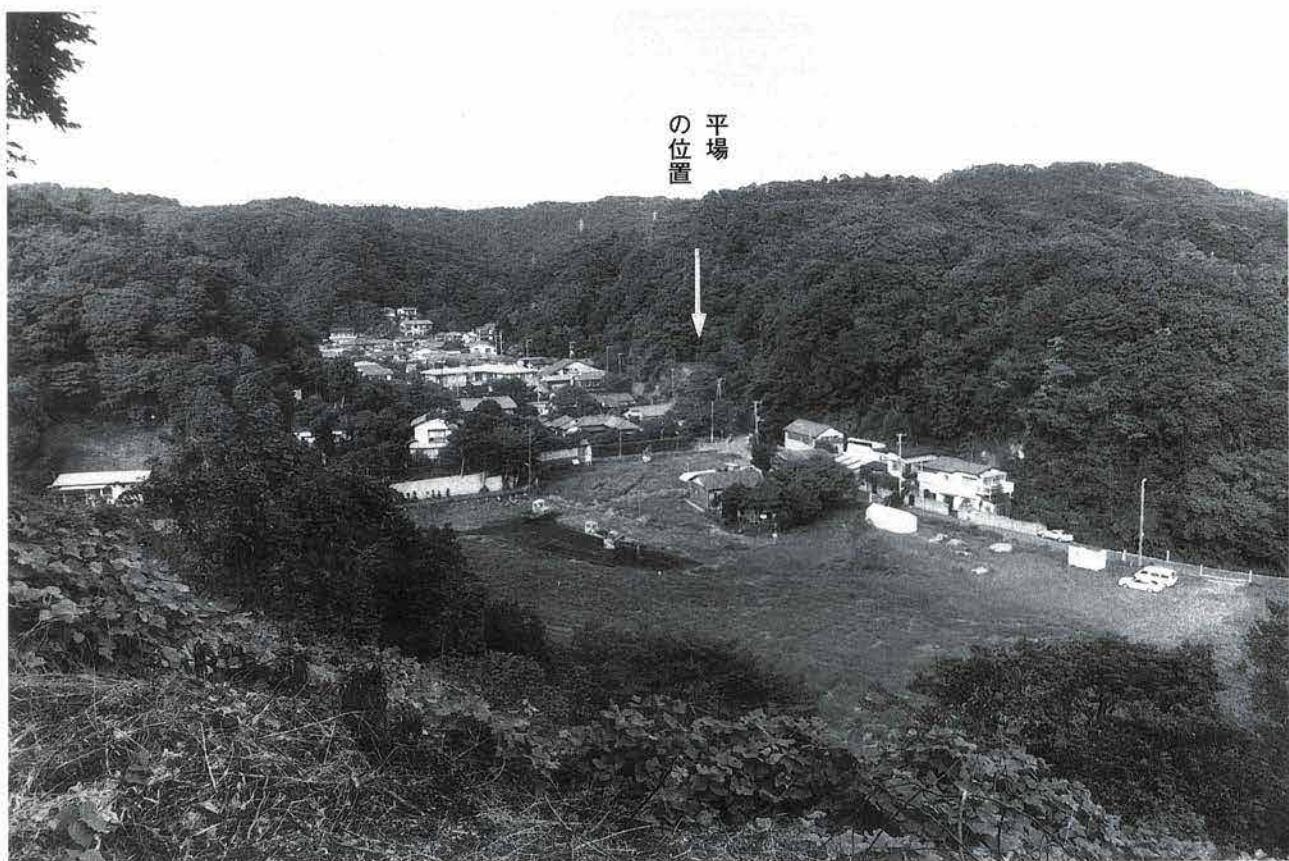
◀ 1. 溝 8

溝が埋められていた後に入り込んだと思われるアカマツの根株



◀ 1. 溝 8 と景石

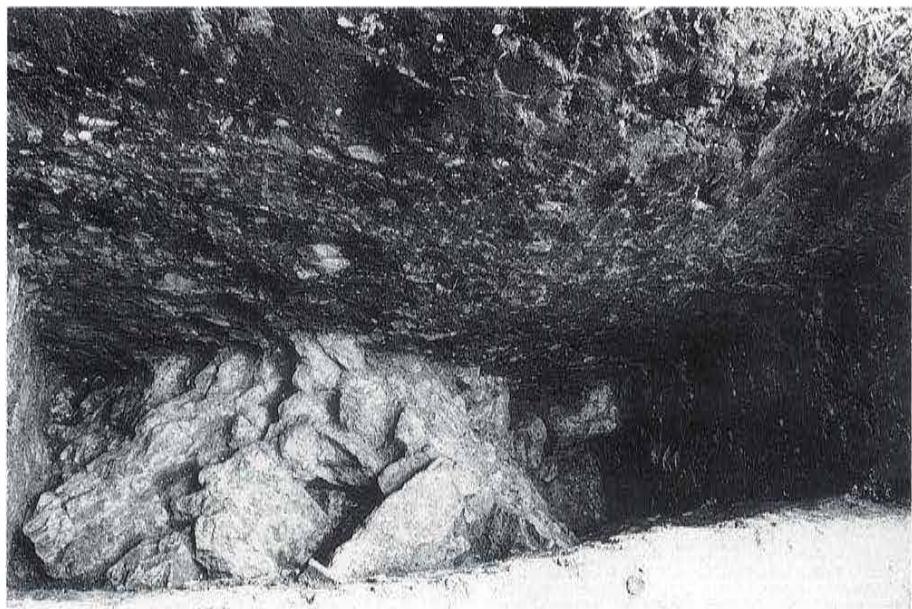
溝 8 の肩を利用して据えられた景石



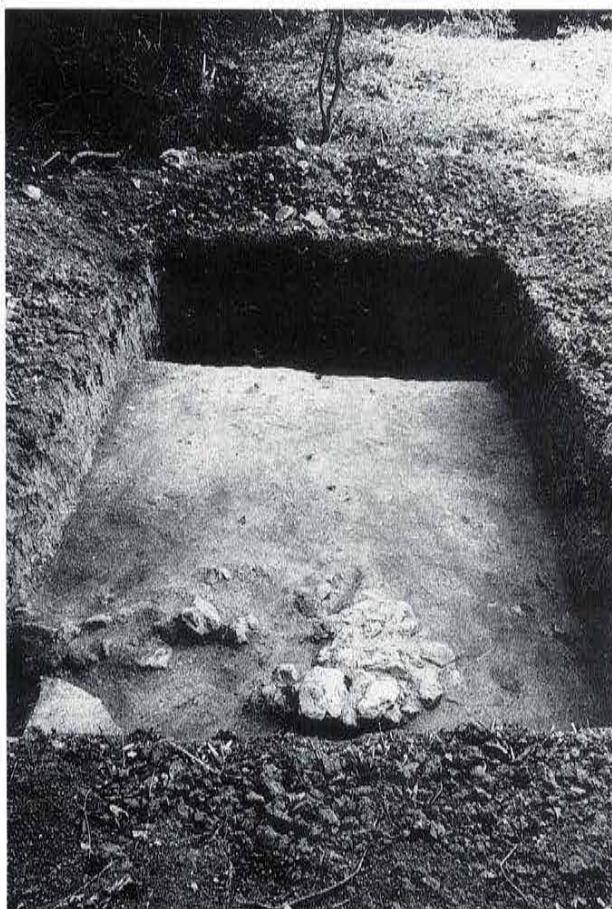
▲1. 伽藍正面（東）の山の平場

▼2. 平場より伽藍背後（西）の山を望む



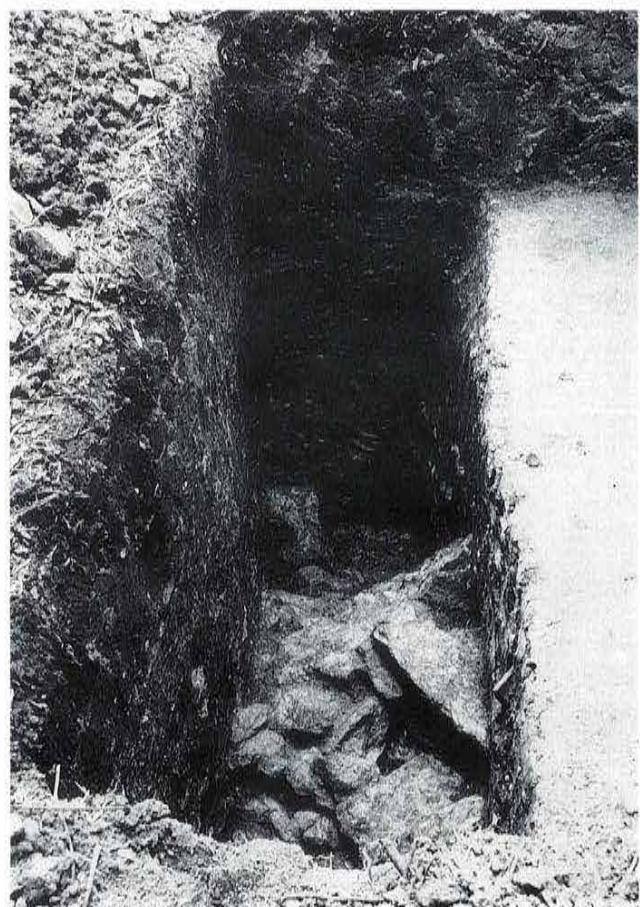


▲1. トレンチ1 深掘り



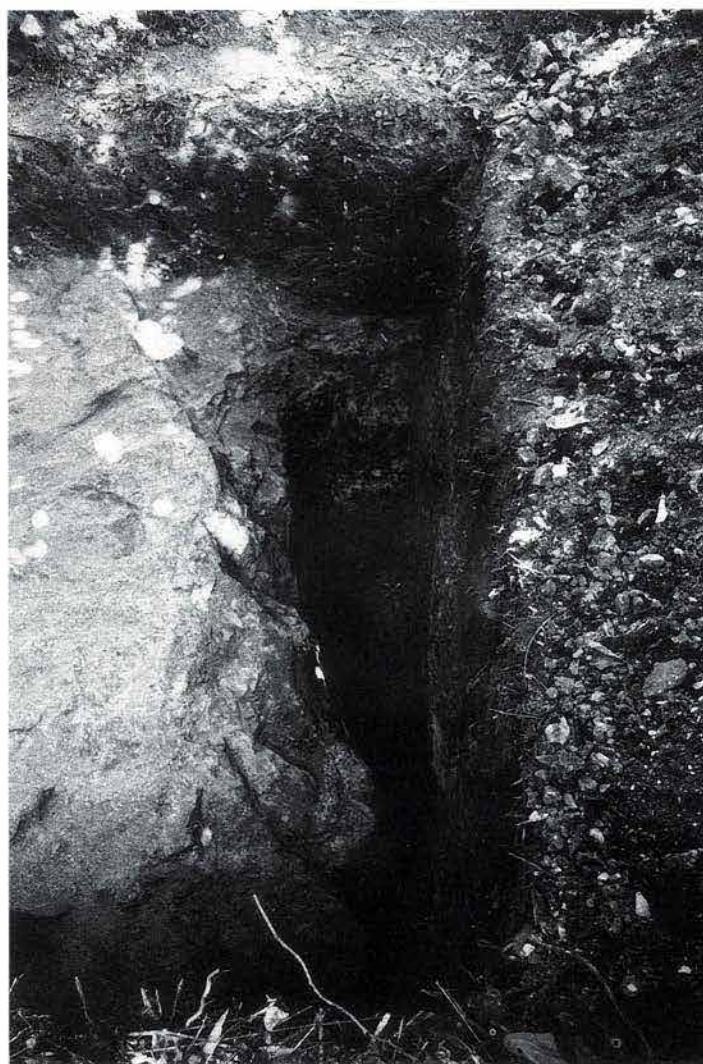
▲2. トレンチ1 全景

▼3. トレンチ1 深掘り

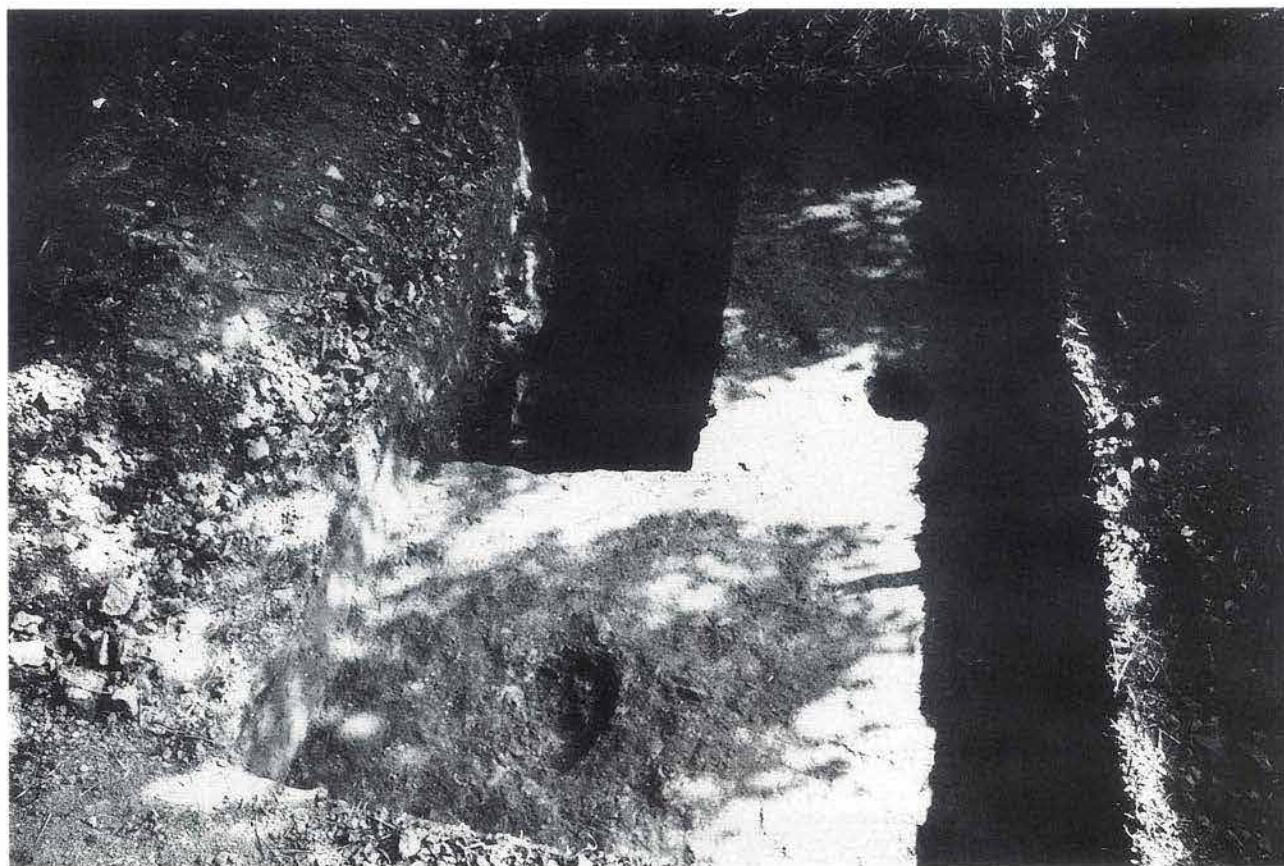




▲1. トレンチ2 全景

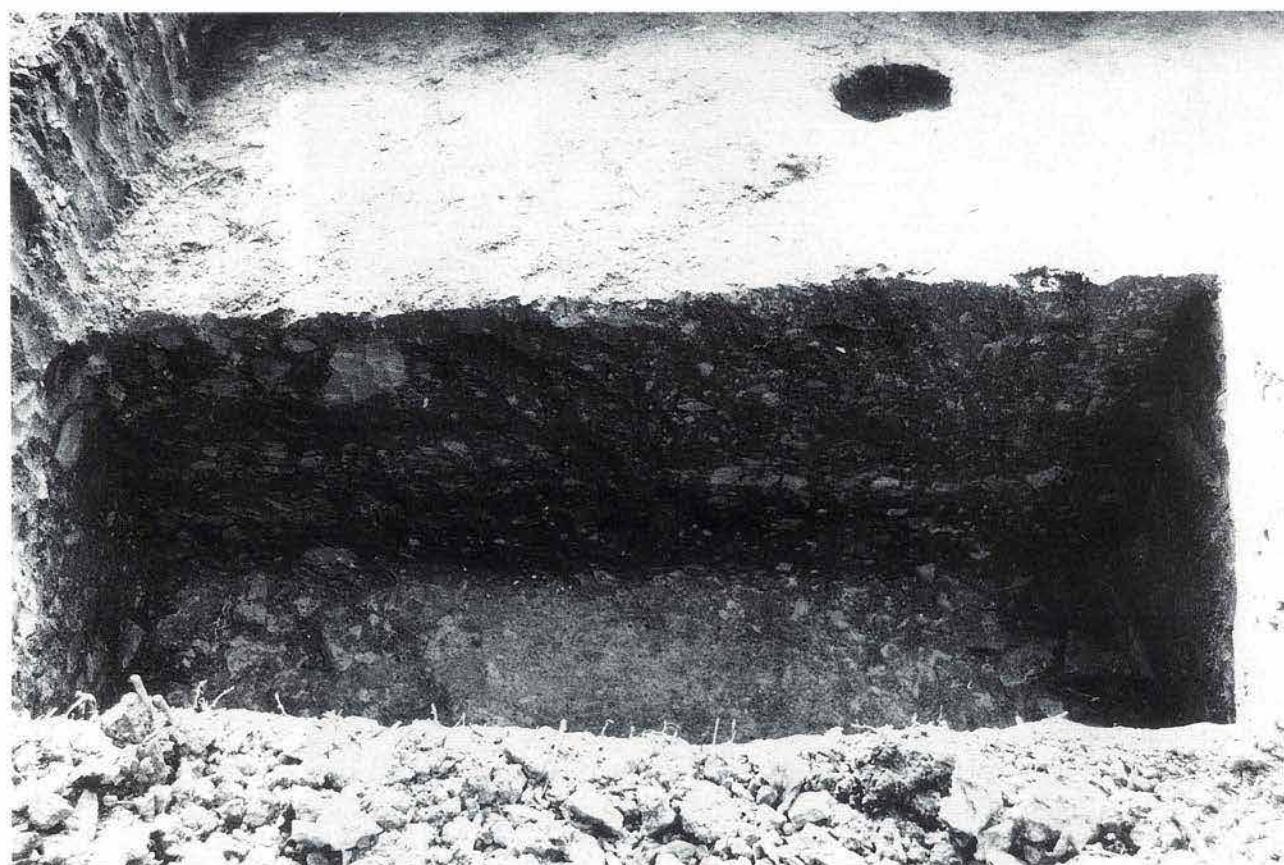


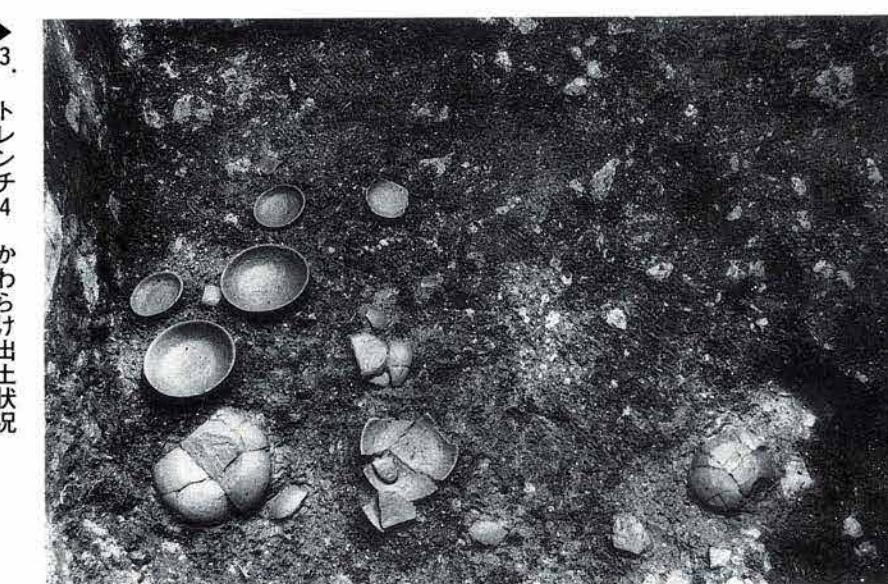
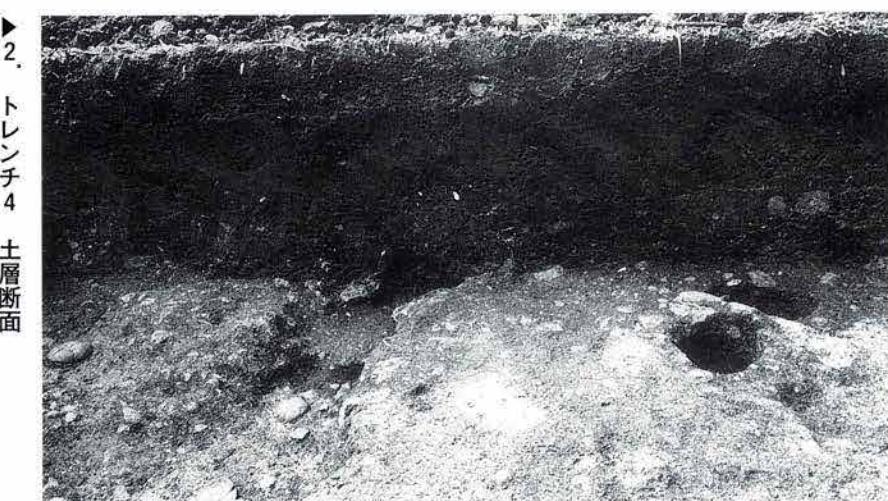
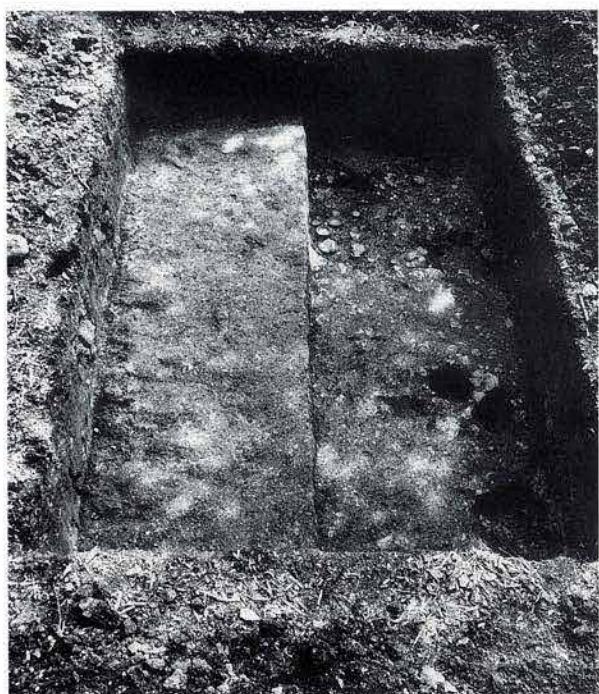
▲2. トレンチ2  
掘り窪められた岩盤



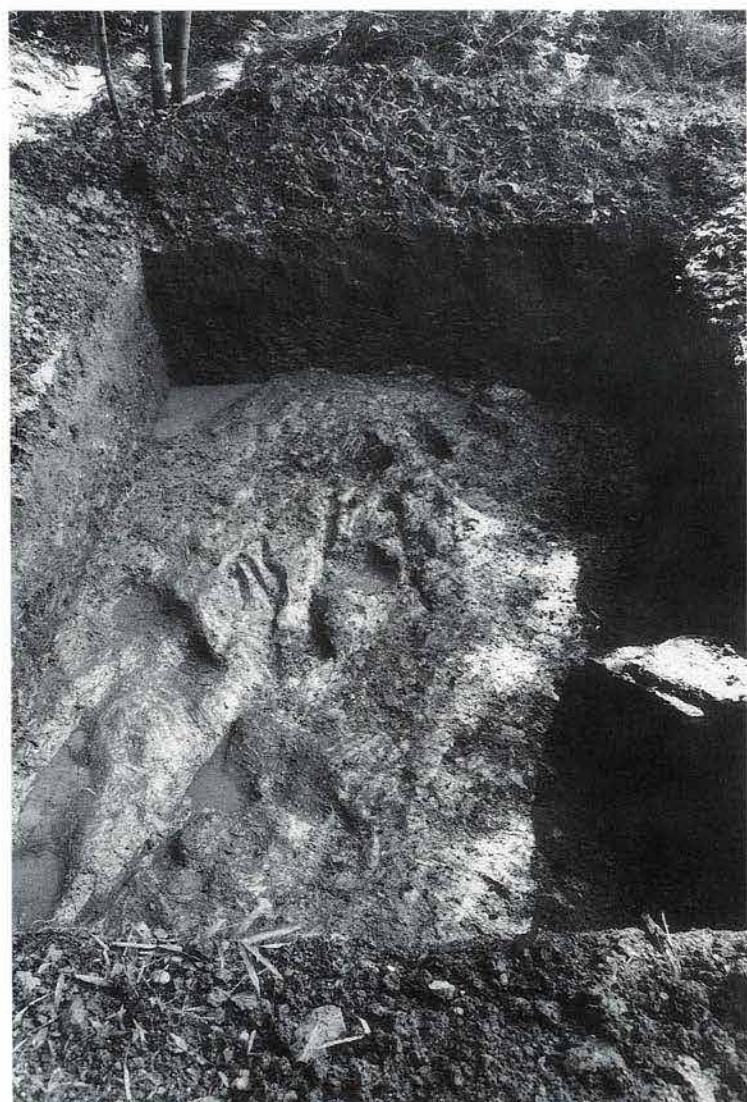
▲1. トレンチ3 全景

▼1. トレンチ3 土層断面



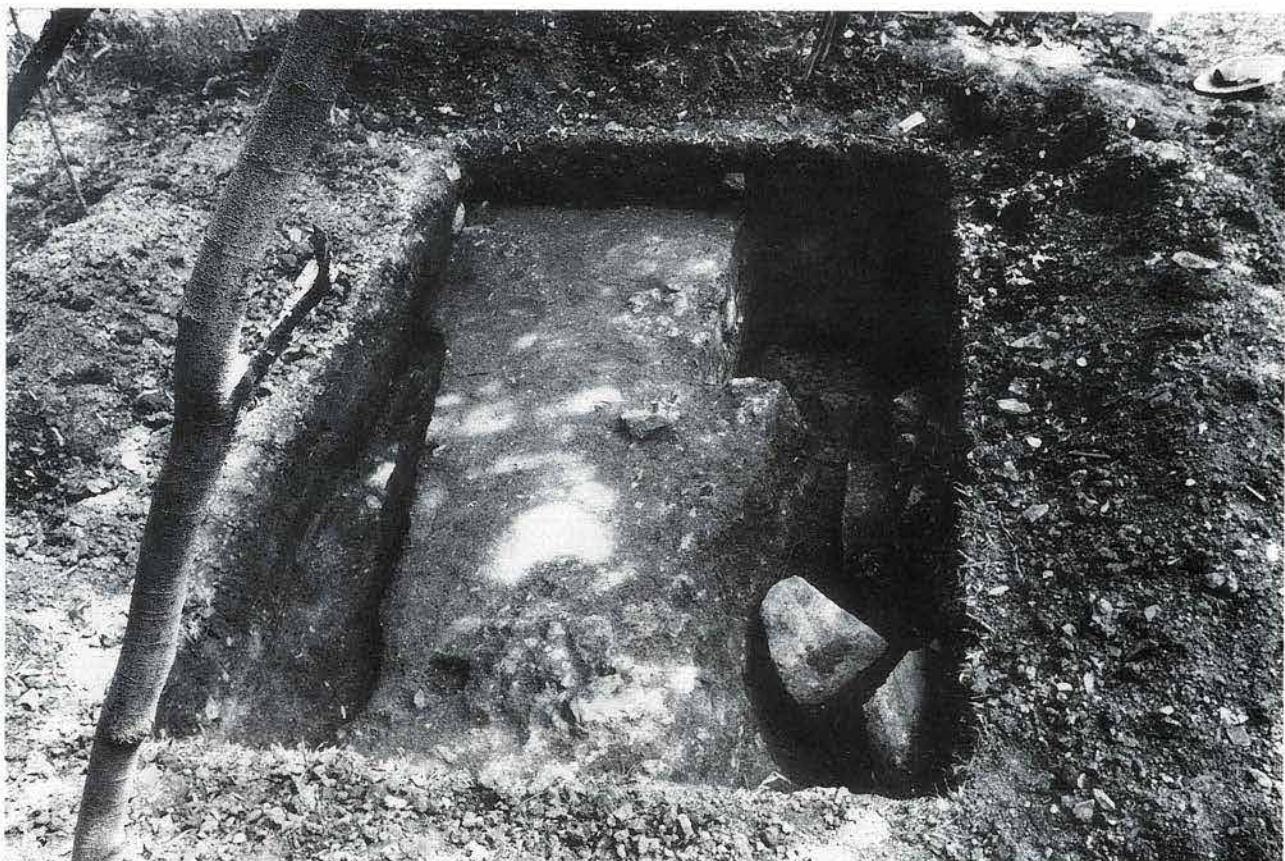


トレンチ5  
全景



▼2. トレンチ5の土層断面と岩盤面



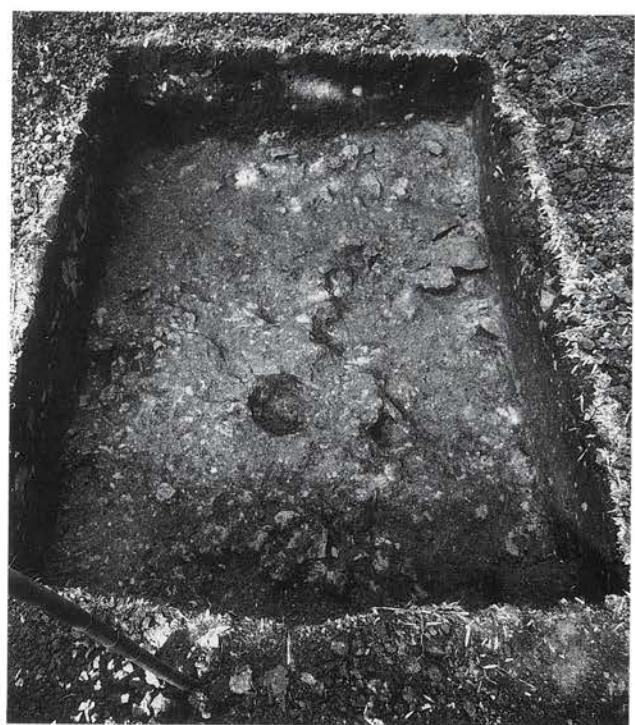


▲1. トレンチ6 全景

▼2. トレンチ6 土層断面



▼2. トレンチ8 全景



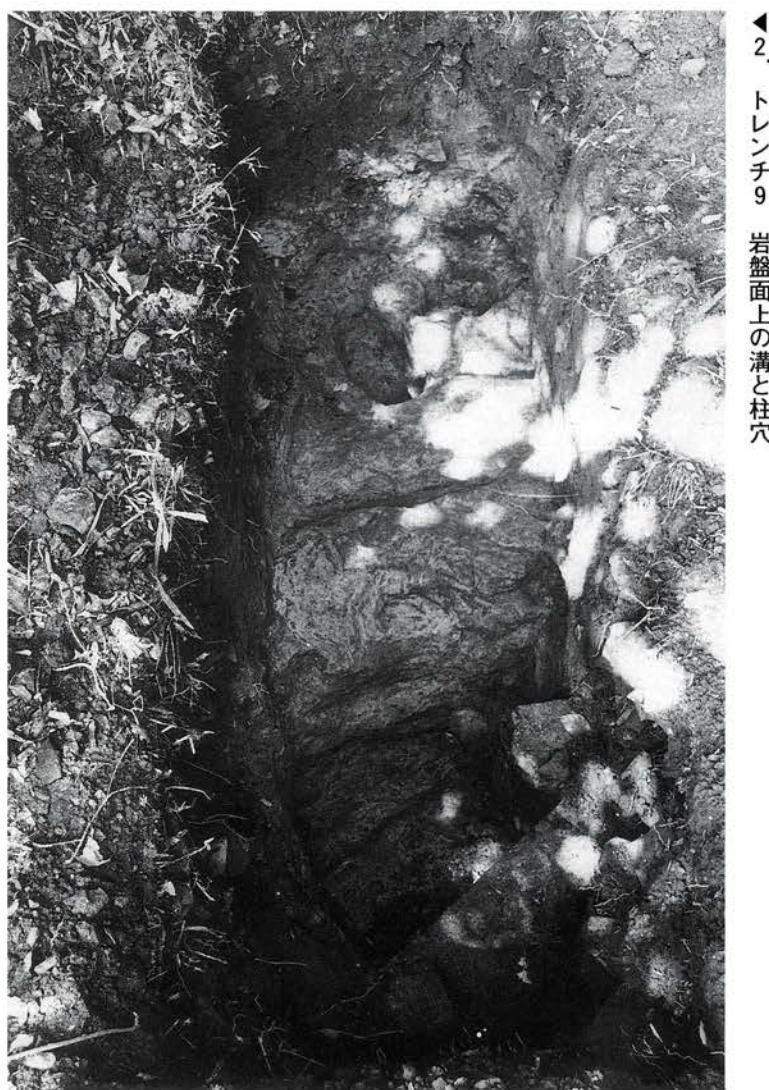
▲1. トレンチ7 全景

▼3. トレンチ8 土層断面と岩盤面



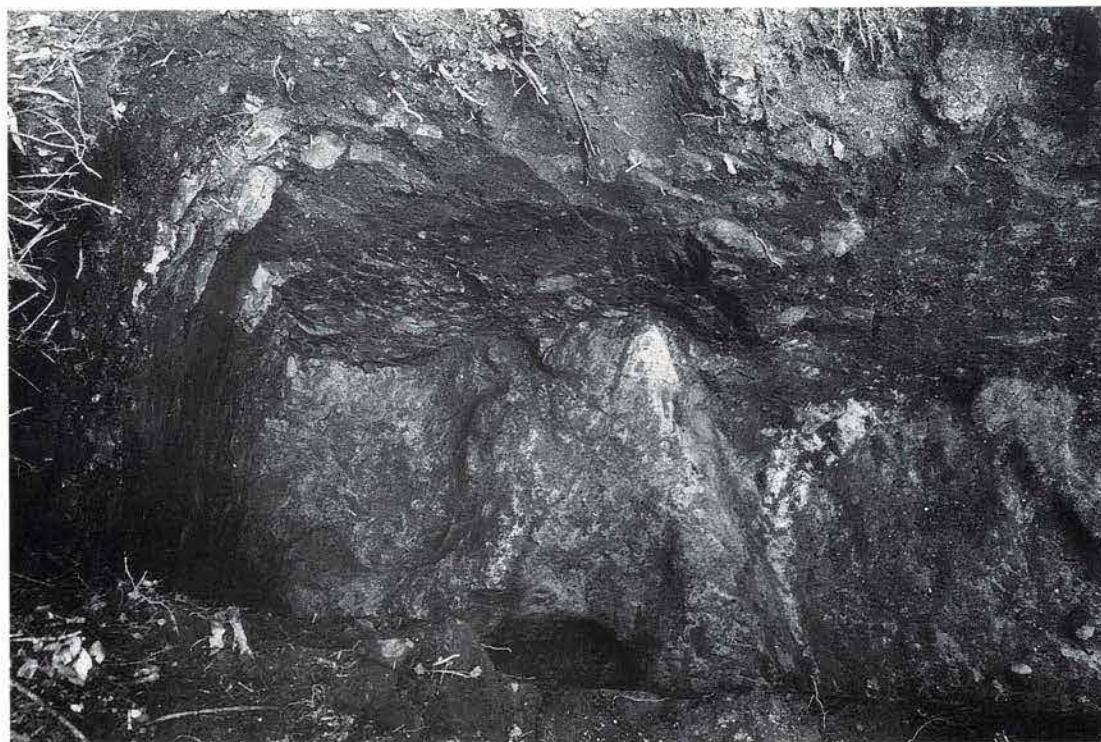


▲1. ブレンチ9 土層断面と岩盤面

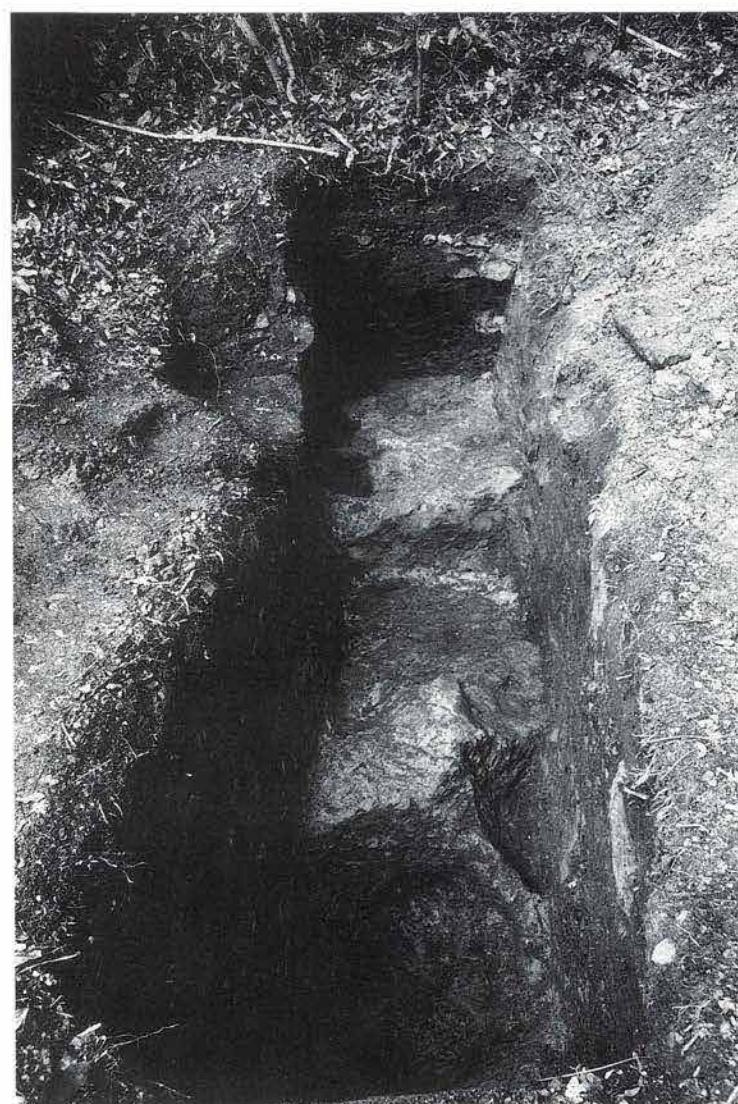


▲2. ブレンチ9 岩盤面上の溝と柱穴

図版25



1. トレンチ10 岩盤面上の溝

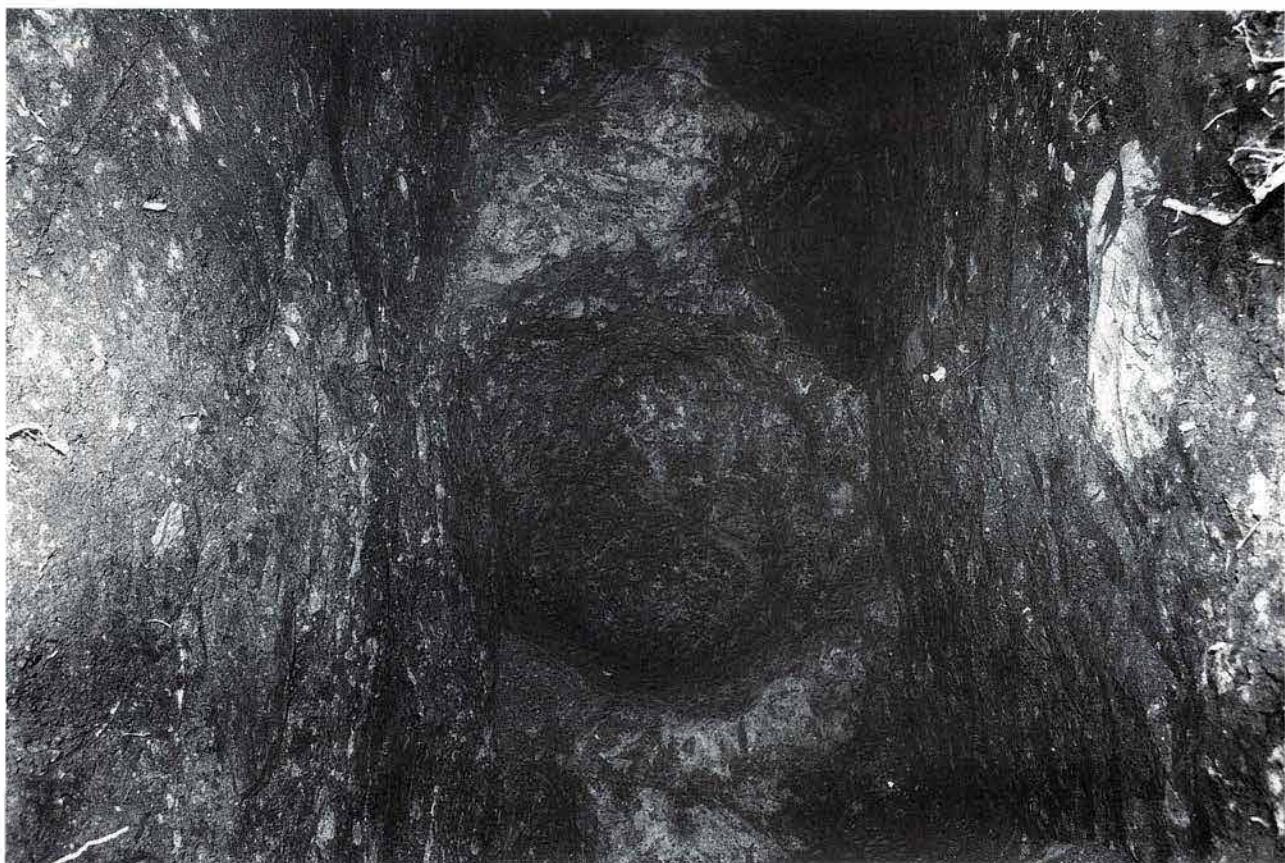


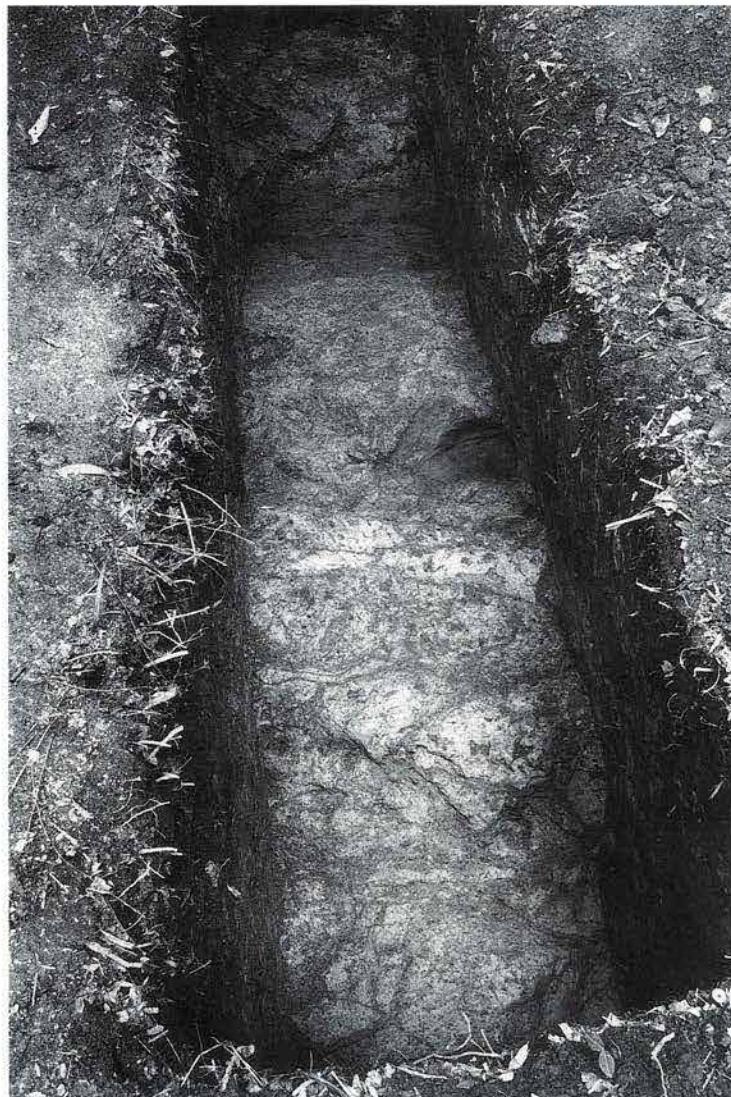
2. トレンチ10 全景



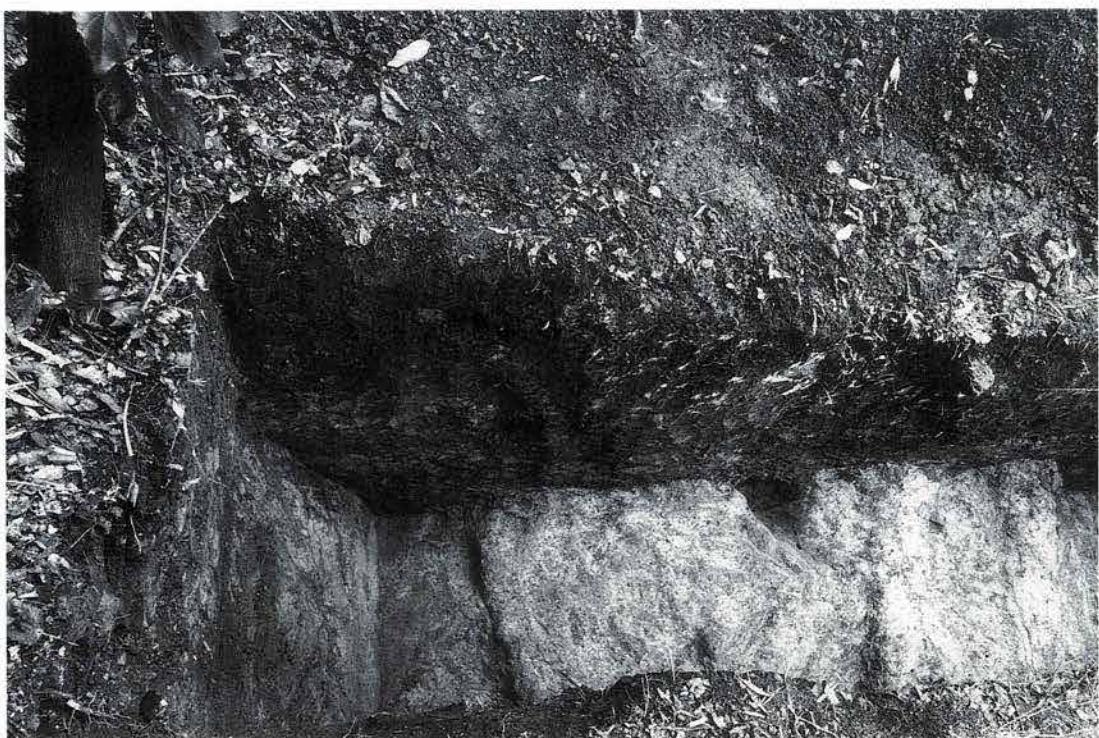
▲1. トレンチ10 岩盤面の土壤

▼2. トレンチ10 岩盤面上に掘り込まれた土壤





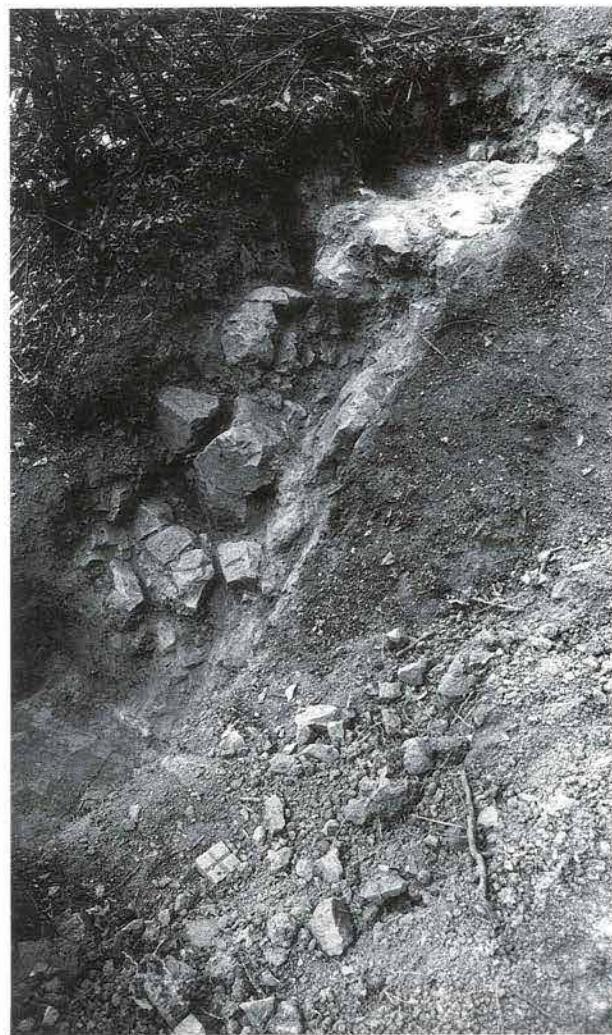
▲1. レンチ 11  
全景



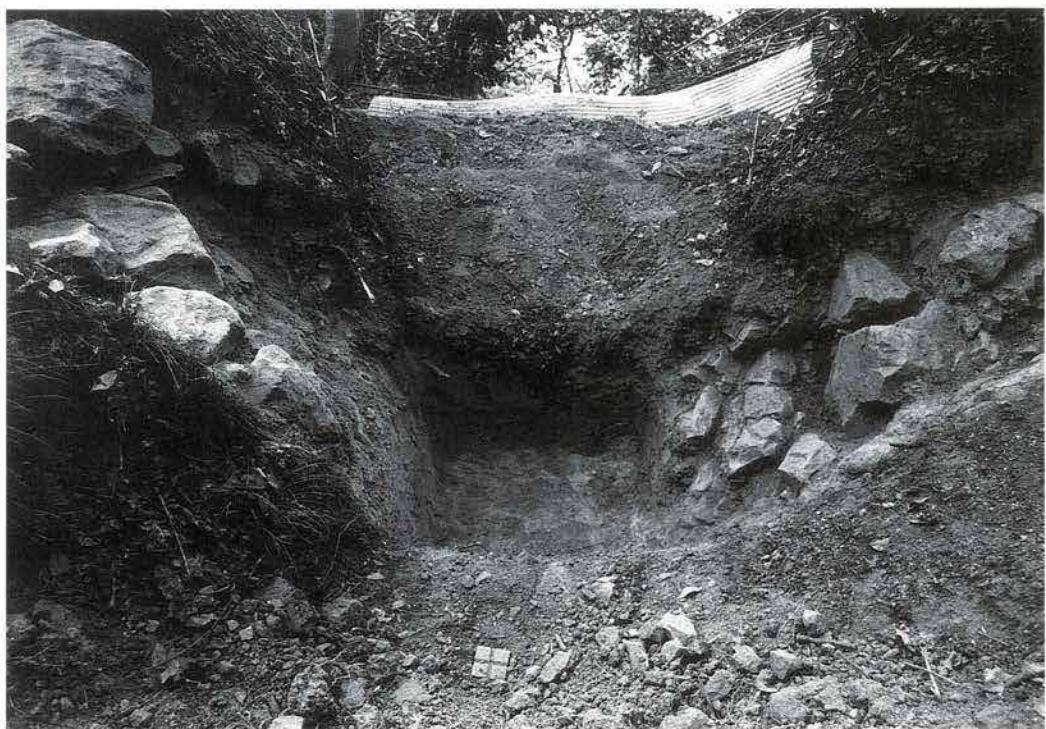
▲2. レンチ 11  
土層断面と岩盤上の溝



▲1. トレンチ12 堀切



▲2. トレンチ12 堀切

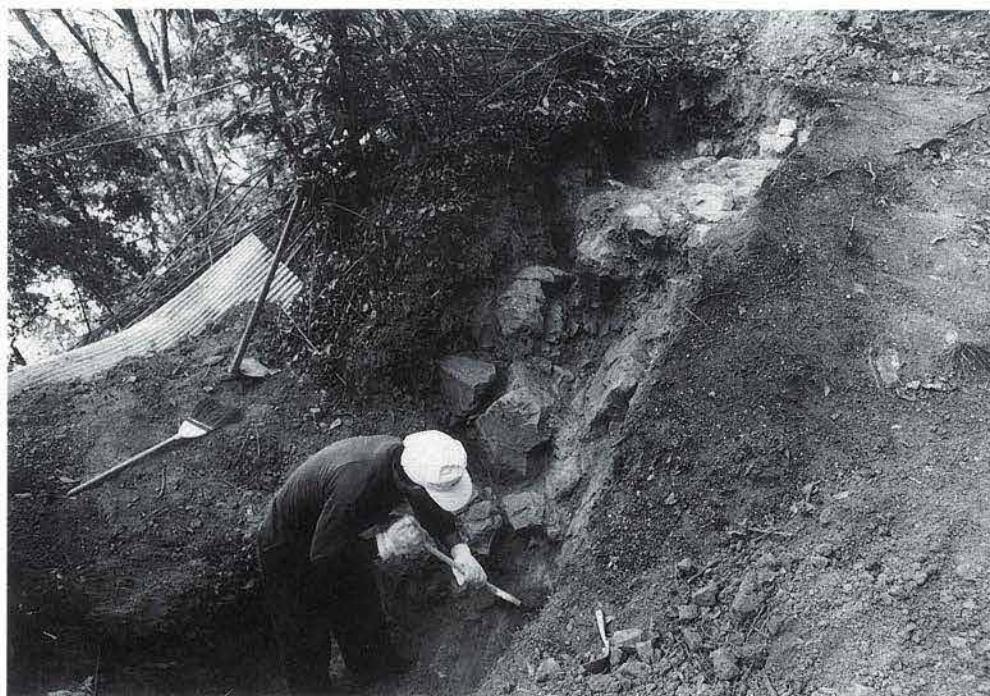


3. トレンチ12  
堀切全景



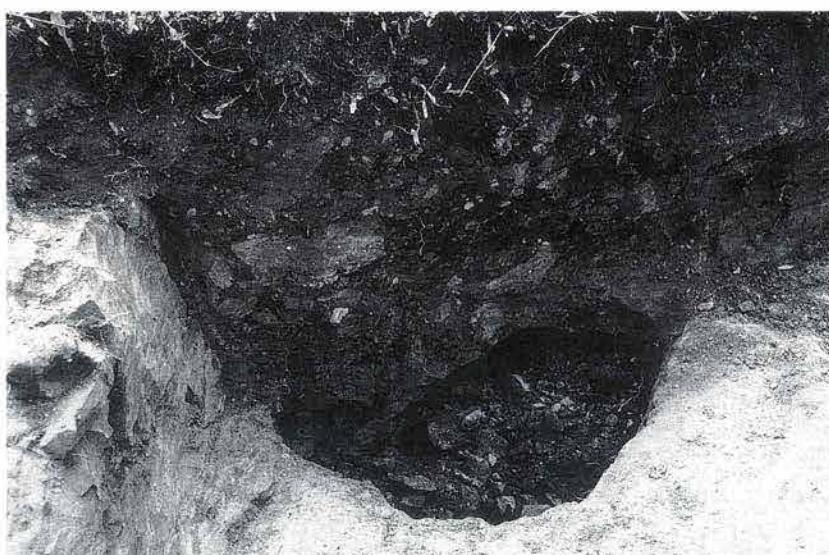
1. トレンチ12  
堀切全景

▼2. トレンチ12 作業風景





1. トレンチ13  
(経塚) の位置



2. 経塚、  
土層断面



3. 経塚、  
検出状況



▲1. 経塚、土層断面と外容器の確認

▼2. 掘り下げ途中で出土した腰刀 1





▲1. 経塚、外容器と腰刀 2

▼2. 経塚、外容器と腰刀出土状況



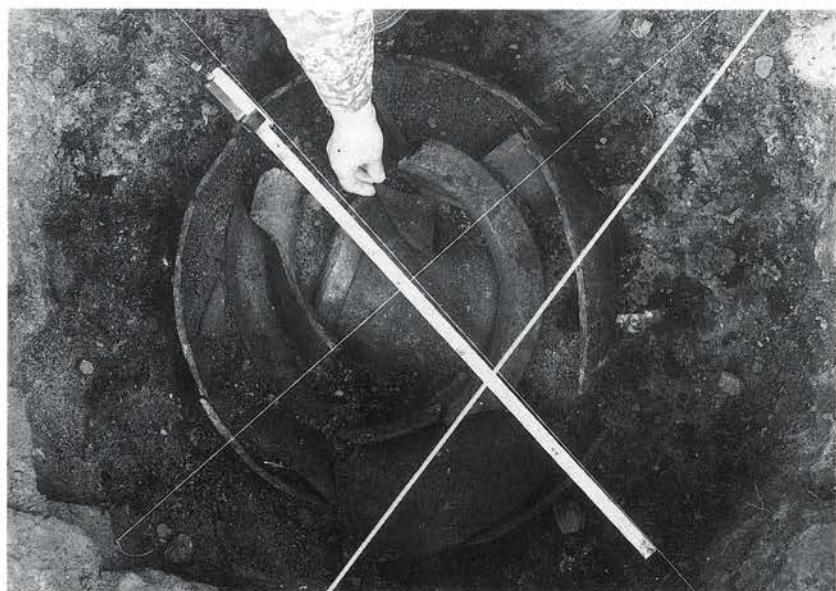


▲1. 経塚、経筒の確認

▼2. 経塚、経筒の上の捏鉢を取り上げた直後



◀1. 経塚、外容器上半分の取り上げ

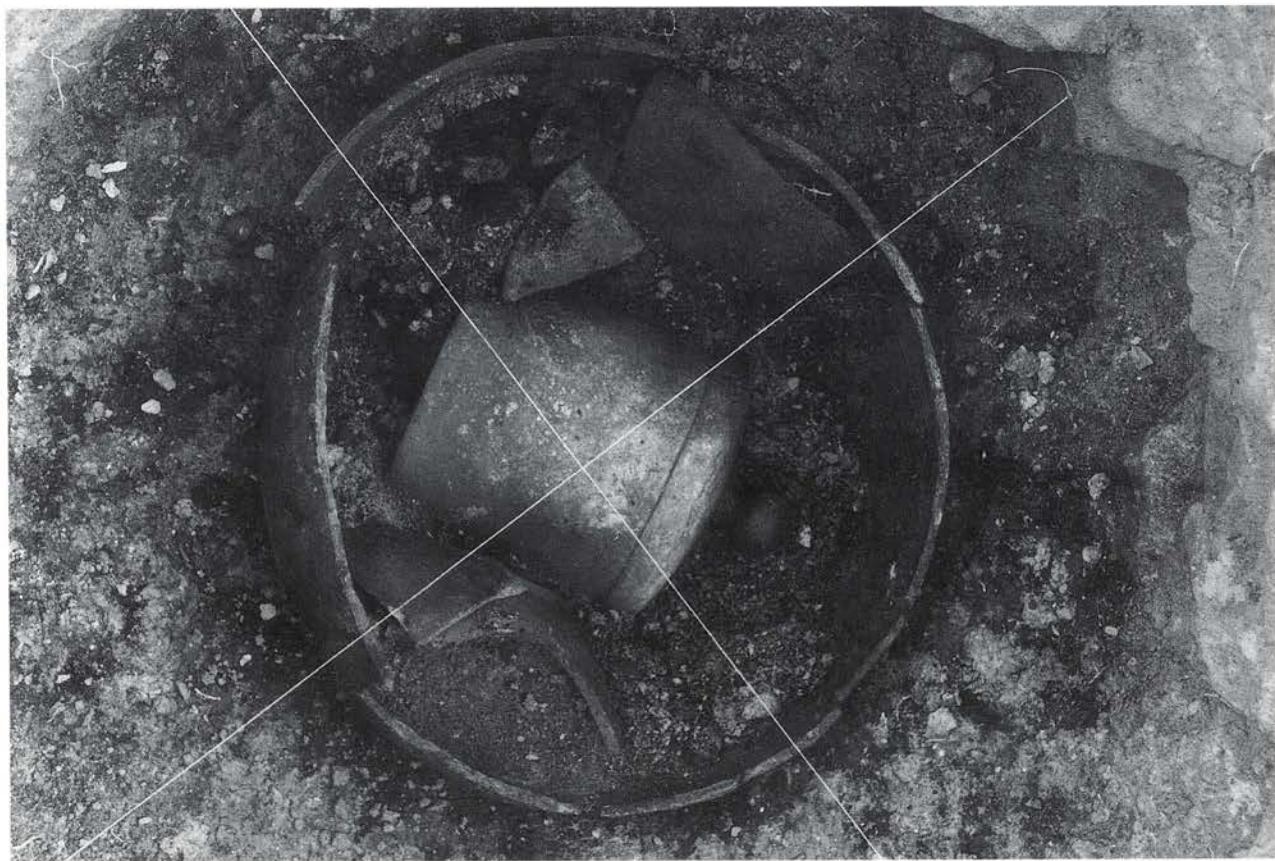


◀2. 経塚、外容器上半分の取り上げ



◀3. 経塚、外容器上半分の取り上げ





▲1. 経塚、外容器の内に横むきに納められた経筒

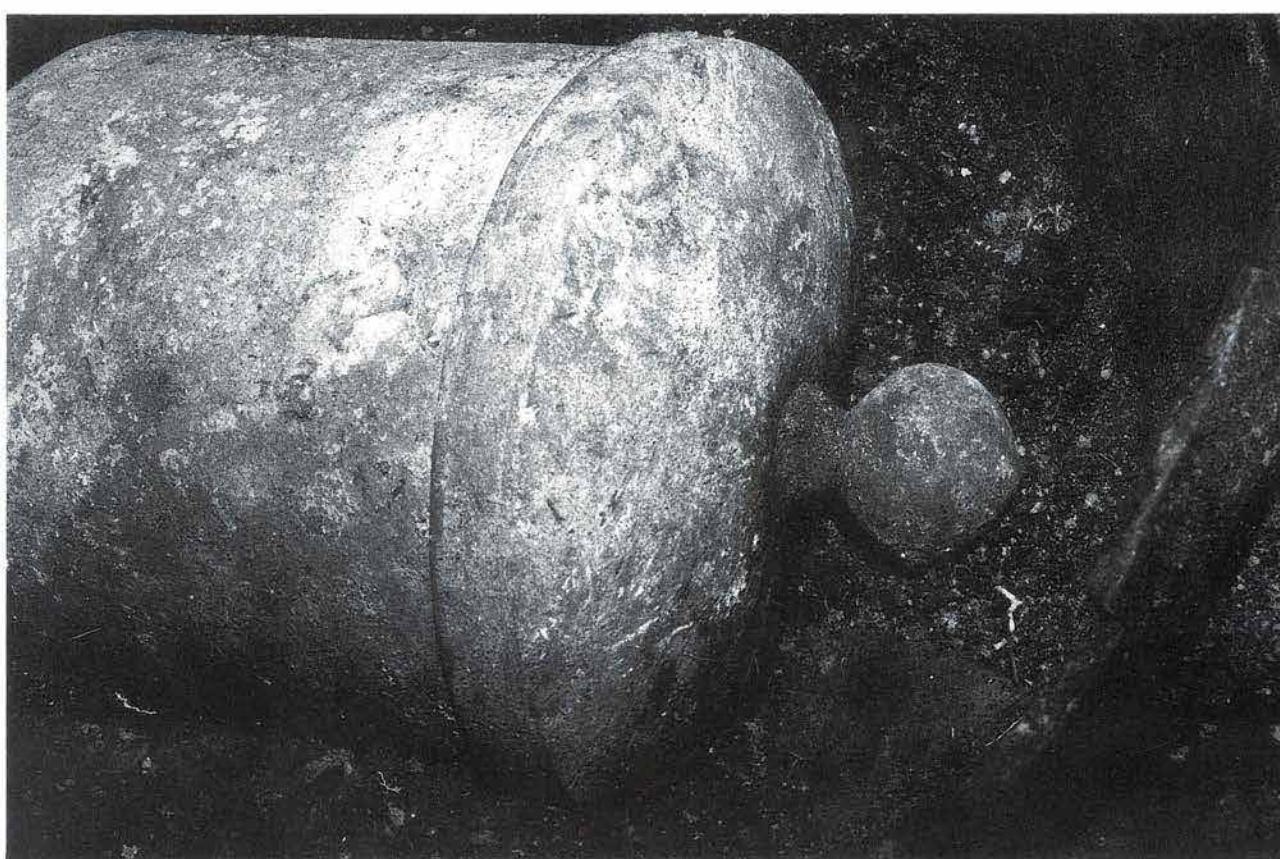
▼2. 経塚、経筒の出土状況





▲1. 経塚、出土した経筒

▼2. 経筒、蓋に付く宝株

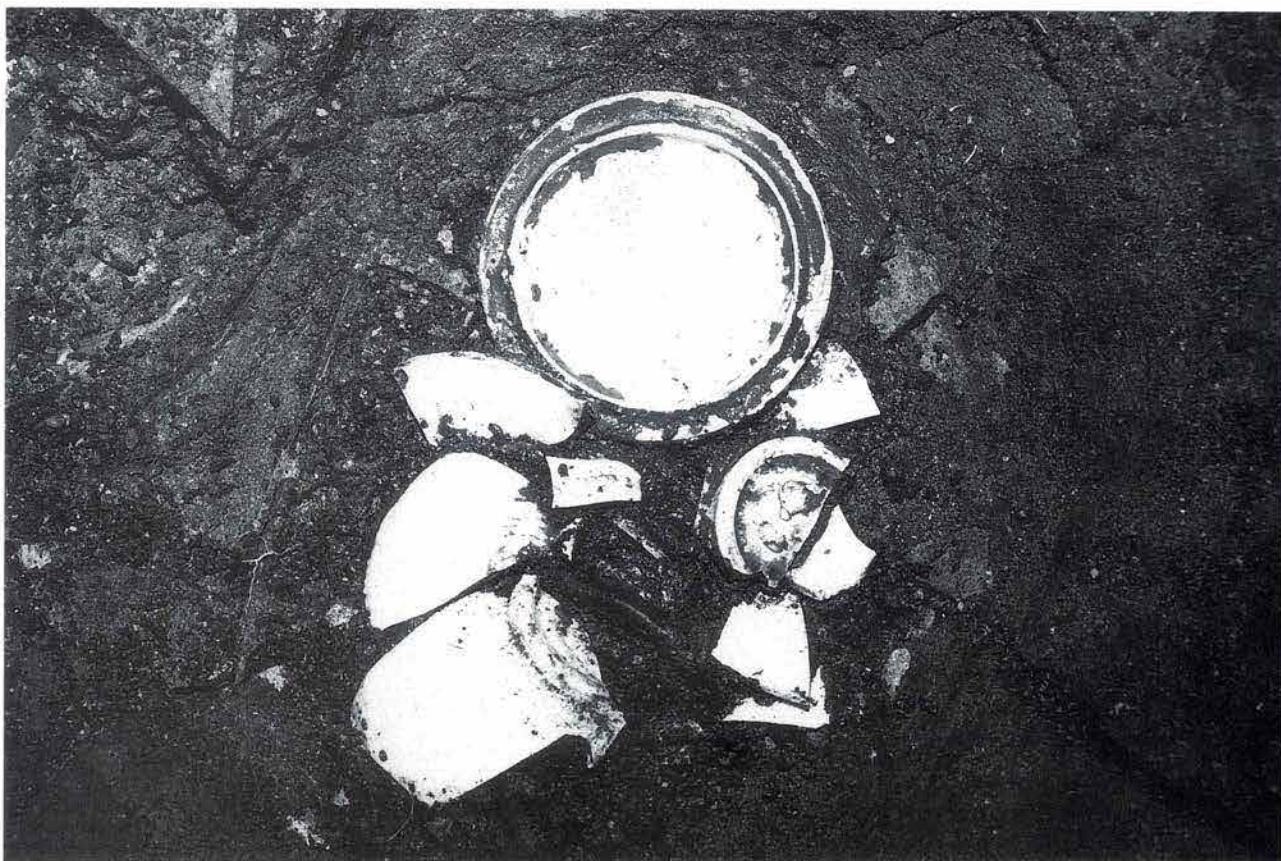




▲1. 経塚、経筒取り上げ直後（圧痕が残る）

▼2. 経塚、経筒下外容器底面から出土した副納品

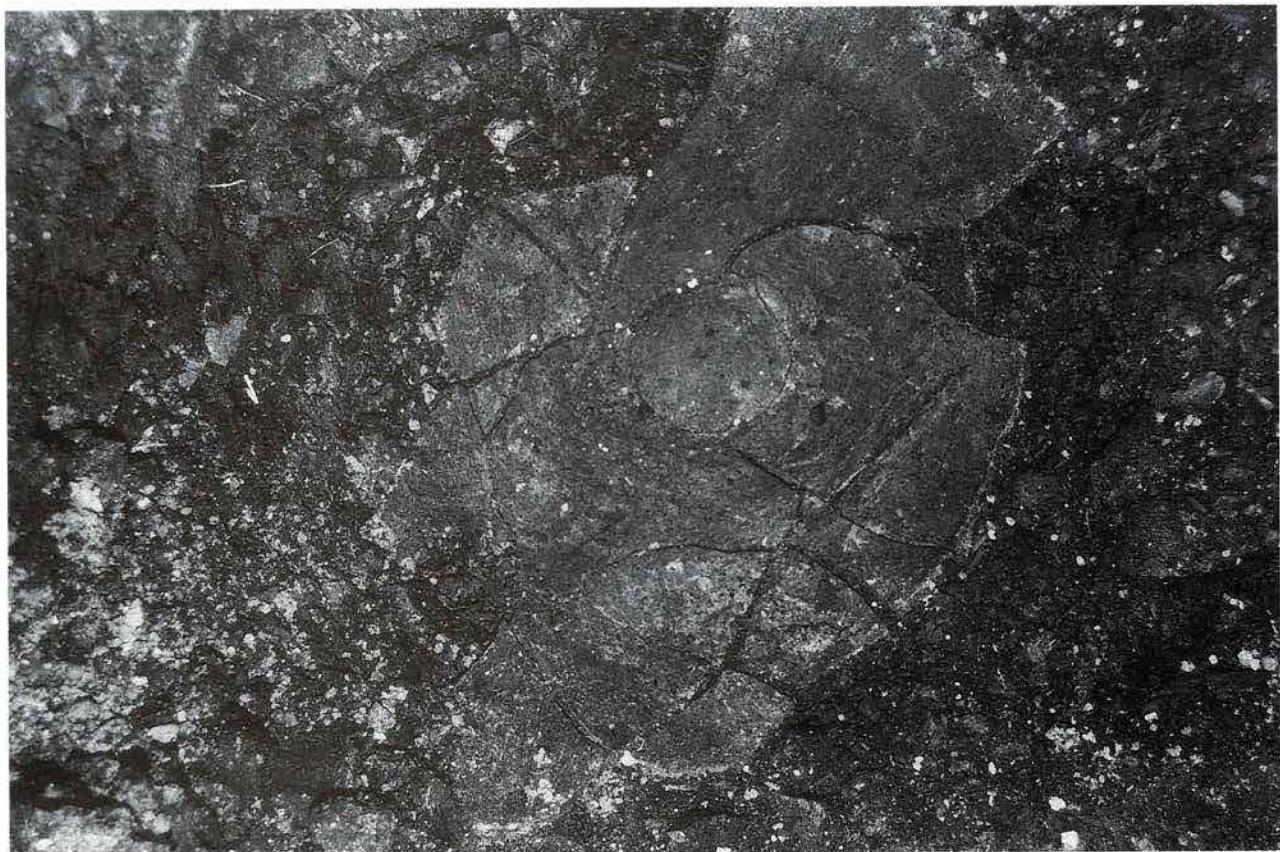




▲1. 経塚、副納品の出土状況（白磁蓋付小壺・櫛）

▼2. 経塚、副納品の出土状況（左から扇・水晶数珠玉・櫛）



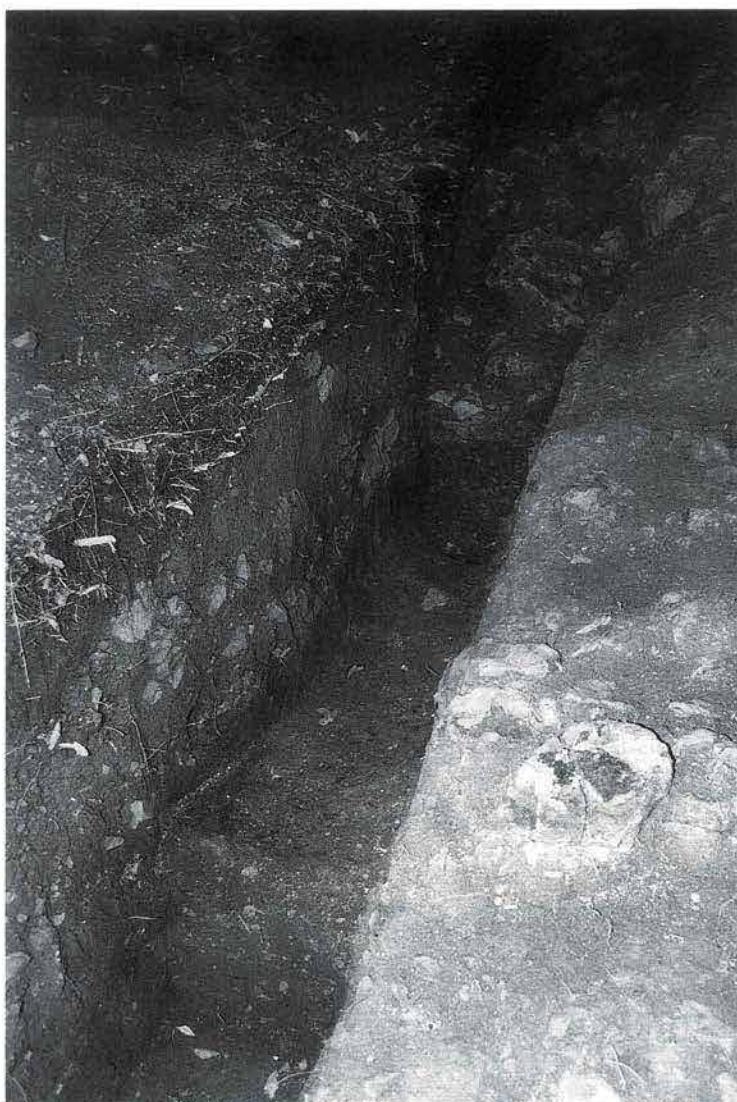


▲ 1. 経塚、外容器底部

▼ 2. 経塚、調査完了状況



1. トレンチ  
14 全景



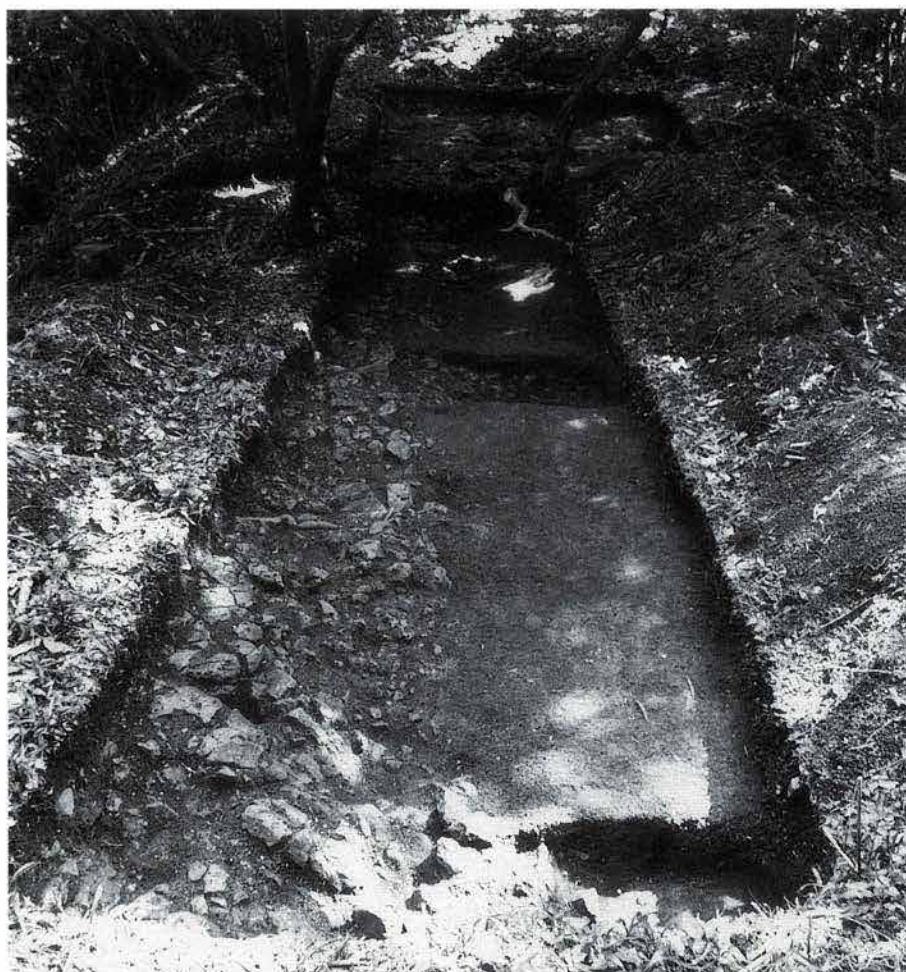
▼2. トレンチ14 土層断面





▲1. トレンチ15 岩盤面と地山面

◀2. トレンチ15  
全景





◀ 1. トレンチ16 全景

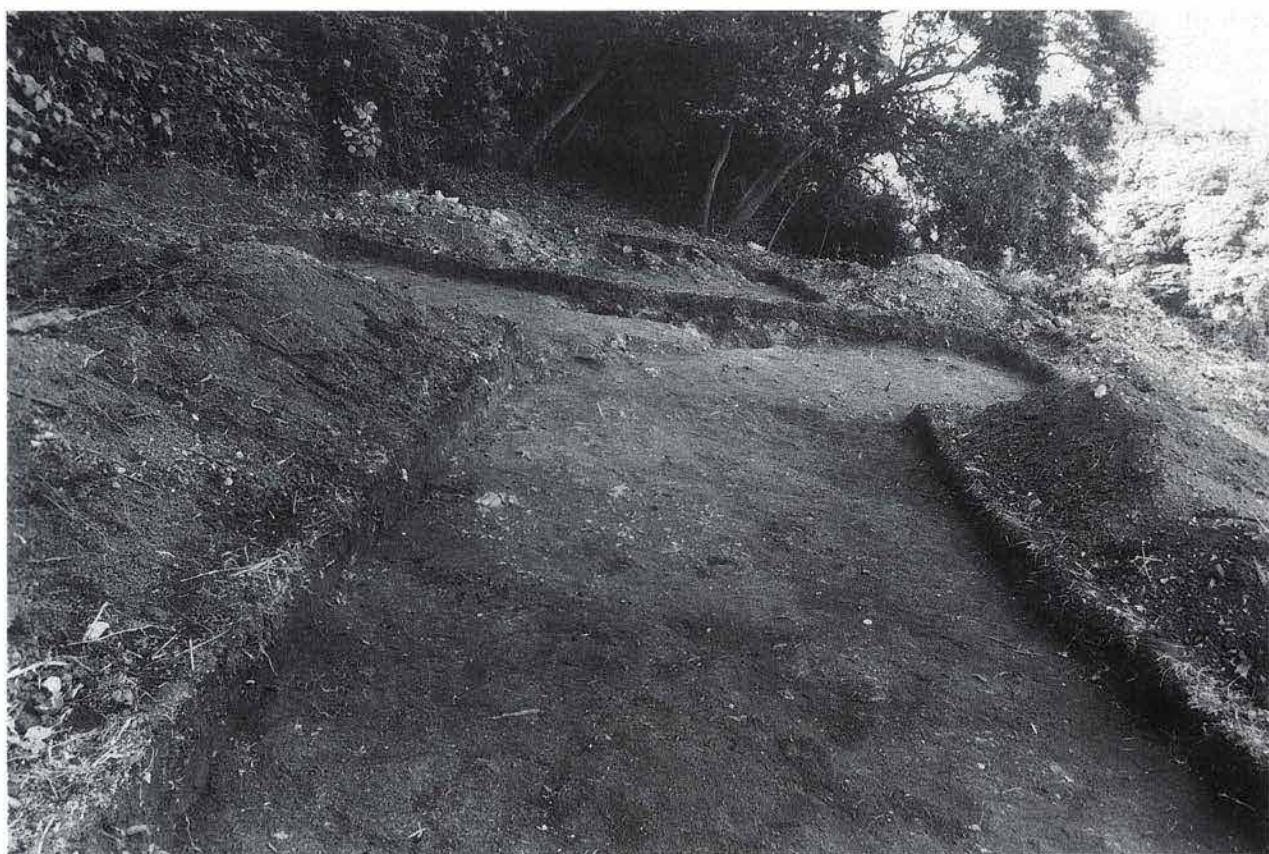
▼ 2. トレンチ17 全景





▲1. トレンチ18 全景

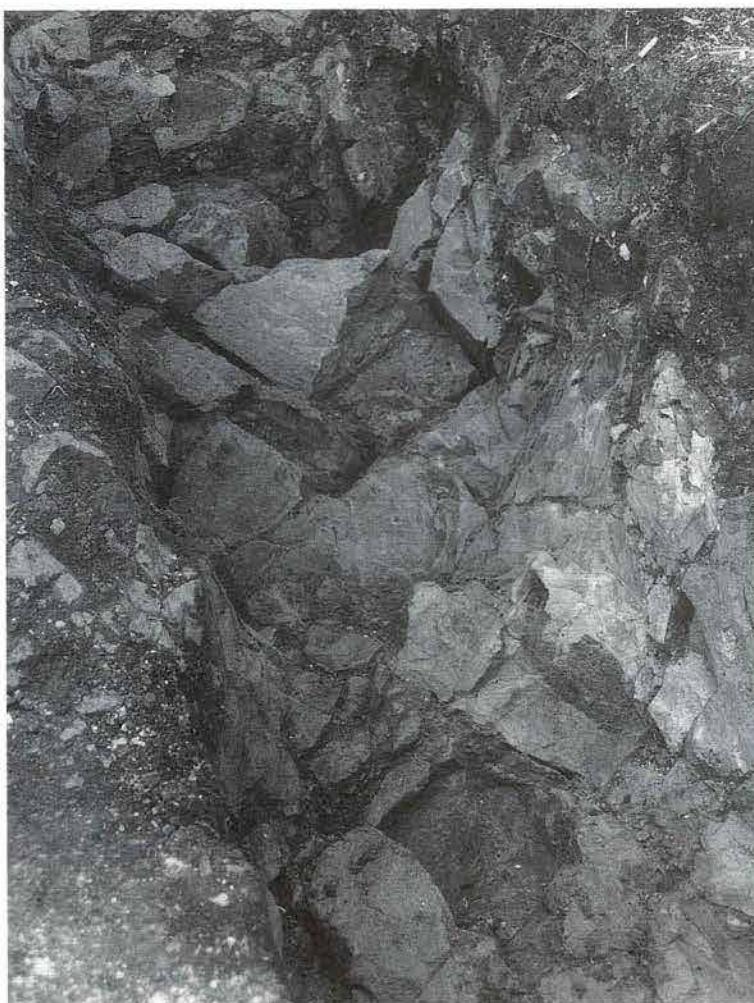
▼2. トレンチ19 全景

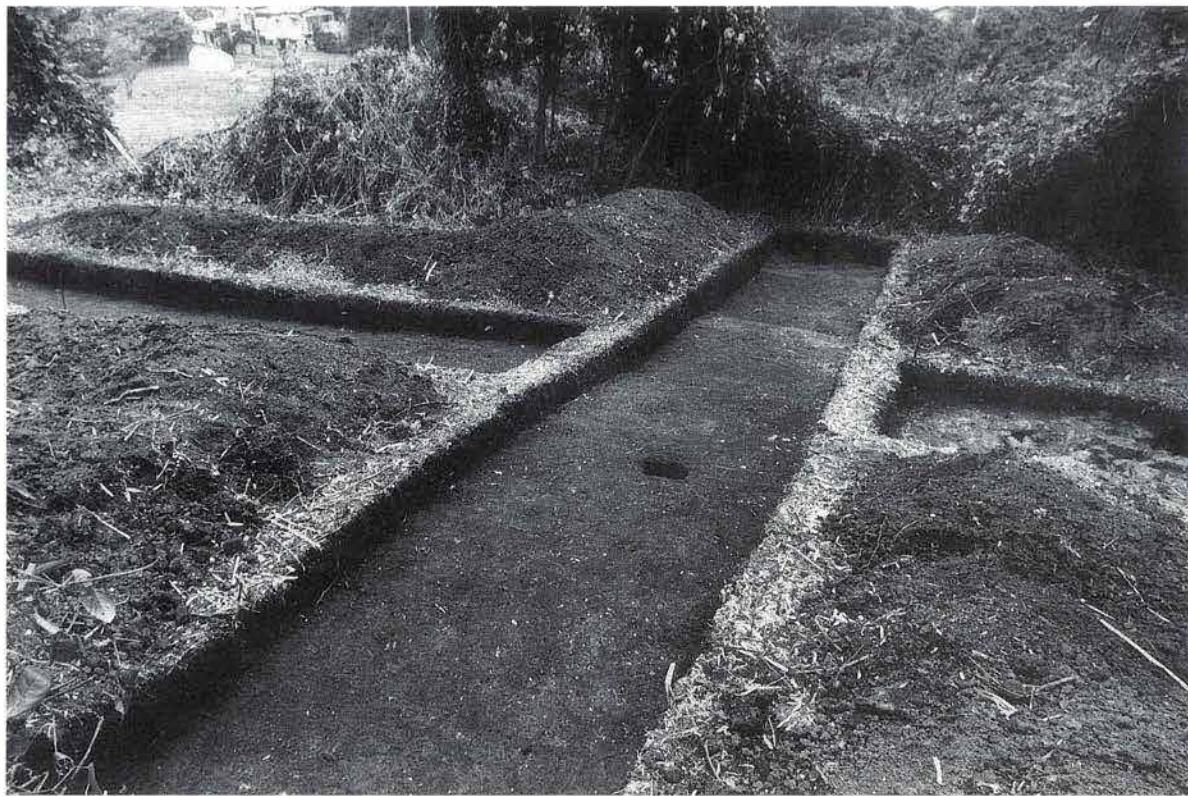




▲1. トレンチ19 全景

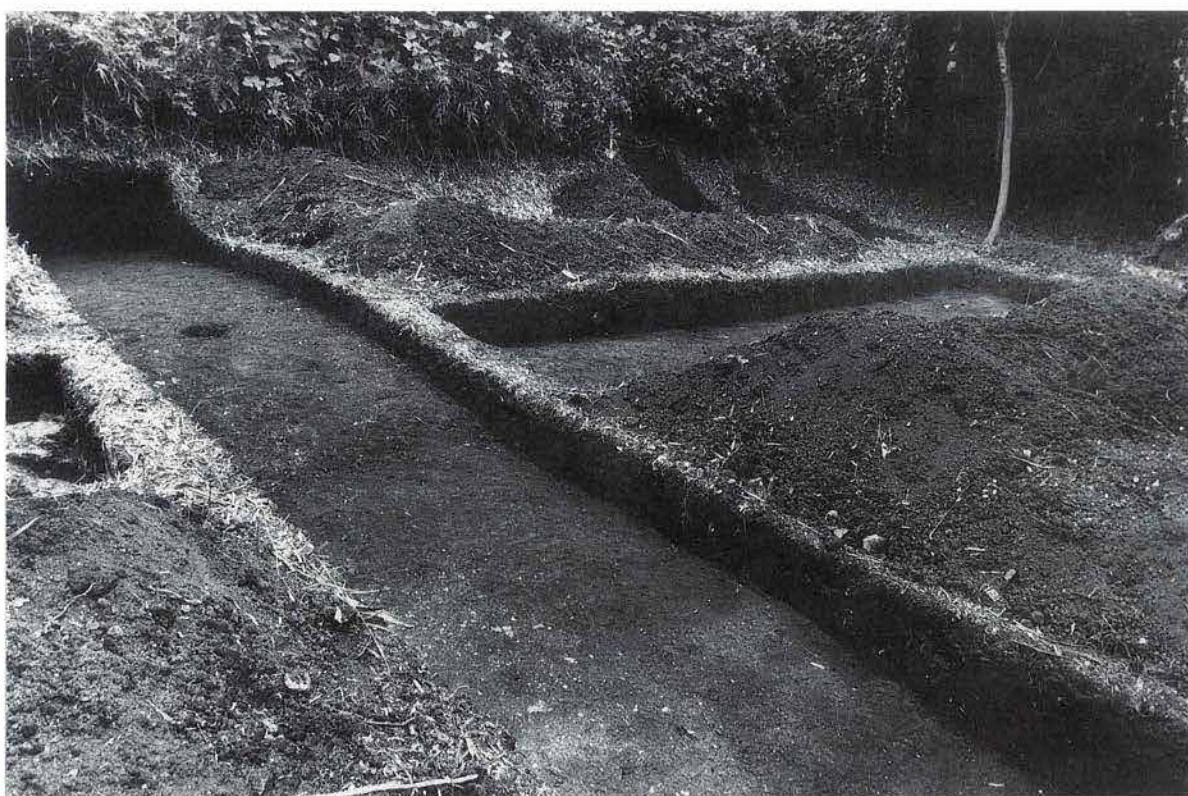
◀2.  
トレンチ  
19  
岩盤面





▲1. トレンチ20 全景

▼2. トレンチ20 全景





▲1. トレンチ20 全景

▼2. トレンチ20 岩盤面

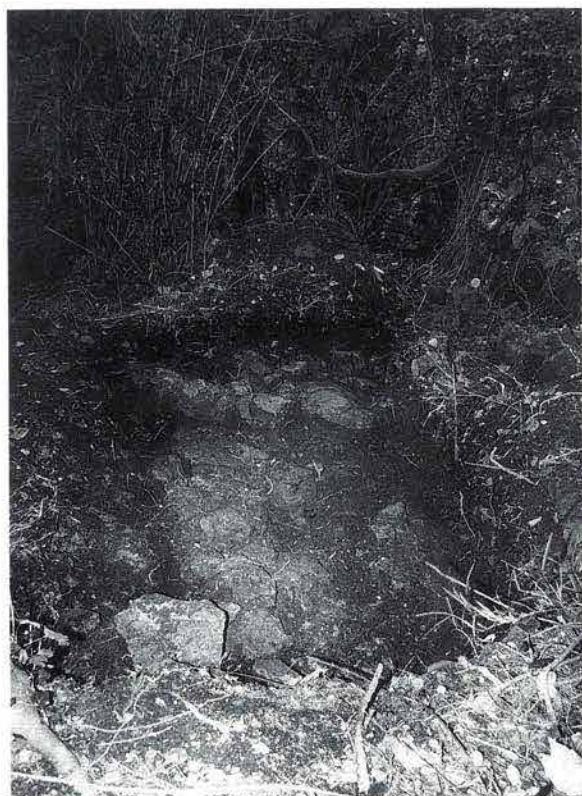


図版47

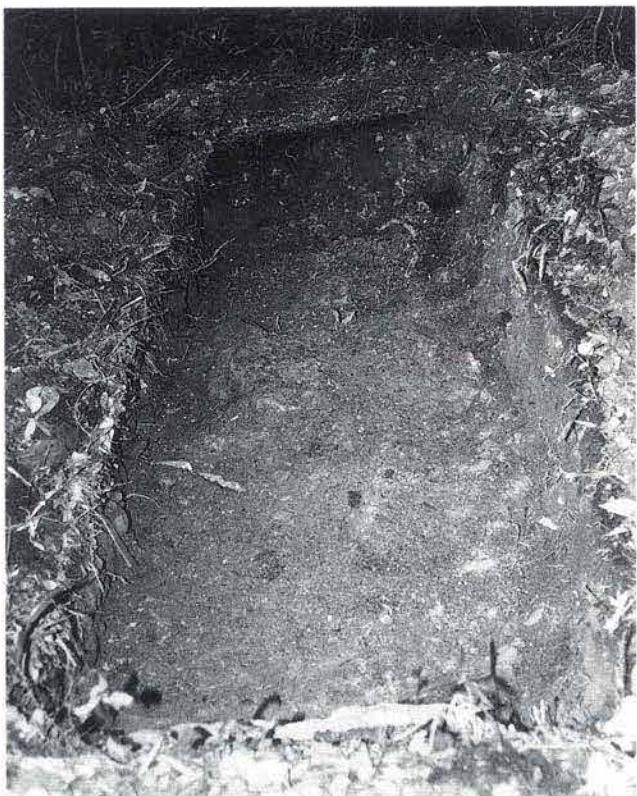


◀1. トレンチ21 全景

▼3 トレンチ26 全景



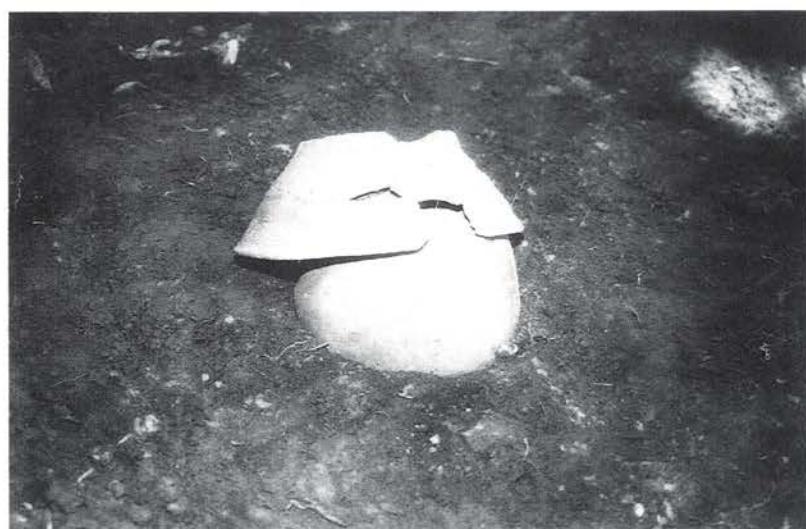
▼2. トレンチ24 全景





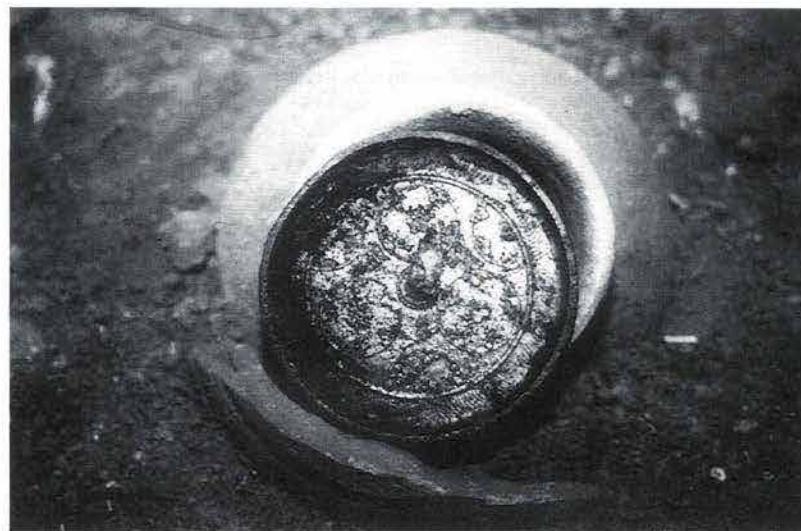
▲1. トレンチ23 全景

▼2. トレンチ23 土壌1 捏鉢出土状況



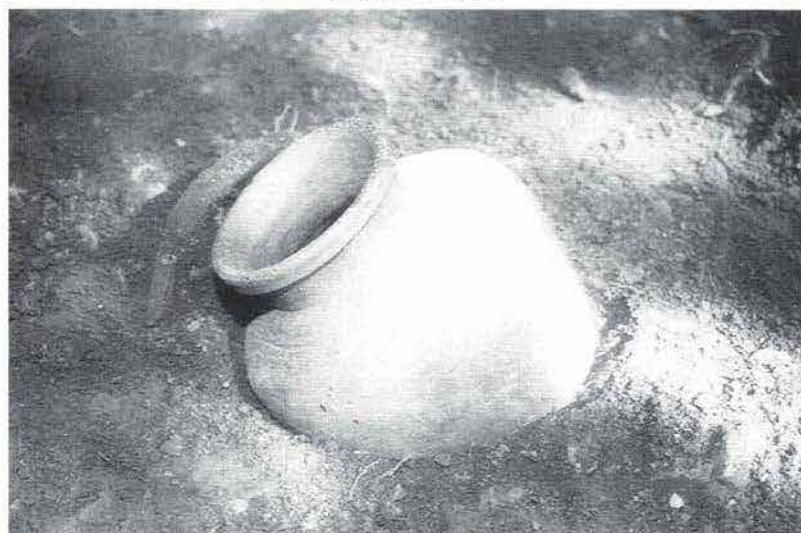
▼3. トレンチ23 土壌1 常滑壺・鏡出土状況





▲1. トレンチ23 土壙1 鏡出土状況

▼2. トレンチ23 土壙1 常滑壺出土状況



▼3. トレンチ23 土壙2 常滑捏鉢出土状況

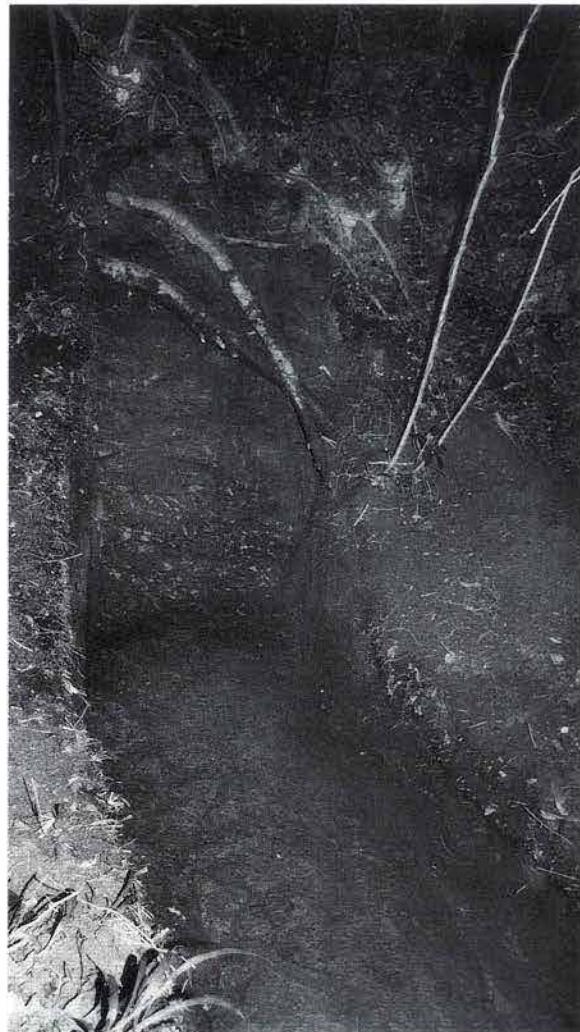


1. トレンチ25  
全景

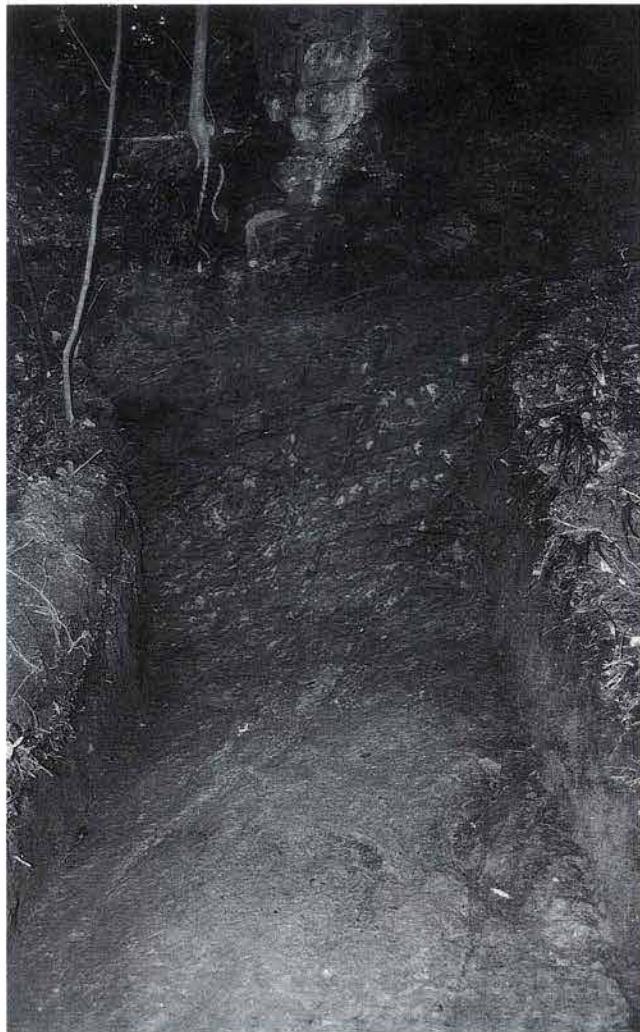


▼2. トレンチ25 かわらけ出土状況





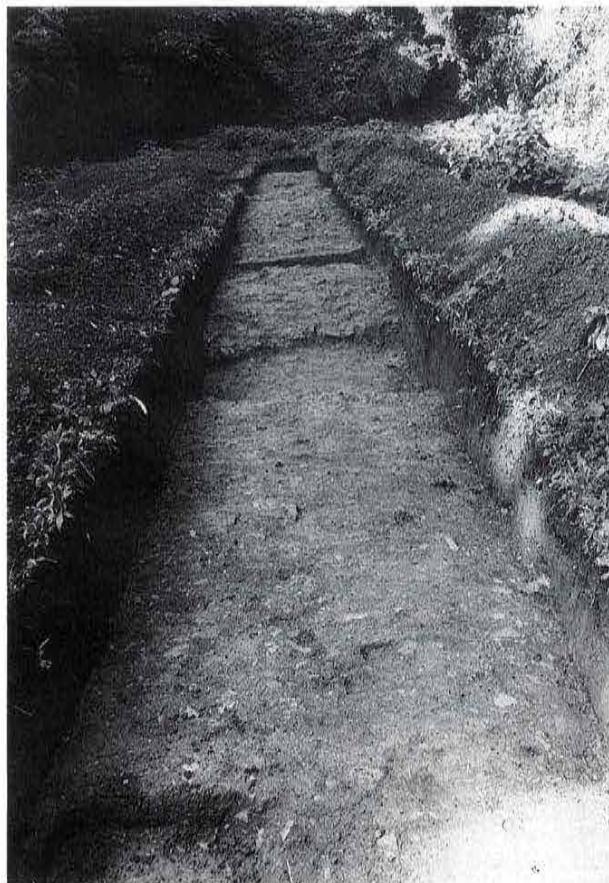
▲1. トレンチ27 堀切（北壁）



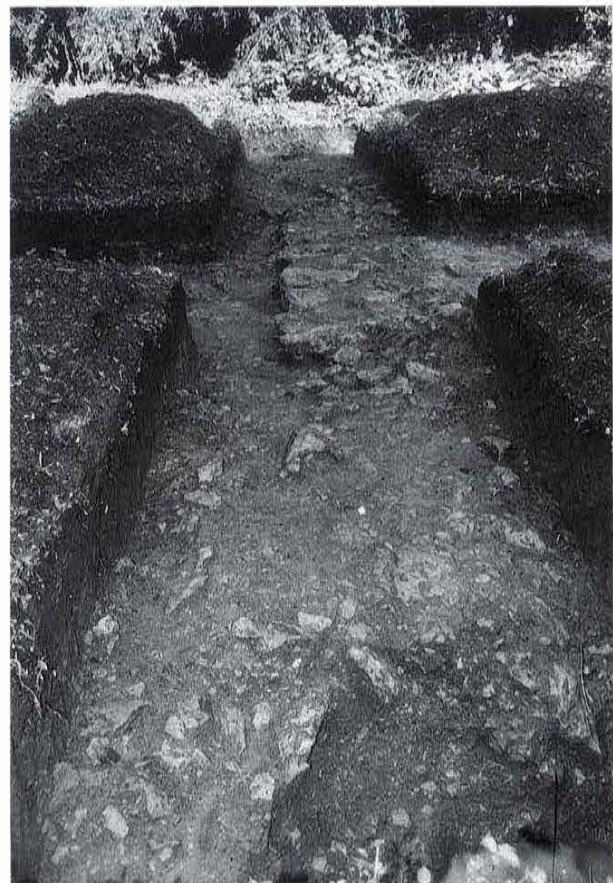
▲2. トレンチ27 堀切（南壁）

▼3. トレンチ27 堀切全景

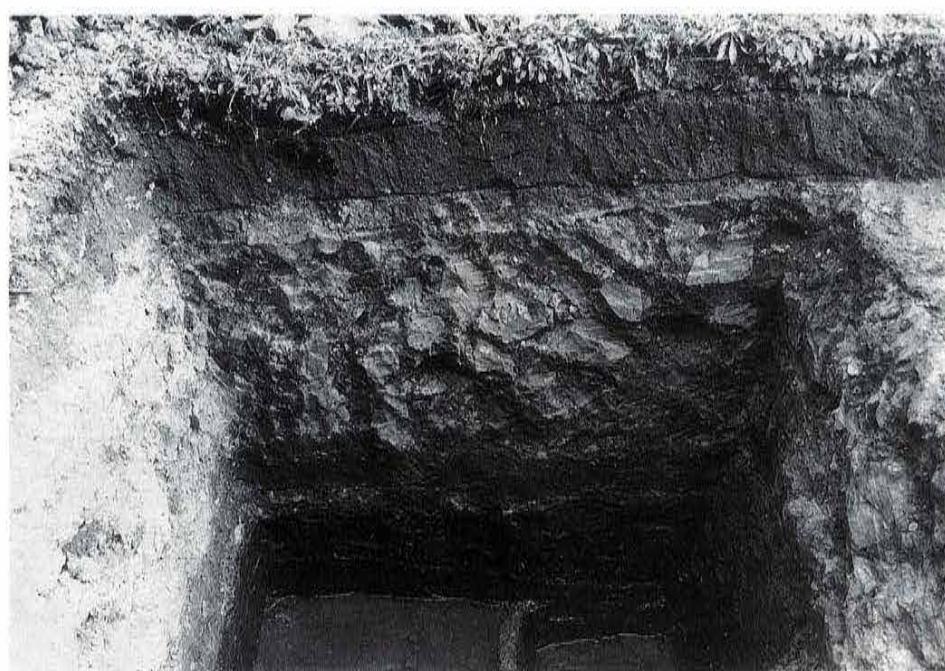


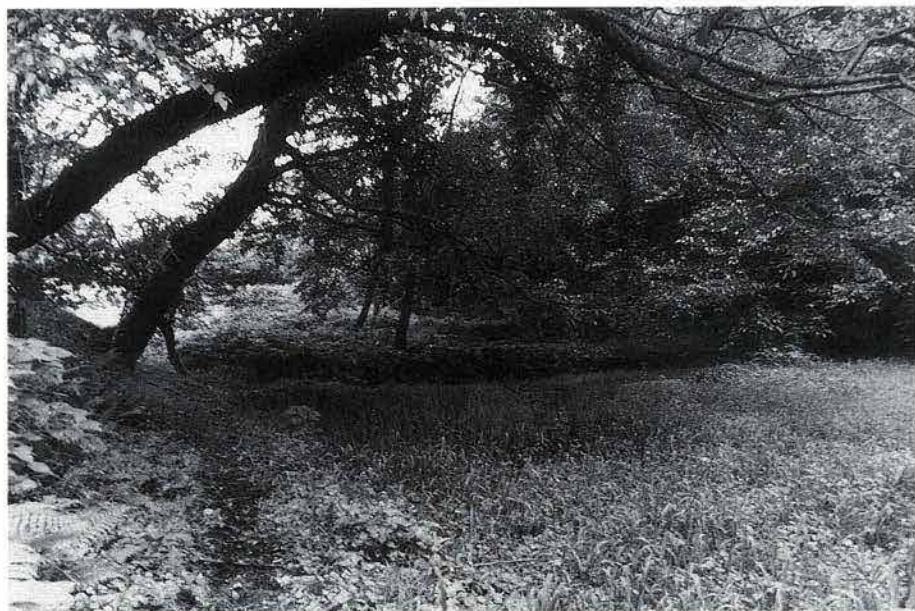


▲1. トレンチ28 全景

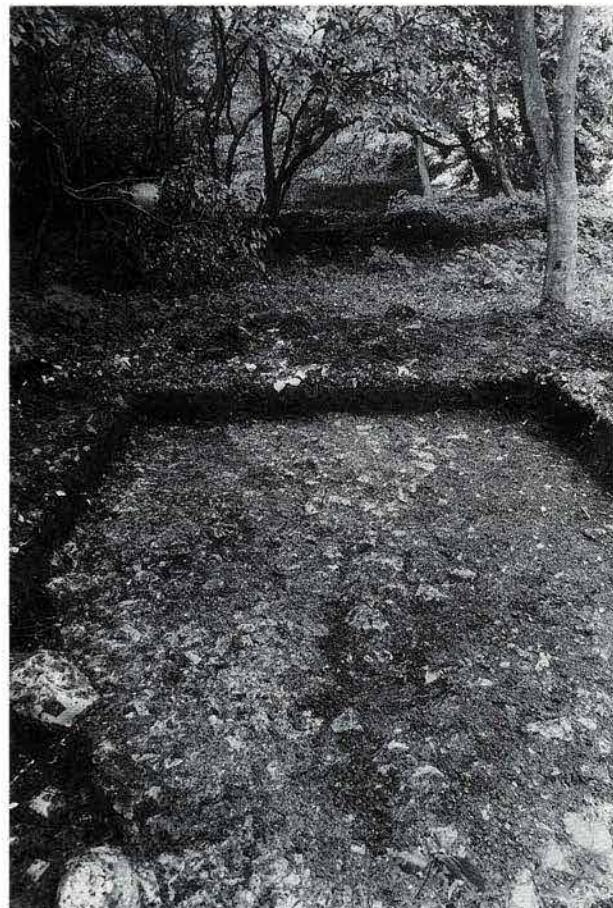


▲2. トレンチ28 全景





▲1. 西ヶ谷



▲3. トレンチ30 全景

▼2. トレンチ29 全景





図6-1



-2



-3



-4



-6



-5



-7



-8



-9



-10



-11



-12



-13



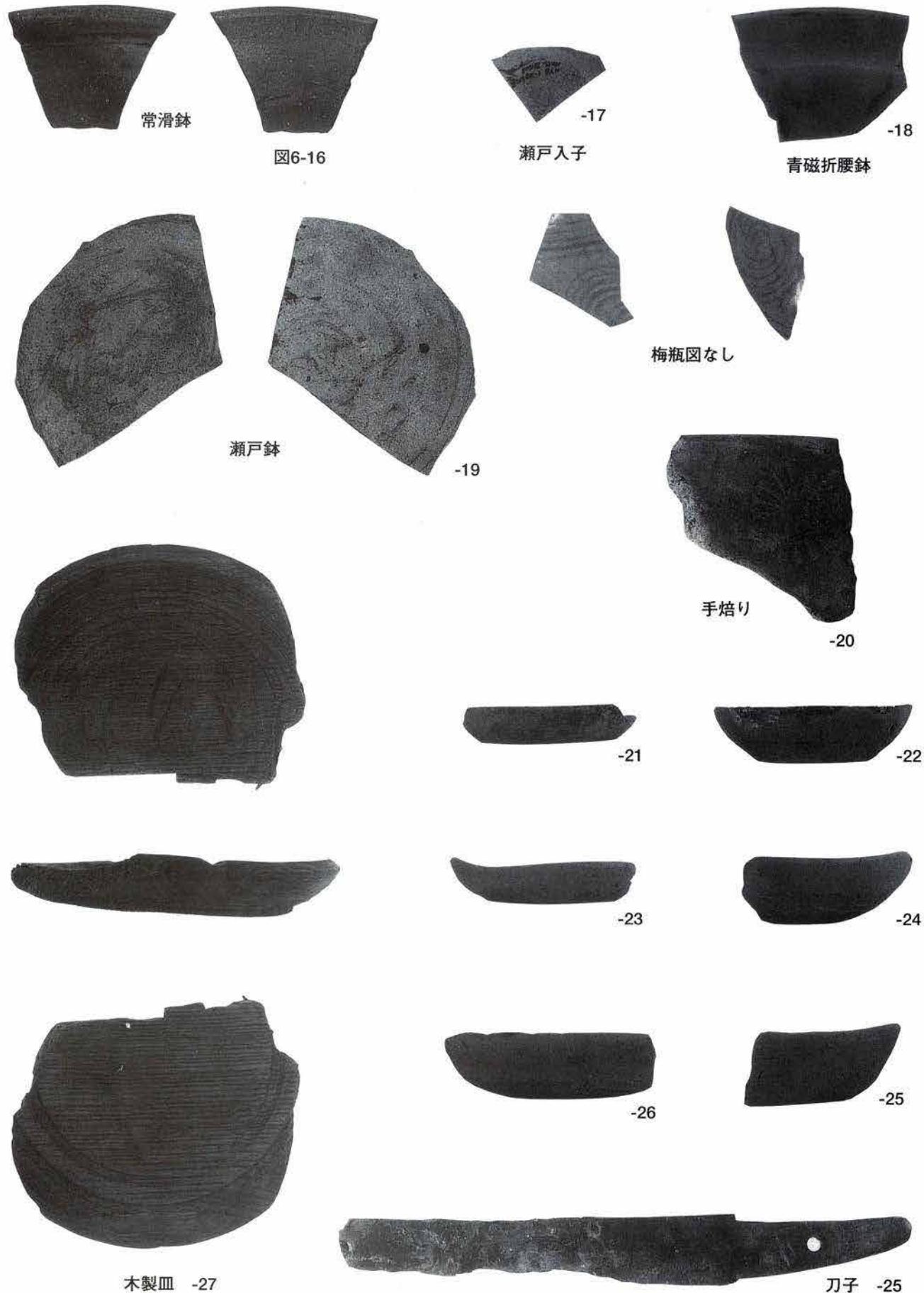
-14



-15

苑池出土の遺物 (土器・陶磁器・金属製品他)

図版55



苑池出土の遺物 (土器・陶磁器・金属製品他)



火輪

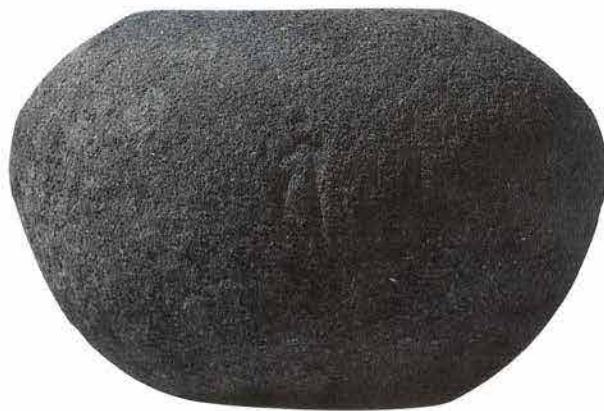
図7-1



東



北

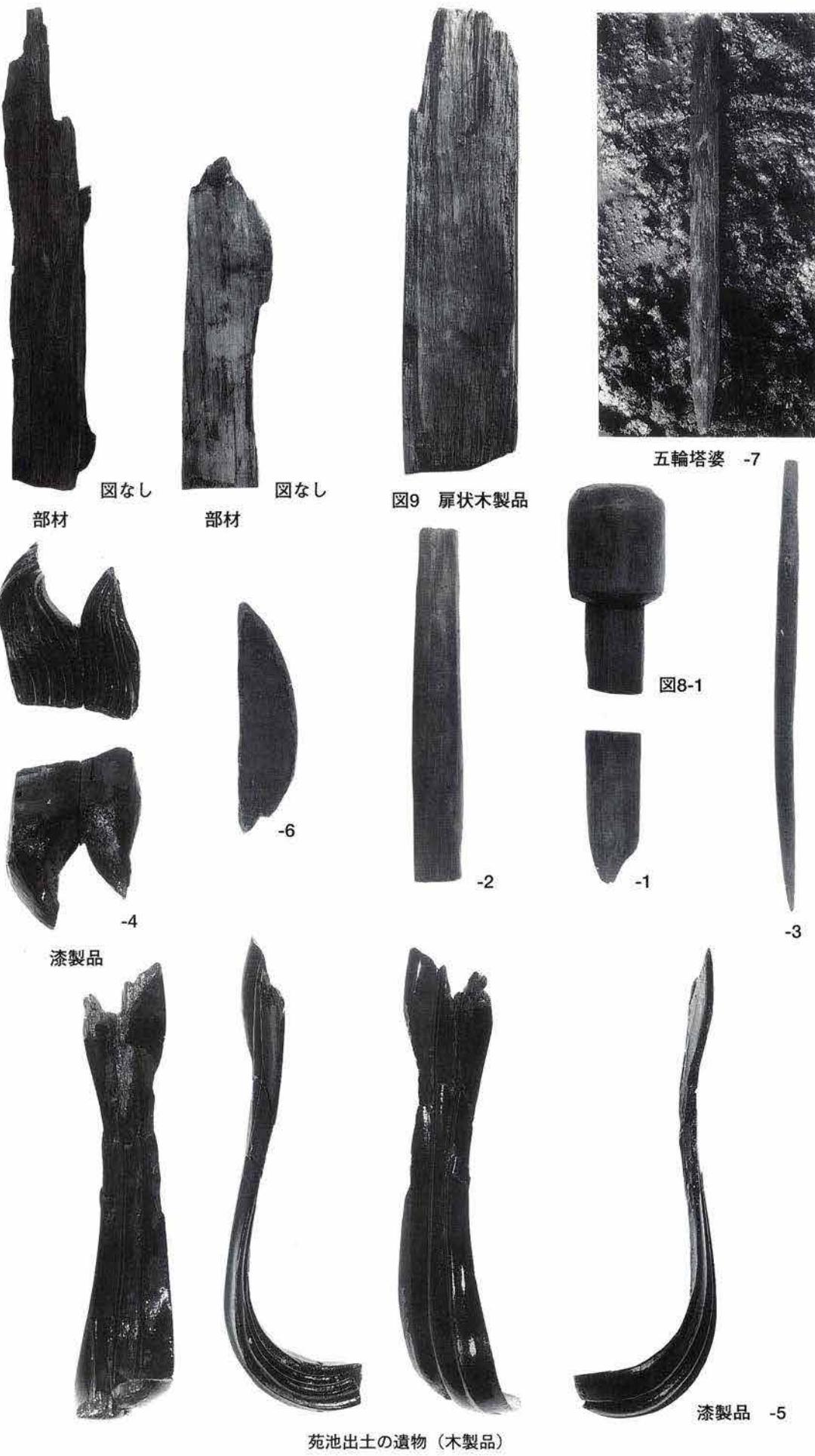


西



南

苑池出土の遺物（石塔）



苑池出土の遺物（木製品）



苑池出土の遺物（鏡瓦・宇瓦）

図版59



YN I 01d 図11



苑池出土の遺物（宇瓦）

YN III 01b 図12

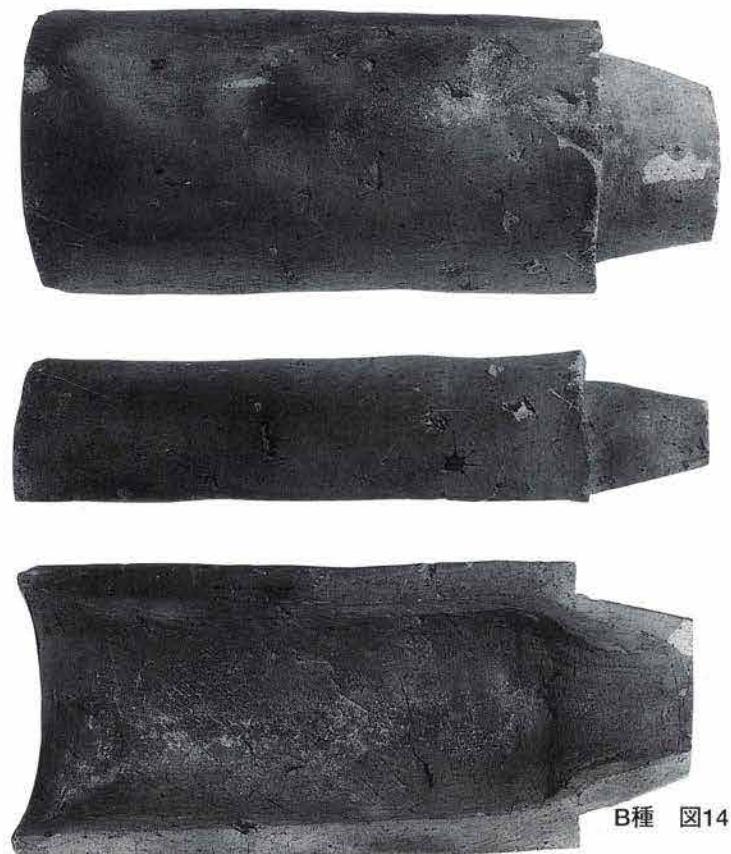


A種 図13-1

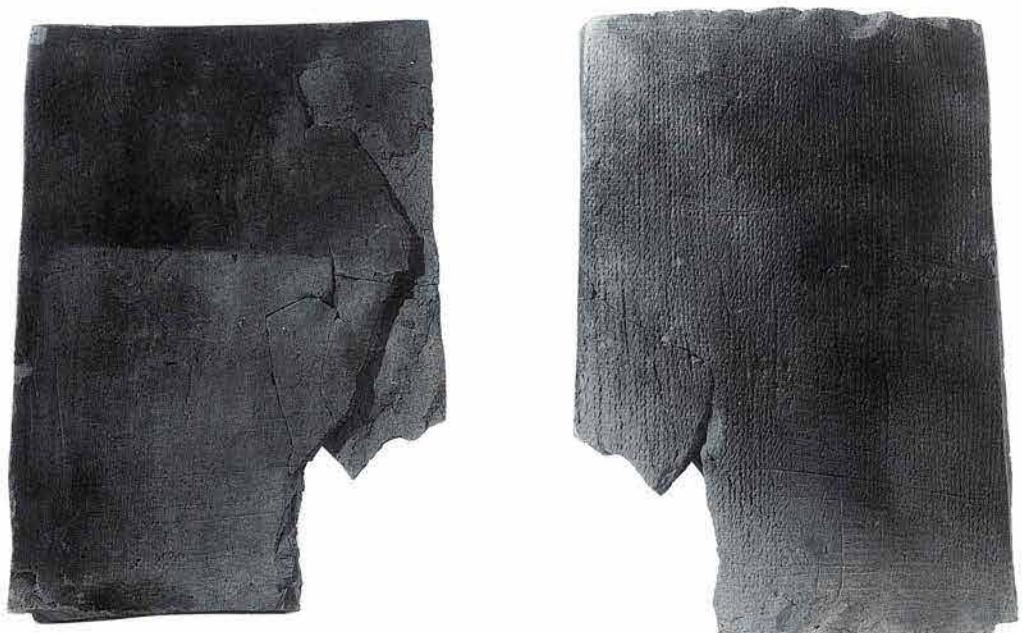


A種 -2

苑池出土の遺物（男瓦）

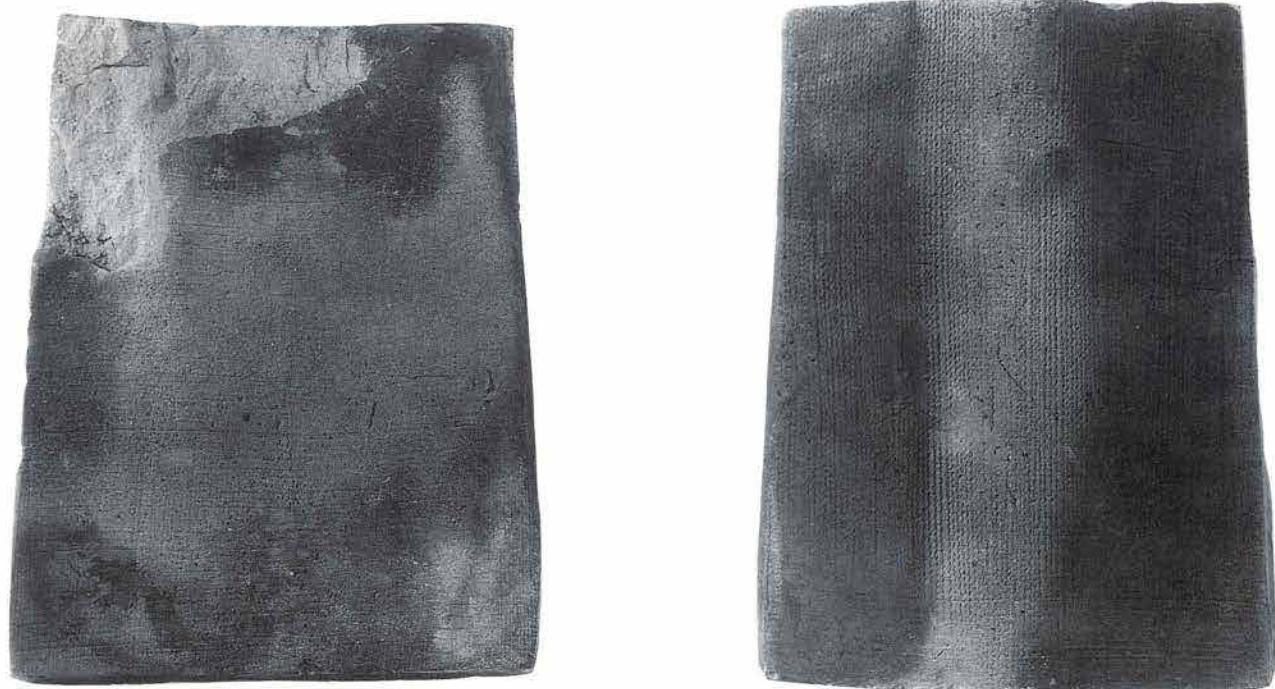


B種 図14



A種 図15

菟池出土の遺物（男瓦・女瓦）



A種 図16



F種 図17

苑池出土の遺物（女瓦）



D種 図18



D種 図19

苑池出土の遺物（女瓦）



D種 図20



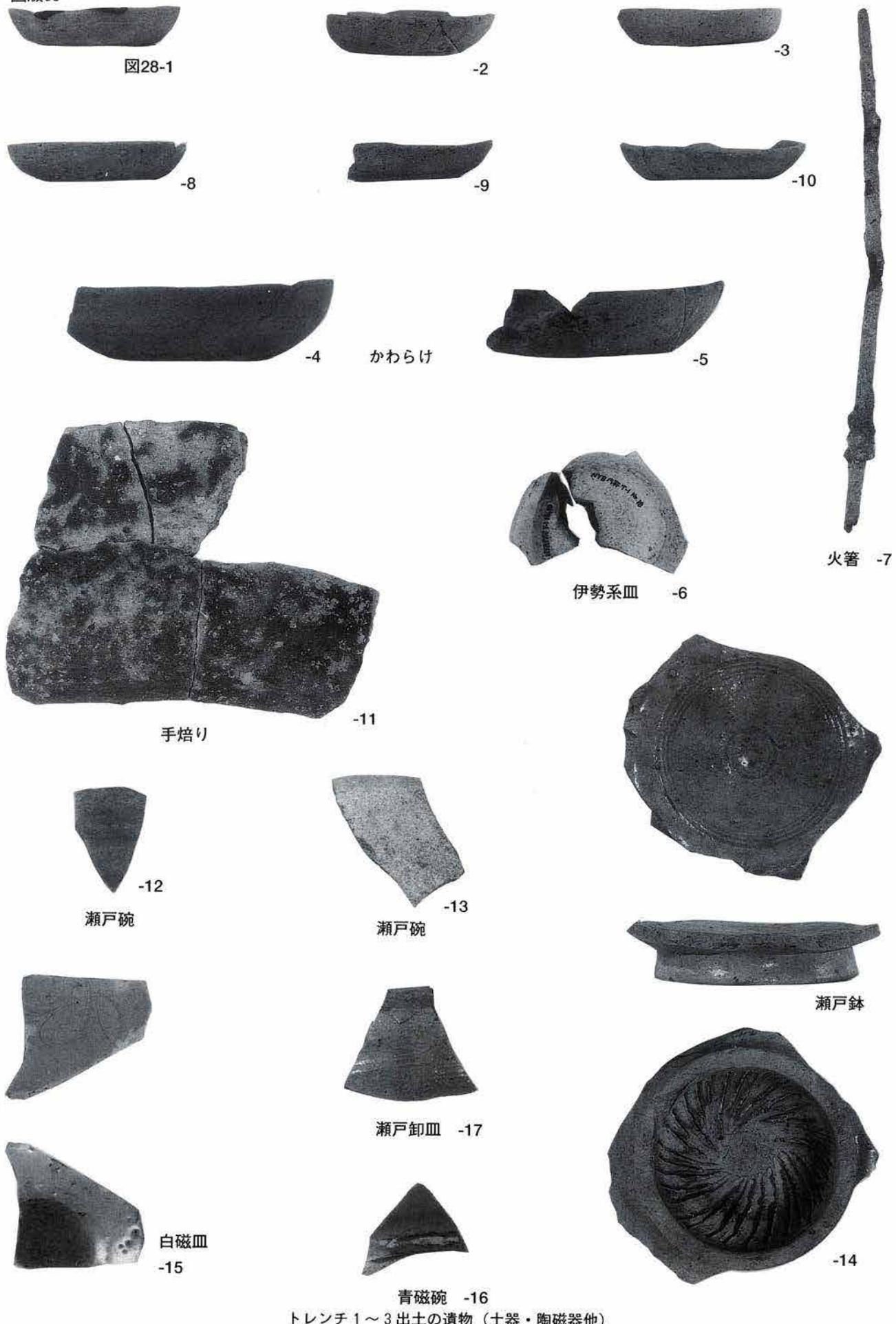
鬼瓦

-2

鬼瓦  
図21-1

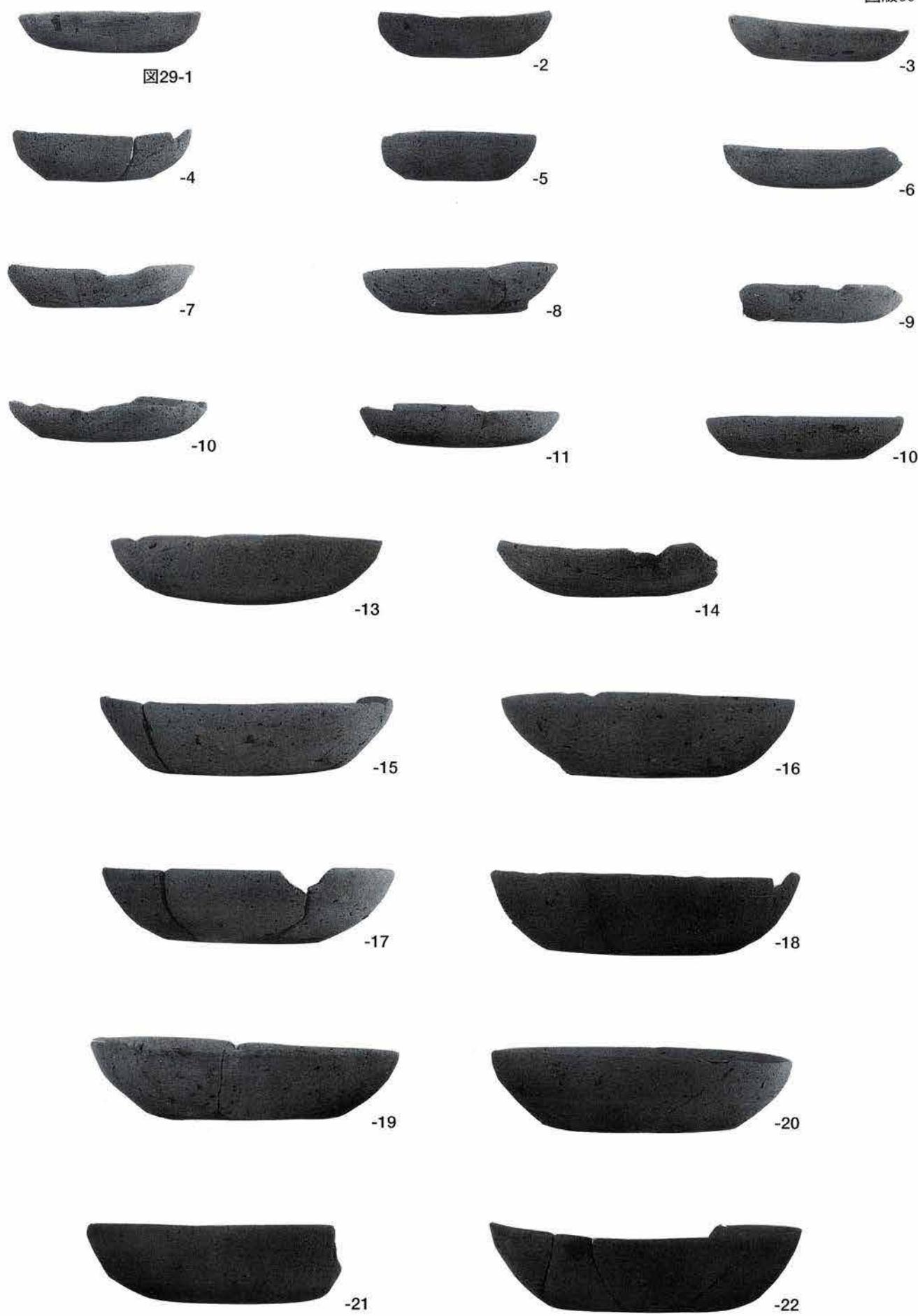
苑池出土の遺物（女瓦・鬼瓦）

図版65



トレンチ 1～3 出土の遺物 (土器・陶磁器他)

図版66



トレンチ4出土の遺物（土器・陶磁器他）



図29-24 濑戸碗



-23  
瀬戸卸皿



手焙り -25



—



-27



—



青磁水滴



砥石 -29



砥石 -30



硯 -31



-32



温石 -28



手焙り -26

トレンチ4出土の遺物（土器・陶磁器他）



図30-1



-2



-3



-4



-5



青磁碗 -8



-6



-7



白磁口元皿 -9



砥石 -10



酒会壺蓋



-11



瀬戸鉢 -13



-14



-15



瀬戸鉢 -18



-20

瀬戸折縁鉢 -12



常滑甕

-19

瀬戸折縁鉢 -17

トレンチ5~11出土の遺物（土器・陶磁器他）



瀬戸折縁鉢 -21



瀬戸入子 -16



硯 -22



図31-1

-2 -3



-4

-5



-6

-7

-8



図32-2



-1

-3

-4



-5

-6



-7

-8

伽藍正面（東）の山の平場出土の石塔

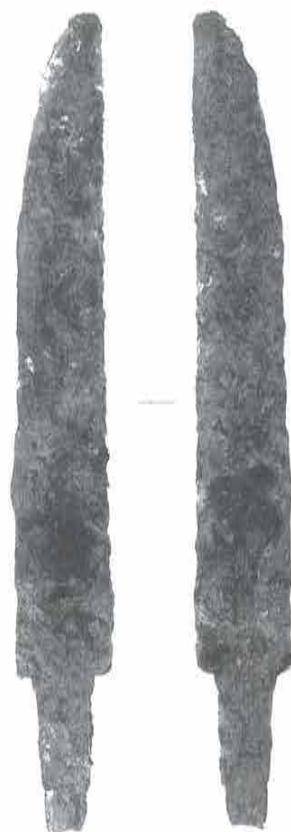
○ 陶製数珠玉  
図38-1



経塚出土 玉石 図なし



指頭による輪花



腰刀 図37-1



渥美捏鉢  
図36-1



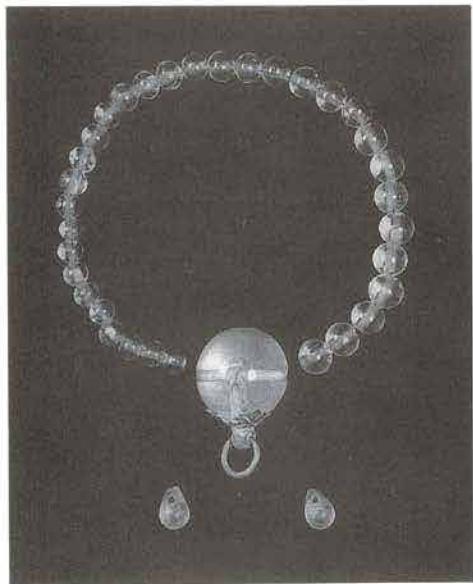
渥美甕  
-2

トレンチ13（経塚）出土の遺物（外容器・捏鉢・腰刀他）



腰刀 -2

図版71



経筒

図37-3



-3

-4

水晶製数珠玉

木製数珠玉

水晶数珠の親王

数珠の房飾り

図38-2



-5

青白磁の小皿



扇と櫛の出土状況 (図なし)



櫛が納められていた白磁壺 -6

トレンチ13 (経塚) 出土の遺物 (経筒・副納品)



瀬戸折縁鉢

図44-1



魚住捏鉢 -2



砥石 -3



常滑捏鉢内面のヘラ記号



常滑捏鉢内面のスタンプ



常滑捏鉢 -4

トレンチ23出土の遺物



数珠玉

図44-5



捏鉢

-6



咸平元宝

-9



開元通宝

-10



鏡

-6



熙寧元宝

-11



-6

出土状態



常滑壺

-7

-7  
トレンチ23 (場)

トレンチ23 (場) 出土の遺物 (常滑壺・捏鉢・鏡・数珠玉・錢)



図44-12



図44-13



1



3



2



4

トレンチ20 古代 図なし



図46-1 トレンチ28

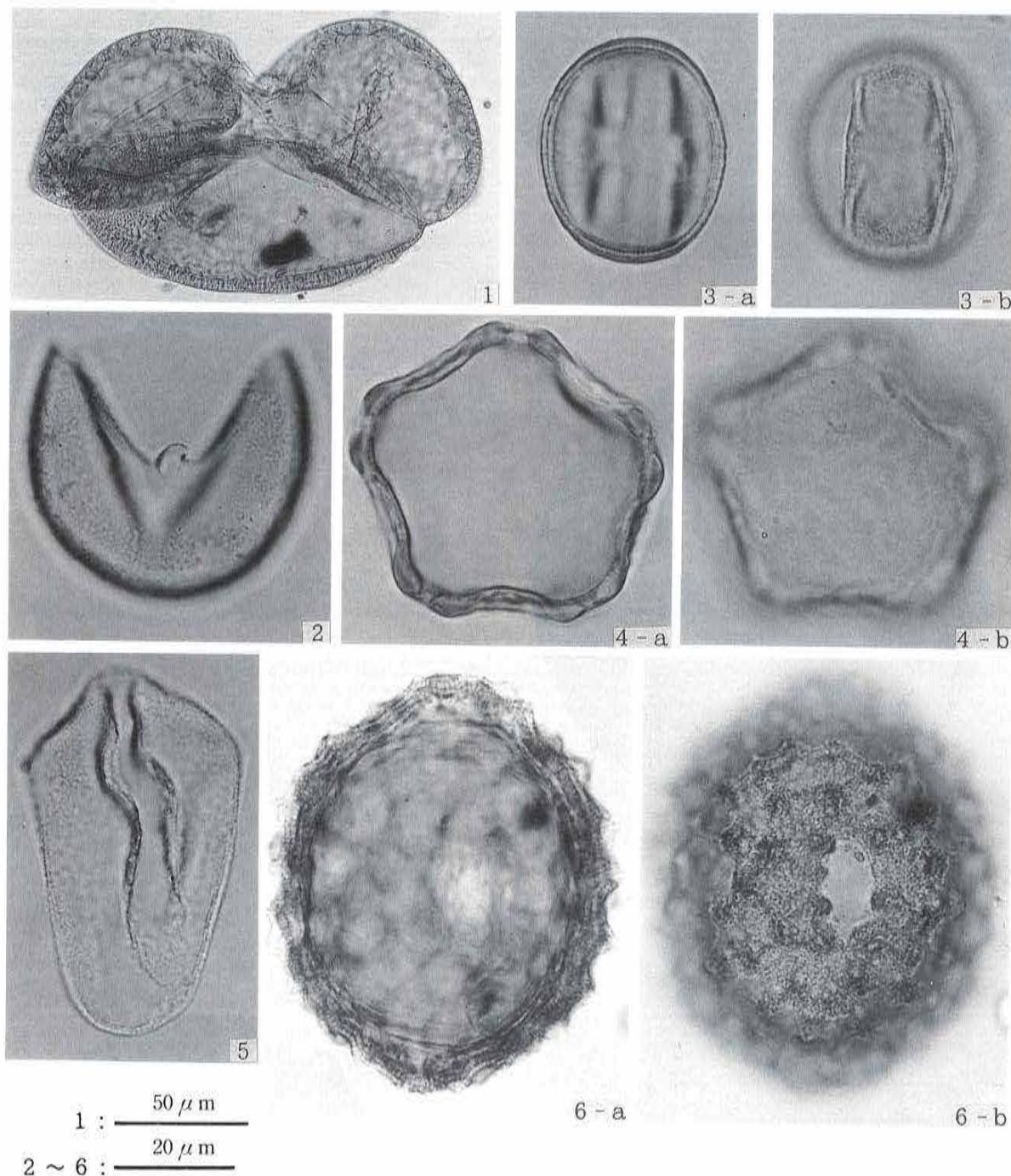


2



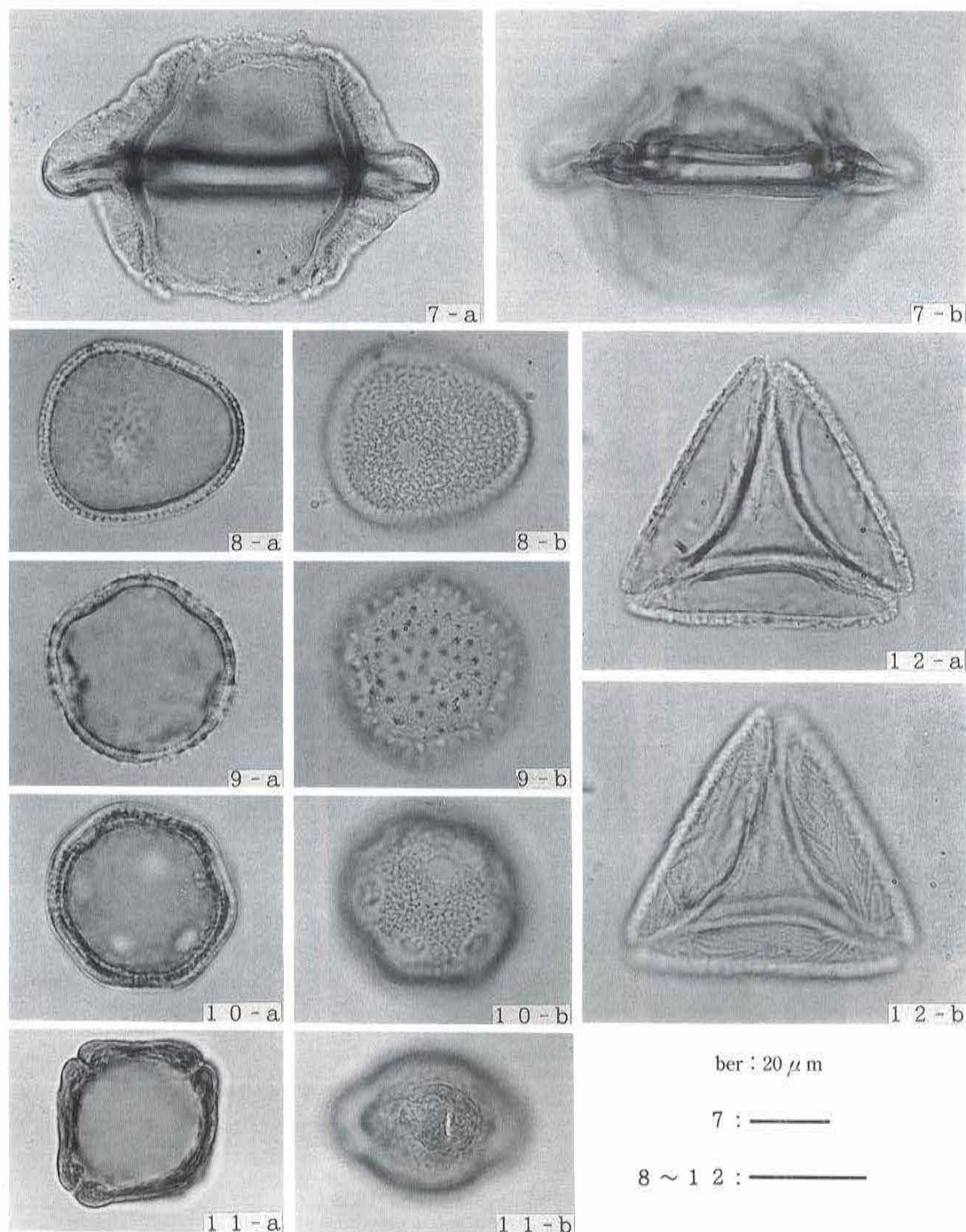
梅瓶 図なし

トレンチ20・25・28出土の遺物



史跡永福寺跡苑池堆積物の花粉化石

- 1 : モミ属 PLC.SS 1960 試料5
- 2 : スギ PLC.SS 1953 試料2
- 3 : コナラ属アカガシ亜属 PLC.SS 1951 試料2
- 4 : ニレ属一ケヤキ属 PLC.SS 1956 試料7
- 5 : カヤツリグサ科 PLC.SS 1955 試料2
- 6 : ベニバナ属近似類 PLC.SS 1957 試料7



## 史跡永福寺跡苑池堆積物の花粉化石

7 : ヒシ属 PLC.SS 1962 試料5

8 : ガマ属 PLC.SS 1961 試料5

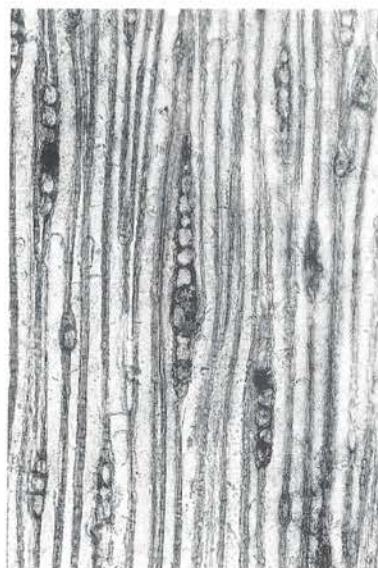
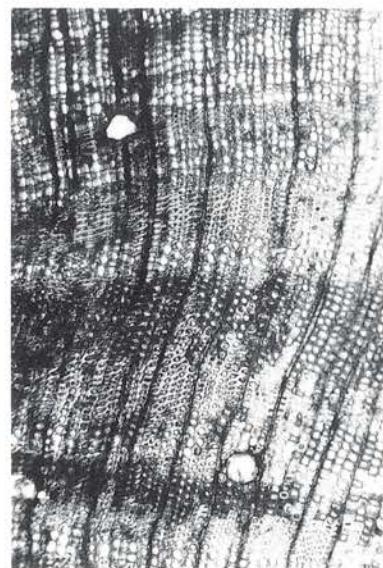
9 : オモダカ属 PLC.SS 1954 試料2

10 : ナデシコ科 PLC.SS 1951 試料2

11 : アリノトウグサ属 PLC.SS 1959 試料5

12 : アザザ型 PLC.SS 1958 試料7

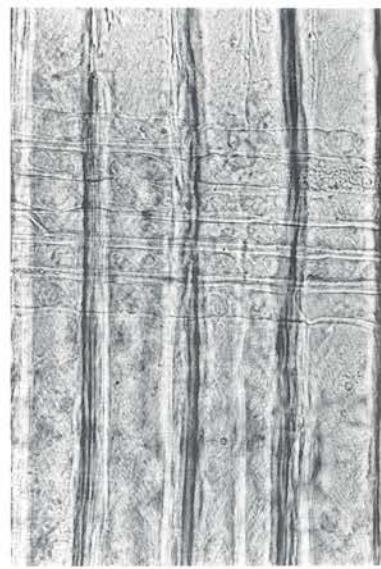
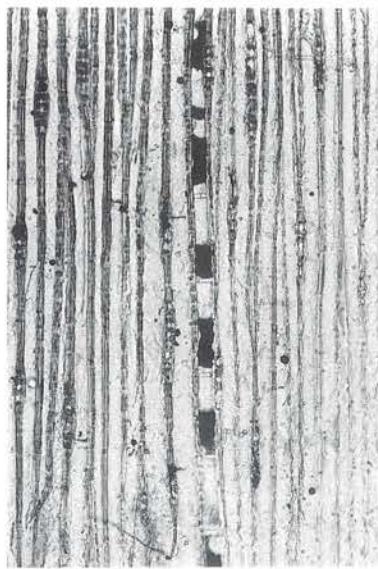
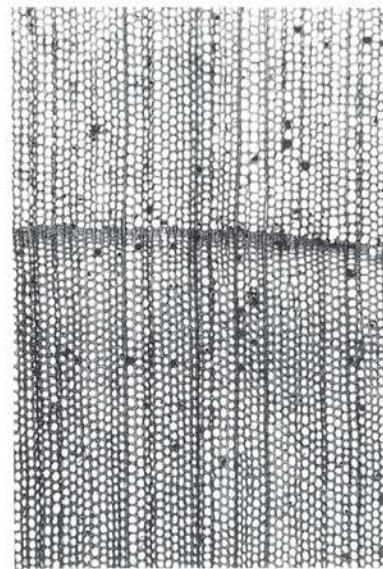
## 史跡永福寺跡苑池堆積物の花粉化石



1 a アカマツ ber: 1mm 材-④

1 b 同 ber: 0.4mm

1 c 同 ber: 0.2mm



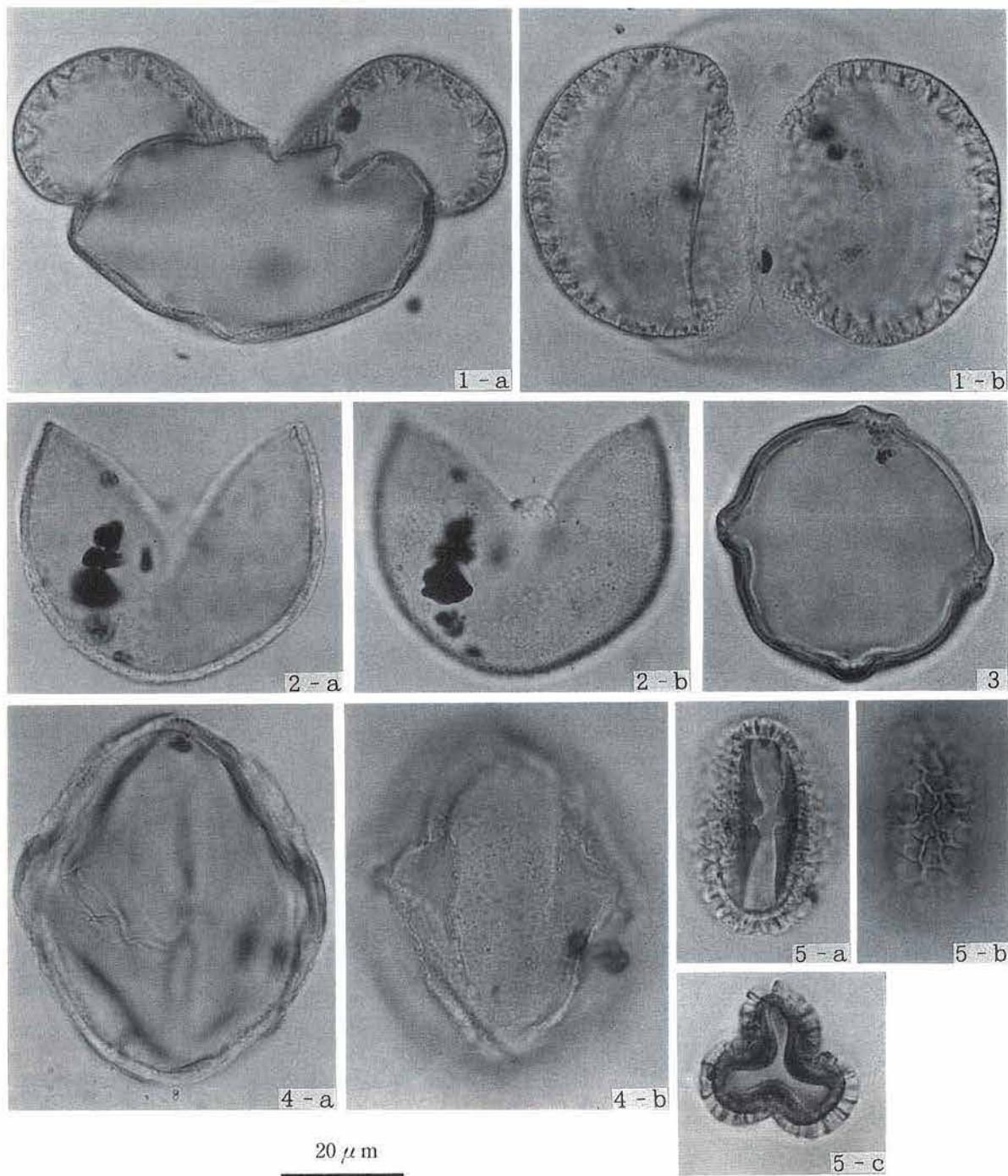
2 a ヒノキ属 ber: 1mm 材-①

2 b 同 ber: 0.2mm

2 c 同 ber: 0.1mm

永福寺跡出土材樹種の顕微鏡写真

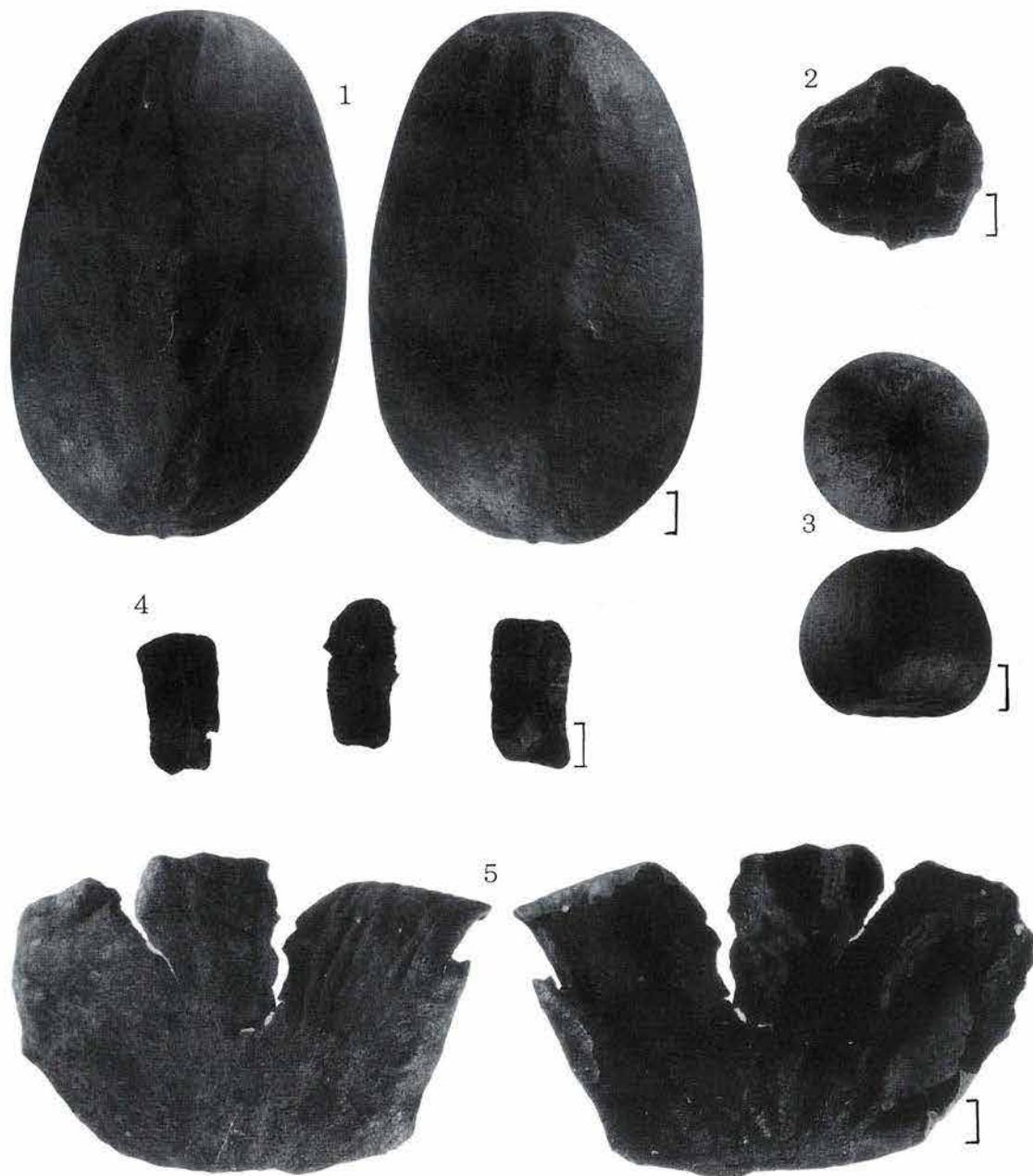
永福寺跡出土木材樹種の顕微鏡写真



### 永福寺跡経塚内土壤の花粉化石

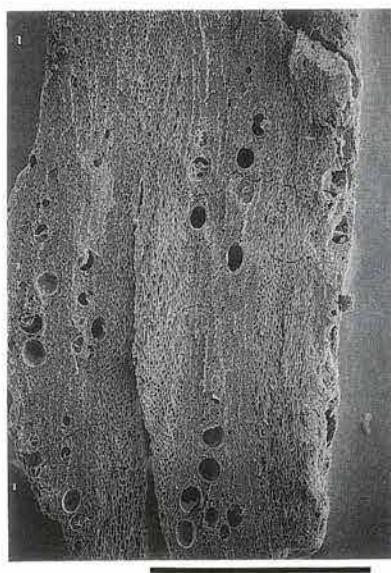
- 1 : マツ属複維管束亜属 PLC.SS 1965  
 2 : スギ PLC.SS 1967  
 3 : クマシデ属—アサダ属 PLC.SS 1968  
 4 : ミズキ属 PLC.SS 1966  
 5 : サンショウウ属 PLC.SS 1963

### 永福寺跡経塚内土壤の花粉化石

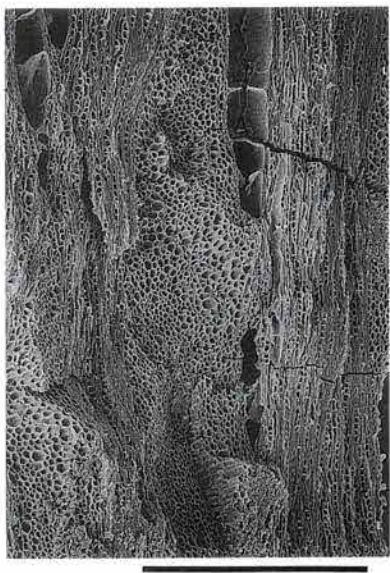


永福寺跡経塚内土壤から出土した大型植物化石 (スケールは1mm)

1. トウダイグサ科、種子 2. 不明A 3. 不明B 4. 不明C 5. 不明D



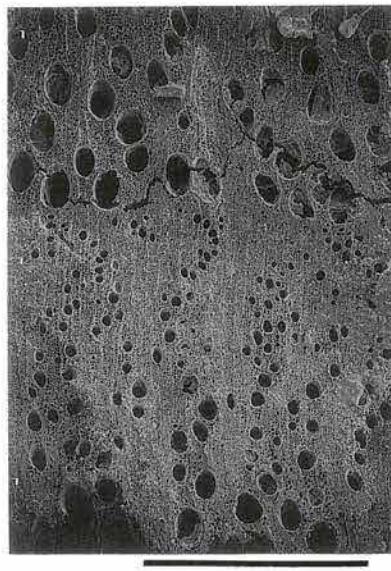
1 a.コナラ属コナラ節(横断面) ber:1mm



1 b.同左(接線断面) ber: 0.5mm



1 c.同左(放射断面) ber: 0.1mm



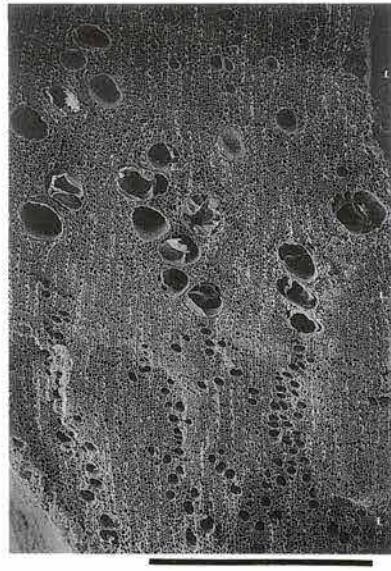
2 a.クリ(横断面) ber: 1mm



2 b.同左(接線断面) ber: 0.5mm



2 c.同左(放射断面) ber: 0.1mm



3. シイノキ属(横断面) ber: 1mm 永福寺跡経塚甕底部から出土した炭化材